
専任教員の教育研究等活動業績

[人間文化学部人間文化学科]

〈教授〉

五味 義 夫	1 2 1
山口 勝 弘	1 2 7
江原 暉 将	1 3 7
深津 容 伸	1 4 4
渡辺 久 壽	1 5 0
川島 秀 一	1 5 7
窪内 節 子	1 6 5
関野 陽 一	1 7 6
荒井 直	1 8 3
斎藤 信 平	1 8 8
戸田 勉	1 9 7
小菅 健 一	2 0 3
須永 範 明	2 0 8
黒田 浩 司	2 1 5
石田 千 尋	2 2 3
宅間 雅 哉	2 3 2
田中 健 夫	2 4 0

〈准教授〉

川口 清 泰	2 4 7
井草 清 志	2 5 3
石橋 泰	2 6 0
韓 暁 宏	2 6 5
難波 道 弘	2 7 2

〈専任講師〉

Danny W. Brown	2 8 0
森 稚 葉	2 8 8
高橋 弘 毅	2 9 5

〈助教〉

李 尚 珍	3 0 5
奥村 弥 生	3 1 4

[人間文化研究科臨床心理学専攻]

〈教授〉

馬場 禮 子	3 1 9
--------	-------	-------

専任教員職務業績集

山梨英和大学

フリガナ 氏名	性別	生年(西暦)	職名	所属
ゴミヨシオ 五味 義夫	男	1935年	教授	人間文化学部人間文化学科 大学院人間文化研究科臨床心理学専攻
取得学位称号	修士(教育学)	専門分野	臨床心理学・青年心理学・人間性心理学・生育史心理学	
学 歴	1964年	3月	山梨県立韮崎高等学校普通科卒業	
	1954年	4月	山梨大学学芸学部教育科学科入学	
	1958年	3月	山梨大学学芸学部教育科学科卒業(教育学士)	
	1972年	4月	東京学芸大学大学院修士課程教育学研究科臨床心理学講座入学	
	1974年	3月	東京学芸大学大学院修士課程教育学研究科臨床心理学講座修了(教育学修士)	
実 務 経 験	1958年	5月	神奈川県相模原公立学校教諭(1966年3月まで)	
	1962年	5月	神奈川県相模原市教育研究所相談部 研究員(兼任)(1966年3月まで)	
	1964年	4月	東京学芸大学留学(神奈川県派遣・臨床心理学研修)(1965年3月まで)	
	1966年	4月	神奈川県相模原市立青少年相談所 主査(カウンセラー)(1972年3月まで)	
	1973年	4月	東京都文京区教育センター教育相談部 非常勤講師(カウンセラー) (1976年3月まで)	
	1973年	4月	白梅学園短期大学 非常勤講師(青年心理学・臨床心理学)(1978年3月まで)	
	1974年	4月	東京学芸大学 非常勤講師(青年心理学・性格心理学)(1978年3月まで)	
	1974年	4月	職業訓練大学校 非常勤講師(相談心理学・心理学)(1976年3月まで)	
	1976年	4月	都留文科大学 非常勤講師(発達教育心理学・教育評価・卒業研究)(1978年3月まで)	
	1978年	4月	玉川大学学生部 非常勤講師(カウンセラー)(1979年5月まで)	
	1979年	6月	山梨大学保健管理センター 助教授(カウンセラー)(1995年3月まで)	
	1980年	4月	山梨大学教育学部 講師(併任)(青年心理学・教育心理学 等)(2001年3月まで)	
	1987年	3月	創価大学教育学部 非常勤講師(臨床心理学・青年心理学)(2001年3月まで)	
	1990年	4月	放送大学 山梨学習センター 非常勤講師(臨床心理学)(1991年3月まで)	
	1994年	4月	放送大学 山梨学習センター 非常勤講師(臨床心理学)(1997年3月まで)	
	1995年	4月	山梨大学保健管理センター 教授 (2001年3月まで)	
	1997年	4月	山梨大学保健管理センター 所長(併任)(2001年3月まで)	
	2001年	3月	山梨大学保健管理センター 教授 定年退職	
	2001年	4月	聖心女子大学文学部教育学科(心理学) 教授(2004年3月まで)	
	2001年	4月	聖心女子大学大学院文学研究科人間科学専攻臨床心理学領域 教授(併任) (2004年3月まで)	
	2001年	4月	東京女子大学文理学部 非常勤講師(学校カウンセリング)(2004年3月まで)	
	2001年	4月	放送大学 客員教授(臨床心理学・卒業研究)(2005年3月まで)	
	2002年	4月	聖心女子大学 学生部 部長補佐 (2003年3月まで)	
	2003年	4月	聖心女子大学 学生部 学生相談室 室長(併任)(2004年3月まで)	
	2004年	3月	聖心女子大学 教授 定年退職	
	2004年	4月	聖心女子大学 非常勤講師(修士論文・卒業論文 2005年3月まで) (学校臨床心理学特論・教育心理学 2006年3月まで)	
	2004年	4月	山梨英和大学人間文化学部人間文化学科 教授 (現在に至る)	
	2004年	4月	山梨英和大学大学院人間文化研究科臨床心理学専攻 教授(兼任)(現在に至る)	
2004年	4月	山梨英和大学心理臨床センター 所長(兼任)(2010年3月まで)		
2005年	10月	山梨英和大学大学院 専攻主任補佐(併任)(2011年3月まで)		

受賞歴	1999年	学会発表及び論文 第36回全国大学保健管理研究集会(後援・文部省)における研究発表 “「入学ガイダンス」としての意識調査の試み”及び“パソコンによる学生健康診断データの活用について”(共同研究)がいずれも学会推薦を受け、改めて原著論文として『CAMPUS HEALTH 35(2)』に掲載
	2003年	神奈川県青少年育成功労者表彰を受賞
所属学会	1960年	日本精神分析学会(現在に至る)
	1963年	日本教育心理学会(現在に至る)
	1971年	日本催眠医学心理学会(現在に至る)
	1973年	日本人間性心理学会(現在に至る)
	1981年	日本病跡学会(現在に至る)
	1982年	日本心理臨床学会(2010年～名誉会員・現在に至る)
	1983年	日本カウンセリング学会(現在に至る)
	1987年	日本学生相談学会(現在に至る)
	1989年	日本発達心理学会(現在に至る)
	1993年	日本青年心理学会(現在に至る)
特免資 許許格 等・・	1958年	小学校教諭一級普通免許(山梨県)
	1965年	養護学校教諭一級普通免許(東京都)
	1988年	臨床心理士(日本臨床心理士認定協会 1149号)

目 次

○教育業績	
教育理念、方針、方法	124
教育能力	
教育方法実践例	124
作成した教科書、教材等	124
教育方法や実践に関する発表、講演等	124
担当授業科目	124
代表的なシラバス	124
教育改善活動	124
教育能力に対する評価	124
○研究業績	
研究の特徴	125
研究経歴	125
研究実績	
著書	125
学術論文	125
その他の研究活動	125
競争的資金採択課題	125
学会等発表、役員参加	125
共同研究・受託研究の実績	125
大学院生指導	125
研究能力に対する評価	125
○サービス活動業績	
学内委員会・作業部会等活動実績	126
アドバイザー活動実績	126
後進育成活動実績	126
社会貢献活動	126
○専門的活動(教育業績、研究業績、サービス活動業績)の統合による成果と目標	
専門的成果	126
専門的目標	126
○添付資料	
略	
○最新データ入力日	126

教育業績

教育理念、方針、方法	
教育能力	(1)教育方法実践例 (2)作成した教科書、教材等 (3)教育方法や実践に関する発表、講演等
担当授業科目	
代表的シラバス	
教育改善活動	
教育能力に対する評価	(1)学生による授業評価 (2)同僚教員等による授業評価

研究業績

研究の特徴		
研究経歴	年 年 年 年 年	
研究実績	(1) 著書 (2) 学術論文 (3) その他の研究活動(国際会議発表、学術誌編集、学術論文査読等)	
競争的資金採択課題		
学会等発表・役員参加	年 月 年 月 年 月 年 月 年 月 年 月	
受託共同研究の実績	年 月 年 月 年 月 年 月	
大学院生指導		
研究能力に対する評価		

サービス活動業績

学 内 委 員 会 ・ 作 業 部 会 等 活 動 実 績	年	月	
	年	月	
	年	月	
	年	月	
	年	月	
	年	月	
アドバイザー活動実績			
後進育成活動実績			
社 会 貢 献 活 動	(1) 講演会 年 月 (2) 出前講座 年 月 (3) 公開講座 年 月 (4) 学外審議会・委員会等 年 月 (5) その他 年 月		

成果と目標

専門的成果	① ② ③
専門的目標	① ② ③

最新データ入力日	2011年 4月 1日
----------	-------------

専任教員職務業績集

山梨英和大学

フリガナ 氏名		性別	生年(西暦)	職名	所属
ヤマグチ カンヒロ 山口 勝弘		男	1941年	教授	人間文化学部人間文化学科 大学院人間文化研究科臨床心理学専攻
取得学位称号	修士(文学)	専門分野	臨床心理学・障害児心理学・治療教育学		
学 歴	1960年	3月 東京都 私立 早稲田高等学校 卒業			
	1960年	4月 日本大学文理学部 心理学科 入学			
	1964年	3月 日本大学文理学部 心理学科 卒業			
	1964年	4月 日本大学大学院 文学研究科 心理学専攻 修士課程 入学			
	1966年	3月 日本大学大学院 文学研究科 心理学専攻 修士課程 修了(文学)			
	1966年	4月 日本大学大学院 文学研究科 心理学専攻 博士課程 入学			
	1969年	3月 日本大学大学院 文学研究科 心理学専攻 博士課程単位取得満期退学			
実 務 経 験	1969年	4月 埼玉県立精神衛生センター嘱託(1970年3月まで)			
	1970年	4月 山梨大学 教育学部 助手(1972年3月まで)			
	1972年	4月 山梨大学 保健管理センター 講師(1978年4月まで)			
	1978年	5月 山梨大学 保健管理センター 助教授(1979年4月まで)			
	1979年	5月 山梨大学 教育学部 助教授(1987年4月まで)			
	1987年	5月 山梨大学 教育学部 教授(1998年3月まで)			
	1994年	4月 山梨大学 学生部長併任(1996年3月まで)			
	1995年	4月 山梨大学大学院 教育学研究科 教授(2007年3月まで) (1994年8月大学院設置審査会で○合資格判定)			
	1998年	4月 山梨大学 教育人間科学部 教授(2007年3月まで)			
	1998年	4月 山梨大学 教育人間科学部 評議員(2002年3月まで)			
	2004年	4月 山梨大学 保健管理センター長(併任)(2007年3月まで)			
	2007年	4月 山梨大学 名誉教授			
	2007年	4月 山梨英和大学 人間文化学部 人間文化学科兼同大学院人間文化研究科 教授 現在に至る			
受 賞 歴	年	月 特になし			
	年	月			
所 属 学 会	1965年	4月 日本心理学会会員(専門別議員:1985~1987年および1989~2009年) (現在に至る)			
	1967年	4月 日本児童精神医学会(現日本児童青年精神医学会)会員(2009年3月まで)			
	1968年	4月 日本アルコール医学会(評議員:1978年4月~1992年3月まで)会員 (1992年3月まで)			
	1970年	4月 日本特殊教育学会会員(現在に至る)			
	1984年	4月 日本電子情報通信学会会員(2009年3月まで)			
	1990年	4月 日本心理臨床学会会員(現在に至る)			
	2001年	4月 日本音楽療法学会会員(現在に至る)			
資格・免許・ 特許等	1990年	1月 臨床心理士(日本臨床心理士資格認定協会 登録番号第02019)			
	年	月			

目 次

○教育業績	
教育理念、方針、方法	129
教育能力	
教育方法実践例	129
作成した教科書、教材等	129
教育方法や実践に関する発表、講演等	129
担当授業科目	129
代表的なシラバス	129
教育改善活動	130
教育能力に対する評価	130
○研究業績	
研究の特徴	130
研究経歴	130
研究実績	
著書	131
学術論文	131
その他の研究活動	131
競争的資金採択課題	132
学会等発表、役員参加	132
共同研究・受託研究の実績	132
大学院生指導	132
研究能力に対する評価	133
○サービス活動業績	
学内委員会・作業部会等活動実績	134
アドバイザー活動実績	134
後進育成活動実績	134
社会貢献活動	135
○専門的活動(教育業績、研究業績、サービス活動業績)の統合による成果と目標	
専門的成果	136
専門的目標	136
○添付資料	
略	
○最新データ入力日	136

教育業績

教育理念、方針、方法	<p>いつの時代にも変わらぬ大学教育の使命がある。それは専門性の探求と、人としての深い教養の修学である。適応的なライフサイクルを実現していくためには、これらの課題をそれ相応に両立させて行くことが肝要である。</p> <p>このような基本的な考えのもと、バランスの取れた人材育成を目指す教育活動を実践する。そのためには、2つの学習方法、即ち、知的学習と体験学習の組み合わせで構成される学習環境の整備や指導法の工夫が重要となる。単なる知的学習に留まらずに、そこで得た事象を体現する力(実践力)にまで発展させるために、2つの形態の学習を自己の中で咀嚼していける授業展開を目指したい。その結果、青年期に生きる学生の自分探し(アイデンティティ)、人間関係の営み技術(コミュニケーション)そして学習への主体的取り組み姿勢の構築に役立つことを伝えたい。</p>
教育能力	<p>(1)教育方法実践例</p> <p>a.山梨英和大学大学院カリキュラムの中で担当している、“障害者(児)臨床心理学特論”で精神遅滞、学習障害、コミュニケーション障害、広汎性発達障害等の行動理解、発達支援、指導構造及び指導法、親の障害受容について、自ら担当した治療教育相談実践例を通して分析、解説、2004年度－2010年度。</p> <p>b.放送大学山梨学習センター、面接授業”障害児の発達支援”で、障害児の実態把握のための教育診断法、発達過程、問題行動のとらえ方、治療教育の方法論等について、視聴覚教材や体験学習のためのエクササイズ(ロールプレイ・コミュニケーション技法)を導入して概説、2008年度－2010年度。</p> <p>(2)作成した教科書、教材等</p> <p>a.山口勝弘他編著、“子どもの発達支援”－障害児教育のフィールドワーカー、pp48－58、84－96 啓明出版、ISBN:4－87448－030－6、2002。</p> <p>b.山口勝弘、“療法的手法による音楽指導”、“音楽の生涯教育－理論と実際－、高萩保治・中嶋恒雄編著、pp92－99、玉川大学出版部、ISBN:4－472－40232－7</p> <p>c.山口勝弘・大島貞夫著、“心理学要説”、pp3－19、21－50、51－64、81－94、117－140、165－167、194－204、相川書房、ISBN:4－7501－0261－X、1999。</p> <p>(3)教育方法や実践に関する発表、講演等</p> <p>a.山口勝弘、“音楽療法士に求められること”、pp1－36、(岐阜県音楽療法士協会 設立記念講演 発表資料)、2002. 10</p> <p>b.山口勝弘、“障害児教育臨床に携わる者に求められること－子ども理解のために－、山梨障害児教育学研究紀要Vol.1、pp1－14、山口勝弘退官記念講演、2007. 7</p> <p>c.山口勝弘、“脳血管障害の対象者に対する音楽療法－障害受容の視点から”、(発表者:井上幸一)、井上氏の論文へのコメント、音楽療法 Vol.17、2007</p> <p>d.山口勝弘、“音楽療法にまつわる介護現場でのコミュニケーションに関する一考察－介護福祉士から見た音楽療法－、(発表者:宮澤 崇)、宮澤氏の論文へのコメント、音楽療法、Vol.18、2008</p>
担当授業科目	<p>2011年度:</p> <p>基礎ゼミ1、人間関係論、教育心理学、地域支援の心理学、専門ゼミ、卒業研究、発達障害者・児の心理・生理(以上学部)。障害者・児臨床心理学特論、臨床心理事例研究、臨床心理実習(以上大学院)。</p>
代表的シラバス	<p>基礎ゼミ・専門ゼミでは演習の形態を取るため、受け身・待ちではなく、自主的・積極的な授業参加ができるような授業構造を設定している。具体的な問題設定から始まって、文献講読、資料分析、プレゼンまでの作業過程を体験学習できるように配慮している。</p> <p>講義では最新情報の提供と併せて、単に知識・情報を機械記憶するだけでなく、話された講義内容に対応する具体的な例を自己の生活に求め、自らを関与させながら反すうするという学習態度の習得を可能にするように構成している。</p>

<p>教育改善活動</p>	<p>a.文献検索の具体的手法及び資料収集についての講義を特科して設置。 b.講義における視覚情報教材の大幅な導入。 c.教員からの一方的な話しではなく、相互コミュニケーションを体現するための教授法の工夫を常時検討。</p>
<p>教育能力に対する評価</p>	<p>(1)学生による授業評価(アンケートより) 全体的評価:わかりやすい、おもしろい等の感想が寄せられ、受講生の適応水準を考慮した授業が展開されたと認識している。大人数の、しかも出席を原則として取らない授業で、ほとんど欠席が見られなかった。演習形式の授業では、最初の頃受け身的姿勢が通らないことに戸惑い、ストレスを感じていたが、支持的指導を受けて適応してくれた。 良い点・改善してほしい点(自由記述欄より):日常生活での自己体験に対応して理解を深めることを求められるので、抽象的な概念も理解しやすかった。反面、授業で適度な緊張感を持続していないとついていけない旨の感想も寄せられた。また、自我関与することができにくい学生の場合、知的学習のみに集中すべく、毎講義の逐語録を毎回配布してほしい旨の要望も出された。 改善に向けた今後の方針:学生の個人差を受容できる学習の場づくりをこれからも多面的に改善していくが、今日、従来の個人差の概念では理解しがたい差異が観察され、それに対応する教育環境の整備が求められる。 (2)同僚教員等による授業評価 基礎ゼミ等では、一部担当教員間でフィードバックを行ってきてはいるが、同僚教員等による講義評価は定例的には行っていない。今後の課題になる。</p>

研究業績

研究の特徴	<p>1971年から今日まで、“治療的小集団研究”に取り組む。発達教育や心理的適応を目指す治療的小集団の形成過程や集団力動の機能等について、実践的研究を行ってきた。このグループ過程の行動学的研究の成果を学生相談におけるグループ・アプローチ、治療教育における指導法そして集団療法の技法検討に活用している。小集団研究で得られた知見は、治療的小集団のみならず、家族、学校、職場、地域社会等における個と集団の関係を理解する際にも活用できる普遍性を所持していることが実証されつつある。大学はじめ、各地域の研究者との共同作業や情報交換を通して、研究を推進している。</p> <p>1984年から1991年にかけて、障害児教育における言語指導のためのマイクロコンピュータによるバイオフィードバックシステムの開発に着手し、音声認識装置の開発とソフトプログラムの実証的研究に従事。併せて、1999年からはPCに換えて、音・音楽活動を媒介にした指導法の実践的研究に着手。現在、これら障害児・者の治療教育、集団力動に関する研究を統合整理。</p>
研究経歴	<p>1971年 山梨大学 教育学部助手・同保健管理センター講師・助教授、山梨大学教授、山梨英和大学教授 エンカウンターグループを主催 大学生の精神健康増進のための体験学習による指導法の 実証的研究に従事(現在まで)</p> <p>1984年 山梨大学 教育学部助教授・教授 障害児の言語指導のための教材開発(1991年3月まで)</p> <p>1999年 山梨大学 教授、山梨英和大学教授 発達障害、精神障害における音楽療法の効用と限界に関する基 礎調査に従事(現在まで)</p>
研究実績	<p>(1)著書</p> <p>a.山口勝弘・古屋義博編著、子どもの発達支援—障害児教育のフィールドワーク、pp48—58&84—96 啓明出版、ISBN:4—87448—030—6、1997.</p> <p>b.山口勝弘・大島貞夫著、心理学要説、pp3—94、117—140、165—167、194—204、相川書房、ISBN:4—7501—0261—X、1999.</p> <p>c.山口勝弘・山下滋夫著、障害を持つ子ども達の理解とその教育、pp1—96、啓明出版、ISBN:4—87448—027—6、1994</p> <p>など。</p> <p>(2)学術論文</p> <p>a.山口勝弘著、“日本における音楽療法の導入とその変遷”、音楽療法第19号、pp35—57、2010. 7</p> <p>b.山口勝弘・長田由布紀著、“就学期を迎えた障害児の母親に対する心理的支援について”、山梨障害児教育学研究紀要第5号、pp35—46、2011. 2</p> <p>c.山口勝弘・加藤千晴著、“障害児の親の障害否認・受容に関する一研究”、山梨障害児教育学研究紀要第3号、pp111—122、2009. 2</p> <p>d.山口勝弘著、“音楽による療法的手法”、山梨大学教育人間科学部紀要8巻、pp241—254、2007. 3</p> <p>e.山口勝弘著、“障害児教育臨床に携わる者に求められること”、山梨障害児教育学研究紀要創刊号、pp1—14、2007. 2</p> <p>など。</p> <p>(3)その他の研究活動(国際会議発表、学術誌編集、学術論文査読等)</p> <p>a.学術雑誌“音楽療法”(日本臨床心理研究所)Vol. 1～19(1991～ 2010年)への投稿論文査読審査および編集の任に当たる。</p>

競争的資金採択課題	<p>a.平成2・3年度(1988年4月～1991年3月)科学研究費(重点領域研究)「コミュニケーション障害児の診断と教育に関する研究」－障害児のためのCAIシステムの開発(平成2年度)・重度・重複障害児へのフィードバック機能を持つCAIシステムの活用(平成3年度)－研究分担者</p> <p>b.2001年4月～2002年3月 厚生科学研究費(障害保健福祉総合研究事業)「音楽療法の臨床的意義とその効用に関する研究」研究分担者</p> <p>c.1977年度～2006年度 学生相談研究会議(国立大学保健管理センター及び学生相談室で構成され、文部省科研費－厚生補導特別経費－で運営してきた組織)の会員として、「大学生の 精神健康増進のためのグループアプローチ」研究分担者</p>
学会等発表・役員参加	<p>2010年 8月 教科指導(音楽・図工・美術)”,第44回全日本特別支援教育研究協議会関東甲信越地区特別支援教育研究集会、指導助言者、都留文科大学、pp37-38</p> <p>2008年 7月 ”音楽療法”Vol.17・18(2009年)投稿論文におけるコメンテーター、pp70、pp54.</p> <p>2007年 11月 山口勝弘他、座談会”音楽療法の未来に向かって－地域とともにはぐくむ音楽療法へ”、第6回日本音楽療法学会関東支部地方大会、パネリスト</p> <p>1998年 4月 日本心理学会専門別議員(1985年～1987年, 1989年～2009年まで)</p>
共同研究・受託研究の実績	特になし
大学院生指導	<p>大学院生(主)指導 教員(山梨英和大学大学院人間文化研究科 臨床心理学専攻)</p> <p>2010年度 * 障害児・者を育てる親の障害受容過程に関する研究－夫婦の会話に焦点を当てて－ * メンタルフレンド活動における青少年への関わり方に関する－考察－実践者への面接を通して－</p> <p>2009年度 * ジェンダー・タイプと主観的幸福感・自尊感情の関係について</p> <p>2008年度 * 就学期を迎えた障害時の母親に対する心理的支援について －継続的な面接調査を通して－</p> <p>2007年度 * 障害児の親の障害否認・受容に関する－研究</p> <p>2007・2008年度の論文は、山梨障害児教育学研究紀要(山梨大学教育人間科学部)に投稿、査読審査の結果、受理された。</p>

<p>研究能力に対する評価</p>	<p>1977年から取り組んできたグループアプローチの実践研究は、キャンパスにおける大学生のメンタルヘルスへの対処に関する厚生補導の指針として文部省と共同開発。国公私立大における保健管理に己貢献。特に個人カウンセリングと集団療法の併用、精神健康増進について具体的方法論の開発に貢献。</p> <p>障害児・者への治療教育に関するプログラム開発・効果の査定等に関する研究の中で、①言語発達を促進するための音声認識装置を利用したバイオフィードバックシステムの開発は、障害児教育における科研費重点領域課題として位置付けられ、その成果は日経をはじめとする業界紙に紹介された。開発されたハード・ソフトは教育現場、特に重度重複障害児の指導に導入された。また、②音・音楽活動を媒介にした治療教育の基礎・実践研究では、児童・生徒及び成人の音楽療法の研究成果や文部省海外短期出張研修での資料等が、日本ではじめての県立音楽療法研究所の開設に利用された。また日本音楽療法学会の設立や音楽療法士の国家資格制度実現のための施策の中で利用されている。</p>
-------------------	---

サービス活動業績

<p>学内委員会・作業部会等活動実績</p>	<p>2007年 4月 共通科目委員会、教職課程運営委員会、大学院臨床実習運営委員会、心理臨床センター管理運営委員会、</p> <p>2008年 4月 教職課程運営委員会、日本語教員養成課程運営委員会、大学院臨床実習運営委員会、心理臨床センター管理運営委員会、</p> <p>2009年 4月 教職課程運営委員会、大学院臨床実習運営委員会、心理臨床センター管理運営委員会、進路支援委員会、</p> <p>2010年 4月 ハラスメント防止委員会、紀要委員会、進路支援委員会、自己点検・評価委員会、大学院臨床実習運営委員会、心理臨床センター管理運営委員会、大学運営委員会、入試委員会、教職課程存廃検討委員会、</p> <p>2011年 4月 ハラスメント防止委員会、学生委員会、進路支援委員会、大学院臨床実習運営委員会、国際交流委員会、大学運営委員会、心理臨床センター管理運営委員会、自己点検・評価委員会、</p>
<p>アドバイザー活動実績</p>	<p>2007年度～2010年度は各年度10～15名(留学生を含む)を担当し、原則として毎週水曜日1限あるいは2限を指定して、アドバイザー活動を実践した。1～2回の来室で問題解決する場合や、定期的に相談に来られる場合もあったが、全く接触がない場合で後日不適応状態になった事案に遭遇した。2011年度に向けて、指導のあり方について要検討。</p>
<p>後進育成活動実績</p>	<p>1. エンカウンターグループを中心としたグループワークの主催(1981年～2009年)を通して集団力動を体験学習した医療従事者・教諭・心理カウンセラー等の養成に従事。延べ81回のグループダイナミクスセミナーを開催。参加者は延べ約800名。</p> <p>2. 音楽療法士養成。精神医学、教諭(小・中・養護学校)・OT・PT・看護・音楽等の背景をもつ対象への音楽療法士養成プログラム及び共同研究の場づくりに従事。音楽療法セミナー 計34回主催 1977年～2009年。</p>

社会 貢 献 活 動	(1)講演会	
	2008年	2月 静岡県知的障害児・者音楽療法講演会:磐田市
	2008年	7月 第2回地域療育等支援事業講演会「暮らしの中で考える障害を持つ人たちの性」講師
	2010年	9月 山梨県視覚障害者講演会「音楽と心のやすらぎ」:山梨県ボランティアセンター講師
	2010年	12月 山梨県PTA協議会主催講演会(対象:義務教育・教育相談担当者)講師
	2011年	3月 山梨県PTA協議会主催講演会(対象:県下全小・中学校PTA地域指導者)講師
	(2)出前講座	
	2007年	7月 山梨県教育委員会主催 校長会研修(学校における精神保健)講師
	2007年	1・2月 被害者支援センターやまなし主催 ボランティア養成講座講師(2011年度まで)
	2008年	5月 放送大学面接授業(障害児の発達支援)・山梨学習センター講師(2010年度まで)
	2007年	4&11月 山梨県立就業支援センター主催 訪問介護員1級養成研修会(1班・2班)講師(2011年度まで)
	2007年	6月 山梨県教育委員会主催スクールカウンセラー派遣事業要請訪問カウンセラー(2011年度まで)
	2009年	10月 山梨県臨床心理士会・山梨県弁護士会共催 「子ども何でも相談」相談員
	2010年	12月 山梨労働局第1回メンタルヘルス研修会講師(第2・3回研修会は、2011年1月)
	(3)公開講座	
	2007年	10月 山梨県精神保健協会主催セミナー「認知症とは」(対象:児童・生徒・父兄)企画・運営(2011年度までー2009年度を除くー)
	(4)学外審議会・委員会等	
	2007年	5月 山梨県臨床心理士会会長(2012年3月まで)
	2007年	4月 山梨県障害児適性就学推進委員会会長(2011年11月まで)
	2007年	4月 山梨県精神保健協会理事(2012年3月まで)
	2007年	4月 甲府家庭裁判所外部委員会委員(2009年7月まで)
	2007年	4月 山梨県社会福祉協議会委員(2012年3月まで)
	2007年	4月 (社)被害者支援センターやまなし副理事長兼センター長(2012年3月まで)
	2009年	4月 山梨県高次脳機能障害支援体制検討会議委員(2012年3月まで)
	2009年	4月 山梨県発達障害者支援企画・推進委員会委員(2012年3月まで)

成果と目標

専門的成果	<p>①音楽療法の基礎的・実践的研究の成果は、科学としての音楽療法の構築に向けて参考とされ、治療教育、高齢者リハビリテーション及び精神医療における治療論や職業としての専門性の確立に利用されている。</p> <p>②重複障害児の言語指導に導入した機器の開発は、その後のPCの進化に伴って、学校現場で利用しやすいように改善。障害児教育現場へのバイオフィードバックシステムの導入に道筋をつけた。</p> <p>③グループダイナミクスに関する研究成果は、集団研究(小集団の構造論や集団力動等)の先駆的役割に貢献。論文、専門書として発信。多くの人との間で、共有されてきている。</p>
専門的目標	<p>①音楽療法関係については、診断と査定技法の一層の検討を踏まえて、信頼性・妥当性のある教育指導法・治療技法の実現が急がれる。そのために、各領域における事例研究の更なる蓄積をしていく。</p> <p>②障害児の言語指導に関しては、バイオフィードバックシステムを遊戯療法その他の指導法とどのように組み合わせしていくか、対象事例の属性を念頭に入れた実践研究を関係者間の協力で取り組んでいく。</p> <p>③集団研究の成果は、家族、学校のクラス等々、種々の集団に共通して見られる集団形成過程の原型を抽出すべく、実践研究の基礎資料を基にした概念化作業に着手していく。</p>

最新データ入力日	2011年 4月 1日
----------	-------------

専任教員職務業績集

山梨英和大学

フリガナ 氏名	性別	生年(西暦)	職名	所属
エハラテルマサ 江原 暉将	男	1944年	教授	人間文化学部人間文化学科
取得学位称号	博士(工学)	専門分野	自然言語処理	
学 歴	1963年	3月 早稲田大学高等学院卒業		
	1963年	4月 早稲田大学第一理工学部電気通信学科入学		
	1967年	3月 早稲田大学第一理工学部電気通信学科卒業		
	1997年	10月 東京工業大学 博士(工学)学位取得		
実 務 経 験	1967年	4月 日本放送協会(NHK)入局		
	1970年	8月 NHK放送技術研究所に配属		
	1989年	6月 国際電気通信基礎研究所(ATR)に出向(1991年6月まで)		
	1996年	10月 通信・放送機構渋谷上原リサーチセンター サブリーダー兼務(2001年3月まで)		
	1997年	4月 東京女子大学現代文化学部 非常勤講師兼務(2000年3月まで)		
	1998年	9月 日本工業大学大学院工学研究科情報工学専攻 非常勤講師兼務(2002年3月まで)		
	2000年	4月 早稲田大学理工学部電子・情報通信学科 非常勤講師兼務(2003年3月まで)		
	2003年	4月 諏訪東京理科大学システム工学部電子システム工学科 教授		
	2007年	4月 (財)日本特許情報機構客員研究員兼務(現在に至る)		
	2009年	4月 山梨英和大学人間文化学部人間文化学科 教授(現在に至る)		
受 賞 歴	年	月		
	年	月		
	年	月		
所 属 学 会	1967年	4月 電気通信学会(現 電子情報通信学会)会員(現在に至る)		
	1979年	4月 情報処理学会会員(現在に至る)		
	1991年	機械翻訳協会(現 アジア太平洋機械翻訳協会)会員(現在に至る)		
	1994年	1月 言語処理学会発足会員(現在に至る)		
特 免 資 格 等 ・ ・	1999年	12月 特許:自然言語処理装置および方法(登録番号 特3017098)		
	年	月		
	年	月		
	年	月		

目 次

○教育業績	
教育理念、方針、方法	139
教育能力	
教育方法実践例	139
作成した教科書、教材等	139
教育方法や実践に関する発表、講演等	139
担当授業科目	139
代表的なシラバス	139
教育改善活動	139
教育能力に対する評価	139
○研究業績	
研究の特徴	140
研究経歴	140
研究実績	
著書	140
学術論文	140
その他の研究活動	140
競争的資金採択課題	140
学会等発表、役員参加	141
共同研究・受託研究の実績	141
大学院生指導	141
研究能力に対する評価	141
○サービス活動業績	
学内委員会・作業部会等活動実績	142
アドバイザー活動実績	142
後進育成活動実績	142
社会貢献活動	142
○専門的活動(教育業績、研究業績、サービス活動業績)の統合による成果と目標	
専門的成果	143
専門的目標	143
○添付資料	
略	
○最新データ入力日	143

教育業績

教育理念、方針、方法	先人から受け継ぎ自らも多少なりと追加した学問や思想を次の世代に引き継ぐことを教育理念とする。歴史を経て積み重ねられてきた豊富な内容を短時間のうちに教授するには、本質となる部分を見定め、その部分の深い理解を促すことが重要である。そのため、演習を多用して、頭だけでなく体を使って理解させる方法をとっている。
教育能力	<p>(1)教育方法実践例 環境マインド育成研究会の主宰(諏訪東京理科大学): 諏訪東京理科大学の教育の特徴の一つである環境教育は3学科にまたがる内容を持っているが、これまで、学科横断的な教育が十分なされていなかった。表題に示す研究会を3学科と共通教育センターの教員および学生を含めて組織し、活動することで学科横断的な環境教育が実現できるようになった。</p> <p>(2)作成した教科書、教材等 コンピュータシステム科目における電子教材の作成と利用(諏訪東京理科大学): 表題の科目の中でCPUとメモリーが連携して行う動作をpower pointを利用した電子教材で学生に提供した。このことで、黒板では表しにくい状態の時間的変化を分かりやすく教育することができた。 電子システム工学実験II教科書執筆(諏訪東京理科大学): 表題の教科書の中の演算増幅器I, IIの部分を執筆。</p> <p>(3)教育方法や実践に関する発表、講演等 江原暉将: e-Learningと言語処理・音声処理—字幕利用を中心として—, 言語処理学会第10回年次大会ワークショップ「e-Learningにおける自然言語処理」論文集, pp.1-4, Mar., 2004.</p>
担当授業科目	<p>2011年度 コンピュータシステム、プログラミングのための数学、情報システム実験演習 I、情報セキュリティ、オペレーティングシステム、プレゼンテーション演習、専門ゼミナール J01、卒業研究 J01</p>
代表的シラバス	<p>プログラミングのための数学 概要: コンピュータを用いた数理的処理は、情報システムだけでなく、ビジネス(経済学)、心理学等においても必須の手法となっている。その数学的基礎は、線形代数、微積分、確率統計である。この講義では、その中で線形代数について学ぶ。 到達目標: 1. 線形と非線形概念を区別し、線形代数とは何かが分かる。 2. 行列を用いた演算ができるようになる。 3. 行列を用いて連立一次方程式が解けるようになる。 4. 行列式に関する基礎がわかる。 5. 固有値・固有ベクトルに関する基礎がわかる。</p>
教育改善活動	FD推進委員会委員長として教育改善活動に取り組んだ(2009年度、2010年度)
教育能力に対する評価	<p>(1)学生による授業評価 総合評価点(5点満点)の平均値は以下のとおりであった。おおむね学生は満足しているが、一部の学生からは内容が難しいという意見もあり、わかりやすい教授法が課題である。 2009年度: 4.57 2010年度: 4.53</p> <p>(2)同僚教員等による授業評価 現時点では、同僚教員による授業評価を実施していない。</p>

研究業績

研究の特徴	私が電気通信技術、情報処理技術の研究を目指した理由は戦争にある。第2次世界大戦中に生を受けたことで、戦争を回避したいという思いを持ち、そのためには対話の充実を図ることが重要であると考えようになった。その結果、上記技術の向上を研究目的と定めた。研究の特徴は理論と実証を結びつけ、研究・開発だけでなく実用化にまで進める点にある。
研究経歴	<p>1970年 日本放送協会放送技術研究所において、仮名漢字変換、情報検索、機械翻訳、音声認識、聴覚障害者向け字幕制作等の研究に従事(2005年まで)</p> <p>2003年 諏訪東京理科大学においてメディア情報処理技術の研究に従事(2009年まで)</p> <p>2008年 (財)日本特許情報機構において特許文書の機械翻訳に関する研究に従事(現在に至る、兼務)</p> <p>2009年 山梨英和大学においてメディア情報処理技術の研究に従事(現在に至る)</p>
研究実績	<p>(1)著書</p> <p>1. 江原暉将:新版情報処理ハンドブック、第14編 自然言語処理、第7章 応用システム、7.1節 機械翻訳、オーム社、pp.1585-1593, Dec., 1995.</p> <p>2. 江原暉将:言語処理学事典、第3部 統合技術・応用システム、3.7 教育支援における言語処理、3.7.3 教育支援システム、共立出版、pp.436-439, Dec., 2009.</p> <p>(2)学術論文</p> <p>1. 後藤功雄、田中英輝、加藤直人、江原暉将、浦谷則好:部分文字列への最適な分割と文脈を考慮した変換による翻字処理,電子情報通信学会論文誌D, Vol.J92-D, No.6, pp.909-920, June, 2009.</p> <p>2. 後藤功雄、加藤直人、田中英輝、江原暉将、浦谷則好: World Wide Web を用いた外国人名の英訳自動獲得,情報処理学会論文誌, Vol.47, No.3, pp.968-979, Mar., 2006.</p> <p>3. 加藤直人、浦谷則好、江原暉将、安藤彰男: ニュース音声認識のための(n≥4)-gramを併用する言語モデル,電子情報通信学会論文誌, Vol.85-D-2, No.6, pp.967-975, June, 2002.</p> <p>4. Takahiro Wakao, Terumasa Ehara and Katsuhiko Shirai: Text Summarisation for Production of Closed-Caption TV Programs in Japanese, Computer Processing of Oriental Languages, Vol.12, No.1, pp.87-97, Sept. 1998.</p> <p>5. 江原暉将、小倉健太郎、篠崎直子、森元逞、樽松明: 電話またはキーボードを介した対話に基づく対話データベースADDの構築,情報処理学会論文誌, Vol.33, No.4, pp. 448-456, April, 1992.</p> <p>(3)その他の研究活動(国際会議発表、学術誌編集、学術論文査読等)</p> <p>1. EHARA Terumasa : Relation between the word order characteristics and suicide/homicide rates (2), Proceedings of The 17th Annual Meeting of The Association for Natural Language Processing, F4-6, pp.1037-1040, Mar., 2011.</p> <p>2. EHARA Terumasa, HAYATA Suzushi and KIMURA Nobuyuki : Mongolian to Japanese Machine Translation System, Journal of Yamanashi Eiwa College, Vol.9, pp.27-40, Feb., 2011.</p> <p>3. EHARA Terumasa: Machine translation for patent documents combining rulebased translation and statistical post-editing, Proceedings of NTCIR-8 Workshop Meeting, June 15-18, 2010, Tokyo, Japan</p> <p>4. Hiroshi Echizen-ya, Terumasa Ehara, Sayori Shimohata, Atsushi Fujii, Masao Utiyama, Mikio Yamamoto, Takehito Utsuro and Noriko Kando : Meta-Evaluation of Automatic Evaluation Methods for Machine Translation using Patent Translation Data in NTCIR-7 , Proceedings of the 3rd Workshop on Patent Translation, pp.9-16, Sept, 2009.</p> <p>5. Isao Goto, Naoto Kato, Terumasa Ehara & Hideki Tanaka: Back transliteration from Japanese to English using target English context, Proceedings of the 20th International Conference on Computational Linguistics, pp.827-833, Aug., 2004.</p> <p>6. Terumasa Ehara, Takahiro Wakao, Eiji Sawamura, Ichiro Maruyama, Yoshiharu Abe and Katsuhiko Shirai: Application of natural language processing and speech processing technology to production of closed-caption TV programs for the hearing impaired, Proceedings of the Natural Language Processing Pacific Rim Symposium '97, pp.273-278, Nov., 1997.</p>
競争的資金採択課題	なし

<p>学会等発表・役員参加</p>	<p>1993年 5月 情報処理学会論文査読委員(現在に至る) 1994年 5月 言語処理学会理事(1998年5月まで) 1997年 3月 言語処理学会第3回年次大会実行委員長 1998年 5月 情報処理学会理事(2000年5月まで) 1999年 3月 情報処理学会第59回全国大会組織委員、特別セッション(情報家電とホームネットワーク)実行委員長 1999年 8月 言語処理学会論文誌「自然言語処理」特集号(構文解析)編集長 2003年 9月 AAMT/Japio特許翻訳研究会委員(現在に至る)(AAMT:アジア太平洋機械翻訳協会、Japio:(財)日本特許情報機構) 2008年 4月 AAMT/Japio特許翻訳研究会副委員長(現在に至る) 2009年 8月 Chair of the MT Summit XII 3rd Workshop on Patent Translation 2010年 12月 AAMT/Japio特許翻訳研究会主催、第1回特許情報シンポジウム、実行委員長</p>
<p>受託共同研究の実績</p>	<p>年 月 なし 年 月 年 月 年 月 年 月</p>
<p>大学院生指導</p>	<p>中国語による自動歌唱の研究を指導した(諏訪東京理科大学)。発表論文は以下のとおり。 1. 久保一志、江原暉将：中国語での話声から歌声への変換，言語処理学会第14回年次大会発表論文集, PD3-6, March, 2008.</p>
<p>研究能力に対する評価</p>	<p>情報処理技術の中で特にコンテンツに関係の深い言語情報処理技術を中心に研究している。日本語情報処理、音声情報処理、機械翻訳、情報検索など実利用に近い分野で基礎研究から実用化まで幅広く手がけている。</p>

サービス活動業績

<p>学内委員会・作業部会等活動実績</p>	<p>2009年 4月 附属図書館長(2011年3月まで) 2010年 4月 IT委員会委員長(2011年3月まで) 2009年 6月 FD推進委員会委員長(現在に至る) 2011年 4月 進路支援室長(現在に至る) 年 月 年 月 年 月</p>
<p>アドバイザー活動実績</p>	<p>他大学の大学院進学希望者に対して進路指導を行った。2010年度実績: 岐阜大学大学院、山梨大学大学院、東京学芸大学大学院、北海道大学大学院(研究生)。</p>
<p>後進育成活動実績</p>	<p>研究室所属の助教に対して研究指導を行った(諏訪東京理科大学)。共著論文例:(1)大田健紘, 江原暉将: 条件付確率場を用いた発話内容の分類による音声認識結果の検証, 第10回音声言語シンポジウム, 46, Dec., 2008. (2)大田健紘, 山越祐太, 江原暉将: 中国語による歌唱合成に関する研究, 音響学会2009年春季研究発表会, 1-R-7, March, 2009.</p>
<p>社会貢献活動</p>	<p>(1)講演会 年 月 特になし (2)出前講座 年 月 特になし (3)公開講座 年 月 特になし (4)学外審議会・委員会等 2009年 2月 エルシーブイ(株) 社外諮問委員会委員 2009年 4月 (財)日本特許情報機構 特許版産業日本語委員会委員 (5)その他 年 月 特になし</p>

成果と目標

専門的成果	<p>①日本語のコンピュータへの入力手段である「かな漢字変換」実用化への道筋をつけた。特に中核技術の一つである日本語文節内文法を研究し、分かち書き単位分析表を完成させた。</p> <p>②日本語のニュースを元に外国語のニュースを制作する多言語翻訳支援システムを研究し、NHKの国際放送で利用した。このことによって国際的な情報発信の充実に寄与した。</p> <p>③テレビジョン放送番組に聴覚障害者向け字幕を付与する字幕制作技術について研究し、字幕付与に貢献した。特に、音声認識を用いたリアルタイム字幕付与、音声処理技術や自然言語処理技術を用いた効率的字幕付与の実用化に寄与した。</p> <p>④特許文書の機械翻訳を研究し、特許情報の世界的な流通促進に寄与した。特に2009年度に実施された特許文書の日英機械翻訳に関するコンテスト(NTCIR-8, PAT-MT task, JE subtask)において参加7チーム中第1位であった。</p>
専門的目標	<p>①特許文書の中英機械翻訳に関するコンテスト(NTCIR-9, PAT-MT task, CE subtask)において上位にランクされる。</p> <p>②第4回特許翻訳ワークショップ(MT Summit XIII, 4th workshop on patent translation)にco-chairとして参加し、成功裏に実行する。</p>

最新データ入力日	2011年 4月 1日
----------	-------------

専任教員職務業績集

山梨英和大学

フリガナ 氏名	性別	生年(西暦)	職名	所属
フカツ 深津	男	1947年	教授	人間文化学部人間文化学科
取得学位称号	Th.M(神学修士)	専門分野	聖書学・キリスト教学	
学 歴	1966年	4月 青山学院大学文学部神学科入学		
	1970年	3月 青山学院大学文学部神学科卒業(神学士)		
	1970年	4月 青山学院大学文学研究科聖書神学専攻修士課程入学		
	1972年	3月 青山学院大学文学研究科聖書神学専攻修士課程修了(文学修士)		
	1972年	4月 青山学院大学文学研究科聖書神学思想専攻博士課程入学		
	1975年	3月 青山学院大学文学研究科聖書神学思想専攻博士課程単位取得退学		
	1975年	9月 プリンストン・セオロジカル・セミナリー大学院修士課程入学		
	1977年	7月 プリンストン・セオロジカル・セミナリー大学院修士課程修了(Th.M)		
実 務 経 験	1974年	2月 日本基督教団新泉教会伝道師		
	1981年	7月 日本基督教団新泉教会主任担任教師(1988年3月まで)		
	1984年	4月 明治学院大学非常勤講師(2005年3月まで)		
	1988年	4月 日本基督教団百人町教会担任教師(2005年3月まで)		
	1991年	4月 ウェスレアン・ホーリネス神学院講師(現在に至る)		
	1992年	4月 日本聖書神学校講師(2005年3月まで)		
	1995年	4月 青山学院大学非常勤講師(2007年3月まで)		
受 賞 歴	年	月		
	年	月 特になし		
	年	月		
所 属 学 会	1970年	4月 青山学院大学同窓会基督教学会会員(現在、委員、同学会誌『基督教論集』編集委員)		
	1972年	6月 日本聖書学研究所会員		
	1974年	10月 日本旧約学会会員		
	1983年	7月 日本基督教学会会員		
特 免 資 格 等	1972年	3月 高等学校教諭宗教科第一種免許状取得		
	1972年	3月 中学校教諭宗教科第一種免許状取得		
	1997年	1月 日本基督教団正教師		
	年	月		

目 次

○教育業績	
教育理念、方針、方法	146
教育能力	
教育方法実践例	146
作成した教科書、教材等	146
教育方法や実践に関する発表、講演等	146
担当授業科目	146
代表的なシラバス	146
教育改善活動	146
教育能力に対する評価	146
○研究業績	
研究の特徴	147
研究経歴	147
研究実績	
著書	147
学術論文	147
その他の研究活動	148
競争的資金採択課題	148
学会等発表、役員参加	148
共同研究・受託研究の実績	148
大学院生指導	148
研究能力に対する評価	148
○サービス活動業績	
学内委員会・作業部会等活動実績	149
アドバイザー活動実績	149
後進育成活動実績	149
社会貢献活動	149
○専門的活動(教育業績、研究業績、サービス活動業績)の統合による成果と目標	
専門的成果	149
専門的目標	149
○添付資料	
略	
○最新データ入力日	149

教育業績

教育理念、方針、方法	<p>本学はミッションスクールとして、キリスト教の信仰に基づく人間形成としての学校教育を建学の理念に掲げている。従って、キリスト教科目のうち、『キリスト教と文化』、『キリスト教と山梨英和』が必修として設置されているのであるが、学生の多くがキリスト教に初めて触れる者である故に、大学教育の水準を保ちつつも、できる限り分かり易い内容となるよう工夫する必要がある。また、縁遠さを感じている学生を配慮し、身近な内容をも心がけるべきものとなっている。そのために取られるべき方法としては、さまざまな教材、特に、現代の学生には身近なものとなっている視覚教材の活用があげられる。</p>
教育能力	<p>(1)教育方法実践例 視覚映像の取り入れ；多くの学生にとってなじみの薄いキリスト教について、より身近でリアルなものとしていくため、映像を多く取り入れるよう努める。「偉大なる生涯の物語」「天地創造」「プリンス オブ エジプト」「ブラザーサン、シスタームーン」「フォレスト・ガンプ」等。</p> <p>(2)作成した教科書、教材等 共著『聖書謎百科』（荒地出版社、2006年）；表記中の「ヤコブとヨセフの信仰は報われたのか？」の項をもとにして講義</p> <p>(3)教育方法や実践に関する発表、講演等 2007年1月21日、講演「青年と教会」日本基督教団山梨分区社会部講演会；表記講演会にて、青年の指導のあり方をめぐって講演</p>
担当授業科目	『キリスト教と山梨英和A』『キリスト教と山梨英和B』『キリスト教と文化A』『キリスト教と文化B』『聖書の世界』『ヒューマンケアA』『ヒューマンケアB』『教養演習』『基礎ゼミナール』
代表的シラバス	『キリスト教と文化』では、とすれば堅苦しく、難解と思われがちな聖書を、身近に興味を抱くよう努め、初めに『創世記』の有名な物語「天地創造」「アダムとイブ」「ノアの箱船」等を取り上げ、そこに隠されている人間のあり方への洞察に努める。また、『ヨブ記』『箴言』『コヘレトの言葉』を取り上げ、人生における苦難の意味を探る。また、イエス・キリストの言葉と活動を通して、隣人愛とは具体的にどのようなあり方と意味で表現されているのかを見る。また、その実践例として、フランチェスコやキング牧師の生き方を取り上げる。以上のように、聖書を通して自分の生き方、あり方を顧みられるよう努める。
教育改善活動	<p>本学のFD推進委員会に委員として所属し、2010年11月9日に風間重雄学長、木田献一山梨英和学院長を講師として、「人間文化学部人間文化学科設立への思い」（木田院長）、「人間文化学部人間文化学科としてのディプロマポリシー」（風間学長）の講演題でのFD研究会を企画した。</p>
教育能力に対する評価	<p>(1)学生による授業評価 『キリスト教と文化』では、大部分の学生にとってはキリスト教に初めて触れることもあって、理解が難しいものとなっている。しかし、ビデオ教材利用への評価は高く、補助教材の役割を十分に果たしているといえる。私語厳禁状態への評価も高く、この点での学生のニーズは大きく、教員の責任も重いことがうかがえる。</p> <p>(2)同僚教員等による授業評価 特になし</p>

研究業績

<p>研究の特徴</p>	<p>海には様々な海流という流れがあって、それらが気温や気象、さらには農業や経済にまで作用していくように、歴史にも、傾向という様々な流れが存在している。それらは、神観や神学、倫理観や人間観あるいは派閥の継承に見られるような傾向の流れであったりする。歴史の出来事はこうした傾向の表面化とも言えるのであって、歴史理解にとっては、このような諸傾向の抽出と把握が重要なものとなる。以上のような傾向の流れは聖書の内容にも影響してきた。聖書からそうした傾向を抽出する。また、ユダヤ教、キリスト教、イスラム教の源流である旧約聖書がそれらの諸宗教に対してどのような影響を与えてきたか、またどのように解釈されてきたか、そして現代のキリスト教や現代社会にどのような意味を持つかをも探る。</p>
<p>研究経歴</p>	<p>1996年 青山学院大学総合研究所、キリスト教文化研究センター研究員(1998年まで) 年 年 年</p>
<p>研 究 実 績</p>	<p>(1) 著書 翻訳『ダ=エル書・ホセア書・アモス書』ケンブリッジ旧約聖書注解19,1981年,新教出版社 共著『古代イスラエル預言者の思想的世界』「預言者エレミヤの傾向史的研究」新教出版社,1997年 共著『新版 総説 旧約聖書』「エレミヤ書」日本キリスト教団出版局、2008年 共著『聖書学用語辞典』日本キリスト教団出版局、2008年 翻訳『エレミヤ書』現代聖書注解スタディ版,日本キリスト教団出版局、2010年</p> <p>(2) 学術論文 「ホセア書1章―3章の考察」『基督教論集』18号、青山学院大学基督教学会、1973年 「ホセアの予言とその時代」『基督教論集』23号、青山学院大学基督教学会、1979年 「ヤハウィストの編集」『基督教論集』30号、青山学院大学基督教学会、1987年 「聖書に見る法の精神」『婦人新報』1052号、日本基督教婦人矯風会、1988年 「旧約聖書の人道主義的傾向」『基督教論集』33号、青山学院大学基督教学会、1990年 「ヤコブとヨセフ」「ヨシュアと士師」『歴史読本ワールド』新人物往来社、1990年、『別冊歴史読本』新人物往来社、1995年 「ゼカリヤ書4章1-14節」『説教者のための聖書講解』75,日本基督教団出版局、『12小預言書』日本基督教団出版局,2000年 「サムエル」『のら』創刊号、雑誌「のら」発行所、1991年 「イスラエルの王国観―申命記を中心として―」『基督教論集』36号青山学院大学同窓会基督教学会、1992年 「旧約聖書学の課題と展望」『新教コイノー=ア』12号、新教出版社、1993年 「サムエル―国家と宗教―」『のら』7号、雑誌「のら」発行所、1993年 「ダニエル書7章15-28節」『アレテア』4号、日本基督教団出版局、1994年、『アレテア―釈義と黙想』日本基督教団出版局、2003年 「詩編8編」『アレテア』9号、日本基督教団出版局、1995年 「マタイによる福音書27章27-44節」『アレテア』22号、日本基督教団出版局、1998年、『マタイによる福音書』日本基督教団出版局、2001年 「エロヒストの編集―その人道主義的傾向―」『研究叢書』8号、青山学院大学総合研究所キリスト教文化研究センター、1999年 「平和への希求―紀元前八世紀の世界的視座―」『研究叢書』8号、青山学院大学総合研究所キリスト教文化研究センター、1999年 「バビロニア捕囚とモーセ五書」『基督教論集』44号、青山学院大学同窓会基督教学会、2001年 「詩編45編」『アレテア』33号、日本基督教団出版局、2001年</p>

	<p>「一神教をめぐる」『基督教論集』46号、青山学院大学同窓会基督教学会、2003年</p> <p>「悔い改めをめぐる」『基督教論集』47号、青山学院大学同窓会基督教学会、2003年</p> <p>「自意識の変遷史」『聖書と神学』16号、日本聖書神学校キリスト教研究会、2004年</p> <p>「偶像礼拝(異教礼拝)をめぐる」『基督教論集』49号、青山学院大学同窓会基督教学会、2005年</p> <p>「日本人とキリスト教」『山梨英和大学紀要』5号、山梨英和大学、2006年</p> <p>「青年とキリスト教」『山梨英和大学紀要』6号、山梨英和大学、2008年</p> <p>「全能の神」『山梨英和大学紀要』7号、山梨英和大学、2009年</p> <p>「聖書学と日本」『基督教論集』52号、青山学院大学同窓会基督教学会、2009年</p> <p>「日本人とキリスト教—山梨の場合—」『山梨英和大学紀要』8号、山梨英和大学、2010年</p> <p>「日本人とキリスト教—山梨英和学院の場合—」『山梨英和大学紀要』9号、山梨英和大学、2011年</p> <p>(3)その他の研究活動(国際会議発表、学術誌編集、学術論文査読等)</p> <p>青山学院大学同窓会基督教学会学会誌『基督教論集』編集委員(1998年～現在まで)</p>
競争的資金採択課題	特になし
学会等発表・役員参加	<p>1978年 2月 青山学院大学基督教学会委員</p> <p>1978年 10月 青山学院大学基督教学会研究発表「ホセアの予言とその時代」</p> <p>1986年 4月 青山学院大学基督教学会研究発表「ヤハウィストの編集」</p> <p>1988年 11月 明治学院大学キリスト教研究所研究発表「旧約聖書におけるヒューマニズム」</p> <p>1991年 6月 日本聖書学研究所研究発表「イスラエルの王国観—申命記を中心として—」</p> <p>1994年 4月 青山学院大学基督教学会研究発表「預言者エレミヤの傾向と生涯」</p> <p>2002年 4月 青山学院大学基督教学会研究発表「一神教をめぐる」</p> <p>2008年 4月 青山学院大学基督教学会研究発表「聖書学と日本」</p> <p>年 月</p> <p>年 月</p>
受託共同研究の実績	<p>1996年 4月 青山学院大学総合研究所、キリスト教文化研究センター研究員として「平和と人権プロジェクト」に旧約聖書学専門の立場で参画し共同研究を行った(1998年まで)。</p> <p>年 月</p> <p>年 月</p> <p>年 月</p>
大学院生指導	特になし
研究能力に対する評価	<p>19世紀末以来、旧約聖書学は急速に、発達してきたが、それは、聖書の各文書がいかに編集されてきたかを分析することに力点が置かれた。そして各文書の中で、編集者(学問的には主として申命記学派と呼ばれているが)の言葉を見い出していくことに努力が払われてきた。結果として、各文書における本来の言葉、著者、語り手の言葉が削除されていくこととなり、これは本来の著者の実像が薄れていき、消えていくという副産物をもたらした。ここ20年来にわたって提唱してきた傾向史的研究は、編集者の傾向(例えば人間観)と著者の傾向を抽出して文献に当てはめていくことにより、失われ、ぼやけてしまった著者の実像を浮き立たせていこうとする試みである。これは現在、エレミヤ書に適用されているが、今後他の諸文書にも試みられていかねばならない。また、この傾向史は歴史の根底に流れる海流のようなものとして位置づけられ、この流れの上に各文書が出現しているものと受けとられる必要がある。この観点から、各文書の神観、思想、伝統への向き合い方を抽出する試み(例えば「全能の神」『山梨英和大学紀要』7号)もなされつつある。そしてさらには、キリスト教の傾向と日本人(民族)の傾向を抽出し、キリスト教宣教はいかになされ、今後いかにあるべきかという実践面にも関心を広げている。今後以上のような諸方面への研究が充実していくことにより、「傾向史的研究」の有効性が確かめられるものと考えている。</p>

サービス活動業績

学内委員会・作業部会等 活動実績	2005年	4月	宗教主任(現在まで)
	2005年	4月	学生委員会委員(2007年3月まで)
	2005年	4月	大学運営協議会委員(2008年まで)
	2005年	4月	大学運営委員会委員(現在まで)
	2007年	4月	司書・学芸員課程運営委員会委員
	2009年	4月	学部FD推進委員会(現在まで)
	2010年	4月	進路支援委員会(2011年3月まで)
アドバイザー活動実績		2005年4月より現在まで担当(教養演習、専門演習、卒業研究、基礎ゼミナール)	
後進育成活動実績		特になし	
社会貢献活動	(1)講演会	特になし	
	(2)出前講座		
	2008年	11月	山梨英和高等学校(高大連携授業として担当)
	2009年	3月	山梨英和高等学校(高大連携授業として担当)
	(3)公開講座		
2006年	7月	山梨英和大学公開講座「日本人とキリスト教」を担当	
(4)学外審議会・委員会等			
年	月	特になし	
(5)その他			
年	月	特になし	

成果と目標

専門的成果	<p>① 「預言者エレミヤの傾向史的研究」(『古代イスラエル預言者の思想的世界』新教出版社)はエレミヤ書に傾向史を適用し、編集者の人間観と預言者エレミヤの人間観を対照することによって、エレミヤの実像を浮き彫りにした。</p> <p>② 上記方法論は、旧約聖書を貫く神観や思想に対しても、その源流から後世への流れを明らかにしえると考えられる。この観点から、これまで人道主義的傾向、国家観、平和観、一神教、悔い改めといった重要事項について考察を進めてきた。</p> <p>③ 近年では、日本人の傾向とキリスト教の傾向を対照させ、日本におけるキリスト教宣教のあり方という実践面にも関心を広げている。</p>
専門的目標	<p>① 今後、傾向史的研究を聖書文献にさらに適用していくことにより、聖書内容がより実体的、立体的に浮かび上がることを目指していく。</p> <p>② 傾向史的研究の実践的応用として、日本人としての聖書の見方はどうあるべきか、日本人にとってのキリスト教はどうあるべきかを探究していく。</p>

最新データ入力日	2011年	4月	1日
----------	-------	----	----

専任教員職務業績集

フリガナ 氏名	性別	生年(西暦)	職名	所属
ワタナベ キョウジ 渡邊 久壽	男	1948年	教授	人間文化学部人間文化学科
取得学位称号	文学修士	専門分野	中古文学	
学歴	1971年 3月 明治大学文学部文学科日本文学専攻卒業 1974年 3月 明治大学大学院文学研究科日本文学専攻修士課程修了 1977年 3月 明治大学大学院文学研究科日本文学専攻博士課程単位取得満期退学			
実務経歴	1977年 4月 山梨英和短期大学国文学科専任講師 1981年 4月 山梨英和短期大学国文学科助教授 1987年 4月 山梨英和短期大学国文学科教授 1990年 4月 明治大学文学部兼任講師(2008年3月まで) 1997年 4月 山梨英和短期大学国文学科長 1999年 4月 山梨英和短期大学日本文化コミュニケーション学科長(2004年3月まで) 1999年 4月 学習院大学文学部非常勤講師(2002年3月まで) 2002年 4月 山梨英和大学人間文化学部教授			
受賞歴	年 月 特になし 年 月 年 月			
所属学会	1972年 4月 明治大学日本文学研究会会員(2005年3月まで) 1972年 5月 中古文学会会員(現在に至る) 1974年 4月 全国大学国語国文学会会員(現在に至る) 1977年 4月 山梨英和短期大学に本文学会会員(1999年3月まで) 1977年 4月 日本文学協会会員(現在に至る) 1984年 8月 日記文学懇話会会員(1995年12月まで) 1985年 4月 平安文学研究会会員(2003年5月まで) 1995年 12月 日記文学研究会会員(現在に至る) 1999年 4月 山梨英和短期大学日本文化コミュニケーション学会会員(2004年3月まで) 2003年 5月 平安文学の会会員(現在に至る) 年 月			
特免資格等	1974年 3月 高等学校教諭 国語 第一種免許状取得 1974年 3月 中学校教諭 国語 第一種免許状取得 年 月 年 月			

目 次

○教育業績	
教育理念、方針、方法	152
教育能力	
教育方法実践例	152
作成した教科書、教材等	152
教育方法や実践に関する発表、講演等	152
担当授業科目	152
代表的なシラバス	152
教育改善活動	152
教育能力に対する評価	152
○研究業績	
研究の特徴	153
研究経歴	153
研究実績	
著書	153
学術論文	153
その他の研究活動	153
競争的資金採択課題	153
学会等発表、役員参加	153
共同研究・受託研究の実績	153
大学院生指導	153
研究能力に対する評価	154
○サービス活動業績	
学内委員会・作業部会等活動実績	155
アドバイザー活動実績	155
後進育成活動実績	155
社会貢献活動	155
○専門的活動(教育業績、研究業績、サービス活動業績)の統合による成果と目標	
専門的成果	156
専門的目標	156
○添付資料	
略	
○最新データ入力日	156

教育業績

教育理念、方針、方法	基本的に、深く豊かな人間理解力を身につけて社会に出て行くことができるように学生を指導したいと考えており、そのために自分は何をしてやれるのかを、常に意識化している。文学作品をもとにして指導する時も、外在的研究方法はもとより、内在的に人間存在にアプローチする方法を学生に伝えたいと考えている。
教育能力	<p>(1)教育方法実践例 「基礎ゼミ」を初年次教育の最重要科目と位置づけ、高校から大学の学びへ架橋するため、あらゆるジャンルを素材に、問題意識の持ち方、掘り下げ方を全員参加型で指導、毎時間レポートにまとめる事を通して表現力も養成した。</p> <p>(2)作成した教科書、教材等 これまでも演習関連科目で独自の教材を工夫してきたが、今年度は「基礎ゼミⅡ」で実践的表現能力の養成を目指して、独自教材を作成した。また、「日本語文化特論」では、変体仮名を集中的にトレーニングしてほとんどの受講生が写本をスムーズに解読できるようになったが、これも独自教材の成果と考えられる。</p> <p>(3)教育方法や実践に関する発表、講演等 特になし</p>
担当授業科目	2011年度 日本の文学、言語文化創造Ⅱ、卒業研究、日本語文化特論、専門ゼミナール、基礎ゼミナール、中古文学講読
代表的シラバス	<p><中古文学講読>の概要 王朝女流日記文学の代表的作品『蜻蛉日記』を取り上げます。この日記は、上・中・下の三巻から成りますが、今年度は、作者藤原道綱母が、上・中巻に描かれる深刻な苦悩を内的に克服した姿を見せるといわれている下巻を中心に講読します。一夫多妻制という女性にとっては全く理不尽な結婚慣習のもと、作者がおのれの人生の本質的問題といかに対決し、苦悩し、克服していったかを、考察していきます。</p>
教育改善活動	特になし
教育能力に対する評価	<p>(1)学生による授業評価 学生の授業評価アンケートより:学んでいくうちに発見があり面白い。深い授業だ。時に深く時に楽しく学べて大変満足。母国の古典にも興味を持たなかった自分がこんなに楽しく古典を学べるとは思わなかった。先生の熱意をすごく感じ、古典文学に興味湧いてきて授業が楽しくなった。丁寧に教えてくれて貴重な知識を学んだ。実践的に学べて良かった。解説が丁寧にわかり易く充実していた。難しかったけど内容は面白かった。きめ細かい指導を受けられスキルアップできた。考えを深めることができた。自分達で考えられる授業で役に立つ。 改善して欲しい点:教室が受講生数に対してせまい。留学生の自分には早い。説明をもう少しゆっくり。書くことが多い。板書のスピードが速い。</p> <p>(2)同僚教員等による授業評価 特になし。</p>

研究業績

研究の特徴	一言で言えば、文学作品を内在的方法で解明し、深く豊かに理解すること。そのことを通して作品や作家を人間の遺産として真に価値付けることができると考えている。もとより、外在的研究方法が作品理解に深く寄与することは現を待たないが、言うまでもないことを踏まえたうえでの事である。	
研究経歴	1977年	山梨英和短期大学で日記文学を研究の中心に据えて平安文学を研究。
	2002年	山梨英和大学で、日記文学の研究を継続。
	2010年	日記文学研究会などを通して、幅広く研究者と交流しながら、日記文学の研究に従事。
研究実績	<p>(1) 著書 『古典文学への誘い100選Ⅱ』共著、東京書籍、「第八章 日記と紀行文 蜻蛉日記」担当、2007年3月。 『王朝文学と仏教・神道・陰陽道』共著、竹林舎、「日記文学と仏教について—『抗い』というテーマ性をめぐって」、2007年5月。 『紫式部日記の新研究』共著、新典社、「『紫式部日記』の私性—『こまのおもとの恥』の表象性を手がかりに」、2008年5月。</p> <p>(2) 学術論文 「児を亡くした親の『こころ』—『土佐日記』」、『解釈と鑑賞』第73巻3号、至文堂、2008年3月。</p> <p>(3) その他の研究活動(国際会議発表、学術誌編集、学術論文査読等) 学術書『日記文学研究』ならびに学術雑誌『日記文学研究誌』の各号刊行にあたり、編集委員、編集長を務め、投稿論文の査読を行ってきている。</p>	
競争的資金採択課題	特になし	
学会等発表・役員参加	1997年	4月 山梨英和短期大学日本文学会会長(1999年3月まで)
	1999年	4月 山梨英和短期大学日本文化コミュニケーション学会会長(2004年3月まで)
	2002年	4月 日記文学研究会運営委員・編集委員(2004年3月まで)
	2004年	4月 日記文学研究会運営委員・編集委員長(2006年3月まで)
	2006年	4月 日記文学研究会運営委員(現在に至る)
	2007年	4月 日記文学研究会、論集『日記文学研究第三集』編集委員
	2010年	4月 日記文学研究会編集委員(現在に至る)
受託共同研究の実績	1995年	4月 「源氏物語の梗概書類の研究」、国文学研究資料館 共同研究(1996年3月31日まで)、研究代表者
	1996年	4月 「『源氏大鏡』—類本本文の比較と研究」、国文学研究資料館 共同研究(1997年3月31日まで)、共同研究者
大学院生指導	日記文学研究会などを通して、研究発表をした他大学の大学院生達に、具体的なアドバイスをしたり、まとめられた論稿に対して指導や意見を求められた場合に、懇切な助言を行っている。	

研究能力に対する評価	日記文学の作品研究において、内在的性格を論じ、考察する際に特に『蜻蛉日記』を扱う場合には、参照されたり、引用されたりして、論述が進められることが多い。作品の内なる論理の考察について評価されていると考えられる。また、若手の研究者で、作品論へのアプローチが十分でないと自覚する人たちから、積極的な助言や指導が求められ、わかり易く手ほどきしてやることに対して、研究上の悩みや壁や問題点が氷解したと感謝されることが多々ある。論文を書くためにあながちに論を立てるのではなく、作品に謙虚に耳を傾け、作品の語るところを汲み取るような自然な読みが大切であることを伝えて、大いなる共感を得ている。
------------	---

サービス活動業績

<p>学内委員会・作業部会等活動実績</p>	<p>2007年 4月 大学運営協議会、入試委員会、広報委員会、自己点検・評価委員会 教育課程検討委員会</p> <p>2008年 4月 大学運営委員会、大学運営協議会、入試委員会、自己点検・評価委員会 教学協議会、学生支援推進会議、学食売店検討委員会</p> <p>2009年 4月 大学運営委員会、入試委員会、自己点検・評価委員会、紀要委員会、教学協議会、 学食売店検討委員会、ハラスメント防止委員会、ハラスメント調査委員会</p> <p>2010年 4月 大学運営委員会、入試委員会、自己点検・評価委員会、紀要委員会 教学協議会大学部会</p> <p>2011年 4月 大学運営委員会、進路支援委員会、エクステンション委員会</p>
<p>アドバイザー活動実績</p>	<p>ゼミの留学生の指導に力を入れた。特に、非漢字文化圏であるインドネシアからの留学生に時間をとって、学生生活をはじめ様々な相談にのった。</p>
<p>後進育成活動実績</p>	<p>特になし</p>
<p>社会貢献活動</p>	<p>(1)講演会</p> <p>2009年 5月 山梨文芸協会 総会記念講演「王朝日記文学の鼓動」 山梨文芸協会主催、於：山梨県立文学館</p> <p>2010年 5月 大東文化大学日本文学会講演会「『蜻蛉日記』への招待一連なる魂のこぼれ」 大東文化大学日本文学会主催、於：大東文化大学東松山校舎</p> <p>(2)出前講座</p> <p>2009年 12月 静岡聖光学院中・高等学校 出張講座</p> <p>(3)公開講座</p> <p>2003年 5月 山梨英和市民教養講座「『源氏物語』を読む」、山梨英和大学エクステンションセンター 主催、山梨英和メイプルカレッジ(現在に至る)(「桐壺」巻より読み始めて現在に至る。 毎年8回開講)</p> <p>2008年 10月 甲斐市立竜王図書館文学講座「『源氏物語』のビタミン」 甲斐市立竜王図書館主催、全3 於：甲斐市立竜王図書館</p> <p>2008年10月～ 県民コミュニティーカレッジ講座「『紫式部日記』の世界ー『源氏物語』創造の源泉を 12月 たどるー」(大学コンソーシアムやまなし主催、全5回、於：山梨英和大学)</p> <p>2011年 6月 甲斐市立双葉図書館古典文学講座「『源氏物語』と日記文学」 甲斐市立双葉図書館主催、全3回 於：甲斐市ふれあい文化館</p> <p>(4)学外審議会・委員会等</p> <p>2006年 12月 大学コンソーシアムやまなし 企業・高大連携部会委員(2008年3月まで)</p> <p>(5)その他</p> <p>年 月 特になし</p>

成果と目標

専門的成果	<p>① 中古日記文学の史的位置づけについて、『土佐日記』『蜻蛉日記』『和泉式部日記』『紫式部日記』『更級日記』の各作品を通して、内在的方法により研究、時代を超える価値とそれの発現する所以を解明してきた。</p>
専門的目標	<p>① 『蜻蛉日記』の主題といわれる「はかなき身の上」の、「はかなさ」の実質を、従来指摘されてきた「諦念」的なものでは説明できないことを指摘し、具体的に解明する。</p> <p>② 『蜻蛉日記』下巻について、現在盛んに行われている外在的アプローチでなく、内在的特質を解明することを通して、意義付けていく。</p>

最新データ入力日	2011年4月1日
----------	-----------

専任教員職務業績集

山梨英和大学

フリガナ 氏名	性別	生年(西暦)	職名	所属
カワシマ ヒデカズ 川島 秀一	男	1949年	教授	人間文化学部人間文化学科
取得学位称号	文学修士	専門分野	日本近代文学	
学 歴	1967年	3月	奈良県立畝傍高等学校 卒業	
	1967年	4月	関西学院大学文学部日本文学科 入学	
	1971年	3月	関西学院大学文学部日本文学科 卒業	
	1971年	4月	関西学院大学大学院修士課程文学研究科日本文学専攻 入学	
	1973年	3月	関西学院大学大学院修士課程文学研究科日本文学専攻 修了	
	1973年	4月	関西学院大学大学院博士課程文学研究科日本文学専攻 入学	
	1976年	3月	関西学院大学大学院博士課程文学研究科日本文学専攻 満期退学	
実 務 経 験	1976年	4月	神戸学院女子短期大学専任講師(1982年3月まで)	
	1982年	4月	山梨英和短期大学助教授(1988年3月まで)	
	1988年	4月	山梨英和短期大学教授(2002年3月まで)	
	2002年	4月	山梨英和大学教授(現在に至る)	
受 賞 歴	年	月		
	年	月	特になし	
	年	月		
所 属 学 会	1971年	4月	日本文芸学会	
	1971年	9月	日本近代文学会	
	1971年	9月	島崎藤村学会	
	1973年	4月	日本キリスト教文学会	
	1973年	4月	全国大学国語国文学会	
	2006年	9月	遠藤周作学会	
特 免 資 許 許 格 等 ・ ・	1973年	3月	高等学校教諭 国語 第一種免許状 取得	
	1973年	3月	中学校教諭 国語 第一種免許状 取得	
	年	月		

目 次

○教育業績	
教育理念、方針、方法	159
教育能力	
教育方法実践例	159
作成した教科書、教材等	159
教育方法や実践に関する発表、講演等	159
担当授業科目	159
代表的なシラバス	159
教育改善活動	159
教育能力に対する評価	160
○研究業績	
研究の特徴	161
研究経歴	161
研究実績	
著書	161
学術論文	161
その他の研究活動	161
競争的資金採択課題	162
学会等発表、役員参加	162
共同研究・受託研究の実績	162
大学院生指導	162
研究能力に対する評価	162
○サービス活動業績	
学内委員会・作業部会等活動実績	163
アドバイザー活動実績	163
後進育成活動実績	163
社会貢献活動	163
○専門的活動(教育業績、研究業績、サービス活動業績)の統合による成果と目標	
専門的成果	164
専門的目標	164
○添付資料	
略	
○最新データ入力日	164

教育業績

教育理念、方針、方法	<p>広く日本文化や文学を学ぶ体験を通じて、日本文化全体への豊かな感受性と想像力を育み、現代社会を生き抜くための新たな文化創造への実践的で総合的な人間力の育成をめざす。〈文学〉とは、高度な日本語の運用・働きを、その想像行為を通して深く学ぶための創造的なツールであり、そこに体験される自己表現能力の習得は、現代社会に最も必要とされる実践的なコミュニケーション能力の育成にとって必須の要件である。</p> <p>〈文学〉というテキストは、単なる知識的媒体として存在するのではなく、深く文化的価値創造にかかわるものであり、具体的な文学テキストが、〈現在〉に問いかけ、私たちの生き方そのものを批判的に問うものであることを、具体的な授業実践において体験する。授業では、近代文化や文学についてその基本的知識を学ぶとともに、具体的で実践的な作品読解を通じて、その作品構造、思想構造、さらには作品(作家)がもつ歴史的な意義(意味)を解明する。単なる知識を超えた、より実践的・創造的な授業実践の場で〈文学〉をとらえていく。あわせて、文学を文化的地平において、より有効あらしめるために、広く心理的、社会的領分へもその視点、方法を開いていく。</p>
教育能力	<p>(1)教育方法実践例</p> <p>a 留学生に対する日本文学の教授法 一般的な文学的知識や文学史的知識の不十分さを踏まえつつ、計画的なテキストの選択、徹底した読解、さらには、個人指導などを通して高い教育的効果を生み出し、毎年大学院への進学も可能となった。</p> <p>b 文学教育と創作教育の融合 「表現と創作」の科目において、「想像力のレッスン」とも言うべき実践的授業によって、新たな文学教育の実践を試みている。</p> <p>(2)作成した教科書、教材等</p> <p>a 山田有策編『近代文学1』p81－p88、学術図書出版、1990</p> <p>b 玉置邦雄編『近代の文芸』p61－p73、和泉書院、1990</p> <p>(3)教育方法や実践に関する発表、講演等</p> <p>a 高校における文章表現の方法と実践 2006年9月(於 山梨県立身延高等学校) 大学における文章教育との関連を踏まえて、高校における文章教育のあり方について講演した。</p>
担当授業科目	<p>日本近代文学の歴史 表現と創作 子どもと文化 近現代文学講読 専門ゼミナール 卒業研究。他に、1年次の導入科目として「アカデミックリテラシー」「基礎ゼミナール」などを担当。</p>
代表的シラバス	<p>文学史を学ぶことは、単なる作家や作品の歴史的配置や知識を学ぶことではありません。できる限り具体的な作品を通して、その豊かな表現行為(活動)を時代や歴史の中に意義付け体験することです。〈文学史的価値〉とは、決して既成のものではなく、それら時代や歴史につながった私たち自身が体験し、発見し、生成する〈価値〉そのものです。自らを問うものとして、問題をとらえたいと思います。</p> <p>到達目標: 近代という時間の意味を理解する。 ②代表的作家の生涯や作品について、基本的知識を習得する。</p> <p>③歴史的展開の必然と意義を理解する。</p>
教育改善活動	<p>(1)新カリキュラム検討委員(2007年度)</p> <p>全学的な新カリキュラムの作成の実務委員として参加。日本語・日本文化コースの具体的なカリキュラムを作成。傍ら、国語教職課程と日本語教員養成課程を導入するための具体的な作業(文科省との関係を含めて)を担当。</p>

教育能力に対する評価	<p>(1) 学生による授業評価(講義アンケートより)</p> <p>演習・講義の全体評価: 全体的に良好である。授業の方針としては、単に一方的な知識の集積を求めるのではなく、学生自らが問題を問い返し、自分の課題として問題が捉えられるような授業の形式、内容を考えたが、評価から見て概ね成功したと思われる。特に演習・ゼミナールにおいては人数も少数であり、学生個人が問題を主体的に問い直し、それぞれの発表を通して具体的に問題を解決しながら、〈卒業研究〉などにおいても大きな成果を生んでいる。その意味からもこれら授業の評価は高い。</p> <p>良い点・改善してほしい点: 〈新しい見方が身についた〉とか〈文学のおもしろさがよくわかった〉などの評価は、講義の意図が十分に成果をもたらしたものである。しかし一方では、〈少し難しい〉という評価もあり、学生の理解度にばらつきがあるのも事実である。特に留学生からは、少し難しいとの意見提示されている。ただ、ゼミ等の小人数の講義では評価が高く、日々の実践において十分な学的成果を生み出しており、結果は大学院進学という形にも表われている。</p> <p>〈改善してほしい〉という意見の多くは、講義が早口であることや板書の方法という講義技術にかかわることが多い。それら技術的なことについては、日々の授業の中で常に意識しながら改善して行きたい。改善に向けた今後の方針: シラバスを通じて、さらに授業の目的・内容を明確にすることや、事前指導や事後指導などを十分に行う。授業における問題設定についてもいっそうの工夫をしてみたい。昨年度から始めた講義ノート of 公開についてもさらに推し進めてみたい。</p> <p>(2) 同僚教員等による授業評価</p> <p>現在、同僚教員等による授業評価は行っていない。今後の課題である。</p>
------------	--

研究業績

研究の特徴	<p>研究テーマの中心は、日本の近代文化における風土論的特質を背景に、その中を生きる作家たち、あるいはその文学表現における倫理性や思想性の構造を理解することにある。具体的には、島崎藤村における自然主義的風土やその思想的、倫理的問題を探求し、遠藤文学の研究では、キリスト教と日本の近代文化との関連を構造化することで、宗教と文学の関係を含めて、遠藤の現代社会における文学的意味をめぐる研究を進めている。ともに、その成果については一部をそれぞれの著書として世に問うている。特に遠藤のそれについては、評価は高い。最近では、宮澤賢治の研究を進めており、〈子ども〉という社会的問題への関心も含めて、表現論的問題の分析を通して、広く日本の近代文化や社会の特質、構造への批判的研究を進めている。今はまだその途上にあるが、早くその成果をまとめ世に発表することが期待されている。</p>
研究経歴	<p>1976年 神戸学院女子短期大学専任講師、島崎藤村を中心に自然主義文学の研究に従事。研究の集大成として、1987年に『島崎藤村論考』を出版。(1982年まで)</p> <p>1982年 山梨英和大学助教授、それまでの藤村研究の傍ら、遠藤周作の研究に従事。先の『島崎藤村論考』に続いて、1993年にそれまでの研究をまとめて『愛の同伴者・遠藤周作』を出版。1988年、山梨英和短期大学教授。引き続き、遠藤周作の研究を継続、2000年には『遠藤周作・〈和解〉の物語』を刊行。遠藤研究のさらなる発展を図る。</p> <p>2002年 山梨英和大学教授、研究のテーマを夏目漱石や宮沢賢治に広げる。2004年には、それら研究の一部を含めて、それまでの研究の集大成として、『表現の身体』を出版。</p> <p>現在は宮沢賢治を中心とした研究に従事。以後現在に及んでは、遠藤周作と宮沢賢治を中心に、広く近現代文学の小説の研究に従事。(現在に至る)</p>
研究実績	<p>(1) 著書</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 『島崎藤村論考』 単著 1987年9月 おうふう 全239頁 2. 『遠藤周作—愛の同伴者』 単著 1993年6月 和泉書院 全236頁 3. 『遠藤周作—〈和解〉の物語』 単著 2000年9月 和泉書院 全275頁 4. 『表現の身体—藤村・白鳥・漱石・賢治』 単著 2004年11月 双文社出版 全308頁 5. 「『哀歌』論」 『遠藤周作—その文学世界』(山形和美編) 1997年12月 国研出版 p93—109 6. 「おバカさん—〈自分のキリスト〉をめぐる」 『作品論 遠藤周作』(笠井秋生・玉置邦雄編) 2000年1月 p93—p109 7. 「『死海のほとり—沸騰する文体』 『遠藤周作—挑発する作家』(柘植光彦編) 2008年10月 至文堂 p245—p254 8. 『拒まれし〈私〉の物語 〈もう一つの富士〉遠望』 『太宰治研究 18』(山内祥史編) 2010年5月 和泉書院 pp148—p160 <p>(2) 学術論文(最近5年のものから記載)</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 「『侍』瞥見—ある躊躇と疑念」 単著 「キリスト教文学研究 第24号」 2007年6月 p28—p34 2. 「〈鹿踊りのはじまり〉という物語—〈歩きつづける男〉の話」 単著 「山梨英和大学紀要」第6号 2008年2月 p1—p15 3. 「想像力の始原—『わたしが・棄てた・女』の定位をめぐる」 単著 「遠藤周作研究」創刊号 2008年9月 p15—p34 4. 「〈文学と死〉をめぐる問い—遠藤周作『深い河』瞥見」 単著 「キリスト教文学研究」第26号 2009年5月 p49—p58 5. 「不在のテキスト、あるいは幻視される物語—『ポラーノの広場』の語りをめぐる」 単著 「山梨英和大学紀要」第8号 2010年2月 p1—p19 <p>(3) その他の研究活動(国際会議発表、学術誌編集、学術論文査読等)</p> <p>「キリスト教文学研究」の編集及び査読(2008年4月から現在)、学術雑誌「遠藤周作研究」の編集及び査読(2008年4月から現在。2011年からは編集責任)</p>

競争的資金採択課題	特になし	
学会等発表・役員参加	2003年	9月 藤村の『春』をめぐって 発表及びコーディネーター 島崎藤村学会全国大会
	2008年	6月 テーマ〈文学と死〉シンポジウムパネラー キリスト教文学学会全国大会
	1996年	4月 島崎藤村学会理事(現在に至る)
	2007年	4月 日本キリスト教文学学会役員(研究誌編集)(現在に至る)
	2006年	9月 遠藤周作学会役員(2011年度から研究誌編集責任)
	年	月
	年	月
受託共同研究の実績	年	月
	年	月 特になし
	年	月
	年	月
	年	月
大学院生指導	なし	
研究能力に対する評価	<p>今までに上梓した『島崎藤村論考』や『表現の身体』についても一定の評価を受けているが、『愛の同伴者 遠藤周作』や『遠藤周作—〈和解〉の物語』においては、遠藤周作研究における主要な研究者としての評価を受けており、今後の研究においても中心的役割を持つ研究者として期待されている。特に後者は、遠藤周作の全生涯における作品を研究した業績としては、研究史上最初の著書、成果である。これら研究成果は多数引用され、今後の遠藤周作研究における必読文献としても高い評価を得ている。また2010年度からは遠藤周作の研究誌「遠藤周作研究」の編集責任者であり、学会の運営においても今後中心的役割を期待されている。</p>	

サービス活動業績

<p>学内委員会・作業部会等活動実績</p>	<p>2007年 4月 図書館長(2009年3月まで) 紀要委員会 2007年 4月 新カリキュラム検討委員会(2008年3月) 2008年 4月 日本語教員養成課程運営委員長(現在に至る) 2009年 4月 進路支援室長(2011年3月まで) 広報委員会 2011年 4月 基礎科目コーディネーター 年 月</p>
<p>アドバイザー活動実績</p>	<p>基礎ゼミナール、専門ゼミナール、卒業研究の担当者として、合わせてアドバイザーの責任を負っている。相談内容の多くは、退学、休学にかかわる基本的な学生身分にかかわる問題、履修にかかわる問題をはじめとして、大学生活における人間関係の悩み、家族関係のトラブルなどその問題は多岐にわたる。最近は特に就職にかかわる相談も多く、進路室と連携しながら問題の解決に向けて適宜指導した。また留学生にあっては、大学院進学との相談も多くあり、その方法についても適切に指導し、ほぼ全員の進学が可能になっている。</p>
<p>後進育成活動実績</p>	<p>特になし</p>
<p>社会貢献活動</p>	<p>(1)講演会 2010年 10月 「文学における生きがい」 〈山梨県いのちの電話主催〉の講演を行った。 (2)出前講座 2011年 1月 「日本の近代社会と漱石」と題して、長野県立田川高等学校において出前授業を行った。 (3)公開講座 2007年 6月 『『家』とその根源への遡行』 藤村小諸記念館「藤村文学講座(於 小諸市立図書館)」を担当。 2009年 9月 コンソーシアム山梨・コミュニティカレッジ(広域ベース) テーマ〈日本人と宗教〉において、遠藤周作の文学と日本の近代文化との関係について講座を担当した。 2010年 5月 山梨英和大学メイプルカレッジ講座(8回)において、「『こころ』に至る道・『彼岸過迄』、『行人』を読む」と題して講座を担当した。 (4)学外審議会・委員会等 2010年 9月 新卒者就職対策会議委員(2011年3月まで) (5)その他 年 月 特になし</p>

成果と目標

専門的成果	<p>①現代社会における遠藤周作の文学的意義 遠藤周作の文学については、その成果として『愛の同伴者 遠藤周作』(1993)、『遠藤周作— 〈和解〉の物語』(2000)2冊として既に世に問うた。特に後者は遠藤の生涯にわたる作品の研究 としては研究史上最初のものである。そこでは、生涯にわたるテーマの全容を明らかにし、遠 藤の文学テーマが私たち現代社会にどのような意義をもつかを明らかにした。あわせて、そこに 表現される〈イエス像〉なる存在が、キリスト教の受容という風土的、倫理的問いを含めて、その 現代社会における有効性と限界についても考察を試みた。</p> <p>②賢治童話における〈子ども〉と身体 宮澤賢治については、その一部を『表現の身体』(2004)において世に問うている。ここにおけ る研究テーマも日本の近代文化に対する批判の根源性と普遍性において、①の問題に連なる ものである。研究の中心的関心は、賢治文学における人間と自然の関係をめぐっての、賢治文学 がめざす生命観の構造と意味を明らかにすることにある。</p> <p>③島崎藤村を中心とした自然主義文学の研究 日本の近代文化を形成する自然主義的風土、特に〈家〉をめぐる問題の検討を通して藤村という 作家の自然観と倫理観、あるいは生命観を考察解明した。成果としては、既に『島崎藤村論考』 として世に問うている。</p>
専門的目標	<p>①遠藤文学の発展的研究 上記の成果を踏まえて、残された作品、特に初期作品の解明を加えて、遠藤文学のさらなる内 在化、体系化をめざす。あわせて、正宗白鳥などの研究を加えて、日本の倫理的、宗教的風土 から問題を相対化することで、遠藤の文学的テーマを日本の宗教的風土の根源へと発展させて みたい。そのことを通じて、日本の近代文化を批判的にとらえる根源的な視座を獲得できると思 われる。</p> <p>②賢治文学の集大成 賢治については、さらなる作品の具体的分析を通して、文学的全体像を明らかにすることをめざ す。人間と自然の関係をめぐる賢治文学の根源性と批判性は、日本の近代文化への最も有効 な批判的視座となるものである。</p> <p>③漱石研究の発展 著書『身体表現』において、漱石文学の初期から中期への展開についてはその研究成果の一部 を世に問うているが、今後は中期から後期の作品群についてもその考察を展開する。</p>

最新データ入力日	2011年 4月 1日
----------	-------------

専任教員職務業績集

山梨英和大学

フリガナ 氏名	性別	生年(西暦)	職名	所属
クボウチ セツコ 窪内 節子	女	非公表	教授	人間文化学部人間文化学科 大学院人間文化研究科臨床心理学専攻
取得学位称号	博士(心理学)	専門分野	臨床心理学・学校臨床心理学・学生相談	
学 歴	1968年	3月 横浜共立学園高等学校卒業		
	1972年	3月 横浜国立大学教育学部小学校教員養成課程卒業		
	1979年	4月 国際基督教大学大学院教育学研究科教育原理専攻教育心理学入学		
	1981年	3月 国際基督教大学大学院教育学研究科教育原理専攻教育心理学修了		
	2003年	4月 名古屋大学大学院教育発達科学研究科心理発達科学専攻博士後期課程入学		
	2006年	3月 名古屋大学大学院教育発達科学研究科心理発達科学専攻博士後期課程修了		
	2007年	1月 名古屋大学大学院教育発達科学研究科心理発達科学専攻において博士(心理学)取得		
実 務 経 験	1972年	4月 東京都目黒区五本木小学校教諭(～1979年3月)		
	1979年	10月 国際基督教大学カウンセリングセンター 非常勤カウンセラー(～1993年6月)		
	1988年	1月 恵泉女学園大学・短期大学英文科 非常勤カウンセラー(～1993年3月)		
	1989年	4月 恵泉女学園短期大学英文学科非常勤講師 心理学及び教育心理学担当(～1996年3月)		
	1990年	4月 青山メンタルヘルスカウンセラー(～現在)		
	1993年	4月 恵泉女学園大学・短期大学英文学科 学生相談室専任カウンセラー(～1996年3月)		
	1996年	4月 山梨英和短期大学専任講師(～1996年3月)		
	1997年	4月 富士市立看護専門学校非常勤講師 (～2010)		
	1998年	4月 山梨英和短期大学助教授 大学との兼任(～2003年3月)		
	1999年	4月 甲府市立東中学校カウンセラー(～2000年3月)		
	2000年	4月 玉川大学 非常勤講師(～2002年3月)		
	2001年	4月 甲府市立西中学校スクールカウンセラー(～2001年3月)		
	2001年	4月 山梨県養成訪問カウンセラー(～現在)		
	2001年	4月 山梨大学保健センター非常勤講師 学生相談担当(～2002年3月)		
	2002年	4月 山梨大学工学部非常勤講師 (～現在)		
	2002年	10月 山梨英和大学人間文化学部助教授(～2003年3月)		
	2003年	4月 山梨県立看護大学非常勤講師(～2007年3月)		
2006年	4月 山梨英和大学教授 山梨英和大学カウンセリングセンター所長			
2011年	4月 山梨英和大学副学長・同大学院臨床心理学専攻主任			
受 賞 歴	年	月		
	年	月 なし		
	年	月		
所 属 学 会	1994年	4月 日本学生相談学会正会員(理事、編集委員)		
	1982年	4月 日本心理臨床学会正会員		
	1999年	4月 日本精神分析学会正会員		
	2008年	10月 日本臨床動作学会正会員		
許 ・ 資 格 ・ 特 許 等	1972年	3月 小学校1級普通免許(小1普第518号)		
	1972年	3月 中学校1級普通免許(中1普第838号)		
	1972年	3月 高等学校2級普通免許(高2普第1000号)		
	1989年	月 臨床心理士(941号)		

目 次

○教育業績	
教育理念、方針、方法	167
教育能力	
教育方法実践例	167
作成した教科書、教材等	167
教育方法や実践に関する発表、講演等	168
担当授業科目	168
代表的なシラバス	168
教育改善活動	168
教育能力に対する評価	169
○研究業績	
研究の特徴	170
研究経歴	170
研究実績	
著書	170
学術論文	171
その他の研究活動	171
競争的資金採択課題	171
学会等発表、役員参加	172
共同研究・受託研究の実績	172
大学院生指導	173
研究能力に対する評価	173
○サービス活動業績	
学内委員会・作業部会等活動実績	174
アドバイザー活動実績	174
後進育成活動実績	174
社会貢献活動	174
○専門的活動(教育業績、研究業績、サービス活動業績)の統合による成果と目標	
専門的成果	175
専門的目標	175
○添付資料	
略	
○最新データ入力日	175

力	<p>b. 楽しく学ぶころのワークブック:窪内節子編著書 全138ページ 学術図書出版 1997.4 心理学の理論をもとに、精神発達過程、人間関係、適性などから本来の自分を探り、身近なころの問題を中心に、心理学を体験しながら学べるよう理論編と体験を楽しむ実践編とに分けて書いた本である。カウンセラーとしての臨床体験から得られた知恵と実践の仕方が随所に加味され、心理学の基礎知識から心理療法の意味や手法を理解するために分かりやすく書いたが、内容的には専門書を目指した。</p> <p>c. 生徒理解と教育相談:窪内節子(単著)全191ページ 玉川大学通信教育部 2001. 3月</p> <p>筆者のカウンセラー経験を生かし、具体的で実際的なものを目指し、生徒を理解するために中学・高校生の心理と発達課題、生徒理解の内容や方法、学業不振への対応、進路指導の方法と実際、教育相談(カウンセリングを含む)を中心に生徒指導、進路指導、さまざまな問題行動の実際とその指導援助について書いたものである。</p> <p>筆者のカウンセラー経験を生かし、具体的で実際的なものを目指し、生徒を理解するために中学・高校生の心理と発達課題、生徒理解の内容や方法、学業不振への対応、進路指導の方法と実際、教育相談とカウンセリング、問題行動の指導・援助の実際について、心理の専門家の立場から取り上げてある。</p> <p>d. やさしく学べる心理療法の基礎:窪内節子 吉武光世(共著) 培風館 約220頁のうち約110頁 2003. 4 カウンセラーの基礎姿勢に始まり、精神分析とそれ以後の様々な心理療法に焦点をあて、各章にサイコセラピー練習という項目を設け、各心理療法の課題をこなしていくことで自然と心理療法の理論が学べる仕組みを取り入れ書いた心理療法論である。</p> <p>e. 窪内節子(共著):学校における心理・社会的な問題の相談と対応 作間慎一編集者代表 教育心理学 玉川大学出版部 2005. 3. 1 「教育心理学」のテキストとして、教師がスクールカウンセラーを如何に有効に活用していけるかに焦点をあて、教師の行うカウンセリングの方法など、最新の児童・生徒の心理理解の方法についても言及した。</p> <p>f. 窪内節子(共著):はじめて学ぶメンタルヘルスと心理学 —「ころ」の健康をみつめて 学文社 3,8,9章(61頁)2005.4. 1 前書「メンタルヘルスと心理学」の姉妹書で、よりメンタルヘルスに焦点をあてて書いたものである。心の発達に始まり、病める心の理解のために心理検査や心の病気についてかなり詳細に書き、解決法としての心理療法について具体例を交えながら解説している。</p>
担当授業科目	<p>2011年度: 学部:基礎ゼミⅡ、専門ゼミナール、学校臨床心理学、生徒指導、卒業研究 大学院:心理臨床面接特論、心理臨床実習、心理臨床事例検討、修士論文</p>
代表的シラバス	<p>例として「生徒指導」のシラバスを取り上げる。(授業概要)</p> <p>学級経営が困難な「学級崩壊」状態にある学級を再生させるための授業と生徒の指導法について学ぶ。</p> <p>学級崩壊に至らないための教師の工夫について、討議形式を用いて学生とともに考えていく。</p> <p>その際、生徒を理解することに重点を置いた生徒指導、進路指導、教育相談についての最新の情報や技法についても取り上げる予定である。以上のように、学生とのディスカッションを加え、主体的に学ぶながらその内容を深めていく授業を心がけている。</p>
教育改善活動	<p>特になし</p>

教育能力に対する評価	<p>(1)①学部学生による授業評価</p> <p>学校臨床心理学：約70%以上の人から満足という評価で、実体験をもとに話されるので、イメージしやすかった、学校現場の「今」に触れられたなど、の評価を得た。</p> <p>・悪い点は、「板書の字が読みにくかった」挙げられ。</p> <p>生徒指導：ほぼ全員から満足をもらい、「学生の意見をもとめ、言いやすい雰囲気だった」学生同士発表したり、ワークをしたりするのが良かったという。</p> <p>その他、基礎ゼミ、専門ゼミ、卒業研究においても同様の評価が得られた。</p> <p>②大学院生による授業評価</p> <p>2009年度・2010年度の学生による授業評価から</p> <p>発達臨床心理学特論：5点評価で4.6を得て、臨床現場の空気が伝わってきた。言葉が心に残った。分かりやすく、受講しやすかったなどの自由記述が寄せられた。</p> <p>臨床心理実習：4.2の評価を得て、自分で動かなければならない実習は有意義だったなどの感想が寄せられた。</p> <p>(2)同僚教員等による授業評価</p> <p>現在、本学学部・大学院共に授業評価は行っていない。</p> <p>しかし、文部科学省が後援する全国大学学生相談担当者を対象とする全国学生相談研修会の分科会講師評価において、2009年度・2010年度5点評価で4.94および4.96を獲得した。</p> <p>その際の記述として、本当に楽しかったです。自身の捉え方、認識が広がった気がします。講師のパーソナルパワーにより、内容に深まりができたと感じるなどが挙げられた。</p>
------------	---

研究業績

研究の特徴	<p>臨床心理学は、実践を基盤とする学問である。したがって、理論や技法の知識だけでなく対人援助職としての研鑽が不可欠な学問である。その結果として、対象となる者の心理内容を把握し、研究が可能となる特徴がある。特に次のような観点について、関心を持ち研究を進めている。</p> <p>a. 大学生を対象にする学生相談において、青年の幼児化が進み、内省体験が減少して、主体となる「自分」が希薄になり、アイデンティティの形成が困難となっている。このようなアイデンティティ形成の道筋が多様化している現代の青年の心理内容について検討する。</p> <p>b. アイデンティティ確立を意味する「自分がある」という意識形成に焦点を当てた事例の検討を通して、青年期のクライアントの自我意識形成プロセスと、そのプロセスにおけるセラピスト-クライアント関係のあり方を考察する。</p> <p>c. 既知集団の研修型エンカウンター・グループに有効な、様々な身体的表現を媒介とするオリジナルなプログラムの開発と施行方法について</p> <p>d. 大学退学とその防止に繋がるこれからの新入生への学生相談的アプローチのあり方</p> <p>e. スクールカウンセラーがより有効に機能するための他業種との連携の意義と有り方の検討</p>
研究経歴	<p>1980年 土居健郎から週2回のスーパービジョンを受ける。(1982年12月まで)</p> <p>1983年 関東中央病院精神神経科(小倉清)にて病院研修。(1988年まで)</p> <p>1984年 精神療法研究会で事例研究。(2009年3月まで)</p> <p>1987年 首都圏心理臨床懇話会で事例研究。(2010年3月)</p> <p>1992年 ICU事例研究会で事例研究。(1998年3月まで)</p> <p>1992年 関東地区学生相談研究会で事例研究等。(～現在)</p> <p>1994年 ヒルズ研究会で事例研究。(2008年3月まで)</p> <p>1996年 小倉研究会で事例研究。(1999年3月まで)</p> <p>1997年 日本語臨床研究会にて事例研究。(2002年3月)</p> <p>1997年 自分の言葉で語る臨床研究会主宰。(～現在)</p> <p>2007年 青山動作法研修会で臨床動作法の訓練(～現在)</p> <p>2011年 さくら会(小倉清主宰事例研究会)</p>
研	<p>(1) 著書</p> <p>1, 窪内節子(分担執筆): 学生相談におけるガイダンスとカウンセリング 都留春夫監修 学生相談—理念・実践・理論化 p95-107 星和書店 1994.5</p> <p>2, 窪内節子 吉武光世 山崎洋史 小野留美子(共著): メンタルヘルスと心理学 p79-94, p155-169, p181-198 学術図書出版社 1995.2</p> <p>3, 窪内節子(分担執筆): ころの日曜日3 菅野泰蔵編著 p29-30, p187-190 研友企画出版 1995.6</p> <p>4, 窪内節子(分担執筆): 全国大学学生相談ガイドブック 学生相談ガイド編集委員会編 p4-5, p76-77 実務教育出版 1996.4</p> <p>5, 窪内節子(分担執筆): ころの日曜日4 菅野泰蔵編著 p158-159, p206-207 研友企画出版 1996.6</p> <p>6, 窪内節子(単編著): 楽しく学ぶころのワークブック 全138頁 学術図書出版 1997.3</p> <p>7, 窪内節子(分担執筆): いつもころに休日を 菅野泰蔵編著 p56-58 成美堂出版 2000. 4</p> <p>8, 窪内節子(単著): 生徒理解と教育相談 玉川大学通信教育部 全191頁 2001.3</p> <p>9, 窪内節子(分担執筆): 短期大学生の学生生活 鶴田和美編著 学生のための心理相談 p. 155-167 培風館 2001. 11</p>

<p>究</p> <p>実</p> <p>績</p>	<p>10.窪内節子 吉武光世(共著):やさしく学べる心理療法の基礎 培風館 約220頁のうち, 2, 3, 4, 5, 11章(約110頁)2003.4</p> <p>11. 窪内節子(単監訳):パチエラーズー結婚しない男達の心理 全208ページ 世織書房 2003. 12</p> <p>12. 窪内節子(共著):学校における心理・社会的な問題の相談と対応 2005. 3. 1 作間慎一編集者代表 教育心理学 玉川大学出版部 p.124-154</p> <p>13. 吉武光世編著 窪内節子・山崎洋史・平澤浩一(共著):はじめて学ぶ メンタルヘルスと心理学―「こころ」の健康をみつめて 学文社 3,8,9章(61頁)2005.4. 1</p> <p>14.窪内節子(分担執筆):学生相談における可変的な面接構造の重要性 鶴田和美・斎藤憲司共編 学生相談シンポジウム-大学カウンセラーが語る実践と研究 培風館 p.86-90 2006. 11</p> <p>15.窪内節子(分担執筆):相談対象に応じた援助 短大・高専・専門学校生 日本学生相談学会50周年記念誌編集委員会編 学生相談ハンドブック 学苑社 p.89-92 2010. 2.20</p> <p>16. 窪内節子(単編著):やさしく学べる心理療法に実践 倍風館 2011. 12 出版予定.</p> <p>(2)学術論文(最新5年間のもの)</p> <p>1. 窪内節子 青年期の心理療法における自我意識の形成に関する実践的研究 ―「甘え」理論を基盤にして― 名古屋大学大学院教育発達科学研究科心理発達科学学位論文 全206頁 2007.1.31</p> <p>2.国際交流委員会・宮崎圭子・窪内節子 中国高等教育の現状と留学生問題 ―中国学生相談学会会長 樊 富珉先生を囲んで― 学生相談研究 Vol.27 No.3 p.274-286 2007.3.31</p> <p>3.窪内節子 看護学生のための研修型エンカウンター・グループの試み ―学生の状態により適応的なグループ・プログラムを提供するために― 山梨英和大学紀要 第7号 p.1-14 2008. 3</p> <p>4. 窪内節子 学生相談と心理臨床―現場に生きる心理臨床の創造とは― 日本心理臨床学会27回大会 準備委員会企画シンポジウム 京都大学カウンセリングセンター紀要 p.94-100 2009.3</p> <p>5. 窪内節子 体験学習を通じた現在学生とのかかわり 日本学生相談学会第25回大会における最首悟先生のトークイン報告 山梨英和大学学生相談室報告書 p.3-23 2009.3</p> <p>6. 窪内節子:大学退学とその防止に繋がる これからの新入生への学生相談的アプローチのあり方 山梨英和大学紀要 8号 p.9-17 2009. 3</p>
<p>競争的資金採択課題</p>	<p>なし</p>

学会等発表・役員参加	(1)学会発表等(最新のもの5編を記載)	
	2002年	10月 窪内節子:情緒の言語化への移行過程 自分の思いを言葉にできないと訴えた学生との精神分析的療法から 日本精神分析学会第48回大会
	2002年	12月 窪内節子:ある分裂病女性患者との10年にわたる手紙を通じた治療過程 自分の言葉で語る臨床研究会例会
	2004年	10月 窪内節子:親から自立して自分らしく生きるまで
	2005年	5月 鈴木奈緒子 窪内節子 鎌田誠: カウンセラーとして授業に携わる試み-新入学生の適応支援のために- 日本学生相談学会第23回大会
	2006年	5月 保科公彦・鈴木奈緒子・鎌田誠・小野ゆり・窪内節子: 身体的訴え:新入学生の適応支援のキーワード 日本学生相談学会第24回大会 2006. 5.
	(2)学会等の役員参加(最新5年間のもの)	
	2006年	5月 日本学生相談学会第24回大会研究発表座長
	2007年	5月 第25回日本学生相談学会準備委員長
	2008年	5月 日本学生相談学会第26回大会ワークショップ講師
	2008年	9月 第27回日本心理臨床学会事例研究司会者
	2008年	9月 第27回日本心理臨床学会準備委員会企画シンポジウムシンポジスト
	2009年	5月 第27回日本学生相談学会事例研究発表座長
	2009年	7月 第16回全国適応指導連絡協議会全国会議第1分科会助言者
	2009年	9月 第28回日本心理臨床学会ポスター発表司会者
	2010年	5月 第28回日本学生相談学会事例研究発表座長
	2010年	8月 山梨県総合教育センター研修会講師・企画運営
	2010年	9月 第29回日本心理臨床学会事例研究発表司会者
	2011年	5月 第29回日本学生相談学会事例研究発表座長
共同研究・受託研究の実績	(最新のもの5編)	
	2004年	4月 学校臨床場面における心理査定活用についての一考察 面接導入への有効性の観点から 山梨英和大学学生相談室との共同研究
	2005年	5月 カウンセラーとして授業に携わる試み-新入学生の適応支援のために- 山梨英和大学学生相談室との共同研究
	2006年	5月 身体的訴え:新入学生の適応支援のキーワード 山梨英和大学学生相談室との共同研究
	2007年	3月 中国高等教育の現状と留学生問題 中国学生相談学会会長 樊 富珉先生を囲んで 学生相談学会国際交流委員会委員として
2009年	3月 学生相談と心理臨床ー現場に生きる心理臨床の創造とはー 京都大学カウンセリングセンターとの共同研究	

<p style="text-align: center;">大学院生指導</p>	<p>大学院修士論文指導教員(副査)</p> <p>2005年度 1. 子育てサークルにおける心理的効果と母親援助の可能性に関する一考察</p> <p>2006年度 1. 職場におけるストレス・コーピングー愛着スタイルとの関連の検討 2. 教師との関係形成を重視したスクールカウンセリングに関する研究 一予防的観点から</p> <p>2007年度 1. 抑うつ傾向にある青年への支援プログラムの効果測定 一認知行動療法による抑うつ軽減プログラムを自己効力感の側面から考える 3. 障害児とその母親の遊び場面に関する一考察</p> <p>2008年度 1. キャリア支援の一環としての集団コラージュ導入の試み 2. 学生相談における贈り物の意味 一心理面接過程におけるターニングポイントの視点から一</p> <p>大学院修士論文指導教員(主査)</p> <p>2009年度 1. 高齢者の心理に与えるコラージュ継続制作の影響 2. 大学生における対人関係が自己受容に及ぼす影響ー愛着との関連ー</p> <p>2010年度 1. グループにおける「語り」を通じた介護職従事者への関わり 一ストレスケアの一環としての心理的援助の試みー 2. 小中移行期におけるコンピテンスの変化と学校適応の関係</p>
<p style="writing-mode: vertical-rl; text-orientation: upright;">研究能力に対する評価</p>	<p>①日本学生相談学会の編集委員に推挙され、編集作業に当たっている。</p> <p>②日本心理臨床学会における論文査読の推薦を受けた。(2008年度・2009年度)</p> <p>③学生相談の立場から心理臨床の新しい視点を提供したと京都大学カウンセリング・センター紀要に取り上げられた。</p>

サービス活動業績

学 内 委 員 会 等 活 動 実 績	2003年	4月 山梨英和大学教授・カウンセリングセンター所長
	2010年	4月 山梨英和大学共通科目委員長
	2011年	4月 山梨英和大学大学院人間文化研究科臨床心理学専攻主任
	2011年	4月 山梨英和大学副学長
	2011年	4月 山梨英和大学FD推進委員会・大学院FD推進委員会委員
アドバイザー活動実績	学部基礎ゼミアドバイザーとして、年2回懇親会を開催	
	学部専門ゼミ及び卒論ゼミアドバイザーとして、懇親会開催・大学祭ゼミ出店・卒業旅行など開催 大学院指導教員として、懇親会開催のほか、修了生も参加する同窓会も主催	
後進育成活動実績	事例検討会「自分の言葉で語る臨床研究会」を主宰し、後進の指導にあたっている。 大学院修了生に対し、適宜スーパービジョンを引き受け、事例の指導にあたっている。	
社 会 貢 貢	(1)講演会（最新のものから5回）	
	2008年	9月 FM甲府ラジオ番組「生涯学習の時間」対談出演「不登校からの学び」
	2010年	8月 山梨県総合教育センター研修会講演 「本来の連携の在り方と意義について考える」
	2010年	10月 山梨英和大学文化事業 第6回臨床心理講演会講師 「教育臨床30年を生きて-その出会いと喜び」
	2011年	1月 名桜大学FD研修会講演講師「大学における学生相談について」
	2011年	1月 被害者支援センターやまなし第5期生ボランティア候補者養成講座講演 「被害者支援のためのカウンセリング」
	(2)出前講座	
	2009年	7月 石和こすもす教室事例検討会講師
	2009年	11月 第47回全国学生相談研修会講師「学生相談の基礎」 小講義「カウンセリング入門」講師
	2009年	11月 学校教育相談実践研修会事例検討会講師
	2010年	11月 教育相談における実践力を養う研修会講師
	2011年	11月 第48回全国学生相談研修会講師「学生相談の基礎」
	(3)公開講座	
	2009年	5月 山梨いのちの電話公開講座「ころを考える10章」講師 ころに寄り添う「カウンセリングの技術」

	(4)学外審議会・委員会等	
献	1995年	4月 日本学生相談学会理事 研修委員
	1998年	5月 日本学生相談学会常任理事 特別委員長 資格検討委員長
活	1998年	5月 日本学生相談学会大会準備委員
	2001年	4月 山梨県心の健全育成委員会副会長
動	2001年	5月 日本学生相談学会常任理事資格認定委員長
	2002年	4月 山梨県新教育ビジョン策定委員会委員
	2003年	4月 山梨県臨床心理士会幹事
	2004年	5月 日本学生相談学会理事(編集委員)
	2006年	5月 山梨県臨床心理士会事務局長
	2006年	11月 日本心理臨床学会理事長推薦甲信越・北陸地区世話人
	2007年	5月 第25回日本学生相談学会大会準備委員長
	2007年	9月 第26回日本心理臨床学会大会準備委員
	2008年	10月 第4回山梨県総合計画審議会委員
	2011年	4月 第5回山梨県総合計画審議会委員
	(5)その他 年 月 特になし	

成果と目標

専門的成果	<p>①著書(窪内, 2001・2010)で、短大生の心理相談の実情や学生の特徴について、大学と短大の学生生活の違い、相談内容からみた短大生の入学期、中間期、卒業期の傾向を分析し、①必修授業の多さからくる心理的余裕のなさ、②単位取得に失敗するすると挽回することの困難さ、③規模が小さいゆえの目立たない存在であることの困難さがあることを明らかにした。</p> <p>②論文(窪内, 1994・1997・2004)で追及してきた心理療法における治療者とクライアントとの間の心の通い合いを原初的な「気持ちのむすびつき」と名付けた。その関係性概念を導入して、「甘え」理論による青年期の自我意識形成のプロセスを事例から明らかにして博士論文(窪内, 2006)まとめた。</p> <p>③論文(窪内, 1997・1998・1999・2000・2003・2007・2009)一貫して学生相談の立場から事例・調査・ワーク開発などを追及し、大学における学生相談のあり方について考察している。</p> <p>④窪内節子・吉武光世(共著)「やさしく学べる心理療法の基礎」(倍風館)は、発売後心理療法の概論として多くの大学の教科書として取り上げられ、大学院入試のための参考書ともなり、現在約13000部が販売されている。</p>
専門的目標	<p>①心理療法において、治療的視点ではなく成長的視点に重点を置いて、幼児的な「甘え」の処理の仕方について考察を深めたい。</p> <p>②博士論文は事例研究ゆえに個人のプライバシーを考慮して出版しなかった。匿名性を高めるなどの工夫をして出版にこぎつけたい。</p> <p>③「やさしく学べる心理療法の基礎」の続編を出版社から強く求められ出版予定である。</p>

最新データ入力日	2011年 4月 1日
----------	-------------

専任教員職務業績集

山梨英和大学

フリガナ 氏名	性別	生年(西暦)	職名	所属
セキノ ヨウイチ 関野 陽一	男	1952年	教授	人間文化学部人間文化学科
取得学位称号	学士	専門分野	図書館情報学・記録管理	
学歴	1971年	3月	私立開成高等学校卒業	
	1972年	4月	慶應義塾大学文学部入学	
	1976年	3月	慶應義塾大学文学部図書館・情報学科卒業	
	年	月		
	年	月		
実務経験	1976年	4月	社団法人経済団体連合会事務局入局 図書館部において図書館運営・データベース構築、広報部において報道対応、 総務部においてシステム管理・文書管理、社会本部において機関誌編集等の 業務を担当。	
	2006年	3月	社団法人日本経済団体連合会事務局自己都合退職	
	2006年	4月	山梨英和大学人間文化学部人間文化学科教授 現在に至る	
受賞歴	年	月	なし。	
	年	月		
	年	月		
所属学会	1976年	4月	三田図書館・情報学会(現在に至る)	
	1991年	4月	記録管理学会(現在に至る)	
	2006年	4月	日本図書館情報学会(現在に至る)	
	2006年	4月	アートドキュメンテーション学会(現在に至る)	
特免資格等	1976年	3月	司書	
	年	月		
	年	月		
	年	月		

目 次

○教育業績	
教育理念、方針、方法	178
教育能力	
教育方法実践例	178
作成した教科書、教材等	178
教育方法や実践に関する発表、講演等	178
担当授業科目	178
代表的なシラバス	178
教育改善活動	178
教育能力に対する評価	179
○研究業績	
研究の特徴	180
研究経歴	180
研究実績	
著書	180
学術論文	180
その他の研究活動	180
競争的資金採択課題	180
学会等発表、役員参加	180
共同研究・受託研究の実績	180
大学院生指導	180
研究能力に対する評価	181
○サービス活動業績	
学内委員会・作業部会等活動実績	181
アドバイザー活動実績	181
後進育成活動実績	181
社会貢献活動	181
○専門的活動(教育業績、研究業績、サービス活動業績)の統合による成果と目標	
専門的成果	182
専門的目標	182
○添付資料	
略	
○最新データ入力日	182

教育業績

教育理念、方針、方法	<p>社会生活を送るうえで必要な基礎学力とともに、社会人として求められるコミュニケーション力や協調性が学生時代に養えるよう留意したい。そのためには、演習系の授業では自発的に学習し、その成果を積極的に発表することを奨励するとともに、グループ作業を活発に行うことで人間関係を構築するノウハウが身に着くようにしたい。</p> <p>卒業後の進路を意識した学生生活を送ることが重要だと考える。とくに、仕事や職業が各人にとってどのような意義をもつかを学生に考えさせたい。各自の目標を明確にするとともに、実現するために必要な力をつけさせたい。</p> <p>留学生が多く学ぶ本学の特色を生かして、日本人学生と留学生との交流を促進したい。ゼミナール等では留学生が多く履修するので、日本人学生と切磋琢磨しながらお互いに様々な面で高めることができるような雰囲気をつくりあげてゆきたい。</p>
教育能力	<p>(1)教育方法実践例</p> <p>a.就職に必要なコミュニケーション力を身につけることを目標とする「キャリアデザイン2」において、聞く、話す、書くといった要素を、社会人を含む複数の講師が担当して参加型の授業を展開した。学生に他では体験しにくい、良い意味でのショックを与えながら、社会で必要とされるコミュニケーション能力がなんであるかを理解させるようにした。</p> <p>b.2010年7月にビジネス・コミュニケーションコースの学生を対象としてビジネス現場体験プログラムを企画した。その際、日本を代表するビッグビジネスの生産現場や企業のダイナミックな技術開発の動きが理解できるよう、日産自動車横浜工場と東芝科学館を見学先として選択したが、学生の反応をみると新鮮な体験をしたことが理解でき、企業活動の先端的なものに触れる重要性を再認識したので、継続したい。</p> <p>(2)作成した教科書、教材等</p> <p>司書関係やシステム関係の授業では実際の現場がどうなっているのかを学生に見せて理解させる必要があるが、実際に体験することは困難を伴う。そこで、パワーポイントを用いてネット上の情報を容易に活用することができるよう工夫したスライドを作成して、授業で活用した。</p> <p>(3)教育方法や実践に関する発表、講演等</p> <p>なし。</p>
担当授業科目	<p>2011年度： 図書館情報論、ビジネスファイリング、情報と職業、ITリテラシー演習1・2、キャリアデザイン2 基礎ゼミナール2、専門ゼミナール、卒業研究</p>
代表的シラバス	<p>授業全体の目標を明らかにするとともに、毎回の授業でもその日の内容が明確になるよう心がけている。</p>
教育改善活動	<p>担当科目である「ビジネス・ファイリング」はファイリングデザイナー検定3級合格を目標としているが、2009年度は合格者が1名しかおらず、十分な成果を出すことができなかった。この反省から、2010年度は最初から目標を明確にして学生に伝え、授業内容も検定受験を意識したものに工夫した。その結果、14名受験し、8名が合格した。合格者には留学生も含まれ、一定の成果を得られたものとする。今年度は、この資格の取得が学生の就職意識に対してどのような影響を与えたか、追跡調査を行いたい。</p>

<p>教育能力に対する評価</p>	<p>(1) 学生による授業評価</p> <p>1年次の演習系の授業では、とくに初めの部分ではゆっくりと丁寧に説明し、実習の時間もたっぷりとするよう心がけた。一部の学生には進度が遅いと指摘されことも再三あったが、決して急がなかった。この結果、日本語能力が十分でない留学生が混じるクラスでも、途中で投げ出してしまうような学生の発生を防げ、説明が丁寧でよく理解できたと評価された。</p> <p>また、担当する司書課程科目では、図書館の現場での実態を学生に理解させることを目指し、web上の映像等の情報源の積極的な活用により効果を上げることができ、分かりやすいと評価された。</p> <p>(2) 同僚教員等による授業評価</p> <p>実施していない。</p>
-------------------	---

研究業績

研究の特徴	<p>情報や記録の管理を主な研究対象としている。とくに、図書館、文書館などの専門機関における情報、記録の収集、整理、蓄積、利用のプロセス全般に対して、デジタル化がどのような影響を与えているか明らかにしたい。さらに、それに携わる専門職が求められる能力や育成のあり方についても考察している。</p> <p>また、企業などのビジネスの現場で、情報や記録がどのように取り扱われているか、その実態を調査するとともに、その意義を明確にしたい。</p>
研究経歴	<p>1983年 経済文献研究会調査研究委員として「経営情報データベース化のための計量的分析に関する調査研究に従事。1985年まで。</p> <p>年</p> <p>年</p>
研究実績	<p>(1) 著書 関野陽一. "経済・企業ビジネス情報 人物情報". 専門資料論. 新訂, 東京書籍, 2004, p.188-199. 関野陽一. "専門図書館の国際交流". 白書・日本の専門図書館1992. 専門図書館協議会. 1992, p.239-252</p> <p>(2) 学術論文 関野陽一. 米国の専門図書館における電子ライブラリーへのアプローチ. 電子ライブラリー. 1997, p.28-31. 関野陽一. 専門図書館の課題. 図書館界. 1993, p.43-47.</p> <p>(3) その他の研究活動(国際会議発表、学術誌編集、学術論文査読等) 記録管理学会誌「レコード・マネジメント」の編集委員長(2009年5月より2011年5月まで) Japanese Industrial Information on the Web.米国専門図書館協会第88回年次大会(1997年9月)</p>
競争的資金採択課題	なし。
学会等発表・役員参加	<p>2005年 5月 記録管理学会理事(2011年5月まで)</p> <p>1996年 10月 専門図書館協議会幹事(1999年3月まで)</p> <p>1989年 5月 専門図書館協議会関東地区協議会幹事(19993月まで)</p> <p>年 月</p> <p>年 月</p> <p>年 月</p> <p>年 月</p>
受託共同研究の実績	<p>年 月 なし。</p> <p>年 月</p> <p>年 月</p> <p>年 月</p> <p>年 月</p>
大学院生指導	なし。

研究能力に対する評価	司書やアーキビスト等の情報や記録の管理にかかわる専門職の養成については、実学的な要素が強い部分があるので、専門図書館での勤務経験等現場で獲得した知識を活かしたい。また、地域の図書館の活性化のために、これまでの経験を活用したい。
------------	---

サービス活動業績

学内委員会・作業部会等活動実績	2011年 4月 入試部長 2009年 4月 司書課程、学芸員課程運営委員長(現在まで) 2008年 4月 進路支援室長(2009年3月まで) 2007年 4月 図書館長(2008年3月まで) 年 月 年 月 年 月
アドバイザー活動実績	2010年度の3年次ゼミナールにおいては、履修学生の進路目標を明確にし、それを実現するための方策を学生とともに考えることを重視した。授業外で、進路に関する長めの個人面談を実施し、就職意識の確立や進学準備の促進について指導した。
後進育成活動実績	なし。
社会貢献活動	(1)講演会 2009年 1月 2008年度生涯学習フォーラム(山梨県社会教育振興会、山梨学院大学生涯学習センター共催)で基調講演「魅力と実力を備えた図書館とは」を担当。 (2)出前講座 年 月 特になし (3)公開講座 2009年 11月 第24回山梨県図書館大会第1分科会「すべての人に読書の楽しみを一図書館に何ができるか」においてコーディネーターを担当。 (4)学外審議会・委員会等 2010年 10月 山梨県図書館協議会委員(副会長)に就任。現在に至る。 (5)その他 1995年 7月 外国人研修生・技能実習生日本語作文コンクール審査委員(国際研修協力機構主催)に就任。現在に至る。

成果と目標

専門的成果	<p>①専門分野と関連する図書館の運営に関連して、山梨県立図書館より来年開館の新図書館の構想具体化について協力を求められたので、山梨県図書館協議会委員への就任要請を受け、現在、審議に加わっている。なお、山梨市立図書館からも同種の依頼を受けている。</p> <p>②学生の進路選択をより確実なものにするための方策を引き続き実施して、成果に結びつける。具体的には、ゼミナール等の授業において社会で必要とされる各種の力が養えるようにする。</p>
専門的目標	<p>①ゼミナールの授業において、日本人学生と留学生との交流を充実させる。効果的に実施することで、今後のグローバルな社会への対応に必要な力を獲得させる。</p> <p>②資格取得と学業成績や進路選択活動の成果との関連を明らかにし、その有効性を確認する。これにより、本学にふさわしい資格等を拡充する。</p> <p>③司書、学芸員、アーキビスト等の情報や記録の管理に関わる専門職養成の課題を検討し、今後の本学の司書課程、学芸員課程のあり方を改善する。</p>

最新データ入力日	2011年 4月 1日
----------	-------------

専任教員職務業績集

山梨英和大学

フリガナ 氏名		性別	生年(西暦)	職名	所属
アライ ナオン 荒井 直		男	1954年	教授	人間文化学部人間文化学科
取得学位称号		文学修士	専門分野	古代ギリシャ・ローマの文芸	
学 歴	年	月			
	年	月			
	年	月			
	年	月			
	年	月			
実 務 経 験	年	月			
	年	月			
	年	月			
受 賞 歴	年	月			
	年	月			
	年	月			
所 属 学 会	年	月			
	年	月			
	年	月			
	年	月			
特 許 資 格 等	年	月			
	年	月			
	年	月			
	年	月			

目 次

○教育業績	
教育理念、方針、方法	185
教育能力	
教育方法実践例	185
作成した教科書、教材等	185
教育方法や実践に関する発表、講演等	185
担当授業科目	185
代表的なシラバス	185
教育改善活動	185
教育能力に対する評価	185
○研究業績	
研究の特徴	186
研究経歴	186
研究実績	
著書	186
学術論文	186
その他の研究活動	186
競争的資金採択課題	186
学会等発表、役員参加	186
共同研究・受託研究の実績	186
大学院生指導	186
研究能力に対する評価	186
○サービス活動業績	
学内委員会・作業部会等活動実績	187
アドバイザー活動実績	187
後進育成活動実績	187
社会貢献活動	187
○専門的活動(教育業績、研究業績、サービス活動業績)の統合による成果と目標	
専門的成果	187
専門的目標	187
○添付資料	
略	
○最新データ入力日	187

教育業績

教育理念、方針、方法	
教育能力	(1)教育方法実践例 (2)作成した教科書、教材等 (3)教育方法や実践に関する発表、講演等
担当授業科目	
代表的シラバス	
教育改善活動	
教育能力に対する評価	(1)学生による授業評価 (2)同僚教員等による授業評価

研究業績

研究の特徴		
研究経歴	年 年 年 年 年	
研究実績	(1) 著書 (2) 学術論文 (3) その他の研究活動(国際会議発表、学術誌編集、学術論文査読等)	
競争的資金採択課題		
学会等発表・役員参加	年 月 年 月 年 月 年 月 年 月 年 月	
受託共同研究の実績	年 月 年 月 年 月 年 月	
大学院生指導		
研究能力に対する評価		

サービス活動業績

学内委員会・作業部会等活動実績	年 月 年 月 年 月 年 月 年 月 年 月
アドバイザー活動実績	
後進育成活動実績	
社会貢献活動	(1)講演会 年 月 (2)出前講座 年 月 (3)公開講座 年 月 (4)学外審議会・委員会等 年 月 (5)その他 年 月

成果と目標

専門的成果	① ② ③
専門的目標	① ② ③

最新データ入力日	2011年 4月 1日
----------	-------------

専任教員職務業績集

山梨英和大学

フリガナ 氏名	性別	生年(西暦)	職名	所属
サイトウ シンペイ 斎藤 信平	男	1955年	教授	人間文化学部人間文化学科
取得学位称号	文学修士	専門分野	英文学、英国文化	
学 歴	1974年	3月 福島県立安達高等学校卒業		
	1976年	4月 専修大学文学部英米文学科入学		
	1981年	3月 専修大学文学部英米文学科卒業		
	1982年	4月 専修大学大学院文学研究科修士課程入学		
	1986年	3月 専修大学大学院文学研究科修士課程修了		
	1988年	4月 成城大学大学院文学研究科博士後期課程入学		
	1990年	3月 成城大学大学院文学研究科博士後期課程中退		
実 務 経 験	1984年	12月 専修大学松戸高校非常勤講師(1985年2月まで)		
	1985年	4月 専修大学付属高校非常勤講師(1990年3月まで)		
	1990年	4月 山梨英和短期大学専任講師		
	1990年	4月 山梨大学非常勤講師(2010年3月まで)		
	1996年	4月 山梨英和短期大学助教授		
	2003年	4月 山梨英和大学教授(現在にいたる)		
	2010年	4月 山梨英和大学副学長(現在にいたる)		
受 賞 歴	年	月		
	年	月 特になし		
	年	月		
所 属 学 会	1990年	月 日本英文学会(現在にいたる)		
	1994年	月 日本サミュエル・ベケット研究会(現在にいたる)		
	2006年	月 日本ジョンソン・クラブ(現在にいたる)		
特 免 資 格 等	1984年	11月 高等学校教諭二級普通免許状 外国語(英語)		
	1986年	3月 高等学校教諭一級普通免許状 外国語(英語)		
	年	月		
	年	月		

目 次

○教育業績	
教育理念、方針、方法	190
教育能力	
教育方法実践例	190
作成した教科書、教材等	190
教育方法や実践に関する発表、講演等	190
担当授業科目	190
代表的なシラバス	191
教育改善活動	191
教育能力に対する評価	192
○研究業績	
研究の特徴	193
研究経歴	193
研究実績	
著書	193
学術論文	193
その他の研究活動	193
競争的資金採択課題	194
学会等発表、役員参加	194
共同研究・受託研究の実績	194
大学院生指導	194
研究能力に対する評価	194
○サービス活動業績	
学内委員会・作業部会等活動実績	195
アドバイザー活動実績	195
後進育成活動実績	195
社会貢献活動	195
○専門的活動(教育業績、研究業績、サービス活動業績)の統合による成果と目標	
専門的成果	196
専門的目標	196
○添付資料	
略	
○最新データ入力日	196

教育業績

<p>教育理念、方針、方法</p>	<p>二十一世紀は「知識基盤社会」の時代であり、精神的文化的側面と物質的経済的側面の調和のとれた社会を作り出し、他者の文化を理解・尊重して他者とコミュニケーションをとることのできる個人を育てていくことが高等教育に求められていることは、周知のとおりである。しかし、特に、近年のITC技術の大きな進歩により、むしろ精神面の深さや文化面の知識や理解をさらに積極的に学生に教育をしていくことが急務となってきていると考える。これは、昨今表層的できわめて浅薄な情報のやり取りがなされ、その裏にある本質の問題までさかのぼろうとしない、現代日本の文化的風潮にも共通して言えることである。ここでの問題は、本質的な議論や教育・研究を本分とする大学の存在と、一般市民が日常的に情報を得ている場の乖離であるとも言える。その意味では、大学教育では専門的な知識を幅広く学生に教育し、浅薄な情報だけを頼りに浅薄な物事の判断をしないように徹底した知的訓練をし、いわゆる「質の保証」をする必要があると考える。具体的方法としては、講義であっても単に学生が聞きっぱなしという授業ではなく、さまざまな問いをこちらから発し、現代との関連において過去の文化的事象がどのような関連を持っているのかを絶えず意識させ続けるようにしなければならないと考える。また、きちんと文献を読んで知識を蓄える習慣をつけるためにも、たえず関連の図書を紹介していかなければならない。</p>
<p>教育能力</p>	<p>(1) 教育方法実践例 「英米の文化」や「英米の思想」においては、毎回授業の最後に単なる感想ではなく、特に印象に残った事象や、質問事項を記述してもらい、それをもとに次の会に、補足説明や質問に対する回答をしている。また、講義では、各学生が現在持っている知識を過去から現代にきちんと結びつけて考えられるように、さまざまな問をしながら、双方向の授業の展開を心がけている。</p> <p>(2) 作成した教科書、教材等 a. 「英米の文化」の教材、全51ページ。 b. 「英米の思想」の教材、全47ページ。 c. 「Tourism English」の教材、全12ページ。</p> <p>(3) 教育方法や実践に関する発表、講演等 特になし</p>
<p>担当授業科目</p>	<p>2011年度 英米の文化、英米の思想、English Reading IIA、English Reading IIB、Tourism English、専門ゼミ、卒業研究、基礎ゼミ2</p>

<p>代表的シラバス</p>	<p>英米の文化 概要</p> <p>本講義では、英国の王政復古以後ロックやニュートンらの果たした役割から講義をはじめ、十八世紀英国の文化の展開を建築や造園、絵画からたどり、さらにはロンドンの都市開発の経緯を概観し、十九世紀のロンドンの庶民の実情までを見ていくことにより、英国の文化と近代性の関連、さらには現代とのつながりを捉えていきます。</p> <p>到達目標</p> <ul style="list-style-type: none"> ・英国の文化の諸相に触れる ・英国文化の流れを概観する ・英国の時代背景と文化の関係を理解する <p>授業計画</p> <table border="0"> <tr> <td>1、英国文化について</td> <td>授業の概説</td> </tr> <tr> <td>2、王政復古期の思潮</td> <td>「科学」の成立</td> </tr> <tr> <td>3、十八世紀英国概観</td> <td>コーヒーハウスの出現</td> </tr> <tr> <td>4、十八世紀英国建築</td> <td>バロック建築からパツラーディオ主義へ</td> </tr> <tr> <td>5、英国風景庭園</td> <td>成立過程とその意味</td> </tr> <tr> <td>6、ロンドンの都市開発（1）</td> <td>スクエアの成立</td> </tr> <tr> <td>7、十八世紀の出版事情</td> <td>サミュエル・ジョンソンを中心に</td> </tr> <tr> <td>8、英国絵画（1）</td> <td>ホガースとレノルズ</td> </tr> <tr> <td>9、ロンドンの給水事情</td> <td>ロンドンっ子の飲み水</td> </tr> <tr> <td>10、大英博物館の成立過程</td> <td>英国人気質の一面をみる</td> </tr> <tr> <td>11、ロンドンの都市開発（2）</td> <td>ウエストエンド開発史</td> </tr> <tr> <td>12、英国絵画（2）</td> <td>ターナーとコンスタブル</td> </tr> <tr> <td>13、十九世紀ロンドンの光と陰</td> <td>大英博覧会を中心に</td> </tr> <tr> <td>14、まとめ：定期試験について</td> <td></td> </tr> <tr> <td>15、定期試験</td> <td></td> </tr> </table>	1、英国文化について	授業の概説	2、王政復古期の思潮	「科学」の成立	3、十八世紀英国概観	コーヒーハウスの出現	4、十八世紀英国建築	バロック建築からパツラーディオ主義へ	5、英国風景庭園	成立過程とその意味	6、ロンドンの都市開発（1）	スクエアの成立	7、十八世紀の出版事情	サミュエル・ジョンソンを中心に	8、英国絵画（1）	ホガースとレノルズ	9、ロンドンの給水事情	ロンドンっ子の飲み水	10、大英博物館の成立過程	英国人気質の一面をみる	11、ロンドンの都市開発（2）	ウエストエンド開発史	12、英国絵画（2）	ターナーとコンスタブル	13、十九世紀ロンドンの光と陰	大英博覧会を中心に	14、まとめ：定期試験について		15、定期試験	
1、英国文化について	授業の概説																														
2、王政復古期の思潮	「科学」の成立																														
3、十八世紀英国概観	コーヒーハウスの出現																														
4、十八世紀英国建築	バロック建築からパツラーディオ主義へ																														
5、英国風景庭園	成立過程とその意味																														
6、ロンドンの都市開発（1）	スクエアの成立																														
7、十八世紀の出版事情	サミュエル・ジョンソンを中心に																														
8、英国絵画（1）	ホガースとレノルズ																														
9、ロンドンの給水事情	ロンドンっ子の飲み水																														
10、大英博物館の成立過程	英国人気質の一面をみる																														
11、ロンドンの都市開発（2）	ウエストエンド開発史																														
12、英国絵画（2）	ターナーとコンスタブル																														
13、十九世紀ロンドンの光と陰	大英博覧会を中心に																														
14、まとめ：定期試験について																															
15、定期試験																															
<p>教育改善活動</p>	<p>学内のFD活動に参加し、自分の授業の展開について、さまざまな角度からチェックをしようとしている。また、同僚の授業の展開などについても参考にしようとしている。</p>																														

<p>教育能力に対する評価</p>	<p>(1) 学生による授業評価 授業改善のためのアンケート：「英米の文化」、「英米の思想」については、内容が難しかったという回答が散見される。欧米の文化的な事象は、世界史の予備知識が要求されるが、講義内容については、きちんと吟味し、できるだけ単純に説明しようと心がけている。しかし、予備知識が無いからといって文化や思想をあまり単純に図式化するのは危険性が伴うので、講義内容の吟味は今後とも続く課題である。</p> <p>改善に向けた今後の方針：文化的な事象は、やはり映像を交えて講義するほうが学生にとって理解しやすいので、今後、映像を的確に導入しながら講義を展開するようにしたい。ただ、学生が映像を見ればなしでノートをとらないという問題があるので、きちんと学生に知識が定着するように工夫していきたい。</p> <p>(2) 同僚教員等による授業評価 現在、同僚教員等による講義評価は行っていない。今後の課題である。</p>
-------------------	--

研究業績

研究の特徴	<p>十八世紀英国における美意識の変化を主要な研究テーマとしている。従来、十八世紀英国文化はおおよそ古典主義の系譜の中で語られることが多かった。たとえば、十八世紀初頭に美意識を展開したシャフツベリーなどは、まさしく、古典にその源を求め、ネオプラトニズムを展開しながら、秩序による審美観を展開した。しかし、英国はなんといっても、経験論の国であり、その精神の根底には、むしろ古典主義に代表されるものとは対極にあるものが流れている。これを包括的ゴシック性と捉え、十八世紀の英国の審美観をゴシック的な側面からとらえ直そうとしている。</p>
研究経歴	<p>1990年～ サミュエル・ベケットを中心にした20世紀英国小説の研究をおこなった。</p> <p>1993年～ ナラトロジーの研究を行い、作品の分析に応用した。</p> <p>1997年～ 英国風景庭園の成立を中心とした十八世紀英国文化の研究をおこなった。</p> <p>2001年～ ネオプラトニズムを中心とした十八世紀英国文化の研究をおこなった。</p> <p>2008年～ ゴシック的審美観を中心とした英国文化の研究をおこなっている。</p>
研究実績	<p>(1) 著書</p> <p>a. 斎藤信平、「ジョンソンとサー・ジョシュア・レノルズ」、『英国文化の巨人 サミュエル・ジョンソン』、江藤秀一、柴垣茂、諏訪部仁編著、pp.138-147、港の人、2009。</p> <p>b. 斎藤信平、「終わり」、「追い出された男」、「鎮痛剤」、『ベケット大全』、高橋康也監修、p.231、p.232、p.237、白水社、1999。</p> <p>(2) 学術論文(最新のものから記載)</p> <p>a. Shimpei Saito, "The Transition of English Aesthetic Sense in the Eighteenth Century(1): To Anthony Ashley Cooper, the Third Earl of Shaftesbury", 山梨英和大学紀要第4号、pp.75-87、2005。</p> <p>b. 斎藤信平、「18世紀初頭英国における空間認識と庭園—英国風景庭園と理想的風景画の接点」、山梨英和短期大学紀要第35号、pp.80-68、2001。</p> <p>c. 斎藤信平、「『ワット』試論—サムのワット経験」、山梨英和短期大学紀要第30号、pp.272-261、1996。</p> <p>d. 斎藤信平、「殺し屋」における〈物語言説〉—〈焦点化〉と〈語り手〉」、山梨英和短期大学紀要第29号、pp.128-115、1995。</p> <p>e. 斎藤信平、「「焦点化」理論について—シュタンツェル、ジュネット、バル」、山梨英和短期大学紀要第27号、pp.136-128、1993。</p> <p>f. 斎藤信平、「物語論の実践と比較—シュタンツェルからジュネットへ」、山梨英和短期大学英文学論集、pp.3-12、1993。</p> <p>g. 斎藤信平、「ベケットの四十六年の短編小説」、山梨英和短期大学紀要第26号、pp.59-68、1992。</p> <p>(3) 研究ノート</p> <p>斎藤信平、「コヴェント・ガーデン・ピアッツァからブルームズベリー・スクエアへ—都市開発と「芝」の接点」、山梨英和短期大学紀要第32号、pp.70-60、1998。</p> <p>(4) 翻訳</p> <p>b. レディングス、ビル『廃墟の中の大学』、青木健、斎藤信平訳、法政大学出版局、2000。</p>

競争的資金採択課題	特になし	
学会等発表・役員参加	2007年 2003年 年 年 年 年 年	5月 齋藤信平、「シャフツベリーの審美観とジョンソンの倫理観」、日本ジョンソン・クラブ。 12月 齋藤信平、「自然・絵画・ベケット」、第22回ベケット研究会。
受託共同研究の実績	年 年 年 年 年	月 月 月 特になし 月 月
大学院生指導	特になし	
研究能力に対する評価	特になし	

サービス活動業績

学内委員会・作業部会等活動実績	2002年	4月	教務部長(2004年3月まで)
	2004年	4月	共通科目委員長(2008年3月まで)
	2006年	4月	国際交流委員会委員長(現在まで)
	2009年	4月	英語・英語圏文化コースコーディネータ(2010年3月まで)
	2010年	4月	副学長(現在まで)
	年	月	
アドバイザー活動実績		特になし	
後進育成活動実績		特になし	
社会貢献活動	(1)講演会		
	年	月	特になし
	(2)出前講座		
	2008年	10月	甲府市生涯学習課知識交流講座で、「絵画を読む:イコノロジー入門」と題して4回にわたって講座を行った。
	2009年	7月	甲府市生涯学習課知識交流講座で、「絵画を読むⅡ—西洋美術の二大潮流(ゴシックと古典主義)」と題して4回にわたって講座を行った。
	(3)公開講座		
	2007年	7月	「風景画を読む」と題し、全四回にわたって講座を行った。
	2008年	9月	「絵画を読む」と題し、全四回にわたって講座を行った。
	2009年	6月	「絵画を読む—美の変遷—」と題し、全四回にわたって講座を行った。
	(4)学外審議会・委員会等		
2011年	4月	大学コンソーシアムやまなし事務局長会議企画・運営委員	
(5)その他			
年	月	特になし	

成果と目標

専門的成果	<p>①ナラトロジーの研究においては、「焦点化」理論をシュタンツェルやジュネット、バルなどを比較し、その理論の進展を整理して、「殺し屋」などの作品分析により、「語り」と「視点」の関係性を明らかにした。</p> <p>②英国風景庭園の成立を中心にした英国文化の研究においては、造園の発想そのものが当時の世界観と密接に関係しており、当時の人間の空間認識や自然観と関係していることを明らかにした。特に、当時の英国貴どのような経緯から庭園の塀を飛び出し自然と一体になるという認識の中で、理想的風景画の美意識を造園における美意識へと転換し利用するに至ったかについて、十八世紀初頭を一つの転換点として捉えなおした。</p> <p>③十八世紀の美意識の変遷の研究では、当時の英国貴族が自認していたイタリアルネサンスの後継者としての立場から、古典主義的芸術論を上位に置く従来の見方ではなく、英国独特の経験論的精神風土や、ゴシック的審美観から美意識を研究することで、これまでどちらかという古典主義的美意識に重きが開かれて前面には出てこなかったゴシック的美意識の系譜こそが英国独特の審美観であることを確認しつつある。</p>
専門的目標	<p>①十八世紀英国文化の底流に流れるゴシック性の確認：従来、十八世紀の英国文化は、当然のごとくにイタリア・ルネサンスの系譜の中で論じられてきた。18世紀英国文壇を代表するサミュエル・ジョンソンや、同じく同世紀を代表する肖像画家ジョシュア・レノルズの作品と芸術理論は、古典主義を継承発展させているものされてきた。文学と絵画の関連性に関する研究は古くからあるが、伝記という文学に描かれる個人像と肖像画という絵画に描かれる個人像に関する経験論的、あるいは写実主義的、さらにはゴシック性の観点からの十八世紀英国文化における文学と絵画の英国文化における関連性の研究は皆無である。ここに新たに18世紀における英国のゴシック性を前面に出し、そこに英国人独特の気質を見い出そうとしている。</p> <p>②サー・ジョシュア・レノルズの芸術理論と肖像画に置ける審美観の関連：ジョシュア・レノルズの「講演」は、ジョンソンやエドモンド・パークらをも巻き込んだ、いわば十八世紀英国の文化の中心にいる人々の審美観の表現ととることできる。しかし、一方でレノルズ自身は紛れもない肖像画家であり、言われ続けてきたのは、理論と実践の違いである。しかし、この古典主義芸術理論とその肖像画の間にも、英国人独特の現実感覚や経験論的な思考が流れている。いわば、十八世紀英国の美意識と英国経験論の関係を解き明かすことも、重要な研究テーマである。</p> <p>③英国のゴシックの系譜は、いわゆる「ゴシック・リバイバル」として研究されてきた。その中心にいるのがジョン・ラスキンである。このリバイバルが起こった理由を再確認し、現代においてゴシック的な審美観を、秩序を基盤にした美意識として確認する。またこの過程で、真にゴシック的な人体表現の系譜にもふれ、ギリシア・ローマの古典主義の人体表現に対峙するゴシック的人体表現のルーツと系譜も探っていく。いわば、西洋文化のゴシック的審美観の流れを明確にすることも研究のテーマである。</p>

最新データ入力日	2011年	4月	1日
----------	-------	----	----

専任教員職務業績集

山梨英和大学

フリガナ 氏名	性別	生年(西暦)	職名	所属
トダ ットム 戸田 勉	男	1955年	教授	人間文化学部人間文化学科
取得学位称号	文学修士	専門分野	英文学・文化、アイルランド文学・文化	
学 歴	1974年 3月 横浜市立桜丘高等学校卒業			
	1974年 4月 明治学院大学文学部英文学科入学			
	1978年 3月 同大学同学部同学科 卒業			
	1978年 4月 明治学院大学大学院文学研究科(英文学専攻)博士課程前期 入学			
	1981年 3月 同大学院同研究科同課程 修了			
	1981年 4月 明治学院大学大学院文学研究科(英文学専攻)博士課程後期 入学			
	1984年 3月 同大学院同研究科同課程 単位取得満期退学			
実 務 経 験	1984年 4月 山梨英和短期大学 英文学科専任講師			
	1989年 4月 同短期大学 助教授			
	1995年 4月 同短期大学 教授			
	2002年 4月 山梨英和大学 人間文化学部 人間文化学科 教授(現在に至る)			
	2004年 4月 トリニティ・コレッジ(アイルランド) 在外研究員(2004年9月まで)			
	2004年 10月 青山学院大学 法学部 非常勤講師(現在に至る)			
	2005年 4月 神奈川大学 外国語学部 非常勤講師(現在に至る)			
受 賞 歴	年 月 特になし			
	年 月			
	年 月			
所 属 学 会	1984年 4月 日本英文学会(現在に至る)			
	1991年 6月 日本ジェイムズ・ジョイス協会(現在に至る)			
	2002年 10月 IASIL Japan(現在に至る)			
	2007年 6月 日本独文学会(現在に至る)			
特 免 資 格 等 ・ ・	年 月 特になし			
	年 月			
	年 月			
	年 月			

目 次

○教育業績	
教育理念、方針、方法	199
教育能力	
教育方法実践例	199
作成した教科書、教材等	199
教育方法や実践に関する発表、講演等	199
担当授業科目	199
代表的なシラバス	199
教育改善活動	199
教育能力に対する評価	199
○研究業績	
研究の特徴	200
研究経歴	200
研究実績	
著書	200
学術論文	200
その他の研究活動	200
競争的資金採択課題	201
学会等発表、役員参加	201
共同研究・受託研究の実績	201
大学院生指導	201
研究能力に対する評価	201
○サービス活動業績	
学内委員会・作業部会等活動実績	202
アドバイザー活動実績	202
後進育成活動実績	202
社会貢献活動	202
○専門的活動(教育業績、研究業績、サービス活動業績)の統合による成果と目標	
専門的成果	202
専門的目標	202
○添付資料	
略	
○最新データ入力日	202

教育業績

教育理念、方針、方法	<p>「教育の目的は、バケツを満たすことではなく、蠟燭に灯をともしことである」と詩人W. B. イェイツが述べているように、学生の知的琴線を共鳴させ、覚醒させることを基本的な教育理念としている。そのためにも研究を充実させ、それを学生に還元することが肝心であると考え</p> <p>研究領域は英文学・文化(アイルランド文学・文化を含む)であるが、そのベースに英語の理解があるので、語学教育にも力を入れている。特に音声面での教育は、コミュニケーション能力の向上には不可欠な要素でありながらも、学生がこれまでに教育を受ける機会の少なかった領域であるため、語学クラスはもちろんであるが講義クラスにおいても学生が音声面に触れる機会をできるだけ多く持てるように心がけている。また、今日急速に進展するグローバル化社会に対応できる人間を育てるため、異文化理解教育にも積極的に取り組んでいる。</p>
教育能力	<p>(1)教育方法実践例</p> <ul style="list-style-type: none"> ・英語の授業だけでなく、英文学の授業でもCALL教室を積極的に利用し、映画や音楽を素材としたマルチメディア教育を実践している。 ・文学の授業において、原文の暗唱を取り入れた鑑賞法を実践している。 ・講義ではパワーポイント等を利用し、わかりやすい説明を心がけている。 <p>(2)作成した教科書、教材等</p> <ul style="list-style-type: none"> ・英米文学の名作の一節をまとめた暗唱用のテキストを作成した。2011年度中には、そのテキストに背景や文法項目の説明を加えた改訂版を作成する予定である。 <p>(3)教育方法や実践に関する発表、講演等</p> <p>特になし。今後の課題としたい。</p>
担当授業科目	英米の文学、英語圏地域研究、日英の表現、現代文化と英語、専門ゼミナール、卒業研究など
代表的シラバス	<p>「英語圏地域研究」</p> <p>アイルランドは、英国の隣に位置し、約8世紀間の植民地支配を受けたため、文化的に英国と同質な国と考えられがちであるが、その根底には独特の文化が根付いている。この講義では、そのようなアイルランド文化の特質を学ぶために、その歴史を概括しながら、節目となる出来事に触れ、その社会的・文化的な影響について考察することを目的としている。具体的には、時代を、植民地以前、植民地時代、独立運動時代、独立後に分け、それぞれを神話、文学、美術、音楽、スポーツなどの観点から多面的に眺めてゆくものであり、長年のアイルランド研究の成果を集約した講義である。</p>
教育改善活動	<ul style="list-style-type: none"> ・毎年の授業改善アンケート、授業中のリアクションペーパー、授業外やオフィスアワーでの学生の意見や要望を参考にして改善している。
教育能力に対する評価	<p>(1)学生による授業評価</p> <p>おおむね良好であり、特に問題はない。</p> <p>(2)同僚教員等による授業評価</p> <p>特になし。</p>

研究業績

研究の特徴	<p>1. 英文学の研究。特に、20世紀初期のモダニズム文学。作家としては、ジェームズ・ジョイス(1882-1941)を中心に据え、その影響関係のある作家や作品を対象にしている。</p> <p>2. アイルランドの社会的・文化的研究。ジェームズ・ジョイスの世界がアイルランド社会と分かちがたく結びついているので、その特殊性—例えば、ケルティズム、カトリシズム、ナショナリズムなど—を整理しながら、文学と社会の関係性について考察することに強い関心がある。</p>
研究経歴	<p>1984年 「小説研究会」に所属し、19世紀から今日までの英国小説を読み始める。</p> <p>1992年 日本ジェームズ・ジョイス協会に入会し、諸作品を精読する会に参加し始める。</p> <p>2004年 トリニティ・カレッジ(アイルランド)で在外研究(4月から9月まで)</p> <p>2006年 科研プロジェクト「プラハとダブリン」に参加し、ドイツ文学研究者と共同研究を始年</p>
研究実績	<p>(1) 著書</p> <p>1990年 2月 (共著)『連枝の世紀』(透土社)</p> <p>(2) 学術論文(2000年以降に発表したもの)</p> <p>2000年 6月 (単著) The Crisis of “Eyedentities” in the Episode of “Cyclops” (<i>Joycean Japan</i> No.11)</p> <p>2001年 6月 (単著) ユダヤ人としてのレオポルド・ブルーム—アイルランド、民族主義、反ユダヤ主義 (1) (『山梨英和短期大学紀要』第36号)</p> <p>2003年 2月 (単著) ユダヤ人としてのレオポルド・ブルーム—アイルランド、民族主義、反ユダヤ主義 (2) (『山梨英和大学紀要』第1号)</p> <p>2003年 6月 (単著) ヘリオトロープとは何か (<i>Joycean Japan</i> No.14)</p> <p>2004年 12月 (単著) The Shadow of the British Empire in “Ivy Day in the Committee Room” (『山梨英和大学紀要』第3号)</p> <p>2006年 1月 (単著) エグザイルの系譜—Stephen Dedalusの孫たち (『英語青年』2006年1月号、研究社)</p> <p>2006年 6月 (単著) The Seating Arrangement (<i>Joycean Japan</i> No.17)</p> <p>2009年 2月 (単著) 21世紀のアイルランド社会—第3世界からヨーロッパの輝ける星へ (『山梨英和大学紀要』第7号)</p> <p>2009年 10月 (単著) ジョイスとユダヤ人(日本独文学叢書066「プラハとダブリン」)</p> <p>2011年 2月 (単著) パネルの亡霊—ジョイスとイエイツの場合 (『山梨英和大学紀要』第9号)</p> <p>(3) その他の研究活動(国際会議発表、学術誌編集、学術論文査読等)</p> <p>2009年 6月 日本ジェームズ・ジョイス協会常任委員として学会誌「<i>Joycean Japan</i>」の編集及び査読に関わる(現在に至る)</p> <p>(4) 翻訳</p> <p>1995年 7月 (共訳) ジェーン・オースティン著、『「美しきカサンドラ」—ジェーン・オースティン初期作品集』(鷹書房弓プレス)</p> <p>1997年 6月 (共訳) A.N.ファーグノリ、M.P.ギレスピー著、『ジェームズ・ジョイス事典』(松伯社)</p> <p>2004年 6月 (共訳) ジョン・マクガハン著、『男の事情、女の事情』(国書刊行会)</p>

	2004年 8月 (共訳) アントニー・トロロープ著、『アントニー・トロロープ短編集I「電信局の娘」』(鷹書房弓プレス)
	2008年 11月 (共訳) アントニー・トロロープ著、『アントニー・トロロープ短編集II「ピラミッドへ行った女性」』(鷹書房弓プレス)
競争的資金採択課題	2006年～09年科研基盤研究(A)「プラハとダブリンー20世紀文学の総括の試みとしての『二都物語』」(06-07年研究協力者、07-08年研究分担者) 2010～12年科研基盤研究(B)「亡霊としての近代ーアイルランド小説通史」(研究分担者) 2012～14年科研基盤研究(B)「プラハとダブリン、20世紀文学のふたつのトポスー言語問題と神秘思想をめぐって」(研究分担者)
学会等発表・役員参加	1993年 6月 「ブルームの東へ旅」(日本ジェイムズ・ジョイス協会第5回大会) 2001年 6月 『ユリシーズ』第17挿話シンポジウム(日本ジェイムズ・ジョイス協会第13回大会) 2002年 6月 『フィネガンズウェイク』ワークショップ(日本ジェイムズ・ジョイス協会第14回大会) 2005年 6月 Symposium on <i>Ulysses</i> (日本ジェイムズ・ジョイス協会第17回大会)[英語による発表] 2008年 10月 シンポジウム「プラハとダブリン」(日本独文学会秋季研究大会) 2009年 6月 日本ジェイムズ・ジョイス協会第21回大会より常任委員として参加(現在に至る)
受託共同研究の実績	2009年 10月 日本独文学会研究叢書066「プラハとダブリン」 年 月 年 月 年 月 年 月
大学院生指導	なし
研究能力に対する評価	1. 客観的な外部評価を受けてはいないが、2006年から連続して3つの科研(共同)が採択されている点では、新しくユニークな文学への研究が評価されていると考えられる。 2. ジェイムズ・ジョイスの研究に関しては、学会発表を着実に積み重ねている。 3. 英文学史上最も難解な書物といわれている『フィネガンズウェイク』精読の研究会に20年近く参加し続けており、あの晦渋なテキストへのアプローチ法を研究し続けている。

サービス活動業績

学内委員会・作業部会等活動実績	2005年 4月 山梨英和大学進路支援室長 (2008年3月まで) 2008年 4月 同 学生部長 (2011年3月まで) 2011年 4月 同 広報委員長 (現在に至る) 年 月 年 月 年 月 年 月
アドバイザー活動実績	2002年度より、「教養演習」、「基礎ゼミナール」、「専門ゼミナール」、「卒業研究」を担当し、担当した学生の指導に関わってきた。
後進育成活動実績	山梨英和短期大学時代(1984-2001)に、新任教員の育成に深く関わった。
社会貢献活動	(1)講演会 1999年 11月 山梨ウィメンズカレッジ「ジョイスの中の女性たち」 (2)出前講座 2010年 3月 山梨県立石和高校「映画で学ぶ英語コミュニケーション」 2010年 11月 山梨県立西高校「アイルランド文化入門」、他 (3)公開講座 2003年 10月 山梨英和大学公開講座「心理小説入門」、他 (4)学外審議会・委員会等 2000年 6月 日本ジェイムズ・ジョイス協会事務局 2009年 6月 日本ジェイムズ・ジョイス協会常任委員(現在に至る) (5)その他 年 月 特になし

成果と目標

専門的成果	① ジェイムズ・ジョイスを中心にしたモダニズム文学研究は、研究論文や学会発表を通して着実に進んでいる。 ② 科研「亡霊たちの近代—アイルランド小説通史」を通し、アイルランド文学を超自然的な側面から眺めることができた。 ③ ②の成果として、アイルランドの独立運動時代のカリスマ的な政治家チャールズ・スチュアート・パーネルと文学の関係というテーマを発見し、研究を開始した。
専門的目標	① 科研「亡霊たちの近代」によるアイルランド文学研究の推進。 ② 科研「プラハとダブリン」を通し、言語危機の問題について研究を始める。 ③ チャールズ・スチュアート・パーネルの研究を継続する。

最新データ入力日	2011年 4月 1日
----------	-------------

専任教員職務業績集

山梨英和大学

フリガナ 氏名		性別	生年(西暦)	職名	所属
コスゲ ケンイチ 小菅 健一		男	1959年	教授	人間文化学部人間文化学科
取得学位称号	文学修士	専門分野	日本近代文学、表現論、表現文化		
学 歴	年 月				
	年 月				
	年 月				
	年 月				
	年 月				
実 務 経 験	年 月				
	年 月				
	年 月				
受 賞 歴	年 月				
	年 月				
	年 月				
所 属 学 会	年 月				
	年 月				
	年 月				
	年 月				
特 許 資 格 等	年 月				
	年 月				
	年 月				
	年 月				

目 次

○教育業績	
教育理念、方針、方法	205
教育能力	
教育方法実践例	205
作成した教科書、教材等	205
教育方法や実践に関する発表、講演等	205
担当授業科目	205
代表的なシラバス	205
教育改善活動	205
教育能力に対する評価	205
○研究業績	
研究の特徴	206
研究経歴	206
研究実績	
著書	206
学術論文	206
その他の研究活動	206
競争的資金採択課題	206
学会等発表、役員参加	206
共同研究・受託研究の実績	206
大学院生指導	206
研究能力に対する評価	206
○サービス活動業績	
学内委員会・作業部会等活動実績	207
アドバイザー活動実績	207
後進育成活動実績	207
社会貢献活動	207
○専門的活動(教育業績、研究業績、サービス活動業績)の統合による成果と目標	
専門的成果	207
専門的目標	207
○添付資料	
略	
○最新データ入力日	207

教育業績

教育理念、方針、方法	
教育能力	(1)教育方法実践例 (2)作成した教科書、教材等 (3)教育方法や実践に関する発表、講演等
担当授業科目	
代表的シラバス	
教育改善活動	
教育能力に対する評価	(1)学生による授業評価 (2)同僚教員等による授業評価

研究業績

研究の特徴		
研究経歴	年 年 年 年 年	
研究実績	(1) 著書 (2) 学術論文 (3) その他の研究活動(国際会議発表、学術誌編集、学術論文査読等)	
競争的資金採択課題		
学会等発表・役員参加	年 月 年 月 年 月 年 月 年 月 年 月	
受託共同研究の実績	年 月 年 月 年 月 年 月	
大学院生指導		
研究能力に対する評価		

サービス活動業績

学 内 委 員 会 ・ 作 業 部 会 等 活 動 実 績	年	月	
	年	月	
	年	月	
	年	月	
	年	月	
	年	月	
アドバイザー活動実績			
後進育成活動実績			
社 会 貢 献 活 動	(1) 講演会 年 月 (2) 出前講座 年 月 (3) 公開講座 年 月 (4) 学外審議会・委員会等 年 月 (5) その他 年 月		

成果と目標

専門的成果	① ② ③
専門的目標	① ② ③

最新データ入力日	2011年 4月 1日
----------	-------------

専任教員職務業績集

山梨英和大学

フリガナ 氏名		性別	生年(西暦)	職名	所属
スナガノリアキ 須永 範明		男	1960年	教授	人間文化学部人間文化学科 大学院人間文化研究科臨床心理学専攻
取得学位称号	博士(心理学)	専門分野	社会科学・心理学・社会的認知		
学 歴	1978年	3月 埼玉県立本庄高等学校 卒業			
	1979年	8月 アメリカ合衆国 州立 ウェストヴァージニア大学 入学			
	1983年	5月 アメリカ合衆国 州立 ウェストヴァージニア大学 卒業 文学士(心理学)			
	1984年	4月 日本大学 文学研究科 心理学専攻 博士前期課程 入学			
	1986年	3月 日本大学 文学研究科 心理学専攻 博士前期課程 修了			
	1986年	4月 日本大学 文理学部 研究生(1987年3月まで)			
	1987年	4月 日本大学 文学研究科 心理学専攻 博士後期課程 入学			
	1990年	3月 日本大学 文学研究科 心理学専攻 博士後期課程 単位取得満期退学			
	2000年	3月 日本大学より博士(心理学)授与			
実 務 経 験	1990年	4月 文教大学 人間科学部 心理学研究室 助手(2002年3月まで)			
	1992年	4月 道都大学 社会福祉学部 専任講師(1993年3月まで)			
	1993年	4月 道都大学 社会福祉学部 助教授(1995年3月まで)			
	1995年	4月 日本大学文理学部 非常勤講師			
	1999年	4月 山梨英和短期大学 情報文化学科 助教授(2002年3月まで)			
	2002年	4月 山梨英和大学 人間文化学部 人間文化学科 助教授(2003年3月まで)			
2003年	4月 山梨英和大学 人間文化学部 人間文化学科 教授(現在に至る)				
受 賞 歴	なし				
所 属 学 会	1985年	4月 日本催眠医学心理学会会員(現在に至る)			
	1987年	10月 日本映像学会会員(1990年3月まで)			
	1988年	4月 日本心理学会会員(現在に至る)			
	1988年	9月 日本社会心理学会会員(現在に至る)			
	1993年	9月 日本教育心理学会、日本カウンセリング学会、日本性格心理学会(現在は日本パーソナリティ心理学会と名称変更)会員(現在に至る)			
	1996年	7月 日本健康心理学会会員(現在に至る)			
	1998年	7月 日本アニメーション学会会員(現在に至る)			
	2000年	3月 日本学生相談学会会員(現在に至る)			
特 免 資 格 等	なし				

目 次

○教育業績	
教育理念、方針、方法	210
教育能力	
教育方法実践例	210
作成した教科書、教材等	210
教育方法や実践に関する発表、講演等	210
担当授業科目	210
代表的なシラバス	210
教育改善活動	210
教育能力に対する評価	210
○研究業績	
研究の特徴	211
研究経歴	211
研究実績	
著書	211
学術論文	211
その他の研究活動	211
競争的資金採択課題	211
学会等発表、役員参加	212
共同研究・受託研究の実績	212
大学院生指導	212
研究能力に対する評価	212
○サービス活動業績	
学内委員会・作業部会等活動実績	213
アドバイザー活動実績	213
後進育成活動実績	213
社会貢献活動	213
○専門的活動(教育業績、研究業績、サービス活動業績)の統合による成果と目標	
専門的成果	214
専門的目標	214
○添付資料	
略	
○最新データ入力日	214

教育業績

教育理念、方針、方法	<p>学生に授業科目を好きになってもらうことを心がけている。好きになってもらうためには、「面白い」と感じてもらうことと、解りやすいと感じてもらいことが大事であると考え。面白いと感じてもらうために、授業で取り上げるテーマ、トピックの内容、材料の提示の仕方、質問紙・クイズの実施等の工夫を取り入れている。解りやすくするためには、1回の授業で取り上げる内容を少なくすること、要点を整理した板書、補足資料の配付、プロジェクトによる視覚的な提示、前回の授業内容の振り返りからの導入などを行なっている。</p>
教育能力	<p>(1)教育方法実践例</p> <p>a. 心理学実験演習の内容設計：心理学実験を体験的に理解するとともに、論理的思考力を養うことを目的に、心理学実験演習の内容を設計した。興味深い実験課題を選び、作業量と実験レポートの難易度を適度に抑えることで、学生の負担感を小さくするようにした。</p> <p>b. 簡単な作業・課題の講義への導入：講義形式の授業であっても学生が主体的に授業にかかわるように、短時間で完了する簡単な作業あるいは課題を実施している。具体的には、短い質問紙尺度、○×式のクイズ、解答を記入するだけの1・2つの問題、簡単な絵の描写などを行なっている。</p> <p>(2)作成した教科書、教材等</p> <p>a. 須永範明「社会心理学」、西野泰広(編著)「こころの科学」、P.125-P.140、東洋経済新報社、2003.</p> <p>(3)教育方法や実践に関する発表、講演等</p> <p>なし</p>
担当授業科目	<p>2011年度： ココロの科学Ⅰ、はじめての統計、ココロと社会のデータ分析、社会心理学、コミュニケーションの活用、心理学実験演習、English ReadingⅡ、基礎ゼミナールⅡ、専門ゼミナール、卒業研究、心理学研究法特論、心理統計法特論、社会心理学特論、修士論文</p>
シラバスの代表的	<p>簡単な課題やクイズ、配付資料を用いて、学生の興味を喚起するように工夫している。解りやすい授業にするために、1回の授業で取り上げる内容を厳選し、適切な情報量になるように配慮している。また、授業内容は教科書から大きく外れないようにし、学生が教科書で予習・復習できるようにしている。教科書は読みやすく、あまり文字量の多くないものを選んだ。授業が3・4回進むと復習のための課題(宿題)を課している。これは定期試験に向けた準備にもなっている。</p>
教育改善活動	<p>a. FD研究会への参加(2009年度、2010年度)： 山梨英和大学で教職員向けに開催されたFD研究会に参加した。そこで学んだ授業時に実施する課題の具体的な内容や学生間での討論のさせ方等を自分の授業に取り入れている。</p> <p>b. 復習としての課題(2009年度)： 教科書の章を1つ終えるごとに、そこで学んだ内容に関する問題作成し、課題(宿題)として課した。学生にとっては学習内容の復習となり、理解と記憶を助け、定期試験への準備ともなる。</p>
教育能力に対する評価	<p>(1)学生による授業評価</p> <p><u>演習・講義の全体評価(2009年度、2010年度講義アンケートより)</u>：科目により評価が異なる傾向があった。卒業研究や心理学実験演習は比較的高い評価を得ていたが、専門演習(専門ゼミナール)は低めの評価であった。後者については、学生が興味を持つような、より面白い内容に変更した。</p> <p><u>良い点・改善してほしい点((2009年度、2010年度講義アンケート自由記述欄より)</u>：板書が多いことと課題を出していることについて評価する意見があった。改善点としては、大教室の講義で学生の私語を注意するべきだという意見が多かった。</p> <p><u>改善に向けた今後の方針</u>：大教室での授業では学生の私語が耳障りになる前の段階で抑制することにする。</p> <p>(2)同僚教員等による授業評価</p> <p>現在、同僚教員等による授業評価は行なわれていない。</p>

研究業績

研究の特徴	臨床心理学的現象(あるいは異常心理学的現象)について実証的方法を用いて研究している。1992年以降は非現実感経験について研究を積み重ねている。非現実感経験は世界的に未だ研究が少なく、解明が進んでいない現象である。今までに、非現実感経験の測定方法を開発し、生起過程に関する理論を構築した。現在は、その理論を実証的に検証する途上にある。非現実感経験の生起に生理的覚醒が関わることが理論から予測されたが、この予測は研究結果から支持されている。今後は、生起過程に関する理論を実験を用いて検討することが望まれる。
研究経歴	<p>1990年 文教大学人間科学部 助手 ストレスとコントロール感に関する研究に従事(1992年3月まで)</p> <p>1992年 道都大学社会福祉学部 専任講師 非現実感経験に関する理論的研究に従事(1993年3月まで)</p> <p>1993年 道都大学社会福祉学部 助教授 非現実感経験の測定に関する研究に従事(1995年3月まで)</p> <p>1995年 日本大学文理学部 非常勤講師 非現実感経験の生起過程に関する研究に従事(1999年3月まで)</p> <p>1999年 山梨英和短期大学情報文化学科 助教授 非現実感経験の生起過程に関する研究に従事(2002年3月まで)</p> <p>2002年 山梨英和大学人間文化学部 助教授 非現実感経験の生起過程に関する研究に従事(2003年3月まで)</p> <p>2003年 山梨英和大学人間文化学部 教授 非現実感経験の生起過程に関する研究に従事(現在に至る)</p>
研究実績	<p>(1)著書</p> <p>a. 須永範明 “社会心理学”、西野泰広(編著)「こころの科学」、P.125-P.140、東洋経済新報社、2003.</p> <p>(2)学術論文(最近のものから。単著・第1著者であるもののみ)</p> <p>a. 須永範明 (2009) ストレス反応としての現実感低下 山梨英和大学紀要, 第7号, 15-23.</p> <p>b. 須永範明 (2004) 現実感が低下するときと高まる時 山梨英和大学カウンセリングセンター紀要, 第1号, 9-14.</p> <p>c. 須永範明 (2001) 非現実感経験と生理的覚醒・対人接触回避との関係—共分散構造分析を用いた検討(追検討)— 山梨英和短期大学紀要, 第36号, 15-22.</p> <p>d. 須永範明(2000) 非現実感経験と生理的覚醒傾向・対人接触回避傾向との関係 日本大学心理学研究, 第21号, 69-73.</p> <p>e. Sunaga, N. (1999) Effects of decision-making on reactions to an evaluational stressor. Japanese Psychological Research, Vol. 41, 173-178.</p> <p>f. 須永範明 (1996) 非現実感質問紙の作成 心理学研究, 第67巻, 86-93.</p> <p>(3)その他の研究活動(国際会議発表、学術誌編集、学術論文査読等)</p> <p>a. 学術雑誌 パーソナリティ研究の編集委員(査読担当)(2007年から2010年まで)</p>
競争的資金採択課題	a. 1990年 文部省科学研究費研究助成金 奨励研究A “ストレス耐性に関する健康心理学的研究” 研究代表者.

<p>学会等 役員等 参加表</p>	<p>2002年 9月 須永範明 “ストレス事態における非現実感経験と生理的覚醒、対人接触回避との関係” 日本心理学会第66回大会</p> <p>2001年 11月 須永範明・丹治哲雄 “個人空間への侵入と非現実感経験(その2)” 日本心理学会第65回大会</p> <p>1999年 9月 須永範明 “現実感が高まるときと低下するとき” 日本性格心理学会第8回大会</p> <p>1998年 10月 須永範明・丹治哲雄 “個人空間への侵入と非現実感経験” 日本心理学会第62回大会</p> <p>1997年 9月 須永範明 “非現実感経験に関するパーソナリティ特性” 日本心理学会第61回大会</p> <p>1996年 9月 須永範明 “ストレス反応としての非現実感経験” 日本心理学会第60回大会</p>
<p>受託共同 研究の 実績</p>	<p>2001年 4月 “個人空間への侵入と非現実感経験(その2)” 共同研究(須永範明・丹治哲雄)(2002年3月まで)</p> <p>1998年 4月 “個人空間への侵入と非現実感経験(その2)” 共同研究(須永範明・丹治哲雄)(1999年3月まで)</p> <p>1993年 4月 “同一性確立過程における自己愛の様相” 共同研究(陶山智・須永範明)(19943月まで)</p>
<p>大学院生指導</p>	<p>修士論文指導補助教員(山梨英和大学 人間文化研究科): 2010年度 自己開示がネガティブ情動の低減に及ぼす影響—筆記間隔の違いに着目して—</p>
<p>研究能力 に対する 評価</p>	<p>非現実感経験の測定のために質問紙尺度を開発した(須永, 1996)が、同質問紙は1997年度の教育心理学年報(第37集)のなかで、“ユニークなもの”(p.74)と紹介されている。同質問紙は、心理測定尺度集Ⅲ(松井・堀 監修 サイエンス社)に収められている。</p>

サービス活動業績

学 内 委 員 会 等 活 動 実 績 ・ 作 業 部	2011年	4月	心理社会コースコーディネータ
	2011年	4月	教務委員会、入試委員会 委員
	2009年	4月	入試実務委員長(2010年4月まで)
	2008年	4月	入試部長(2009年3月まで)
	2006年	4月	入試実務委員長(2008年3月まで)
	2004年	4月	入試委員会 実務委員(2006年3月まで)
	2003年	4月	教務委員会 委員(2004年3月まで)
アドバイザー活動実績		特になし	
後進育成活動実績		特になし	
社 会 貢 献 活 動	(1)講演会 特になし		
	(2)出前講座 2009年 6月 山梨県立吉田高校主催『楽問楽学講座』での出張講義を依頼され、『心理学はじめの一步』と題して、心理学の面白さを伝える講座を行なった。		
	(3)公開講座 2007年 7月 キャンパスネットやまなし(山梨県生涯学習推進センター主催)と山梨英和大学との提携講座。4講座の1つ。『非現実感経験とストレス社会』と題し、ストレスによって現実感、さらには生きている実感が弱まってしまう恐れがあることについて講演した。		
	(4)学外審議会・委員会等 2005年 7月 社団法人 日本心理学会 代議員(2007年6月まで)		
	(5)その他 特になし		

成果と目標

専門的成果	<p>①非現実感経験に関する研究:非現実感経験は健常者にも一般的に見られる現象であるが、その生起過程および生起に関わる要因についてはほとんど明らかにされていない。非現実感経験を実証的に研究するため、測定道具を開発した。次に生起過程に関する理論を構築した。その理論に基づき、生理的覚醒が現実感の低下に関わる要因の1つであることを実証的に明らかにした。</p> <p>②自己決定とストレスに関する研究:ストレスフルな状況での自己決定の効果、対処とストレス反応との関連について検討している。自己決定については、ストレスの影響を単純に低下させるのではなく、ストレス源である課題に取り組み続けるか、中止するかを能動的に判断するようになっていった、ストレス状況での態度(枠組み)に影響することが示唆された。</p> <p>③研究成果の発信等:研究成果について、公開講座(2007年キャンパスネットやまなしと山梨英和大学との提携講座)等で一般の方々に発信している。</p>
専門的目標	<p>①非現実感経験に関する研究:非現実感経験の生起過程を明らかにすることが目標である。上述の通り、すでに理論構築は成されており、実証的研究も始まっている。最重要の検討課題は、理論の中核である「知覚の劣化」が生じているか否かを実証的に明らかにすることである。そのため、非現実感経験生起時の知覚情報処理量を捉える実験を計画している。</p> <p>②自己決定とストレスに関する研究:ストレス状況下で自己決定の機会を得ることが、対処方略の選択に影響を及ぼすか検討する。自己決定により対処法力が変わることが明らかになれば、個々のストレス状況下で、個人により適応的な対処を選択させる(非適応的対処は選択させない)ことが可能になるかもしれない。</p> <p>③研究成果の発信等:一般の方々に講演会やWebを通して発信していきたい。特に、非現実感経験については、専門的知識を持つ研究者は国内外合わせても少ない。情報発信していく社会的意義は大きいであろう。</p>

最新データ入力日	2011年 4月 1日
----------	-------------

専任教員職務業績集

山梨英和大学

フリガナ 氏名	性別	生年(西暦)	職名	所属
クロダ ヒロシ 黒田 浩司	男	1960年	教授	人間文化学部人間文化学科 大学院人間文化研究科臨床心理学専攻
取得学位称号	社会学修士	専門分野	臨床心理学	
学歴	1979年	3月 岐阜県立大垣東高等学校卒業		
	1979年	4月 千葉大学人文学部人文学科心理学専攻入学		
	1983年	3月 千葉大学人文学部人文学科心理学専攻卒業		
	1983年	4月 慶応義塾大学大学院社会研究科社会学専攻修士課程入学		
	1985年	3月 慶応義塾大学大学院社会研究科社会学専攻修士課程修了		
	1985年	4月 慶応義塾大学大学院社会研究科社会学専攻博士課程入学		
	1989年	3月 慶応義塾大学大学院社会学研究科社会学専攻博士課程単位修得退学		
実務経歴	1984年	4月 千葉県柏児童相談所嘱託判定員(1988年3月まで)		
	1988年	4月 青山学院大学生相談センターカウンセラー(1994年3月まで)		
	1988年	5月 国立千葉病院精神神経科嘱託臨床心理士(1994年3月まで)		
	1989年	4月 産能短期大学通信教育部非常勤講師(2005年3月まで)		
	1994年	4月 茨城大学人文学部専任講師(1997年3月まで)		
	1996年	4月 茨城県スクールカウンセラー(1999年3月まで)		
	1997年	4月 茨城大学人文学部助教授(2004年9月まで)		
	1998年	4月 みとカウンセリングルームどんぐりカウンセラー(2009年3月まで)		
	2004年	4月 放送大学茨城学習センター兼任講師(2009年3月まで)		
	2004年	4月 茨城大学大学院教育学研究科学校臨床専攻兼任(2009年3月)		
	2004年	4月 常磐大学大学院人間科学研究科非常勤講師(心理療法特論2009年3月まで)		
	2004年	10月 茨城大学人文学部教授(2009年3月まで)		
	2005年	2月 英国Tavistock Clinic 思春期部門留学(文部科学省平成16年度海外先進教育実践による派遣 2006年2月まで)		
	2009年	4月 茨城大学大学院教育学研究科学校臨床専攻非常勤講師		
2009年	4月 山梨英和大学人間文化学部教授			
受賞歴	2007年	3月 茨城大学2006年度推奨授業受賞 教養科目「こころの科学」		
所属学会	1986年	4月 日本心理臨床学会(現在にいたる)		
	1996年	4月 日本ロールシャッハ学会(現在にいたる)		
	2000年	4月 包括システムによる日本ロールシャッハ学会(現在にいたる)		
	2001年	4月 日本精神分析学会(現在にいたる)		
特免資格等	1995年	4月 臨床心理士(日本臨床心理士資格認定協会 No04221)		
	年	月		
	年	月		
	年	月		

目 次

○教育業績	
教育理念、方針、方法	217
教育能力	
教育方法実践例	217
作成した教科書、教材等	217
教育方法や実践に関する発表、講演等	217
担当授業科目	217
代表的なシラバス	217
教育改善活動	217
教育能力に対する評価	218
○研究業績	
研究の特徴	219
研究経歴	219
研究実績	
著書	219
学術論文	219
その他の研究活動	219
競争的資金採択課題	220
学会等発表、役員参加	220
共同研究・受託研究の実績	220
大学院生指導	220
研究能力に対する評価	220
○サービス活動業績	
学内委員会・作業部会等活動実績	221
アドバイザー活動実績	221
後進育成活動実績	221
社会貢献活動	221
○専門的活動(教育業績、研究業績、サービス活動業績)の統合による成果と目標	
専門的成果	222
専門的目標	222
○添付資料	
略	
○最新データ入力日	222

教育業績

教育理念、方針、方法	<p>大学教育において学問の基本を学ぶことは、その学問の理念や緒理論を理解するだけでなく、対象を多様な観点から考察しうる学問的態度を見につけることが肝要と考えられる。この学問的な態度には批判的な観点も同時に持ちつつ、机上の論理にならないように現実の事象や実際の場面とかかわることが含まれ、これが実践的な学問的能力となり、知識および良識ある社会人の育成につながるものとする。</p> <p>教養科目、専門科目、大学院科目のすべての領域において、この基本的な理念や諸理論と実際的な問題をつなぎ、授業の中で主体的考える機会を多く取り入れておる。教養科目においては心理学の基本的な実験や、心理テスト、カウンセリングの実習を取り入れ、なおかつ精神障害者に対する偏見については課題を出し、実践を通して考察をすることを求めており、受講生が心理学や精神病の現実を知り、社会の様々な事象を心理学的に考察することの面白さを体験できるように心がけている。</p>
教育能力	<p>(1)教育方法実践例</p> <p>a. 大学における精神障害に関する心理教育の試み 大学の教養科目において、偏見の少ない精神障害に対する正しい知識を習得してもらうために、受講生自身が心理教育を受けるだけでなく、最低3名の周囲の人(家族、友人など)に心理教育をおこなう実践を求め、その成果をレポート課題として提出を求めた。教室で受身的に聞くだけでなく、自らが心理教育活動に参加することによりこの問題に対する積極的な態度がより培われた。</p> <p>また、学部専門科目においてはその授業の中で、精神病院デイケアとの交流会や作業所ボランティアなどに学生に積極的に関与させ、精神障害を抱えている人との実際のかかわりを通して、この問題を深く考察されている。</p> <p>(2)作成した教科書、教材等 a.黒田浩司「臨床心理アセスメント(2)知能検査と質問紙法」「臨床心理アセスメント(3)投映法」「コミュニティ援助(1)危機介入とコンサルテーション」「臨床心理学概説」馬場禮子(編著)p67-77、p78-88、p1140-149、放送大学教育振興会、1999/2003</p> <p>(3)教育方法や実践に関する発表、講演等 黒田浩司 茨城大学2006年度表象授業報告</p>
担当授業科目	<p>2011年度</p> <p>アドバンスド心理学研究演習、キャリアカウンセリング演習、キャリア心理学、心理検査演習、専門ゼミナール、卒業研究(以上学部)、臨床心理査定演習、臨床心理事例研究、臨床心理的地域援助</p>
代表的シラバス	<p>授業の方針としてはそれが講義であっても、演習であっても、授業の中に実習をできるだけ取り入れ、学生自身が深く問題に関与し、積極的に取り組むように努力している。そのためにかなりボリュームのある資料を用意し、受講生の提出したデータを授業の中でもちいるようにしている。卒業論文研究につながるようにレポートとして提出するように求めている。</p>
教育改善活動	<p>a. 教養教育科目人文分野専門部会長(2006年～2008年度、茨城大学) 茨城大学全学の人文分野の教養教育科目の専門部会長として授業の質をよくするために授業アンケートやFD研修会、シンポジウム、シラバス改善のための点検評価、などをおこなった。</p> <p>b. 山梨英和大学FD推進委員(2009年～現在) FD推進委員として、研究会の講師を務め、FD研修会の企画、開催、記録・報告などをおこなった。</p>

<p>教育能力に対する評価</p>	<p>(1) 学生による授業評価</p> <p>授業への全体的評価(授業アンケートより): 興味深く役に立つ資料が多く配布され、心理臨床や社会の現場の問題が授業の中でプレゼンテーションされることに対して学生は高く評価していた。精神障害の心理教育に関する課題が授業の中で課せられることについては負担が大きいと記述する学生も見られたが、自らが参与することでこのような問題の核心に触れたように感じる受講生も少なくなく、受講生の積極的にものごとに参与する姿勢や自己評価が高まった印象を受けている。</p> <p>改善してほしい点: 受講生の多くが提出したレポートについてフィードバックを欲しいと希望していたが、すべてにコメントをつけて返却することができず、今後改善が必要であると思われる。現在は授業の最後の時間にいくつかのレポートについてコメントし、代表的な質問に対してコメントを返しているのみとなっている。また、試験をおこなう科目についてはいくつかの科目で試験後の授業の中で問題の意図と解答例を解説しているが、受講生からは「どのように解答すれば良いかの参考になり、とても勉強になった」との評価が得られており、今後はなるべくすべての科目で実践してゆきたいと考えている。</p> <p>(2) 同僚教員等による授業評価</p> <p>現在同僚による授業評価はおこなっていない、今後の課題である。</p>
-------------------	--

研究業績

研究の特徴	<p>心理臨床におけるアセスメントと臨床心理学的地域援助が主な研究テーマになっている。アセスメントに関しては投映法のロールシャッハテスト、およびSCTをもちいての、クライアントの内面を精神力動的にアセスメントする技法について研究を継続しており、境界性人格、非行少年、発達障害者に関して多数の学会発表がある。</p> <p>臨床心理学的地域援助に関しては、精神障害に関する心理教育、思春期・青年期の臨床心理的問題の地域援助、地域がんセンターにおける他職種と心理臨床家の協働に関する研究を継続している。思春期・青年期の臨床心理学的問題の地域援助については、このテーマに関して1年間英国Tavistock Clinic思春期部門への留学経験があり、その後も毎年Tavistock Clinicを訪問して、英国の研究者との交流を続け、ロンドンでのアウトリーチ実践について日本での応用の可能性を探っている</p>
研究経歴	<p>2010年 山梨英和大学にて臨床心理士の効果的な教育訓練システムについて従事(現在まで)</p> <p>2005年 茨城大学にて授業を通じての精神障害や発達障害に関する心理教育の実践とその効果の測定の研究に従事(現在まで)</p> <p>2004年 地域がんセンターにおける臨床心理と他職種の効果的なコラボレーションに関する研究(現在まで)</p> <p>2004年 思春期・青年期の心理的問題に対する効果的な地域支援に関する研究(現在まで)</p> <p>1999年 投映法心理検査による心理臨床アセスメントに関する研究(現在まで)</p>
研究実績	<p>(1) 著書</p> <p>a.黒田浩司“はじめての人のための「学びのガイドライン”、“大学院修了後のスーパーヴィジョンの体験から”「臨床心理士の基礎研修」日本臨床心理士会(編)p5-17、p188-191.創元社、2009</p> <p>b.黒田浩司“コンサルテーションに役立った例(妄想反応)”、“ひきこもり青年の内面理解(分裂的性格)”、“SCT(文章完成法)”、“WAI(Who am I)”、“Barrier and Penetration Scales”、“クーパーの防衛尺”「心理査定実践ハンドブック」氏原寛・岡堂哲雄・亀口憲治・西村洲衛男・馬場禮子・松島恭子(編)p34-37、p38-41、p231-235、p364-368、p379-382、p388-392.創元社、2006</p> <p>c.黒田浩司“臨床心理アセスメント(2)知能検査と質問紙法”“臨床心理アセスメント(3)投映法”“コミュニティ援助(1)危機介入とコンサルテーション”「臨床心理学概説」馬場禮子(編著)p67-77、p78-88、p1140-149、放送大学教育振興会、1999/2003</p> <p>d.黒田浩司・馬場禮子“ロールシャッハ・テスト”「臨床心理学大系第6巻人格の理解②」安香宏・大塚義孝・村瀬孝雄(編)、p25-51、金子書房、1992.</p> <p>e.黒田浩司・山本和郎“コンサルテーション”「メンタルヘルスハンドブック」上里一郎・飯田眞・内山喜久雄・小林重雄・筒井末春(監修)56-6、同朋舎、1989</p> <p>(2) 学術論文</p> <p>a.黒田浩司“看護師の自己評価とプロ意識——臨床心理士からみた看護師のストレスと悩み——”『看護管理』、第18巻、第1号、p20-24.2008.</p> <p>b.黒田浩司“大学生における精神障害に関する心理教育の試み”茨城大学人文学部紀要『人文コミュニケーション学科論集』、第2号、p49-68.2007</p> <p>c.黒田浩司“コミュニティベースの臨床心理学的援助の新しい可能性”茨城大学人文学部紀要『人文コミュニケーション学科論集』、第1号、p23-39,2006</p> <p>d.黒田浩司“ロールシャッハ・テストにおける力動的理解の現在”『臨床心理学』、第5巻第29号、P621-627.2005.</p> <p>e.黒田浩司“コミュニティ援助の理論と実践”茨城大学人文学部紀要『人文科学論集』39号、P13-29.2003.</p> <p>f.黒田浩司“最近の不登校とその教育相談的対応”月刊学校教育相談1月増刊、p30-35、2002.</p> <p>(3) その他の研究活動(国際会議発表、学術誌編集、学術論文査読等)</p> <p>a.Hiroshi Kuroda “W Face Response on the Rorschach Test. Tthe 19th conference of International Society of the Rorschach and Projective Techniques.in Lueven,Belgium 2008.</p> <p>b.学術雑誌「心理臨床学研究」編集協力委員(2010年度、および2009年度)</p> <p>c.学術雑誌「包括システムによる日本ロールシャッハ学会誌」編集委員(2006年度より)</p> <p>d.学術雑誌「Rorschachiana」Editial Borad. (2006年より)</p>

競争的資金採択課題	2005年2月～2006年 文部科学省平成16年海外先進教育研究実践プログラム	
学会等発表・役員参加	2010年 2010年 2010年 2009年 2009年 2009年 2008年	10月 黒田浩司”精神病的の不安を抱える青年期事例”日本ロールシャッハ学会第14回大会、帝塚山大学 9月 黒田浩司・森稚葉・小野綾子・田中健夫・馬場禮子”効果的な心理臨床教育・訓練システムに関する研究(3)”日本心理臨床学会第29回大会、東北大学 7月 黒田浩司”地域がんセンター緩和ケアチームとのコラボレーション”日本コミュニティ心理学会第13回大会 立教大学 10月 黒田浩司”境界性人格のSCTIにみられる対象関係”日本ロールシャッハ学会第13回大会、大妻女子大学 9月 黒田浩司”変化することへの強い抵抗を示すクライアントの心理療法”日本心理臨床学会第28回大会、東京国際フォーラム 7月 黒田浩司”医療現場におけるコミュニティ支援プログラムの展開の試み;地域がんセンター緩和ケアチームとのコラボレーション”日本コミュニティ心理学会第12回大会、東北大学 10月 黒田浩司”自己臭恐怖を訴える青年期事例”日本ロールシャッハ学会第12回大会、新潟青陵大学
受託共同研究の実績	年 年 年 年 年	月 特になし 月 月 月 月
大学院生指導	大学院指導教員(山梨英和大学大学院) 2010年度 1.児童養護施設における心理的援助と他職種との連携:施設心理士の発展を目指して 2.臨床の場で『人を育てる』ということ:プリセプターの新人看護師指導プロセス分析 大学院指導教員(茨城大学大学院) 2006年度 1. 育児ストレスとその対処に関する研究	
研究能力に対する評価	投映法心理検査によるアセスメントについては学界において中心的役割を果たすと期待されており、国際学会の組織員や国際学会誌の編集委員、ワークショップや基礎講座の講師の依頼を多く受けている。 臨床心理的地域援助においてもこの領域の第一人者と評価されており、他大学や家庭裁判所調査官の研修などにおいて講演や研究報告の依頼を何度か受けている。	

サービス活動業績

学内委員会・作業部会等活動実績	2011年	4月	心理臨床センター長、学生部長、広報委員会、進路支援委員会
	2010年	4月	心理臨床センター長、入試委員会、FD推進委員会
	2009年	4月	学生委員会、国際交流委員会、FD推進委員会
	2008年	4月	茨城大学大学院人文科学研究科文化構造専攻専攻長
	2006年	4月	茨城大学教養教育科目専門部会長(2009年3月まで)
		年	月
	年	月	
アドバイザー活動実績	特になし		
後進育成活動実績	特になし		
社会貢献活動	(1)講演会		
	2011年	2月	黒田浩司“テストバッテリー”家庭裁判所調査官補研修、裁判所研修委員研修所
	2010年	12月	黒田浩司“自殺企図の高いクライアントのリスクアセスメントとかかわり”山梨英和大学心理臨床センター地域貢献セミナー、山梨英和大学
	2010年	9月	黒田浩司“リーダーシップ能力と対人関係能力の育成”群馬県小児医療センター看護部リーダーシップ研修
	(2)出前講座		
	2010年	6月	黒田浩司“こころの諸問題とその支援方法”長野県立諏訪高等学校
	2010年	8月	黒田浩司“こころの諸問題とその支援方法”山梨英和大学オープンキャンパス模擬授業
	(3)公開講座		
	2010年	10月	黒田浩司“現代のコミュニケーションの問題を臨床心理学的に考える”山梨英和大学メイプルカレッジプログラム
	2009年	2月	黒田浩司“こころの病と不応について学ぶ”放送大学茨城学習センター公開講座
	(4)学外審議会・委員会等		
	2009年	4月	日本心理臨床学会選挙管理委員(2010年3月まで)
	2009年	4月	国際ロールシャッハ及び投映法学会第20回日本大会組織員(財務担当 現在まで)
	2007年	4月	日本臨床心理士会研修委員(2009年3月まで)
	2004年	4月	包括システムによる日本ロールシャッハ学会編集委員(現在まで)
(5)その他			
年	月	特になし	

成果と目標

専門的成果	<p>テストバッテリーにおける文章完成法(SCT)の活用に関する研究: 投映法心理検査の中では、比較的多く利用されるが、その解釈手続きや信頼性・妥当性が十分に検討されていなかった文章完成法(SCT)に関して、境界性人格、精神病者、非行少年、発達障害者のデータを収集し、数量的文責と質的分析をおこない、そのアセスメントの有効性について実証的に考察をおこなった。また、ロールシヤツハテストや描画法と組み合わせることによって多面的にクライアントを理解する手法についても検討し、より有効なテストバッテリーの活用について考察をおこなっている。</p> <p>臨床心理学的地域支援については地域における実践をいくつか継続しており、心理臨床家が関連する他職種をサポートすることにより、より効果的な地域援助が実践できる可能性を見出している。</p> <p>研究成果に関しては学会発表などを通じて発信しており、その結果、研究成果にもとづく専門家や関連する領域(例えば看護職、福祉職など)からの研修・講演いらいなど幅広く発信している。</p>
専門的目標	<p>投映法によるアセスメントも臨床心理学的地域援助に関しても、研究成果の発表は国内にとどまっておき、今後は国際学会での発表や国際的な学会誌への論文投稿を目標としている。今後は、この領域における国際学会にも深く関与してゆきたいと考えている。</p> <p>また、臨床心理学的地域援助や心理教育に関しては山梨の地を拠点とした活動をおこなってゆきたいと考えている。一つのテーマとして「自死問題」をとりあげ、この問題については「自死問題研究会」として、人間文化講演会を申請するなどして、どのような地域支援ができる可能性があるかについて検討している。</p>

最新データ入力日	2011 年 4 月 1 日
----------	----------------

専任教員職務業績集

山梨英和大学

フリガナ 氏名	性別	生年(西暦)	職名	所属
イダ ヒロ 石田 千尋	女	非公表	教授	人間文化学部人間文化学科
取得学位称号	博士(文学)	専門分野	日本古典文学・上代文学・歌謡論・和歌・神話	
学 歴	1981年	3月 徳島市立高等学校 卒業		
	1981年	4月 徳島大学 教育学部 小学校教員養成課程 入学		
	1985年	3月 徳島大学 教育学部 小学校教員養成課程 卒業		
	1988年	4月 東京大学大学院 人文科学研究科 修士課程 国語国文学専攻 入学		
	1991年	3月 東京大学大学院 人文科学研究科 修士課程 国語国文学専攻 修了		
	1991年	4月 東京大学大学院 人文科学研究科 博士課程 国語国文学専攻 入学		
	1995年	3月 東京大学大学院 人文科学研究科 博士課程 国語国文学専攻 修了		
実 務 経 験	1986年	4月 東京大学 文学部 中国文学科 研究室事務(1988年3月まで)		
	1995年	4月 山梨英和短期大学 国文学科 専任講師(1999年7月まで)		
	1999年	4月 山梨英和短期大学 日本文化コミュニケーション学科(学科名変更) 助教授(2001年3月まで)		
	1999年	5月 青山学院大学 文学部 日本文学科 非常勤講師(1999年7月まで)		
	2000年	4月 放送大学教養学部(埼玉学習センター・東京世田谷学習センター) 非常勤講師(2002年3月まで)		
	2001年	4月 山梨英和大学 人間文化学部 人間文化学科(改組転換) 助教授(2005年3月まで)		
	2004年	4月 青山学院大学 文学部 日本文学科 非常勤講師(2008年3月まで)		
	2004年	4月 聖心女子大学 文学部 日本語・日本文学科 非常勤講師(2008年3月まで)		
	2005年	4月 山梨英和大学 人間文化学部 人間文化学科 教授(現在に至る)		
	2010年	4月 放送大学 教養学部(東京多摩学習センター) 非常勤講師(2007年7月まで)		
2010年	4月 山梨大学 教育人間科学部 非常勤講師(現在に至る)			
受 賞 歴	1984年	1月 三木康楽賞(財団法人康楽会) 徳島大学における学士取得論文「『古事記』上巻のテキスト分析—世界創世神話から大蛇退治神話まで—」により受賞		
所 属 学 会	1988年	4月 国語国文学会(現在に至る)		
	1991年	4月 日本歌謡学会(1996年まで)		
	1991年	4月 上代文学会(現在に至る)		
	1991年	4月 萬葉学会(現在に至る)		
	1995年	4月 古事記学会(現在に至る)		
特 免 資 許 許 格 等 ・ ・	1985年	3月 小学校教諭 1級免許 取得		
	1985年	3月 中学校教諭 国語 2級免許 取得		

目 次

○教育業績	
教育理念、方針、方法	225
教育能力	
教育方法実践例	225
作成した教科書、教材等	225
教育方法や実践に関する発表、講演等	225
担当授業科目	225
代表的なシラバス	226
教育改善活動	226
教育能力に対する評価	226
○研究業績	
研究の特徴	227
研究経歴	227
研究実績	
著書	228
学術論文	228
その他の研究活動	228
競争的資金採択課題	228
学会等発表、役員参加	228
共同研究・受託研究の実績	228
大学院生指導	228
研究能力に対する評価	229
○サービス活動業績	
学内委員会・作業部会等活動実績	229
アドバイザー活動実績	229
後進育成活動実績	229
社会貢献活動	230
○専門的活動(教育業績、研究業績、サービス活動業績)の統合による成果と目標	
専門的成果	231
専門的目標	231
○添付資料	
略	
○最新データ入力日	231

教育業績

教育理念、方針、方法	<p>学生が知的な発見と納得を体験し、自らの思考と感性の新たな局面を切り開くことのできる授業・指導を実現すること、それが教育理念である。講義科目においては、日本古典文学の読解と成立事情についての丁寧な解説とあわせ、思想的な潮流や文化的な背景などについても解き明かすことで、人間と文化に対する多面的かつ深い理解に導くことをめざす。演習科目においては、おもに研究発表・ディスカッションとそための指導を行なうことで、学生に“気づく喜びと学ぶ楽しみ”を実感させ、自ら学ぶ力を養うことをめざす。また、課外活動の企画実施やサークル活動への支援などを通して、学生間のコミュニケーションを促進し、個々人の創造性を引き出す指導を通して、総合的な人間力の向上のためにも尽力したいと考えている。</p>
教育能力	<p>(1)教育方法実践例</p> <p>カードレポートの実施→大人数での講義科目において、毎回の授業後のカードレポートの実施した。その目的は、受講生の毎回の学びへの理解を確かなものとし、学んだ内容をフィードバックすることで、自らが気づきや疑問を自覚できるようにするため、及び、教員が学生の理解度を把握しその後の授業の内容や方法に反省的に反映させて改善させていくためである。方法としては、毎回の授業の最後に、教員が課題を1問提示し、それに対する回答とその回の授業内容に対する質問・感想を受講生が情報カード(B6版)に書いて提出、教員がそれを添削・採点しコメントを記して次回授業時に返却するというかたちで実施した。受講生からは、毎回のレポート執筆は負担ではあったが、授業内容への理解がひじょうに深まった、あるいはカードを書くことを意識することで毎回の授業に集中できた、教員からのコメントが励みになりやる気が出たなどの感想が大半であった。結果として、受講生の学習に対するモチベーション向上と、教員と受講生の意思疎通の確保、学生の表現力向上などさまざまな教育的効果が得られた。</p> <p>(2)作成した教科書、教材等</p> <p>a 2008年 11月 『王朝文化辞典 万葉から江戸まで』山口秋穂・鈴木日出男編、朝倉書店、8項目記名執筆</p> <p>b 2001年 10月 『万葉ことば辞典』青木生子・橋本達雄編、大和書房、8項目記名執筆</p> <p>c 1999年 5月 『歌ことば歌枕大辞典』久保田淳・馬場あき子編、角川書店、13項目記名執筆</p> <p>他に、3冊の事典・辞典類の項目執筆を担当</p> <p>(3)教育方法や実践に関する発表、講演等</p> <p>特になし</p>
担当授業科目	<p>2011年度:上代文学講読、言語文化創造 I (歴史・うた)、日本古典文学の歴史、日本文化入門、卒業研究、専門ゼミナールNO4、基礎ゼミナール1I、</p>

<p>代表的シラバス</p>	<p>上代文学講読→約1,300年前に成立した現存最古の書『古事記』。そこには、古代国家が成立して間もない時代の支配者層が打ち立てようとした世界観・歴史観が壮大な物語として描き出されています。本科目ではとくに、天皇や后妃・皇子・皇女たちのドラマティックな事蹟を伝える中巻のエピソードを取り上げ、作品としての『古事記』のテーマとその魅力に迫っていきます。(2011年度シラバスより抄出) 言語文化創造 I (歴史・うた)→和歌という文学様式は、1,300年余り前、日本の伝統的なうたと中国から受容した漢詩に触発されて成立しました。飛鳥時代・奈良時代と呼ばれるその時代は、政治的にも文化的にも日本が大きな転換をとげた時代でもありました。この講義では、和歌の黎明期に編纂された歌集『万葉集』の中から、さまざまな人物たちが詠んだ歌を味わいながら、彼らの内面世界と当時の時代状況について掘り下げていきます。(2011年度シラバスより抄出)</p>
<p>教育改善活動</p>	<p>b 出席カードのリアクションカードとしての活用→大人数での講義において、出席カードをリアクションペーパーとして活用する方式を実施した。その目的は、受講生の授業時の緊張感を保つことが難しい大人数での講義において、学生個々の参加意識と緊張感を確保するため、また教員が受講生の理解度を把握し後の授業の内容や方法に反省的に反映させる参考とするためである。方法としては、毎回配布する出席カードに、その回の授業内容に対する質問・感想を書かせて授業終了時に回収し、教員はそれによって出席票を付けるとともに、的確な質問や独創的な感想をチェックして次回授業時にそれに応えるという方式で行なった。受講生からは、教員が毎回質問にきちんと答えてくれることで学習に対する意欲が高まった、他の受講生の意見や感想を聞いて自分もがんばろうと励みになった、などの評価があった。結果的に、受講生との意思疎通がはかりにくい大人数にて講義において、カードを通じて学生個々とのコミュニケーションがある程度確保できたこと、学生たちが何に関心をもち、どのような点に理解が届きにくいかを把握できたこと、教員の授業内容や方法を即時的に改善するための参考になったこと、などの成果が得られた。</p>
<p>教育能力に対する評価</p>	<p>(1) 学生による授業評価 良い点としては、ことばの意味や時代背景についての丁寧でわかりやすい説明が良かった、板書に工夫があり授業内容が理解しやすかった、カラープリントなど資料が充実していて後々とても役に立つ、などの評価があった。改善してほしい点としては、私語をしている学生への注意喚起を工夫してほしいという意見があった。</p> <p>(2) 同僚教員等による授業評価 現在、同僚教員等による授業評価は行なっていない。</p>

研究業績

研究の特徴	<p>奈良時代に成立し、日本における現存最古の書である『古事記』には、百十首あまりの歌謡(唱謡される歌の歌詞)が収載されている。それらの詞句表現の意味内容にはなお不明なものも少なくなく、また、歌と物語(譚)との有機的な関連もまだ十全に説明されているとは言えない状況にある。そうした『古事記』の歌謡(古事記の歌)の解釈の見直しと、それが本文の散文表現とどのように連繋しながら物語(譚)をかたちづくっているかについて考究することが、主たる研究テーマである。こうしたことがらを明らかにすることは、和歌を含む歌の歴史全体の中で、古事記歌謡はどのように生み出されたのか、またそこに求められていたのはどのような機能であったのかという論点とも不可分であり、文学の草創期における歌への意識と方法という、より大きな射程の問題ともリンクすると考えられる。</p> <p>一方、日本の文化芸術のあらゆるジャンルにおける主要なモチーフのひとつであり続けてきた富士山について、古典文学(古代から中世までの和歌・歌謡・漢詩・史書・物語・説話・随筆・日記・紀行などの作品)、における記述の用例を拾い出し、そのイメージと表現の特徴を分析することを通して富士山が文学作品において担ってきた表象性を検証する研究にも、継続的に取り組んでいる。</p>
研究経歴	<p>2010年 古事記歌謡(古事記の歌)を含む物語(譚)の表現と主題を作品論的観点から再解釈する研究に従事(現在に至る)。</p> <p>2009年 古事記歌謡(古事記の歌)が作品全体の主題と文脈においてどのような位置づけを与えられているかを検証する研究に従事(現在に至る)。</p> <p>2008年 山梨県教育委員会の委託を受け、日本の古典文学(韻文・散文)のうち、とくに上代から中世に成立した作品における富士山像を説明する研究に従事(現在に至る)。</p> <p>2005年 古事記における歌謡(古事記の歌)をめぐる研究史について、とく明治時代以降の展開と主要な論点を整理・展望する研究に従事。</p> <p>2003年 山梨英和大学共同研究として、若林一美教授(社会教育学専攻)とともに、近親者を亡くした者にとって〈書く〉という行為が悲嘆とともに生きていくことにおいてどのような意味を持つかについて究明する研究に従事(2005年2月まで)。</p>

研究実績	(1)著書	
	a 2005年	共著『セミナー万葉の歌人と作品 第十二巻 万葉秀歌抄』神野志隆光・坂本信行編、和泉書院、全383頁のうち2頁(258～259頁)
	b 2001年	10月 共著『日本文芸の表現史 山梨英和短期大学創立三十五周年記念』「古事記歌謡と万葉歌の類句—記二四歌をめぐって—」、おうふう、全398頁のうち19頁(1～19頁)
	c 1999年	11月 共著『声と文字 上代文学へのアプローチ』「古事記における助動詞と時間」、塙書房、全375頁のうち16頁(67～82頁)
	d 1999年	3月 共著『ことばが拓く古代文学史』鈴木日出男編「古事記歌謡のく抒情」、笠間書院、全618頁のうち14頁(120～133頁)
	e 1996年	10月 共著『日本文芸の系譜 山梨英和短期大学創立三十周年記念』「清寧記ヲケ物語の歌垣をめぐって」、笠間書院、全280頁のうち18頁、1～18頁
	(2)学術論文	
	a 2011年	2月 単著「古事記の歌の構成—仁徳と石之日売の歌をめぐって—」『山梨英和大学紀要』第9号、全16頁
	b 2010年	2月 単著『古事記』木梨之軽太子の譚』『山梨英和大学紀要』第7号、全26頁
	c 2003年	2月 単著「柿本人麻呂歌集歌のく見立て—『万葉集』3129番歌をめぐって(一)—」『山梨英和大学紀要』創刊号、全14頁
	d 1999年	11月 単著『古事記』における助動詞の表記と歌謡』『萬葉集研究』第23集、全15頁
	e 1993年	4月 単著「天神御子とく久米歌」』『国語と国文学』第70巻第4号、全13頁
	他11編	
	(3)その他の研究活動(国際会議発表、学術誌編集、学術論文査読等) 歌謡研究の応用展開的な実践として歌謡の作詞を行なった。瀬川昌治作・演出、舟木和夫・久野綾希子主演、(株)アイエス制作、ミュージカル「アイ・ラブ・ニューヨーク」劇中歌9曲作詞、2000年2～3月上演(新宿シアターアプル・神戸オリエンタル劇場)	
競争的資金採択課題 特になし		
学会等発表・役員参加	2005年	10月 「歌がたつたえること・歌でつたえること—古事記の歌の記定をめぐって—」、萬葉学会全国大会、同志社女子大学
	2003年	7月 「文学の始まりとく恋」の発見—日本上代文学研究の立場から」、日本人間性心理学会シンポジウム、山梨英和大学
	1999年	9月 「『古事記』における助動詞の表記と歌謡」、上代文学会、早稲田大学
	1994年	9月 「讚美の方法—『古事記』「枯野」の歌謡物語をめぐって—」、上代文学会例会、成蹊大学
	1992年	5月 「カムヤマトイハレビコとく久米歌」、日本歌謡学会、帝京大学
受託共同研究の実績	2003年	5月 山梨英和大学共同研究(2005年3月まで)、共同研究者:若林和美教授(社会教育学専攻)、研究課題:「書くこと」の根源—DEATH STUDYと日本上代文学の双方向的視点から—、研究成果:「悲歎の形象—『万葉集』における死別を嘆く歌—」(『山梨英和大学紀要』2004年3月)
	2008年	9月 山梨県教育委員会からの委託により、富士山の文化的価値を検証するため古典文学作品における富士山に関する記述の用例の拾い出しとファイリング作業を計画し指揮する役を果たすとともに、それらの表現分析および総括等を行なっている。
大学院生指導		特になし

研究能力に対する評価	『古事記』の歌謡(古事記の歌)は、従来、個々の文脈から切り離し、『万葉集』以前の歌の姿を留めるものとする視点から解釈されることが多かった。いわゆる「独立歌謡」という用語はそうした古事記の歌の扱い方を端的に表す語だが、筆者の立場は、古事記の歌を、散文とともに記され歴史の叙述に関わるものとして記定されているという前提に立ち、個々の歌と譚の解釈を探ることにある。そうした観点を徹底させての論考には今なお多くの余地があり、筆者の研究はそうした研究史上の課題を切り拓こうとするものである。 また、富士山の文学についての研究は、古来から甲斐の国(山梨県)に生きる人々の誇りであり貴重な自然遺産・文化遺産である富士山をめぐる文化的価値の実証に資するものであり、その成果は山梨県民のみならず富士山の世界文化遺産認定にも大きく関わるものとして期待されている。
------------	--

サービス活動業績

学内委員会・作業部会等活動実績	2010年	4月	山梨英和大学人間文化学部人間文化学科 日本語・日本文化コースコーディネータ(現在に至る)、教員の採用・承認に関する規定検討委員会、教職課程存廃に関する委員会
	2009年	4月	教務委員会、教職課程委員会、日本語教員養成課程委員会、司書学芸員課程委員会、留学生教育問題等検討委員会
	2008年	4月	学生委員会、教職課程委員会、日本語教員養成課程委員会、司書学芸員課程委員会、留学生教育問題等検討委員会
	2002年	4月	エクステンション委員会(エクステンションセンター長)2007年3月まで、大学運営協議会委員
	1999年	4月	入試委員会(2008年3月まで)
アドバイザー活動実績	1年次・2年次生については、オフィスアワーを活用し主として勉学・履修に関する相談や生活面におけるアドバイスを行なっている。また、学期ごとにクラス親睦を深めコミュニケーションを促進するためのスポーツイベントや食事会を企画・実施している。3年次・4年次生については、主としてオフィスアワーを活用し、研究発表や論文執筆に関する個別指導をグループごとないし個人ごとに行なっている。また、おもに専門科目としてゼミナールないし卒業研究を受講している3年次・4年次生を対象に、受講生が専門的な知識と見聞を実地体験を通して広げられるよう、県内外の遺跡・博物館などを見学・研修する歴史・文化探訪を企画・実施している。		
後進育成活動実績	特になし		

社会貢献活動	(1)講演会	
	2011年	3月 「日本人は富士山になにを思い描いてきたか—古典文学の富士山を読み解く—」、山梨県教育委員会主催・忍野村教育委員会共催講演会、岡田紅陽写真美術館・小池邦夫絵手紙美術館
	2010年	5月 「古典文学の富士山」、山梨文芸協会主催、山梨県立文学館
	2008年	7月 「古代の旅—万葉の旅の歌を読む—」、山梨県文化学習協会主催講演会、山梨県立文学館
	2006年	11月 「富士山の文化的価値とは—古典文学の立場から」、山梨県企画部世界遺産推進課主催富士山文化遺産登録推進山梨県シンポジウム、山梨県立大学
	2005年	3月 「万葉集 声のうたの世界—初期万葉の歌々をよむ—」、韮崎市中心公民館主催講演会、韮崎市民会館
	2004年	7月 「生涯学習を通してアジアの連合を考える—日本・韓国・中国等の人や歴史・文化をつなぐ—」、山梨県生涯学習推進センター主催シンポジウムパネラー、山梨県民ホール
	2004年	5月 「万葉集第一期の歌を読む」、朝日カルチャーセンター主催講演会、朝日カルチャー藤沢校
	2002年	8月 「人はなぜうたうのか」、木鷄会主催、甲府市北公民館
	(2)出前講座	
	2008年	9月 「うたとところ—万葉のうた世界—」、山梨英和高等学校高大連携講座
	2006年	3月 「古典って、おもしろい！—和歌を読む楽しみ—」、山梨県立石和高等学校ミニ大学
	2003年	9月 「ナゼひとはうたうのか？—古代の恋歌を読む—」、静岡県立北高等学校出張講義
	他多数	
	(3)公開講座	
	2006年	7月 「こころのかたち—万葉歌に見る情と景—」、山梨英和大学エクステンションセンター・山梨県生涯学習文化課共催公開講座、山梨英和大学
	2003年	9月 「うたわれた歌と書かれた歌」、山梨英和大学エクステンションセンター・山梨県生涯学習文化課共催公開講座、山梨英和大学
	2002年	5月 「古事記を読む」、山梨英和大学エクステンションセンター主催メイプルカレッジ講座、山梨英和大学(2005年3月まで全40回)
	2000年	6月 山梨県立文学館主宰文学講座(古典)「万葉集を訪ねて—『万葉集』初期の作品世界—」、山梨県立文学館(2001年1月まで全8回)
	1999年	5月 山梨県立文学館主宰文学講座(古典)「日本神話のヒーロー・ヒロインたち—『古事記』『日本書紀』の世界—」、山梨県立文学館(1999年12月まで全8回)
	(4)学外審議会・委員会等	
	2009年	10月 山梨県立文学館協議会委員(現在に至る)
	2008年	9月 富士山総合学術調査委員会委員(現在に至る)
	2007年	4月 やまなし文化学習協会理事(現在に至る)
	2005年	4月 山梨県キャンパスネット委員会委員(2010年3月まで)
	2005年	4月 山梨県富士山世界文化遺産登録推進学術委員会委員(現在に至る)
	2004年	4月 山梨県生涯学習審議会委員(2006年3月まで)
(5)その他		
2003年	5月 メイプルカレッジ講座「古事記を読む」の受講生(一般社会人)約20名を対象として、古代の歴史と文学を実地に探訪する旅行を企画し(2泊3日)、現地の遺跡や博物館等の案内や解説を行うとともに、宿泊所にて「『古事記』における刀剣」と題するレクチャーを行なった。同様の探訪・研修旅行を、2004年9月(伊勢)、2005年5月(熊野・飛鳥)、2006年3月(高千穂・日向)に企画し開催した。	

成果と目標

専門的成果	<p>①『古事記』の歌謡(古事記の歌)を含む譚の解釈と作品論的理解について、収載歌数が相対的に多い下巻の譚(多数の歌を収載している譚)をとりあげ、『古事記』における歌の構成方法や歌が散文表現と有機的に連繋しつつ文脈や人物造形と密接に関わっていることなどを明らかにした。</p> <p>②『古事記』の歌謡(古事記の歌)を譚の文脈と語義に沿って再解釈する研究を進めていく中で、古事記の歌は古来からの伝誦歌謡をそのまま利用したといったものとは考えにくいこと、その表現の質に第二期の万葉歌との相関性が多く認められること、すなわち古事記の歌は文字に記されることで初めて成り立ちえた歌々であるという新たな知見を、今後継続して検証すべき論点として提示した。</p> <p>③富士山の文化的価値を検証することを目的とし、2008年度より古典文学作品における富士山に関する記述の用例の拾い出しとファイリング作業を続けてきたが、それによって作成した韻文・散文作品の用例ファイルを山梨県教育委員会に提供している(現在も作業は続行中)。またそこでの成果として、用例の表現分析および総括を講演等を通して発表している。</p>
専門的目標	<p>①『古事記』のうた(歌謡)を含む譚の解釈と作品論的理解を、研究史を検証しながらさらに掘り下げ、『古事記』の歴史叙述における歌と散文の構成と相関性および歌を記定するにあたっての『古事記』の方法を明らかにする。</p> <p>②『古事記』の歌謡(古事記の歌)を単純に『万葉集』以前の歌とみなすのではなく、歌を〈書く〉試行の中で獲得された方法という点で、むしろ万葉歌と多くの同時代性をもつということを重視するという観点に立ち、それぞれの歌相互の表現の相関性、またその根底にある発想の共通性を追究していきたい。</p> <p>③古典文学作品において富士山という地名や存在がどのような意味・想念を担ってきたかを追求し、その成果を講演・講座また論文執筆などを通して発表し地域社会に還元するのみならず学会にも問いたい。</p>

最新データ入力日	2011年4月1日
----------	-----------

専任教員職務業績集

山梨英和大学

フリガナ 氏名	性別	生年(西暦)	職名	所属
タクマ マサヤ 宅間 雅哉	男	1963年	教授	人間文化学部人間文化学科
取得学位称号	修士(教育学)	専門分野	英語学(史的研究)、イングランドの気候地名	
学歴	1982年 3月 高知県立 高知追手前高等学校 普通科 卒業 1982年 4月 早稲田大学 教育学部 英語英文学科 入学 1986年 3月 早稲田大学 教育学部 英語英文学科 卒業(文学士) 1986年 4月 早稲田大学専攻科 英語英文学専攻 入学 1987年 3月 早稲田大学専攻科 英語英文学専攻 修了 1988年 4月 国際基督教大学大学院 教育学研究科 教育方法学専攻 英語教育法専修 博士前期課程 入学 1991年 6月 国際基督教大学大学院 教育学研究科 教育方法学専攻 英語教育法専修 博士前期課程 修了(教育学修士)			
実務経験	1993年 4月 山梨英和短期大学 英文学科 専任講師(1999年3月まで) 1999年 4月 山梨英和短期大学 英語コミュニケーション学科 助教授(2002年3月まで) 2002年 4月 山梨英和大学 人間文化学部 人間文化学科 助教授(2005年3月まで) 2005年 4月 山梨英和大学 人間文化学部 人間文化学科 教授(現在に至る)			
受賞歴	特になし			
所属学会	1986年 3月 早稲田大学英語英文学会会員(現在に至る) 1988年 5月 日本英文学会会員(現在に至る) 1988年 6月 日本中世英語英文学会会員(現在に至る) 1988年 9月 東京都立大学中世英語英文学研究会会員(現在に至る)			
特免資格等	1986年 3月 中学校教諭一級普通免許状 外国語(英語) 取得 1986年 3月 高等学校教諭二級普通免許状 外国語(英語) 取得 1987年 3月 高等学校教諭一級普通免許状 外国語(英語) 取得			

目 次

○教育業績	
教育理念、方針、方法	234
教育能力	
教育方法実践例	234
作成した教科書、教材等	234
教育方法や実践に関する発表、講演等	234
担当授業科目	235
代表的なシラバス	235
教育改善活動	235
教育能力に対する評価	235
○研究業績	
研究の特徴	236
研究経歴	236
研究実績	
著書	236
学術論文	236
その他の研究活動	236
競争的資金採択課題	237
学会等発表、役員参加	237
共同研究・受託研究の実績	237
大学院生指導	237
研究能力に対する評価	237
○サービス活動業績	
学内委員会・作業部会等活動実績	238
アドバイザー活動実績	238
後進育成活動実績	238
社会貢献活動	238
○専門的活動(教育業績、研究業績、サービス活動業績)の統合による成果と目標	
専門的成果	239
専門的目標	239
○添付資料	
略	
○最新データ入力日	239

力	<p>(3)教育方法や実践に関する発表、講演等</p> <p>a. 講演「英語の授業を活性化させるためのIT機器やメディアの活用方法について—動画、音声教材の作成とインターネット上の教材—」、2004年9月28日、2004年度下伊那教育研究会教科別分科会外国語</p> <p>b. 講演「英語のコミュニケーション能力を高めるための工夫」、2006年8月18日、第32回山梨県私学教育研修会英語科部会</p>
担当授業科目	<p>2011年度:</p> <p>基礎ゼミナール 2、English Listening II、TOEIC、IT English、Current English、英語音声学、英語学、専門ゼミナール、卒業研究</p>
代表的シラバス	<p>講義科目では、講話を中心としつつも、適宜、ディスカッション・タイムや個人演習・グループ演習の時間を取り入れ、学生同士及び教員・学生間のコミュニケーションに配慮し、「ともに学ぶ」姿勢を重視している。演習科目では、毎回、複数回の発言機会をもてるよう最大限配慮するとともに、常に学生の理解度を確認しつつ進度を微調整している。講義・演習を問わず、パソコンによるマルチメディアを活用し、理解度の向上を目指している</p>
教育改善活動	<p>FD推進委員会初代構成員の選考・推薦(2009年度)及び同委員会構成員(2009年度～2010年度)山梨英和大学人間文化学部のFD推進委員会起ち上げに中心的役割を果たし、大学運営委員会の要請を受けて、初代構成員6名を選考・推薦した。以後、構成員の一人として毎回事業委員会に陪席した。</p>
教育能力に対する評価	<p>(1)学生による授業評価</p> <p>講義科目・演習科目とも、授業に対する満足度はいずれも良好である。2010年度担当科目で「良かった点」とされた指摘は以下の通りである:</p> <p>a) 発音の明瞭さと十分な声量、b) 説明・板書のわかりやすさ、c) 多様な視聴覚教材の活用、d) 適切な難易度設定と内容の濃さ、e) 学びやすく集中できる授業環境、f) コミュニケーション(質問、意見等)の取りやすさ、g) 積極的姿勢・熱意、h) 授業開始及び終了時間の遵守。</p> <p>一方、「改善して欲しい点」とされた指摘は以下の通りである:</p> <p>a) 時々説明や進度がはやい日がある、b) 質問の時間がもっと欲しい。</p> <p>説明や進度がはやくなるのは、授業計画が予定通り進行しない際に、演習科目で生じる。説明と演習にかかる時間配分のバランスを考慮する必要がある。また質問の時間が十分取れないのは、特に発音技能の習得を目的とした演習科目においてである。これについてはオフィスアワーの活用や、学生との細かな時間調整によって対応していく必要がある。</p> <p>(2)同僚教員等による授業評価</p> <p>現在、同僚教員等による授業評価は行われていない。今後の課題である。</p>

研究業績

研究の特徴	<p>英語の変化を歴史的に研究することを主要テーマとし、特に古英語期(700年から1100年頃)及び中英語期(1100年から1500年頃)を対象としている。英語の文構成にかかわる主要な要因が、語形から語順に移行するこの時代を探る一つの手がかりとして、<i>æt</i>、<i>in</i>、<i>on</i>、<i>to</i>等の「空間」に関する前置詞を取り上げ、これらが導く前置詞句の意味と目的語の語形との関係が、時代とともにどのように変化して行ったのか。言い換えれば、対象となる「空間」がいかなる「空間」として認識され、その結果、いかなる前置詞によって導かれ、いかなる語形で示されているのかを解明し、これらの関係が古英語期と中英語期でいかに変化したかを研究している。</p> <p>これと並行して、2009年より、イングランドの気候地名研究を推進している。気候地名とは日照、風、降水などの気候要素に関連する文字や単語のついた地名である。日本の日向、日影、風越、雨坪などがこれにあたる。我が国では1990年代後半から体系的・専門的研究が行われているが、イギリスではほとんど未着手の状態、気候要素に由来する地名の研究という視点自体が極めて希薄である。すでにイングランドにおける日照、寒暖、乾湿、季節、風、雪に関する気候地名の存在を確認し、白地図に分布状況を表示した。今後は専門の英語学(史的研究)を中心に、関連諸領域を含めた学際的研究に発展させたい。</p>
研究経歴	<p>1993年 山梨英和短期大学 英文学科 専任講師 中世英語英文学に関する研究に従事(1999年3月まで)</p> <p>1999年 山梨英和短期大学 英語コミュニケーション学科 助教授 中世英語英文学に関する研究に従事(2002年3月まで)</p> <p>2002年 山梨英和大学 人間文化学部 人間文化学科 助教授 中世英語英文学に関する研究に従事(2005年3月まで)</p> <p>2005年 山梨英和大学 人間文化学部 人間文化学科 教授 中世英語英文学、イングランドの気候地名に関する研究に従事(現在まで)</p>
研究実	<p>(1) 著書 特になし</p> <p>(2) 学術論文(最新のものから記載)</p> <p>a. 宅間雅哉 「『河畔の低地草地』に由来するイングランドの地名:気候地名との関連をさぐるための基盤研究」『山梨英和大学紀要』第9号、85-119 (2011)。</p> <p>b. 宅間雅哉 「イングランドの気候地名研究-英語史研究の視点から」『山梨英和大学紀要』第8号、65-94 (2010)。</p> <p>c. Takuma, Masaya, "Morphological Variations of the Prepositional Prases of 'Time' Introduced by <i>On</i> in the <i>Peterborough Chronicle</i>." <i>Journal of Yamanashi Eiwa College</i>. No. 7, Yamanashi Eiwa College, 49-66 (2009). 論説資料保存会『英語学論説資料』第43号、第2分冊に採録。</p> <p>d. 宅間雅哉 「2005年9月11日の総選挙結果はオーストラリアでどのように伝えられたか-現地四紙の記事と社説の比較」『山梨英和大学紀要』第4号、113-135 (2005)。</p> <p>e. Takuma, Masaya, "A Study in the Meanings and the Forms of Prepositional Phrases of Time Introduced by <i>On</i>, <i>Æt</i>, <i>To</i> and <i>In</i> in the Parker MS. of the <i>Anglo-Saxon Chronicle</i>." <i>Journal of Yamanashi Eiwa College</i>. No. 3, Yamanashi Eiwa College, 103-130 (2004). 論説資料保存会『英語学論説資料』第39号、第2分冊、788-796頁に採録。</p> <p>f. Brown, Danny and Masaya Takuma, "Natural Sequences in the Acquisition of English Morphology." <i>Journal of Yamanashi Eiwa College</i>. No. 2, Yamanashi Eiwa College, 87-102 (2004). 論説資料保存会『英語学論説資料』第39号、第4分冊、342-350頁に採録。</p>

績	<p>g. Takuma, Masaya, "A Study on the Meanings of the Prepositions <i>In</i>, <i>Innan</i> and <i>Into</i> in the <i>Peterborough Chronicle</i> 1070-1154." <i>Journal of Yamanashi Eiwa College</i>. No. 1, Yamanashi Eiwa College, 15-41 (2003). 論説資料保存会『英語学論説資料』第37号、第5分冊、198～211頁に採録。 など。</p> <p>(3)その他の研究活動(国際会議発表、学術誌編集、学術論文査読等) 特になし</p>
競争的資金採択課題	特になし
表・学会等 加・役員等 員・参	<p>2010年 4月 日本中世英語英文学会 大会準備委員会 委員(2011年3月まで)</p> <p>2011年 4月 日本中世英語英文学会 大会準備委員会 副委員長(現在まで)</p>
受託共同 研究の 実・績	特になし
大学院生指導	特になし
対研究 する 能力 評価	<p>研究経歴の当初より、散文を対象として、古英語期から初期中英語期(9世紀後半から12世紀半ば)の「空間」及び「時間」に関する前置詞句の意味と形態の研究を継続している。山梨英和短期大学の時代も含め、本学在職中にこの分野で発表した学術論文は、論説資料保存会によって、すべて『英語学論説資料』に採録されている。</p> <p>2009年から着手したイングランドの気候地名研究は、国内外に先行研究の例がなく、英語学、気候学、地理学、地質学、水文学などとの新たな学際的研究として今後の発展が期待される。</p>

サービス活動業績

学内委員会・作業部会等活動実績	2011年	4月	大学運営委員会、自己点検・評価委員会、学生委員会、進路支援委員会、国際交流委員会、広報委員会、心理臨床センター管理運営委員会 委員
	2007年	4月	教務部長、自己点検・評価委員会、広報委員会、情報機器・ネットワーク等検討委員会、個人情報保護委員会、教職課程運営委員会 委員。FD推進委員会 構成員(陪席者)(2011年3月まで)
	2006年	4月	教務委員会 委員(2007年3月まで)
	2005年	4月	司書課程・学芸員課程運営委員会 委員長(2007年3月まで)
	2004年	4月	共通科目委員会 委員(2009年3月まで)
	2002年	4月	入試委員会 委員(2004年3月まで)
アドバイザー活動実績	特になし		
後進育成活動実績	特になし		
社会貢献活動	(1)講演会 特になし		
	(2)出前講座		
	2010年	10月	平成22年度 甲府東高等学校ミニ大学講師:「ニュースとアニメ番組の英語:音声・語い・内容理解」をテーマに、パソコンの映像と音声を活用して、英語学の楽しさを伝えた。
	(3)公開講座		
	2006年	6月	2006年度山梨英和大学公開講座及び県民コミュニティカレッジ分担講座の1つとして、「海外メディアの中のJapan」をテーマに講師を担当した。
(4)学外審議会・委員会等			
2007年	4月	大学コンソーシアムやまなし単位互換部会 委員(2011年3月まで)	
(5)その他			
2009年	4月	グリーンバンク杯山梨県中学生英語コンテスト審査委員長(現在まで):同一学校法人山梨英和中学校が主催する同コンテスト20周年を機に、実施スタイルを1分間スピーチ(第1部)、個別インタビュー(第2部)、集団インタビュー(第3部)とする三部構成に改革し、参加者・聴衆・関係者から好評を	
2001年	7月	財団法人日本英語検定協会実用英語技能検定二次試験面接委員(現在まで)	

成果と目標

専門的成果	<p>①英語前置詞句の意味と目的語の語形に関する史的研究: 初期中英語散文『ピーターバラ年代記』の1070年から1154年の記述を対象とした研究では、時代の推移とともにto及びinが多義性を帯びるのに対し、innanは消滅あるいはinの意味領域に包摂される傾向を示す。同様に、intoも出現頻度の減少とともに意味領域も縮小し、専ら「目的地」を意味する傾向を強める。これに対して、ætは中期以降、「時間」の意味を表す頻度が高くなり、類似の文脈で同一の目的語を導くtoとの区別が困難な例が認められる。他の前置詞に比べて出現数が圧倒的に多いonでは、「時間」を意味する前置詞句194例中の限定詞及び名詞の語形を考察した。その結果、古英語の限定詞2系統のうち、一方は初期から中期にかけて減少し後期に消滅するが、他方は初期・中期同数の例が後期に倍増すること、名詞の語尾変化は初期から中期にかけて漸減し、後期にほぼ消滅することが明らかになった。</p> <p>②イングランドの気候地名研究: イギリス本国においてほとんど未着手というこの分野の研究推進は、A. D. Millsの地名辞典(第2版、1998年)を出発点とした。すなわち、同辞典に収録された地名から、特に語源に着目して、気候要素に関する古語に由来する地名145例を抽出し、日照、寒暖、乾湿、季節、風、雪に関する気候地名の存在を確認した。さらに気候要素に関する意味ごとに地名の分布状況を白地図上に表示し、それぞれが一定の地域性をもって分布することを明らかにした。また日照、寒暖、乾湿に関する気候地名の分布は、それぞれ年間平均日照時間、夏・冬の平均気温及び年間平均降水量(イギリス気象庁が公式サイトにて提供するデータ)との間に相関関係が認められる点も指摘した。</p> <p>③イングランドの気候地名研究のための周辺研究: 古英語hamm及び古スカンジナビア語holmrはともに“water-meadow”、すなわち「川のそばにあって、特に冬、定期的に冠水する野原」を意味する。ところが、この「河畔の低地草地」に由来する地名は、必ずしも年間平均降水量、あるいは冬季の平均降水量が多い地域が分布の中心とはならない。上記の定義から、これらの地名は季節に関する気候地名、及び乾湿に関する気候地名との関連が想定されるが、三者を結びつける要因を年間降水量、冬の降水量以外に考慮する必要がある。</p>
専門的目標	<p>①英語前置詞句の意味と目的語の語形に関する史的研究: 初期中英語散文『ピーターバラ年代記』の1070年から1154年の記述を対象とした研究の仕上げとして、「空間」を意味するonの前置詞句を詳細に分析する。まず、テキストの精読によって意味の下位区分を設定し、その推移を初期・中期・後期にわけて検討する。さらに「時間」を意味するonの前置詞句同様、目的語を構成する限定詞及び名詞の語形を考察し、onの意味変化と目的語の語形変化の関係を通時的に研究する。</p> <p>②イングランドの気候地名研究: まず、イングランドの気候地名を網羅的に収集する。最初に、A. D. Millsの地名辞典よりも大冊で専門性の高いVictor Wattsの地名辞典(2004)、次に、イギリス地名協会によって1924年以来編纂が続く『イングランド各州地名要覧』をデータ収集のソースとする予定である。収集完了後は、語源を詳細に検討して気候地名とみなし得るか否かの検証を行い、気候要素に関する意味ごとに地名を分類し、分布図を作成する。これと並行して、ウェールズ、スコットランド、北アイルランド、さらにアイルランド共和国についても同様の作業と研究を進めて行く。</p> <p>③イングランドの気候地名研究のための周辺研究: 古英語hammには「河畔の低地草地」のほかに、「囲い地」「水、湿地、高台に囲まれた土地」「川の湾曲部の中の土地」「岬」の意味がある。こうした多義性は、いずれの意味で語源に関与するかによって、地名の分布状況に顕著な差を生じるのではないか。さらに上に列挙した意味のうち、「囲い地」については、唯一「水」の含意に乏しく、古英語ham(「家屋敷」)に由来する地名との関連も無視できない。そこで、古英語hammに由来する地名を上記の意味ごとに収集し、分布状況を比較検討するとともに、古英語hamに由来する地名の分布との関係を検討したい。</p>

最新データ入力日	2011年 4月 1日
----------	-------------

専任教員職務業績集

山梨英和大学

氏名	性別	生年(西暦)	職名	所属
田中 健夫	男	1965年	教授	人間文化学部人間文化学科 大学院人間文化研究科臨床心理学専攻
取得学位称号	博士(教育学)	専門分野	臨床心理学・青年心理学・精神分析学	
学歴	1984年	3月 長野県 上田高等学校 卒業		
	1984年	4月 東北大学文学部 入学		
	1988年	3月 東北大学文学部社会学科心理学専攻 卒業 学士(文学)		
	1993年	4月 京都大学大学院教育学研究科臨床教育学専攻 博士前期課程 入学		
	1995年	3月 京都大学大学院教育学研究科臨床教育学専攻 博士前期課程 修了		
	1995年	4月 京都大学大学院教育学研究科臨床教育学専攻 博士後期課程 入学		
	1997年	3月 京都大学大学院教育学研究科臨床教育学専攻 博士後期課程 中退		
	1999年	9月 英国エセックス大学精神分析研究センター客員研究員(2000年7月まで)		
	2008年	3月 京都大学大学院教育学研究科 論文博士(教育学)		
実務経験	1988年	4月 京都家庭裁判所 家庭裁判所調査官補		
	1990年	3月 京都家庭裁判所 家庭裁判所調査官(1992年3月まで)		
	1997年	4月 九州大学健康科学センター 講師		
	1999年	8月 九州大学大学教育研究センター 助教授(2008年3月まで)		
	2008年	4月 山梨英和大学人間文化学部人間文化学科 准教授		
	2011年	4月 山梨英和大学人間文化学部人間文化学科 教授(現在に至る)		
受賞歴	2008年	11月 日本青年心理学会第4回学会賞		
	2009年	5月 日本学生相談学会研究奨励賞		
所属学会	1993年	7月 日本心理臨床学会 会員(現在に至る)		
	1993年	7月 日本教育心理学会 会員(現在に至る)		
	1995年	7月 日本学生相談学会 会員 2010年6月より編集委員(現在に至る)		
	2001年	4月 日本精神分析学会 会員(現在に至る)		
	2001年	4月 日本青年心理学会 会員 2006年2月～2009年1月研究委員 2010年4月より編集委員(現在に至る)		
特免資格等	1993年	3月 臨床心理士(No.3783)		
	2004年	11月 認定心理療法士(日本精神分析学会)		

目 次

○教育業績	
教育理念、方針、方法	242
教育能力	
教育方法実践例	242
作成した教科書、教材等	242
教育方法や実践に関する発表、講演等	242
担当授業科目	242
代表的なシラバス	242
教育改善活動	242
教育能力に対する評価	242
○研究業績	
研究の特徴	243
研究経歴	243
研究実績	
著書	243
学術論文	243
その他の研究活動	243
競争的資金採択課題	243
学会等発表、役員参加	244
共同研究・受託研究の実績	244
大学院生指導	244
研究能力に対する評価	244
○サービス活動業績	
学内委員会・作業部会等活動実績	245
アドバイザー活動実績	245
後進育成活動実績	245
社会貢献活動	245
○専門的活動(教育業績、研究業績、サービス活動業績)の統合による成果と目標	
専門的成果	246
専門的目標	246
○添付資料	
略	
○最新データ入力日	246

教育業績

教育理念、方針、方法	心理臨床学は実践の学である。理論の学習とともに、臨床実践を通して得た実感と照合しながら、知らないことや曖昧さにもちこたえつつ学ぶという過程は不可欠だと考えられる。そのために、学部の授業では具体例の紹介や小実習による体験を、またディスカッションなどによる他者(対教員/学生)との対話の機会を、大学院の授業ではそれぞれの臨床の経験をふまえた学びを大切にしたいと考えている。
教育能力	<p>(1)教育方法実践例</p> <p>a. フィードバック・テキストの配布による双方向授業の工夫: 九州大学共通教育「心理学」において、受講学生による毎回の授業のコメント(一部)をフィードバック・テキストとしてまとめ、翌週の授業で配布し、それへのコメントをもとに授業を展開させるようにした。山梨英和大学の学部講義においても、15回の授業のうち4回程度は、そうしたコメント・質問を出発点に授業を進めている。</p> <p>(2)作成した教科書、教材等</p> <p>a. 田中健夫 1998 「私」というもの—知っている私と知らない私— 氏原寛・杉原保史共編 『臨床心理学入門—理解と関わり方の心理学—』 培風館 37-54.</p> <p>b. 田中健夫 2004 勉強につまづいたら—学習、生活相談— 『AERA Mook 98 勉強のやり方がわかる。』 朝日新聞社 172-175.</p> <p>c. 田中健夫 2005 パラサイトシングルの臨床 『迷走する若者のアイデンティティ』 白井利明編 ゆまに書房 152-177.</p> <p>(3)教育方法や実践に関する発表、講演等</p> <p>a. 第13回大学教育研究フォーラム(於 京都大学) 小講演:生徒から学生への移行過程:学生相談からみえる課題 2007.3.</p> <p>b. 青年心理学会第17回大会 研究委員会企画シンポジウム「学生の成長をどのようにとらえ、どのように支えていくのか」シンポジスト 2009.11.</p>
担当授業科目	2011年度(学部) 心理療法論、ストレスマネジメント法、発達心理学、心理検査演習、専門ゼミナール、卒業研究 (大学院) 心理療法特論Ⅱ、臨床心理基礎実習、臨床心理事例研究、修士論文
代表的シラバス	「心理療法論」では、治療の機序とその背景にある理論について、各学派がもつ人間観をふまえた理解を深めていくことを目的としている。小実習やロールプレイなどの体験を振り返り、自身の感じたことや考えたことを参照しながら学び進めていかれるように構成した。「心理検査演習」では、心理臨床の各場面で用いられる代表的な心理検査の考え方と実施方法について、ペアまたは個人による実習を通して学ぶ。検査者と被検査者双方の体験を実際に行うことによって、各検査の実施上の留意点について実践的に習得するとともに、心理検査の有効性と限界、倫理的問題、所見のまとめ方について理解を深めていくことを目的とする。
教育改善活動	山梨英和大学FD委員会委員(学部 2009年度～、大学院2010年度～): 学部では、外部講師を招聘してのFD研究会を計画・実施し、大学院ではシラバスの教員間での共有・改善などに取り組んだ。
教育能力に対する評価	<p>(1)学生による授業評価</p> <p>演習・講義の評価(講義アンケートより):授業の展開や教材、具体例を入れての説明などについては概ね良好な評価であったが、学生自身の授業への積極的な取り組みを促す工夫が必要だという記述もみられた。演習科目は、受講生のニーズをある程度ふまえた授業展開と、質問への回答がなされているとの評価がなされていた。</p> <p>(2)同僚教員等による授業評価</p> <p>現時点においては、同僚教員等による授業評価は行っていない。今後の課題である。</p>

研究業績

研究の特徴	精神分析的な心理療法の実践をふまえた研究を中心に、質問紙や面接法を組み合わせさせておこなってきた。個別の事例から普遍的な知見を導きだすにあたっての課題についても検討を続けている。また、他者から押しつけられたアイデンティティ、大学生にとっての修学の行き詰まりの意味、心的外傷の長期的影響などの実践的問題を扱ってきた。
研究経歴	1998年～九州大学総合臨床心理センター 研究員（現在に至る） 1999年9月～英国エセックス大学精神分析研究センター客員研究員（2000年7月まで） 2008年4月 山梨英和大学 人間文化学部 准教授（大学院兼任） 精神分析的な心理療法、青年心理学、心的外傷についての研究に従事（現在まで）
研究実績	<p>(1) 著書（いずれも分担執筆）</p> <p>a. 田中健夫 2010 第6話 迷惑がられるのはイヤなんです 『12人のカウンセラーが語る12の物語』 杉原保史・高石恭子編 ミネルヴァ書房 119-139.</p> <p>b. 田中健夫 2009 発達障害の学生との心理療法の課題 『「発達障害」と心理療法』 伊藤良子・角野義宏・大山泰宏編 創元社 59-67.</p> <p>c. 田中健夫 2007 学校保健教育支援としての養護教諭と共に学ぶ教育心理臨床 『現代のエスプリ別冊 教育心理臨床パラダイム』 藤原勝紀編 至文堂 291-295.</p> <p>d. 田中健夫 2005 パラサイトシングルの臨床 『迷走する若者のアイデンティティ』 白井利明編 ゆまに書房 152-177.</p> <p>e. 田中健夫 2005 修学上の移行の契機となる行き詰まりの性質 『心理学者、大学教育への挑戦』 溝上慎一・藤田哲也編 ナカニシヤ出版 159-188.</p> <p>(2) 学術論文（査読あり）</p> <p>a. 田中健夫（印刷中）心理臨床からみた未来を創る主体としての学生との関わり 心理科学, 32(1)</p> <p>b. 田中健夫 2009 「知ることの制止」と消化過程 精神分析研究, 53, 12-21.</p> <p>c. 田中健夫 2009 白井論文「青年心理学研究方法論としての変容確認法の発展—発達主体として青年を捉えるアプローチ—」へのコメント 青年心理学研究, 21, 126-130.</p> <p>d. 田中健夫 2008 「大学生の相談事例からみた修学上の行き詰まりの様相」への杉村・山本氏のコメントに対するリプライ 青年心理学研究, 20, 150-154.</p> <p>e. 田中健夫 2007 大学生の相談事例からみた修学上の行き詰まりの様相 青年心理学研究, 19, 33-50.</p> <p>f. 吉良安之・田中健夫・福留留美 2007 学生相談来談者の学年ごとの問題内容と学生期の諸課題 学生相談研究, 28-1, 1-13.</p> <p>g. 田中健夫 2002 学生相談における“学ぶことの困難”の情緒体験と面接での関わり 心理臨床学研究, 20(2), 122-132.</p> <p>h. Takeo Tanaka 2001 The Identity Formation of the Victim of 'Shunning'. School Psychology International, 22(4), 463-476.</p> <p>i. 田中健夫 2001 入学期における喪失と獲得体験の意味 学生相談研究, 22(1), 35-43. (査読なし 山梨英和大学赴任後)</p> <p>a. 田中健夫 2010 学生相談の視点からみた「予防」 山梨英和大学紀要, 8, 19-30.</p> <p>b. 田中健夫 2010 特集—心理臨床現場での転移/逆転移「学生相談室」臨床心理学, 10(2), 18</p> <p>(3) その他</p> <p>a. 松木邦裕監訳 田中健夫・梅本園乃訳 2011【翻訳】トラウマを理解する—対象関係論に基づ</p> <p>b. こころの臨床a-la-carte 29(4) 2010「うつ病からの回復とリハビリテーション」Q&A p.27, 50, 51,</p> <p>c. 田中健夫 2007【書評】「精神分析入門講座—英国学派を中心に—」 精神分析研究, 51(3),</p> <p>d. 田中健夫 2005【翻訳】英国学生相談学会による大学とカレッジのカウンセリング・サービスに</p> <p>e. 日本青年心理学会編集委員、日本学生相談学会編集委員</p>
競争的資金採択課題	<p>a. 2001～2002年度 科学研究費補助金 奨励研究(A)、若手研究(B) いじめられ体験をもつ被害者のアイデンティティ. [研究代表者]</p> <p>b. 2004～2006年度 科学研究費補助金 萌芽研究 セラピストフォーカシング法の開発に関する研究. [研究分担者]</p>

<p>学会等発表・役員参加</p>	<p>2010年 5月 第3回精神分析的心理療法フォーラム 学生相談における精神分析的心理学療法の方法とその可能性(第4分科会) 話題提供</p> <p>2010年 3月 小野綾子・森稚葉・黒田浩司・田中健夫・馬場禮子 効果的な心理臨床教育・訓練システムに関する研究(1)(2)(3) 日本心理臨床学会第29回大会発表論文集,540-543.</p> <p>2009年 11月 青年心理学会第17回大会 研究委員会企画シンポジウム「学生の成長をどのようにとらえ、どのように支えていくのか」シンポジスト</p>
<p>共同研究の実績</p>	<p>「効果的な心理臨床教育・訓練システムに関する探索的研究」(2010年度山梨英和大学共同研究助成)の研究組織の一員として、研究を進めている。</p>
<p>大学院生指導</p>	<p>山梨英和大学人間文化研究科臨床心理学専攻(担当教員) 2008年度 修士学生2名、2009年度3名 2010年度2名(タイトルa.「大学生の「仮想的劣等感」についての一研究」、b.「発達障害のある子どもを母親がどう理解していくか」)</p>
<p>研究能力に対する評価</p>	<p>学生相談実践をふまえての、“知ろうとすること”の制止の研究は一区切りを迎えつつある。精神分析(対象関係論)の視点をもとに実践を振り返り、心理臨床の立場からの知見を組み立てることとともに、大学教育や青年心理学の研究者との交流を深めることを大切にしてきた。その一つは、『リーディングス日本の高等教育③』(玉川大学出版部;2010)への論文再録というかたちとなった。また、日本青年心理学会や学生相談学会からの一定の評価を受けたが、まだ十分に共有できる言葉を用いた知見としてはまとめきれないとも感じている。臨床心理学と青年心理学の研究手法をうまく取り入れて、研究を進めていくことは、引き続き大きな課題である。また、大学院共同研究として、「効果的な心理臨床教育・訓練システムに関する研究」を、特に研修生による心理臨床センターでの面接担当の困難と課題について文献、質・量的な研究を進めており、その知見は今後の臨床心理士養成において重要な視点を提供すると考えている。</p>

サービス活動業績

<p>学内委員会・作業部会等活動実績</p>	<p>2008年 4月 大学院教務委員、心理臨床センター紀要編集委員(現在に至る) 2009年 4月 入試委員会、図書館運営委員会、宗教委員会、FD推進委員会 委員 2010年 4月 学生委員会、国際交流委員会、FD推進委員会 委員 2011年 4月 心理臨床コースコーディネーター 教務委員会、入試委員会、広報委員会、FD推進委員会 委員</p>
<p>アドバイザー活動実績</p>	<p>2008年度 教養演習、専門演習、卒業研究 履修学生アドバイザー 2009年度 基礎ゼミナールⅠ、専門ゼミナール、卒業研究 履修学生アドバイザー 2010年度 基礎ゼミナールⅡ、専門ゼミナール、卒業研究 履修学生アドバイザー</p>
<p>後進育成活動実績</p>	<p>赤坂アイ心理臨床センターにて、グループ・スーパービジョンを担当(2009年度～) 山梨英和大学大学院同窓会準備会主催事例検討会 コメンテーター(2009年度)</p>
<p>社会貢献活動</p>	<p>(1)講演会 2008年 6月 不登校児童生徒・担当とこすもす教室指導員合同学習会「心をつなぐ訪問指導(家庭訪問)の在り方」 2008年 8月 私立学校初任者研修中部地区静岡・山梨 研修会「カウンセリング実習」(主催:日本私学教育研究所) 2009年8月、2010年8月にも実施 2008年 11月 山梨県専修学校各種学校協会の新任教員研修会「青年心理学」 2009年 6月 不登校児童生徒担任・担当とこすもす教室指導員合同学習会「中学生が抱える不安からみた不登校」 2010年 11月 大月こすもす教室事例検討会(助言者) (2)出前講座 2010年 10月 韮崎高校「個性を育てる学習サポート:臨床心理学入門」ほか多数 (3)公開講座 2009年 11月 山梨英和大学主催 メイプルカレッジ「コミュニケーションに活かす心理学」 (4)学外審議会・委員会等 2005年 11月 日本学生支援機構「大学における学生相談体制の整備に資する調査研究会」委員(～2007年3月まで) (5)その他 特になし</p>

成果と目標

専門的成果	<p>① 学生相談臨床における研究：修学の取り組みとその行き詰まりのなかに、“学生生活サイクル”それぞれの時期の心理・社会的アイデンティティの形成の契機が内在していることを、相談事例を通して明らかにした。知ろうとすること(knowing)の制止が、関係のなかで生起する不安という文脈で起こることについて、時期ごとの課題との関連で考察した。</p> <p>② 青年期、主に大学生を対象とした心理臨床の特徴を、転移・逆転移という観点から記述し、学生相談領域への精神分析的な心理療法の適用の意義とその限界について考察した。</p> <p>③ 心的外傷の対象関係論に基づく理解とアプローチについて、翻訳とともに、関与の時期という点をふまえて日本での心理臨床への適用を検討している。</p>
専門的目標	<p>① 学生相談と大学教育研究による知見の交流のなかから、キャリア形成についての意義ある共同成果をみだし、発信していく。</p> <p>② 心的外傷という文脈から、加害-被害関係の固定化・スティグマ化がそれぞれのアイデンティティ形成に及ぼす影響について、臨床心理学的研究を通して明らかにしていきたい。</p> <p>③ 個人/グループへのスーパービジョンと、自身の精神分析的な心理療法家に向けての訓練を通して、心理臨床にかかわる態度、技法の向上に努めていきたい。</p>

最新データ入力日	2011年 4月 1日
----------	-------------

専任教員職務業績集

山梨英和大学

フリガナ 氏名	性別	生年(西暦)	職名	所属
カワグチ キヨヤス 川口 清泰	男	1948年	准教授	人間文化学部人間文化学科
取得学位称号	修士(英文学)	専門分野	英文学、英国演劇、シェイクスピア	
学 歴	1964年 3月	東京都 私立 明治学院高等学校 卒業		
	1967年 4月	明治学院大学 文学部 英文学科 入学		
	1971年 3月	明治学院大学 文学部 英文学 卒業		
	1972年 2月	米国 カリフォルニア州立大学 文学部 比較文学科 入学		
	1974年 6月	米国 カリフォルニア州立大学 文学部 比学科 卒業		
	1976年 4月	明治学院大学 文学部英文学専攻 博士課程前期 入学		
	1978年 3月	明治学院大学 文学部英文学専攻 博士課程前期 修了		
実 務 経 験	1974年 7月	東京都 学校法人 神田外語学院 英会話講師(1975年3月まで)		
	1975年 4月	東京都 学校法人 ECC東京外語学院 英会話講師(1978年3月まで)		
受 賞 歴	年 月			
	年 月	特になし		
	年 月			
所 属 学 会	1978年 4月	日本シェイクスピア学会会員		
	1978年 4月	日本英文学会会員		
	年 月			
	年 月			
特 免 資 格 特 許 等	年 月			
	年 月	特になし		
	年 月			
	年 月			

目 次

○教育業績	
教育理念、方針、方法	249
教育能力	
教育方法実践例	249
作成した教科書、教材等	249
教育方法や実践に関する発表、講演等	249
担当授業科目	249
代表的なシラバス	249
教育改善活動	249
教育能力に対する評価	249
○研究業績	
研究の特徴	250
研究経歴	250
研究実績	
著書	250
学術論文	250
その他の研究活動	250
競争的資金採択課題	250
学会等発表、役員参加	250
共同研究・受託研究の実績	250
大学院生指導	250
研究能力に対する評価	
○サービス活動業績	
学内委員会・作業部会等活動実績	251
アドバイザー活動実績	251
後進育成活動実績	251
社会貢献活動	251
○専門的活動(教育業績、研究業績、サービス活動業績)の統合による成果と目標	
専門的成果	252
専門的目標	252
○添付資料	
略	
○最新データ入力日	252

教育業績

教育理念、方針、方法	どのクラスにおいても、学生参加を大事にする。英語の授業では、各学生が理解しているかをつねに意識しながら教育している。各個人への気配りを最大の目標としている。演劇関係の授業では学生とともに芝居をしながら、クラス全体の士気を高めている。
教育能力	<p>(1)教育方法実践例 英米の演劇では、毎週、シェイクスピアの名場面を披露している。そのために周到な練習時間を取っている。</p> <p>(2)作成した教科書、教材等 英会話の教科書を同僚と作成して、授業に生かした。</p> <p>(3)教育方法や実践に関する発表、講演等 地域の演劇鑑賞会において十数回、シェイクスピア劇を原語で実演してきた。</p>
担当授業科目	2011年度 卒業研究、英米の演劇、英米の舞台芸術、翻訳のしかた、English Recitation、外国語(英語)、英語コミュニケーション、Practice in Grammar
代表的シラバス	英国の劇作家ウィリアム・シェイクスピアの悲劇作品『ハムレット』を多角的に学びます。様々な日本語訳を比較したり、日英の実際の舞台(のDVD)を鑑賞します。また経験豊かな演劇関係者、卒業生、学生有志による実演もあります。学生は希望すれば、役者や裏方などに加わったりできます。もちろん、観客としてのみ参加しても結構です。シェイクスピアのすごさを、ぜひ味わってください。またシェイクスピアとの比較のために、現代劇の解説や、実演もします。
教育改善活動	特になし。
教育能力に対する評価	<p>(1)学生による授業評価 本格的な劇を教室という制約の中で行ったことに対する、驚きと感謝が評価に現われている。また、多くの卒業生や演劇関係者を招待したことに対する評価も高い。ただ、演劇の激しさに、違和感を感じる学生もたまにいますので、その対応はこれからの課題である。</p> <p>(2)同僚教員等による授業評価 ダニー・ブラウン専任講師の基礎ゼミナールは、すべて私が日本語に訳してきた。また、彼の教会の通訳も、隔週で担当している。彼から評価を聞いてもらえれば、英和大学の英語教育及び教会活動に対する態度は理解してもらえると信じる。</p>

研究業績

研究の特徴	主にシェイクスピアの喜劇と悲劇が研究対象。難解とされていたシェイクスピア研究書を翻訳出版した。論文は喜劇作品の研究が多い。主に作品の構成、舞台反応の研究に従事してきた。また、喜劇の構造の研究との関連から、喜劇の創作にも関心を払ってきた。	
研究経歴	1976年 明治学院 大学大学 ¹ において、エリザベス朝演劇の研究に従事した。 1978年 山梨英和 短期大学において、シェイクスピアの研究に従事。 2002年 山梨英和 大学において、シェイクスピアの研究に従事 ² 現在に至る。 年 年	
研究実績	(1)著書 特になし (2)学術論文 1979年、山梨英和短期大学紀要第12号に、「QurlousとWinwife』『「パーソロミューの祭り』におけるメイン・プロットの考察)以後、主に大学の紀要を中心に、学術論文を十数本発表してきた。 (3)その他の研究活動(国際会議発表、学術誌編集、学術論文査読等) 特になし	
競争的資金採択課題	なし	
学会等発表・役員参加	年 月 特になし 年 月 年 月 年 月 年 月 年 月 年 月	
受託共同研究の実績	年 月 特になし 年 月 年 月 年 月	
大学院生指導	なし	
対研究する能力価に	なし	

サービス活動業績

学内委員会・作業部会等活動実績	2009年	4月	宗教委員会、進路支援委員会委員
	2010年	4月	図書館運営委員会委員
	2011年	4月	図書館運営委員会、入試委員会委員
	年	月	
	年	月	
アドバイザー活動実績	特になし		
後進育成活動実績	特になし		
社会貢献活動	(1)講演会		
	1999年	6月	演劇団体舞芸センター主催の講演会で「十二夜」の講演 以後十数回にわたり同センターで講演会を行う。最近は2008年11月「シェイクスピアの悲劇の謎」を講演。
	(2)出前講座		
	1983年	7月	山梨県立南高校の課外集中講義で、英語を3日間教える。以後 以後ほぼ毎年高校で出前授業を行ってきた。
	(3)公開講座		
	2002年	10月	山梨英和大学メイプルカレッジにおいて「シェイクスピアの悲劇」の講義を一般人に行った。以後、ほぼ毎年、シェイクスピア関係の講義をメイプルカレッジで実践した。
	(4)学外審議会・委員会等		
	年	月	特になし
	(5)その他		
	2001年	8月	山梨県立白根高校の文化祭で、英米人の英語教師(ALT)と英和の学生を動員して、悲劇「マクベス」を英語で上演した。主役マクベスを演じただけでなく、演出なども行い、地域の英語教育及び演劇振興に貢献した。 以後も、英和大学の学生を様々な演劇にかかわらせ、芸術ホールなどの舞台に立たせてきた。
2007年	10月	県立文学館における演劇公演『翔べない二人』に役者として出演。	
2009年	3月	桜座における演劇公演『基板』に役者として出演。	
2010年	8月	県立文化ホールにおける演劇公演に役者として登場。『さまよえる子羊たち』に役者として出演。	

成果と目標

専門的評価	<p>①シェイクスピアの専門書の翻訳を通して、日本のシェイクスピア研究者に刺激を与えた。翻訳不可能とされていたニーヴォーの研究書の翻訳は白水社『新劇』のなかの、その年(1985年)の演劇界の貢献として、賞賛された。また、1990年出版の『シェイクスピアの七つの悲劇』は、観客反応という現代的テーマを扱った研究書の本格的翻訳として、注目を集めた。さらに、1995年出版の『シェイクスピアの愛の喜劇』は、シェイクスピア喜劇の喜劇研究のもっとも名高い書物の翻訳として演劇界に歓迎された。各種の事典への項目執筆での貢献も評価されてきた。最近では、2007年7月、ミネルヴァ書房出版『英悟文学辞典』に演劇関係の項目を多数執筆。</p>
専門的目標	<p>①これからも、主に翻訳を通して、シェイクスピアの研究書を日本の演劇人に提供していきたい。2009年度に学内紀要に発表したような、19世紀から20世紀初頭の研究書に注目して、現代の研究法の相違などに留意しながら、翻訳を進めたい。</p>

最新データ入力日	2011年4月1日
----------	-----------

専任教員職務業績集

山梨英和大学

フリガナ 氏名		性別	生年(西暦)	職名	所属
イグサ キヨシ 井草 清志		男	1950年	准教授	人間文化学部人間文化学科
取得学位称号	経済学修士	専門分野	理論経済、計量経済、日本経済、開発経済		
学 歴	1971年	4月	国際基督教大学教養学部入学		
	1975年	3月	国際基督教大学教養学部卒業		
	1975年	4月	国際基督教大学大学院行政学研究科行政学専攻入学		
	1977年	3月	国際基督教大学大学院行政学研究科行政学専攻終了(行政学修士)		
	1977年	9月	ニューヨーク州立大学大学院経済学研究科入学		
	1982年	5月	ニューヨーク州立大学大学院経済学研究科博士課程終了		
実 務 経 験	1976年	4月	国際基督教大学非常勤助手(1977年6月まで)		
	1977年	9月	ニューヨーク州立大学非常勤助手(1982年5月まで)		
	1982年	9月	国際基督教大学非常勤助手(1983年3月まで)		
	1983年	4月	山梨英和短期大学専任講師(1987年3月まで)		
	1987年	4月	山梨英和短期大学助教授(1994年3月まで)		
	1994年	4月	山梨英和短期大学教授(2002年3月まで)		
	2002年	4月	山梨英和大学准教授(現在に至る)		
受 賞 歴	年	月	なし		
	年	月			
	年	月			
所 属 学 会	1982年	月	理論・計量経済学会会員		
	1983年	月	国際経済学会会員		
	1986年	月	統計研究会会員		
特 免 資 格 等 ・ ・ 等	年	月	なし		
	年	月			
	年	月			
	年	月			

目 次

○教育業績	
教育理念、方針、方法	255
教育能力	
教育方法実践例	255
作成した教科書、教材等	255
教育方法や実践に関する発表、講演等	255
担当授業科目	255
代表的なシラバス	255
教育改善活動	255
教育能力に対する評価	256
○研究業績	
研究の特徴	257
研究経歴	257
研究実績	
著書	257
学術論文	257
その他の研究活動	257
競争的資金採択課題	257
学会等発表、役員参加	257
共同研究・受託研究の実績	257
大学院生指導	257
研究能力に対する評価	257
○サービス活動業績	
学内委員会・作業部会等活動実績	258
アドバイザー活動実績	258
後進育成活動実績	258
社会貢献活動	258
○専門的活動(教育業績、研究業績、サービス活動業績)の統合による成果と目標	
専門的成果	259
専門的目標	259
○添付資料	
略	
○最新データ入力日	259

教育業績

教育理念、方針、方法	<p>未来を担う若者に自信とビジネスマインドを持たせ、経済、社会の復活と再生を託しうる人材育成を目指す。長期に及ぶデフレ体質、少子高齢化、巨額の財政赤字と前途は暗く、閉塞感が漂っている上に大震災である。まさに未曾有の危機であるが、これは新しい経済社会を再構築するチャンスとも考えられる。「創造的破壊」をなすのは過去のしがらみにとらわれない若者しかいない。</p> <p>現実の経済問題を中心に、1)基本情報の提供、2)思考力の要請、3)問題解決能力の育成、4)発表能力の涵養を目指している。</p>
教育能力	<p>(1)教育方法実践例 バナナプランテーションの教材を使って、1)バナナ生産の現状、貧困、経済格差、日本とフィリピンの経済関係等の基礎情報を提供したうえで、2)これらの経済問題の原因を考えさせる。3)次に、問題解決のために自分は関係するのかわからないのか、するとすれば具体的にどう関わるのかを考えさせたうえで、4)レポートにまとめたり、プレゼンテーションさせる。</p> <p>(2)作成した教科書、教材等 井草清志他共著、「暮らしの中の経済学」、pp163-210、八千代出版</p> <p>(3)教育方法や実践に関する発表、講演等 なし</p>
担当授業科目	<p>経済入門、日本の経済、マクロ経済、専門ゼミナール、卒業研究、基礎ゼミ1、開発経済、文系のための数学</p>
代表的シラバス	<p>本学は大別すればいわゆる文系の大学に分類され、それが故か数学嫌いの学生が多い。しかし、今日数学は経済学は無論、人文、社会科学の様々な分野で幅広く活用されている。そこで、「文系のための数学」では数式を使わずに、集合論、線形代数、解析学の基礎的概念を理解させたうえで、数学的思考方法を身につけることを目指している。</p>
教育改善活動	<p>講義科目においては、毎回授業内容についての感想を書かせている。こうすることで、学んだことが整理されるだけでなく、文章化することで疑問点も明確になる。授業を聞いてただノートを取るだけだと受け身の授業になりがちだが、こうすることで授業に主体的に取り組むようになる。しかも、無記名で書かせるので成績評価に関係しないために様々な意見が出るが、その中で常識的には「不適切」な意見、例えば「お金で幸せは買える。」といった意見も紹介することでさらに議論や思考が深まる。さらに、そうした「非常識」な意見を書いても否定されないということをととても新鮮に感じているようである。学ぶとは覚えることではなく、知ることの楽しさをおして学ぶとは思考することであることを体験させている。</p>

教育能力に対する評価	<p>(1) 学生による授業評価</p> <p>演習・講義の全体評価(講義アンケートより): 演習・講義の方針としては、学生自身が自主的に課題への取り組みが出来るように配慮をした。講義では毎回授業の感想を書かせることで、主体的に授業に取り組むようになり興味、理解が進んだ。演習では課題に取り組むことで応用力を高めたり、研究発表を課すことによって自主的に学ぶ楽しさを体験できるよう心がけた。こうした努力は一定の成果をあげたようで、学生の授業に対する満足度は平均を上回っている。</p> <p>良い点・改善してほしい点(講義アンケート自由記述欄より): 経済学は難しそうと思ったが興味がわいた、自由に自分の意見が言えて新鮮だった、学ぶとは覚えるのではなく知ること、考えることだと分かった等肯定的な意見が多かったが、シラバスどおりに授業をして欲しいとの注文もあった。</p> <p>改善に向けた今後の方針: 学生の授業に対する理解や興味を確認しながら進めるので、往々にして授業がシラバス通りに進められない。確かに15週の授業計画通りにするのが原則であるが十分な内容理解と学生の主体性を引き出すことも重要で、この2点を両立させるよう一層の努力が必要である。特に、入門や概論の授業では経済専攻学生は少数派なので、経済学にさして興味のない学生に経済学の面白さを実感させつつ授業計画に沿った授業展開を心がけなければならない。</p> <p>(2) 同僚教員等による授業評価</p> <p>現在、同僚教員等による講義評価は行っていない。</p>
------------	--

研究業績

研究の特徴	計量経済学をメインとした定量分析手法をもちいて現実の経済問題を分析し、また予測している。マクロ経済分野の計量分析、特に為替変動、金融政策に関する実証分析をおこなってきたが、最近ではODAとNGOの関係など開発援助問題にも取り組んでいる。
研究経歴	1976年 国際基督教大学非常勤助手(1977年6月まで) 1977年 ニューヨーク州立大学非常勤助手(1982年6月まで) 1982年 国際基督教大学非常勤助手(1983年3月まで) 1983年 山梨英和短期大学専任講師(2002年3月まで) 2002年 山梨英和大学準教授
研究実績	(1)著書 井草清志他共著、「暮らしの中の経済学」、pp163-210、八千代出版 井草清志他共訳、「ジャバンプライシスー”準大国”日本への警告」、有斐閣出版 (2)学術論文 井草清志、種本広之「水問題に関する一考察—水道料金問題を中心として」、山梨英和大学紀要第9号、pp137-163, 2010. 井草清志、「日本の開発援助政策に関する一考察」、山梨英和短期大学紀要第34号、pp1-17、2000. 井草清志、「金融政策と地価抑制—バブル期の金融政策の実証分析」、山梨英和短期大学紀要第30号、pp147-162、1996. 井草清志、「Purchasing Power Parityによる1980年代の為替変動の実証分析」、山梨英和短期大学紀要第25号、pp149-166, 1991. (3)その他の研究活動(国際会議発表、学術誌編集、学術論文査読等) なし
競争的資金採択課題	なし
学会等発表・役員参加	年 月 なし 年 月 年 月 年 月 年 月 年 月 年 月
受託共同研究の実績	年 月 なし 年 月 年 月 年 月 年 月
大学院生指導	なし
対研究する能力に	マネーサプライ等現実の経済データにもとづく計量経済学的手法によりバブル期における日銀の誤った金融政策がバブルの発生とその後の長期経済不況を引き起こしたことを実証する(「金融政策と地価抑制」という一定の研究成果をあげた。こうした実証分析の手法によって財政や金融問題などの様々な現実の経済問題を分析し、解決策を提言する意義は大きいといえよう。

サービス活動業績

学内委員会・作業部会等 活動実績	2011年	4月	グループA主任
	2011年	4月	ビジネス・コミュニケーションコース コーディネーター
	2011年	4月	学生委員会委員
	2011年	4月	教務委員会委員
	2011年	4月	進路支援委員会委員
	2011年	4月	宗教委員会委員
	2011年	4月	大学運営委員会委員
	2011年	4月	国際交流委員会委員
アドバイザー活動実績	毎学期最低1回はアドバイザーと面談することで、学生の近況を把握するよう努めている。こうすることで2010年は当初退学を考えていた学生2名が退学ではなく、休学の道を選んだ。またアドバイザーであるなしにかかわらず、悩んでいる学生の話をよく聞くことで問題解消できるよう努めている。		
後進育成活動実績	なし		
社会貢献活動	(1)講演会 年 月 なし		
	(2)出前講座 2010年 7月 高大連携、諏訪双葉高校で日本とアジアの経済関係の講義をした。		
	(3)公開講座 年 月 なし		
	(4)学外審議会・委員会等 1996年 4月 甲府市消費者問題環境部会長(1997年3月まで) 1997年 4月 山梨県大規模店舗審議会委員(2001年3月まで) 1998年 4月 市民フォーラム2001MDB問題担当委員 1998年 10月 NGO・大蔵省(現財務省)定期協議会委員 2000年 11月 NPO法人富士山クラブ会員 2010年 7月 スペシャルオリンピック山梨(知的障害児のスポーツ振興団体)役員		
	(5)その他 1998年 3月 甲府市消費者問題環境部会長として甲府市一般廃棄物に関する報告書を作成した。 2010年 スペシャルオリンピック山梨の役員として県内の各種活動を推進した。特に2010年は4年に1度の全国大会が大阪で開催されたので、その準備等に積極的に関わった。		

成果と目標

専門的成果	<p>①計量経済学的手法によって、為替変動や地価動向とマネーサプライに関して実証的に一定の研究成果が得られた。</p> <p>②日本のODAは大きな成果をあげる一方課題も大きい。それは、援助がODAによるインフラ整備に偏重しているためにいわゆる「フィズカルドラッグ」になり、必ずしも自律的な経済発展をもたらしていないということである。自律的発展のためには公共事業投資よりはむしろ人材育成のための教育投資の方が長期的には望ましいのである。</p> <p>③日本は低成長、人口減少によってすでに水は余っているのだから高度経済成長期の水源開発はもはや無用である。税金の無駄遣いととどまらず、無駄な公共事業は財政赤字の元凶である。新規の水源開発は不要だが既存の給水インフラの維持補修には多額の資金を要するがその対策を講じている自治体はほとんどないのが現状である。</p>
専門的目標	<p>①日本経済は低成長、人口減少、巨額の財政赤字、更に今回の大震災と問題山積である。経済危機の真っただ中にある我が国の諸問題解決のために計量経済学的定量分析によって実証的に解決策を探ることは意義深いので、色々な経済問題の計量分析を試みたい。</p> <p>②2000年にODAは1兆円に達したが、その後急落した。低成長や財政問題を考えれば今後急増することないだろう。それならばこそ、資金を有効に使って感謝される援助政策を実行することが求められるの、更なる研究を進めたい。</p> <p>③近年「水ビジネス」が注目されているが、現実には厳しい。それは、日本では水道事業は地方自治体が事業主体、つまりビジネスとして水道事業経営のノウハウはゼロだからである。昨年日本の水道事業と世界の水需給についてサーベイしたが、今年はそれをさらに発展させ、「水ビジネス」をまさにビジネスとして、つまり魅力ある産業とするにはどうすればよいか研究した。この分野を中心に科研費等競争的資金の獲得に向け積極的に応募していきたい。</p>

最新データ入力日	2011年 4 月 1日
----------	--------------

専任教員職務業績集

山梨英和大学

フリガナ 氏名		性別	生年(西暦)	職名	所属
イシハシ ヤスシ 石橋 泰		男	1960年	准教授	人間文化学部人間文化学科 大学院人間文化研究科臨床心理学専攻
取得学位称号	教育学修士		専門分野	臨床心理学、カウンセリング、ユング心理学	
学 歴	年	月			
	年	月			
	年	月			
	年	月			
	年	月			
実務 経 験	年	月			
	年	月			
	年	月			
受 賞 歴	年	月			
	年	月			
	年	月			
所 属 学 会	年	月			
	年	月			
	年	月			
	年	月			
特 許 資 格 等	年	月			
	年	月			
	年	月			
	年	月			

目 次

○教育業績	
教育理念、方針、方法	262
教育能力	
教育方法実践例	262
作成した教科書、教材等	262
教育方法や実践に関する発表、講演等	262
担当授業科目	262
代表的なシラバス	262
教育改善活動	262
教育能力に対する評価	262
○研究業績	
研究の特徴	263
研究経歴	263
研究実績	
著書	263
学術論文	263
その他の研究活動	263
競争的資金採択課題	263
学会等発表、役員参加	263
共同研究・受託研究の実績	263
大学院生指導	263
研究能力に対する評価	263
○サービス活動業績	
学内委員会・作業部会等活動実績	264
アドバイザー活動実績	264
後進育成活動実績	264
社会貢献活動	264
○専門的活動(教育業績、研究業績、サービス活動業績)の統合による成果と目標	
専門的成果	264
専門的目標	264
○添付資料	
略	
○最新データ入力日	264

教育業績

教育理念、方針、方法	
教育能力	(1)教育方法実践例 (2)作成した教科書、教材等 (3)教育方法や実践に関する発表、講演等
担当授業科目	
代表的シラバス	
教育改善活動	
教育能力に対する評価	(1)学生による授業評価 (2)同僚教員等による授業評価

研究業績

研究の特徴		
研究経歴	年 年 年 年 年	
研究実績	(1) 著書 (2) 学術論文 (3) その他の研究活動(国際会議発表、学術誌編集、学術論文査読等)	
競争的資金採択課題		
学会等発表・役員参加	年 月 年 月 年 月 年 月 年 月 年 月	
受託共同研究の実績	年 月 年 月 年 月 年 月	
大学院生指導		
研究能力に対する評価		

サービス活動業績

学 内 委 員 会 ・ 作 業 部 会 等 活 動 実 績	年	月	
	年	月	
	年	月	
	年	月	
	年	月	
	年	月	
アドバイザー活動実績			
後進育成活動実績			
社 会 貢 献 活 動	(1) 講演会 年 月 (2) 出前講座 年 月 (3) 公開講座 年 月 (4) 学外審議会・委員会等 年 月 (5) その他 年 月		

成果と目標

専門的成果	① ② ③
専門的目標	① ② ③

最新データ入力日	2011年 4月 1日
----------	-------------

専任教員職務業績集

山梨英和大学

フリガナ 氏名		性別	生年(西暦)	職名	所属
加藤 暁 宏		男	1968年	准教授	人間文化学部人間文化学科
取得学位称号	博士(学術)	専門分野	経営学、中国経済		
学 歴	1987年 7月	中国遼寧省凌源市第一高等学校卒			
	1987年 9月	中国東北師範大学外国語学部日本語学科入学			
	1991年 7月	中国東北師範大学外国語学部日本語学科卒業 文学学士			
	1994年 9月	中国国家外国専門家局に派遣され、早稲田大学にて日本語研修			
	1995年 4月	桜美林大学大学院国際学研究科博士前期課程入学			
	1997年 3月	桜美林大学大学院国際学研究科博士前期課程修了 国際学修士			
	1997年 4月	桜美林大学大学院国際学研究科博士後期課程入学			
	2000年 3月	桜美林大学大学院国際学研究科博士後期課程修了 満期退学			
	2001年 8月	桜美林大学大学院学術博士学位取得 学術博士			
実務 経 験	1991年 8月	中国東北電力大学にて勤務、専任講師(2001年8月まで)			
	2001年 9月	中茂国際株式会社(商社)にて勤務、営業本部長(2007年9月まで)			
	2007年 10月	山梨英和大学国際交流センター顧問(2008年3月まで)			
	2008年 4月	山梨英和大学人間文化学部人間文化学科 准教授(現在に至る)			
受賞 歴	特になし				
所 属 学 会	2001年 4月	国際総合研究学会(元日本国際開発学会)(現在に至る)			
	2000年 5月	アジア経営学会(現在に至る)			
	2000年 4月	経営行動学会(現在に至る)			
特免資 許許格 等	特になし				

目 次

○教育業績	
教育理念、方針、方法	267
教育能力	
教育方法実践例	267
作成した教科書、教材等	267
教育方法や実践に関する発表、講演等	267
担当授業科目	267
代表的なシラバス	267
教育改善活動	267
教育能力に対する評価	268
○研究業績	
研究の特徴	269
研究経歴	269
研究実績	
著書	269
学術論文	269
その他の研究活動	269
競争的資金採択課題	269
学会等発表、役員参加	269
共同研究・受託研究の実績	270
大学院生指導	270
研究能力に対する評価	270
○サービス活動業績	
学内委員会・作業部会等活動実績	271
アドバイザー活動実績	271
後進育成活動実績	271
社会貢献活動	271
○専門的活動(教育業績、研究業績、サービス活動業績)の統合による成果と目標	
専門的成果	271
専門的目標	271
○添付資料	
略	
○最新データ入力日	271

教育業績

教育理念、方針、方法	<p>グローバル化が進んだ現今、大学教育は国・地域を問わず、国際社会に対応する、国際感覚を持っている人材を育成していくのが教育機関としての大学の使命ではないかと考えている。このような理念のもとで、人へ、地域へ、そして世界へ貢献できる学生を育むことが心掛けています。</p> <p>グローバルな社会で、ビジネスパーソンになるためには、ビジネスに関する専門知識、コミュニケーション能力が求められている。このことを自分の専門分野の範囲で、講義・演習を通じて少しでも学生の一助けになりたい。</p>
教育能力	<p>(1)教育方法実践例</p> <p>a.双方向授業の実践</p> <p>学生の顔を見て話をする直接的なコミュニケーション及びアンケートにより、勉学への意識や理解度をリアルタイムに把握している。また、授業計画や準備の段階で学生の意見等を多角的に聞き取り、指導案を作成する。こうした双方向授業に学生は素直に反応し動機づけにと繋がることで、講義が活性化していく。</p> <p>b.総合的なコミュニケーション能力の向上へ</p> <p>コミュニケーション能力を高めていくのに、言葉自体の勉強だけは不十分である。その言葉に関わる文化などの理解も必要である。「生活の中の中国語」と「ビジネス中国語」の授業においては、実際のシーンを設け、言葉の応用を身につけると同時に、言葉及び場面に関わる中国文化、伝統、習慣、歴史等も触れる。最終的に総合的なコミュニケーション能力が高められる。</p> <p>(2)作成した教科書、教材等</p> <p>特になし</p> <p>(3)教育方法や実践に関する発表、講演等</p> <p>特になし</p>
担当授業科目	中国現代事情、体験としての異文化理解B、経営入門、ビジネス中国語、生活の中の中国語、卒業研究、専門ゼミナール、基礎ゼミナール、貿易入門、
代表的シラバス	<p>a.講義としては、「中国現代事情」である。</p> <p>中国は1978年改革・開放以来30年以上経っている。それによる急成長を成し遂げている中国は、今世界から多大な関心が寄せられている。本講義は、現代の中国を政治、経済、外交、文化、教育など様々な分野からクローズアップして紹介し、中国全般を理解し、リアルタイムで激動する現代中国をキャッチしていく。詳細の授業計画は本学のホームページを参照されたい。</p> <p>b.演習としては、「卒業研究」である。</p> <p>卒業研究は、大学で学んできたことを総仕上げ、一本の論文に理論的かつ体系的に纏める。受講生は、3年次までの学習から形成されてきた関心領域に対して、文献収集と精読を通じて、問題意識を明確化し、研究テーマを決定する。各自の研究テーマに基づき、経営学の視点から、研究計画を立て、理論的に分析し、その内容を纏め、卒業論文を完成する。詳細の授業計画は本学のホームページを参照されたい。</p>
教育改善活動	<p>a. 新教育課程検討会への参加</p> <p>2009年度開設予定の新たなカリキュラムを検討するうえで、従来なかったビジネス関連のコース設置に向けて各種提案を行った。</p> <p>b. 留学生教育体制点検委員会への参加</p> <p>2009年11月に留学生教育体制点検委員会で、留学生教育に関する多様な提案を行った。</p>

教育能力に対する評価	<p>(1) 学生による授業評価</p> <p><u>講義・演習の全体評価(講義アンケートより)</u>: 講義・演習については、シラバスの通り、分かりやすく授業を進めたとのことである。講義は学生たちの意見・レベル等を考慮して、学生の勉強意欲を最大限に引き出すことに配慮した。授業中に内容を理解するため、映像などを通じて、関連する知識も触れた。演習は、学生自身が自主的に課題への取り組みが出来るように心掛けている。学生たちの一人一人の特徴、関心を持っている分野に合わせ、研究のスタンス、課題への解決に力を入れた。</p> <p><u>良い点・改善してほしい点(講義アンケート自由記述欄より)</u>: 全体的には授業内容よりも、授業の方式(例えば、板書や字の大きさ等)に指摘された意見が多かった。また、科目の人数の関係で、学生たちに質問を与えるチャンスが少なかったという意見もあった。</p> <p><u>改善に向けた今後の方針</u>: 学期末の学生からの授業評価を真摯に受け止め、改善してほしい点を克服しながら、よい点を次年度に生かしていきたい。</p> <p>(2) 同僚教員等による授業評価</p> <p>現在、同僚教員などによる講義評価は行っていない。</p>
------------	---

研究業績

研究の特徴	主に中国の国有企業の改革について、“現代的”企業の育成の視点から、企業のガバナンス及び経営メカニズムを研究している。計画経済から市場経済へ移行している中国に、企業の改革は外国(先進国)の公企業の改革が参考となるが、その経済システムや経営環境が異なっている。そこに、如何にマッチして、中国の国有企業を効率的に改革していくかは研究の中心所在である。	
研究経歴	2000年	中国国有企業の民営化に関する研究に従事
	2001年	中国国有企業の改革の実態に関する現地調査(凌源鋼鉄集团公司を中心に)
	2002年	中国の私営企業の経営メカニズムに関する研究
	2011年	中国企業の現代的企業への育成における経営者市場の育成に関する研究(進行中)
研究実績	<p>(1) 著書 特になし</p> <p>(2) 学術論文</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 「中国の企業改革の実例研究—福建実達コンピュータ株式会社を中心に—」『山梨英和大学紀要』第9号 2010年 2. 「中国の国有企業改革について—凌源鋼鉄集团公司の実例研究—」『山梨英和大学紀要』第8号 2009年 3. 「中国国有企業の改革の研究—“現代的”企業の育成を目指して—」博士学位論文 2001年7月 4. 「中国の企業改革とコーポレート・ガバナンス—経営者インセンティブの視点からのアプローチ」『アジア経営研究』アジア経営学会 2001年6月第7号 pp37～42 5. “The Foundation of Corporate Governance in Chinese Enterprises During the Transitional Period” China Newsletter 2001 Vol.1 No.150 pp2～14(翻訳版) 6. 「移行期における中国企業のコーポレート・ガバナンス」『中国経済』日本貿易振興会 2000年11月 pp34～54 7. 「中国企業の経営者の実像と課題—中国企業家調査から—」『日中経協ジャーナル』No.72 日中経済協会 1999年12月号 pp6～15 8. 「中国国有企業の株式制改革とイタリアの国家持株機関」『日中経協ジャーナル』No.65 日中経済協会 1999年4月号 pp79～88 9. 「中国企業の経営者に関する一考察」『桜美林国際学論集』No.4 桜美林大学大学院国際学研究科 1999年12月 pp47～62 10. 「中国国有企業の株式制改革について」『桜美林国際学論集』No.3 桜美林大学大学院国際学研究科 1998年12月 pp99～112 <p>(3) その他の研究活動(国際会議発表、学術誌編集、学術論文査読等) 特になし</p>	
競争的資金採択課題	特になし	
学会等発表	2000年 10月	「中国の企業改革とコーポレート・ガバナンス」アジア経営学会第7回全国大会 創価大学において
	1999年 3月	「中国国有企業の株式制度とイタリア混合経済との比較研究」日本国際開発学会 専修大学において

受託共同研究の実績	特になし
大学院生指導	特になし
研究能力に対する評価	<p>計画経済の体制のもとで運営されてきていた中国の国有企業は、市場経済への移行にあたって、色々な課題が直面している。それを克服しながら、“現代的”企業を目指して改革していくには、“漸進的”な改革が必要である。また、経済環境・経営環境の変化につれ、最終的に国有企業の“民営化”以外ほかの道はない。国有企業の“民営化”への改革は、業種によって、漸進的民営化と完全的民営化に分けるべきである。国有企業の漸進的民営化は外国(先進国)の公企業の改革が参考となる。先進国の公企業と中国の国有企業の状況を分析し、効率的に改革していく方法の模索が期待されている。“混合経済の企業改革モデル”はその改革の一つの方法である。“混合経済の企業改革モデル”はすでに、学術論文を通じて発表されている。</p> <p>また、“現代的”企業を目指している中国の国有企業の改革において、経営メカニズムを機能するには経営者市場、資本市場の育成が不可欠である。この点は今後の中国の国有企業の改革に示唆を与えていることが期待されている。</p>

サービス活動業績

学内委員会・作業部会等活動実績	2007年 10月	国際交流センター顧問(2008年3月まで)
	2008年 4月	国際交流委員会委員(現在に至る)
	2009年 4月	教務委員会委員(2011年3月まで)
	2011年 4月	入試委員会委員(現在に至る)
	2011年 4月	進路支援委員会会員(現在に至る)
	2011年 4月	図書館運営委員会委員(現在に至る)
	2009年 4月	ビジネス・コミュニケーションコースコーディネータ(2011年3月まで)
	2009年 11月	留学生教育体制等点検委員会(2010年3月まで)
2007年 10月	海外の教育機関との交流を促進し、大学の国際化に取り組む(現在に至る)	
アドバイザー活動実績	2008年	1年次の学生の教養演習を担当した(2009年3月まで)
	2009年	3年次の学生の専門ゼミナールを担当する(現在に至る)
	2010年	4年次の学生の卒業研究を担当する(現在に至る)
	2010年	1年次・2年次の学生の基礎ゼミナールを担当する(現在に至る)
	2008年	1年次から4年時までの留学生(中国)の世話役(現在に至る)
後進育成活動実績	特になし	
社会貢献活動	(1)学外審議会・委員会等	
	2011年 4月	山梨県総合計画審議会委員(任期2年、2013年3月まで)
	(2)講演会	
	2011年 9月	山梨総合研究所アジアフォーラム21研究会にて講演(予定)
(3)その他		
2010年 12月	山梨県にある地元中小企業(株式会社ニスカ)の海外赴任人員の語学研修の企画・実践	

成果と目標

専門的成果	<p>計画経済から市場経済への移行にあたって、“現代的”企業を目指している中国の国有企業の改革は、業種によって、漸進的民営化と完全的民営化が必要である。その漸進的民営化の手法は外国(先進国)の公企業の改革が参考となる。外国(先進国)の公企業の改革について、日本の国鉄とイタリアの公企業の改革を参考にして、“混合経済の企業改革モデル”を構築した。この研究について、学術論文を通じて、発表されている。</p> <p>また、“現代的”企業を目指している中国の国有企業の改革において、経営メカニズムを機能するには、経営者市場、資本市場の育成が至急な課題になっている。中国の国有企業の改革に、あまり触れていない経営者市場の育成について、学術論文を通じて、発表されている。特に経営者のインセンティブ付与について、主張し続けているストックオプション制度を導入する点が最近盛んに議論されている。</p>
専門的目標	<p>中国の国有企業の改革において、業種によって、移行経済に適用する漸進的民営化モデルと完全的民営化モデルを更に具現化しなければならない。また、“現代的”企業を目指している国有企業の経営者市場の育成について、中国にある他業種の企業の実態調査を通じて、今までの改革案を更に検証する必要がある。</p> <p>以上の点を踏まえ、最終は中国の国有企業の改革における現実に近い改革モデルを構築していきたい。</p>

最新データ入力日	2011年4月1日
----------	-----------

専任教員職務業績集

山梨英和大学

フリガナ 氏名	性別	生年(西暦)	職名	所属
ナンバ ミチヒロ 難波 道弘	男	1974年	准教授	人間文化学部人間文化学科
取得学位称号	博士(工学)	専門分野	情報工学(知能情報学・教育工学)	
学 歴	1997年	3月	岡山県立大学情報工学部情報通信工学科卒業	
	1997年	4月	岡山県立大学大学院情報系工学研究科機械情報システム工学専攻(修士課程)入学	
	1999年	3月	岡山県立大学大学院情報系工学研究科機械情報システム工学専攻(修士課程)修了	
	1999年	4月	岡山県立大学大学院情報系工学研究科システム工学専攻(博士後期課程)入学	
	2002年	3月	岡山県立大学大学院情報系工学研究科システム工学専攻(博士後期課程)修了	
実 務 経 験	2002年	4月	山梨英和大学人間文化学部人間文化学科助手	
	2004年	4月	山梨英和大学人間文化学部人間文化学科専任講師	
	2009年	4月	山梨英和大学人間文化学部人間文化学科准教授(現在に至る)	
	2009年	9月	埼玉学園大学経営学部会計学科非常勤講師(～2011年3月)	
	2011年	4月	帝京科学大学生命科学部生命科学科非常勤講師(現在に至る)	
受 賞 歴	2002年	3月	仁科顕彰会仁科賞(岡山県)	
	(学術論文「不定セル探索アルゴリズムを用いた連想記憶セルラニューラルネットワーク」に対する受賞)			
所 属 学 会	1998年	5月	電子情報通信学会会員(現在に至る)	
	2001年	5月	情報処理学会会員(現在に至る)	
	2002年	5月	日本教育工学会(現在に至る)	
	2005年	6月	教育システム情報学会会員(現在に至る)	
	2006年	7月	日本感性工学会会員(現在に至る)	
	2007年	7月	人工知能学会会員(現在に至る)	
特 免 資 格 等 ・ ・ 等	2009年	12月	情報処理技術者試験応用情報技術者 取得	
	年	月		
	年	月		
	年	月		

目 次

○教育業績	
教育理念、方針、方法	274
教育能力	
教育方法実践例	274
作成した教科書、教材等	274
教育方法や実践に関する発表、講演等	274
担当授業科目	274
代表的なシラバス	274
教育改善活動	274
教育能力に対する評価	275
○研究業績	
研究の特徴	276
研究経歴	276
研究実績	
著書	276
学術論文	276
その他の研究活動	276
競争的資金採択課題	276
学会等発表、役員参加	277
共同研究・受託研究の実績	277
大学院生指導	277
研究能力に対する評価	277
○サービス活動業績	
学内委員会・作業部会等活動実績	278
アドバイザー活動実績	278
後進育成活動実績	278
社会貢献活動	278
○専門的活動(教育業績、研究業績、サービス活動業績)の統合による成果と目標	
専門的成果	279
専門的目標	279
○添付資料	
略	
○最新データ入力日	279

教育業績

教育理念、方針、方法	<p>近年、ICTはすべての職業人に求められる必須能力であるが、ICTの専門能力だけでは実際の職務を遂行することはできない。とりわけ近年の学生に欠如しているといわれる次の能力を習得させるための教育・研究指導を行いたいと考えている。</p> <p>1)論理的思考力 2)分析力 3)プレゼンテーション力 4)ディベート力 5)主体性</p> <p>ICTを敬遠する学生の多くは、「コンピュータは難しそう」や「数学は苦手だから」などが多い。そのような学生たちには考えることの楽しさを伝え、課題を解決したときの達成感を実感できるような授業を、そしてこれまでの教育スタイルであった受動型から能動型に転換し、学生が主役となるような授業展開を推進したいと考えている。</p>
教育能力	<p>(1)教育方法実践例</p> <p>1. 教育におけるE-mail/Web利用 学生のITリテラシー向上の一環として、課題提出をすべてE-mailで行わせ、マナーなどを含めた指導により、知識と技術の向上に寄与した。また講義では課題をWeb配信することにより欠席した場合などでも自宅から入手できると好評である。</p> <p>2. 研究室Webサイトによる研究室内での情報交換と共有 研究室内の活性化とIT活用機会の増加などを目的としており、実際に研究室内での活性化に寄与している。</p> <p>(2)作成した教科書、教材等 「情報システム実験演習II-オブジェクト指向入門」のテキストを作成。以前の担当科目において多数。</p> <p>(3)教育方法や実践に関する発表、講演等</p> <p>1. 難波道弘、`自己組織化マップを用いた学生による授業評価の一分析`、教育システム情報学会、2005 2. 難波道弘、`演習型WBTシステムの開発と評価`、教育システム情報学会、2006</p>
担当授業科目	基礎ゼミナール2、コンピュータ科学入門、アルゴリズム基礎、データベース、システム開発の方法、アルゴリズム応用、情報システム実験演習II、専門ゼミナール、卒業研究(以上、2011年度)
代表的シラバス	講義においては、ほぼ毎回課題を課し、次回の授業で提出させ、添削・フィードバックしている。理解の一助となっており、受講生にはおおむね好評である。授業内でもインタラクティブ性を重視し、問題を解かせ、できた学生に板書させるなど参加型授業の展開に努めている。
教育改善活動	FD推進会議への出席と参加報告：2009年に私大連主催の標記会議に大学代表として出席。その後学内の研修会においてその内容を報告。自己点検・評価活動の一助となった。

<p>教育能力に対する評価</p>	<p>(1) 学生による授業評価 授業評価アンケートの平均得点においては概ね高い得点である。講義ではほぼ毎回課題を与え、添削・フィードバック・解説のプロセスによって学生の内容理解の一助となっていることが要因として考えられる。ただし、学生が分からないところをそのままにして結局、試験ができずに単位を落としているケースが散見される。そのような学生へのフォローアップが今後の課題である。</p> <p>(2) 同僚教員等による授業評価 これまでのところ特に行っていないので、今後の課題としたい。</p>
-------------------	--

研究業績

研究の特徴	<p>人工知能とその応用に関する研究を行っている。特に連想記憶セルラニューラルネットワークを用いており、これまでに文字認識、肝臓病診断、故障診断、点字画像認識へ応用した研究成果を公表している。</p> <p>近年では、連想記憶CNNをe-learningシステムに組み込んだシステムを設計・構築しており、国内外の学会でその成果を公表している。</p>
研究経歴	<p>2002年 山梨英和大学人間文化学部で人工知能、主に連想記憶CNNとその応用に関する研究に従事。(現在に至る)</p>
研究実績	<p>(1) 著書 特になし</p> <p>(2) 学術論文(最新のものから)</p> <p>1. M.Namba, ``Design of Tri-Valued Output Cellular Neural Network for Associative Memory for Self-Directed E-learning'', ICIC Express Letters, Vol.2, No.3(B), pp.552-558, 2010.</p> <p>2. S.Yancong, M.Namba and H.Murao, ``Solving a Timetabling Problem Using Distributed Genetic Algorithm'', ICIC Express Letters, Vol.3, No.4(A), pp.1055-1060, 2009.</p> <p>3. 難波 道弘, ``連想記憶セルラニューラルネットワークによる学習者の理解度推定'', 日本教育工学会論文誌, Vol.32, Suppl., pp.97-100, 2008.</p> <p>4. 難波 道弘, 澤田 隆幸, ``演習問題を重視したWBTシステムの開発と試行'', 日本教育工学会論文誌, Vol.30, Suppl., pp.17-20, 2006.</p> <p>5. Z.Zhang, M.Namba and H.Kawabata, ``Cellular Neural Networks and its Application to Abnormal Detection'', J.of Information, Vol.8, No.4, pp.587-604, 2005.</p> <p>など。詳細はhttp://www.yamanashi-eiwa.ac.jp/~namba/を参照。</p> <p>(3) その他の研究活動(国際会議発表、学術誌編集、学術論文査読等)(最新のものから)</p> <p>1. M.Namba, ``Tri-Valued Output Cellular Neural Networks for Associative Memory to Estimate Understanding Level'', Proc. of the 13th IASTED International Conference on Computers and Advanced Technology in Education (CATE), Maui(Hawaii), USA, pp.88-93,2010.</p> <p>2. M.Namba, ``Estimating Learner's Comprehension with Cellular Neural Networks for Associative Memory'', Proc. of the 11th International Conference on Cellular Neural Networks and their Applications (CNNA), Santiago de Compostela, Spain, pp.150-153,2008.</p> <p>3. M.Namba and Z.Zhang, ``Cellular Neural Network for Associative Memory and Its Application to Braille Image Recognition'', Proc. of World Congress on Computational Intelligence(WCCI), Vancouver, Canada, pp.4716-4721,2006.</p> <p>など。詳細はhttp://www.yamanashi-eiwa.ac.jp/~namba/を参照。</p>
競争的資金採択課題	<p>2009年6月～現在 : 科学研究費補助金若手研究(B)、連想記憶CNNの理解度推定を用いたE-learningシステム、研究代表者</p>

学会等発表・役員参加	<p>2011年 3月 篠原大地、難波道弘、`3値出力連想記憶CNNを用いた理解度推定に関する研究`、教育システム情報学会学生研究発表会</p> <p>2009年 12月 難波道弘、`理解度推定のための3値出力連想記憶セルラニューラルネットワークの設計`、電子情報通信学会教育工学研究会</p> <p>2008年 11月 笠井かおり、難波道弘、`ITSのための連想記憶セルラニューラルネットワークの設計と評価`、教育システム情報学会研究会</p> <p>など。詳細はhttp://www.yamanashi-eiwa.ac.jp/~namba/を参照。</p>
受託共同研究の実績	<p>年 月 特になし</p> <p>年 月</p> <p>年 月</p> <p>年 月</p> <p>年 月</p>
大学院生指導	特になし
研究能力に対する評価	<p>主研究テーマである「連想記憶CNNを用いた学習者の理解度推定に関する研究」はその研究成果が学術論文や国際会議プロシーディングスなどにも掲載されている。その後その実績が評価され、学術振興会科学研究補助金に採択されている。このテーマは人工知能技術をe-learningに適用したシステムであり、その有用性が認められれば、汎用性が高いため、今後は広範囲にわたる実用化が期待される。</p>

サービス活動業績

学内委員会・作業部会等活動実績	2011年	4月	教務部長、IT委員長、大学運営委員会委員
	2010年	10月	事務システム検討会座長
	2009年	4月	情報システムコースコーディネータ
	2008年	2月	山梨英和大学新カリキュラム検討委員会委員
	年	月	その他、これまでに入試委員、広報委員、教職課程運営委員などを歴任。
アドバイザー活動実績			基礎ゼミナール1において、学生間のコミュニケーションを図るための企画を推進した。2010年度はスポーツ大会、バーベキュー、焼き芋パーティー、有志による新年会など。
後進育成活動実績			特になし
社会貢献活動	(1)講演会	年	月 特になし
	(2)出前講座	年	月 特になし
	(3)公開講座	年	月 特になし
	(4)学外審議会・委員会等	年	月 特になし
	(5)その他	2006年	4～6月

成果と目標

専門的成果	<p>①連想記憶CNNとその応用に関する研究 1988年に考案されたセルラニューラルネットワーク(CNN)は画像処理や迷路探索など多くの応用事例が報告されている。その後CNNが連想記憶に有効であることが提案された。これまでに文字認識、肝臓病診断、自動車異常音診断、点字画像認識などへの応用例を提案・報告している。それと並行して連想記憶CNNの効率化設計についても研究し、いくつかの観点から設計法を提案した。</p> <p>②e-learningシステムの開発・評価に関する研究 主として、ITS(連想記憶CNNを融合させたシステム)を研究開発している。教師不在型e-learningシステムにおけるこのモデルの可能性については学術論文や国際会議などで公表しているが、今後の実用化に向け、その基盤が整備されつつある。</p>
専門的目標	<p>①連想記憶CNNとその応用に関する研究 これまでの応用事例における精度の向上と新たな応用事例の開拓をめざす。</p> <p>②e-learningシステムの開発・評価に関する研究 これまでの研究成果を踏まえ、実用化に向けた研究開発を推進したい。特に本研究はその成果が認められ、競争的外部資金の獲得に至っている。研究の質を高めるために積極的な教育研究活動を行いたい。</p>

最新データ入力日	2011年 4月 1日
----------	-------------

専任教員職務業績集

山梨英和大学

フリガナ 氏名	性別	生年(西暦)	職名	所属
ダニー ブラウン Danny W. Brown	男	1961年	専任講師	人間文化学部人間文化学科
取得学位称号	博士	専門分野	外国語教育	
学 歴	1979年 5月	Bowling Green High School, Kentucky, U.S.A. 卒業		
	1979年 9月	Southwestern Assembly of God College, Texas, U.S.A. 入学(1980年12月まで)		
	1981年 1月	Western Kentucky University, Religion Department, Kentucky, U.S.A. 編入学		
	1983年 5月	Western Kentucky University, Religion Department, Kentucky, U.S.A. 卒業(学位、専攻:宗教学)		
	1985年 9月	North Texas State University, Graduate School, English Department, Texas, U.S.A. 入学		
	1986年 8月	North Texas State University, Graduate School, English Department, Texas, U.S.A. 卒業(修士号、専攻:英語教育)		
	1991年 9月	University of Texas at Austin, Foreign Language Education Department, U.S.A. 入学		
	1996年 8月	University of Texas at Austin, Foreign Language Education Department, U.S.A. 卒業(博士号、専攻:外国語教育)		
実 務 経 験	1987年 4月	駿台外語専門学校(大阪市)講師(1989年7月まで)		
	1989年 9月	Pittsburg State University, Kansas, U.S.A., Intensive English Program, lecturer(1991年8月まで)		
	1992年 9月	Austin Community College, Parallel Studies Department, ESL Program, part-time teacher(1997 1月まで)		
	1997年 4月	山梨英和短期大学英文学科、契約教師(2000年4月まで)		
	2000年 4月	山梨英和大学人間文化学部、契約教師(2005年4月まで)		
	2005年 4月	山梨英和大学人間文化学部、専任講師(現在まで)		
受 賞 歴	1979年 5月	German Student of the Year Award, German III class, Bowling Green High School, Kentucky, U.S.A		
	1979年 5月	ROTC Student of the Year Award, High School Reserve Officer Training Corps (all classes), Bowling Green High School, Kentucky, U.S.A.		
	1991年 9月	University Fellowship, Office of Graduate Studies, University of Texas, Texas, U.S.A. (for the 1987-88 school year)		
	1996年 12月	Nominated for Part-time Teacher of the Year Award, Austin Community College (all campuses).		
所属 学会	1986年 4月	Member of Japan Association of Language Teaching (JALT) (現在まで)		

目 次

○教育業績	
教育理念、方針、方法	282
教育能力	
教育方法実践例	282
作成した教科書、教材等	282
教育方法や実践に関する発表、講演等	282
担当授業科目	282
代表的なシラバス	282
教育改善活動	282
教育能力に対する評価	283
○研究業績	
研究の特徴	284
研究経歴	284
研究実績	
著書	285
学術論文	285
その他の研究活動	285
競争的資金採択課題	285
学会等発表、役員参加	285
共同研究・受託研究の実績	285
大学院生指導	285
研究能力に対する評価	285
○サービス活動業績	
学内委員会・作業部会等活動実績	286
アドバイザー活動実績	286
後進育成活動実績	286
社会貢献活動	286
○専門的活動(教育業績、研究業績、サービス活動業績)の統合による成果と目標	
専門的成果	287
専門的目標	287
○最新データ入力日	287

教育業績

教育理念、方針、方法	
教育能力	<p>(1)教育方法実践例</p> <p>English Presentation: Using mostly materials that I wrote myself, students learn the rules of intonation, pronunciation of past tense, speech-giving techniques, and advanced grammar points. They also sing a song as a choir during class, memorize the Lord's prayer with correct intonation and pronunciation, give a personal speech before the whole class using notes, practice and tell a personal story before the whole class without notes, and write and give an academic speech before the class with notes and an outline.</p> <p>(2)作成した教科書、教材等</p> <p>I have not created any books. However, I personally write about 70% of all text material that I use in my classes.</p> <p>(3)教育方法や実践に関する発表、講演等</p> <p>"Grammar is not Communication,"Lecture that I presented at 駿台外語専門学校高校で高校の英語の教師のための教育発表会.</p>
担当授業科目	<p>2011年度の授業</p> <p>基礎ゼミ2、English Reading 1, English Speaking 2, English Presentation, American Society and Culture, English Bible and Western Culture, 専門演習, 卒業研究</p>
代表的シラバス	<p>専門演習:社会及び心理の諸問題について英語で読み、英語で討論する。本学の大学院を希望している学生にとっても、また英語を話す力をつけたい学生にとっても、最適なゼミである。 Student will study vocabulary and take multiple tests. Students will do oral readings in class about social problems: hikikomori, makein, drugs, gangs, etc. Students will discuss those social problems with the class. Each student will write a final paper over one social problem of his or her choice, in consultation with the teacher.</p>
教育改善活動	<p>I have purchased and learned how to use Adobe Photoshop software to help create pictures for my class Powerpoint presentations.</p> <p>I have studied the Japanese language so I can use it sometimes in class. I learned in graduate school that it is best to speak only the target (foreign) language in the class, but also that on occasion a few words in the students' own language can save much time and confusion. So I probably speak 95% to 98% English in the class. However I can also give word definitions in Japanese, and make short explanations to confused students in Japanese, so I feel that my teaching has greatly improved.</p>

<p style="writing-mode: vertical-rl; text-orientation: upright;">教育能力に対する評価</p>	<p>(1) 学生による授業評価</p> <p>Students' evaluations of me always remain fairly high (4.6–4.8 out of 5). However, I am disappointed that, though students approve of my teaching, they sometimes report lower scores for their own participation than they report for my teaching. There is a saying, “Good teachers explain, great teachers inspire.” I want to inspire more, so this year I have been working harder to talk to students on a personal basis, even in larger classes, and to be excited and more energetic as I speak to each class.</p> <p>(2) 同僚教員等による授業評価</p> <p>Yamanashi Eiwa College does not give formal evaluations of their faculty. This seems to be Japanese culture, though Americans always give formal faculty evaluations. My colleagues informally have told me that my classes are popular and that I get along well with the faculty and staff of the college so they are pleased with my work.</p>
---	--

研究業績

<p>研究の特徴</p>	<p>I have only worked on few research projects in the last few years because I use much time for my church work, prayer, and in the evenings Japanese language study (now I can read and speak Japanese at an intermediate level). So my research has decreased for the last few years.</p> <p>Learning Motivations: Most of my research has focused on student motivations. My own research suggests that Japanese college students' motivations in college classrooms appear to be largely based on task motivation or external motivations provided by the teacher. Japanese students who want to learn English depend on the surrounding context of the classroom to motivate them more than their personal desires to learn English. For example, Japanese students typically do not play with language nor personally motivate other students in the class to study, which is very different than students from other countries, especially different from American education. (I am American.) Instead, the students watch the teacher to see what he will do. As a result, the students are longing for the teacher to motivate them. The teacher should impress or interest the students by using interesting stories, jokes, and other techniques so that help students pay close attention. The teacher should also frequently offer the students tasks to perform even during lecture classes to increase motivation,</p> <p>and the teacher should keep students active working together in pairs to stimulate interest. Furthermore, the teacher should slowly teach students to internalize their motivations for language learning by praising students and talking about their learning in an open way. These are some of the results of my research. At this time, I have collected more data regarding motivations, but due to my Japanese language study, that research is awaiting analysis.</p> <p>Vocabulary Knowledge/English Morphemes: I have also done one study regarding active vocabulary use of students in order to understand the level of language knowledge of students entering our college. I implemented those findings into my curriculum by focusing my teaching more on certain vocabulary groupings. Further more, I also did one study regarding the English morphemes used by Japanese students to learn more about the level of language knowledge of our school's students. I also implemented that research into my curriculum by encouraging particular grammatical points in my class that the students were weak in.</p>
<p>研究経歴</p>	<p>年 特になし 年 年 年 年</p>

研究実績	(1)著書	特になし
	(2)学術論文	
	1996年 8月	博士論文 The classroom-related beliefs and learning strategies of seven adult Japanese learners in a United States ESL program, 317 pp.
	2003年 2月	The Use of Vocabulary by Japanese Learners of English in Speaking Tests, 山梨英和大学紀要第1号
	2004年 1月	Natural Sequences in the Acquisition of English Morphology, 山梨英和大学紀要第2号
2004年 1月	The Motivations of Japanese College Students to Participate in an English Vocabulary Learning Activity, 山梨英和大学紀要第2号	
	(3)その他の研究活動(国際会議発表、学術誌編集、学術論文査読等)	特になし
競争的資金採択課題	特になし	
学会役員等参加表・	年 月	特になし
	年 月	
	年 月	
	年 月	
	年 月	
	年 月	
託共同研究の実績受	年 月	特になし
	年 月	
	年 月	
	年 月	
大学院生指導	特になし	
対研究する能力に	特になし	

サービス活動業績

学 内 委 員 会 等 活 動 実 績 ・ 作 業 部	2005年	4月	国際交流委員会委員(2011年3月まで)
	2008年	4月	宗教委員会委員(現在まで)
	2011年	4月	入試委員会委員(現在まで)
	年	月	
	年	月	
アドバイザー活動実績	2000-2006年度		Advisor of the English Life Club (English conversation and friendship club)
	2011年度		Advisor for the Maple Leaf Club (English conversation club)
後進育成活動実績	1997-Present		I have taught numerous small weekly English Bible studies in my home and on campus to encourage understanding of Christian faith and morals. Many semesters I have held English Bible studies in my office at school. For example, last semester 4 students and another teacher attended my Bible study, and this year, 5 students are attending my Bible study.
社 会	(1)講演会		
	年	月	特になし
	(2)出前講座		
	年	月	特になし
(3)公開講座			
年	月	特になし	
(4)学外審議会・委員会等			
年	月	特になし	

貢 献 活 動	(5)その他	1999年3月
	<p>I am pastor of New Life International Church in Kofu, Japan. New Life is a bilingual church with English/Japanese. This church currently averages 40 people in attendance, many of whom are students of our college. The church meets in a large classroom at Yamanashi Eiwa College. As pastor, I plan and lead the church service one time each week, preaching before the church each time, leading prayer and social activities. I coordinate programs of the church including church Bible studies (Japanese and English), the council of elders and elders' meeting, the church worship band, the children's program, and missionary offering support. I also perform many small activities related to being a pastor, such as writing recommendations for jobs or school entrance, visiting the sick, and counseling those with personal problems. Furthermore, I coordinate temporary projects, such as our annual winter retreat at Lake Yamanakako. I organized a 4-day trip for 5 people (myself included) to do volunteer work in the area of the Noto Peninsula Earthquake (能登半島地震) in March 2007.</p> <p>I I organized another 4-day volunteer trip to the area of the Chūetsu Offshore Earthquake (新潟県中越沖地震) in July 2007 for 5 people. I have also lead our church in giving food to local refugees from the Miyagi-ken and Iwate-ken area who live in Kofu City area in March-May 2011. (1999年3月から、現在まで)</p>	

成果と目標

専門的成果	<p>① I have learned how to better motivate students in English classes by my teacher presentations and text writing.</p> <p>② I have learned more about the language knowledge (vocabulary and grammar) of Japanese college students for curriculum planning purposes.</p>
専門的目標	<p>① My first goal is a greater understanding of what content in teacher's lectures is most motivating to students. (That data is in my office waiting analysis now.)</p> <p>② My second goal is to learn more about how to encourage students to internalize language learning motivations so that they are not so dependent on the teacher and classroom context.</p> <p>③ My third goal is to learn more about students' language knowledge. One project that I hope to perform in the future is to analyze Japanese high school English textbooks to categorize the types of language exercises that they require, and then compare those exercises to the language knowledge that students bring to the college.</p>

最新データ入力日	2011年4月1日
----------	-----------

専任教員職務業績集

山梨英和大学

フリガナ 氏名	性別	生年(西暦)	職名	所属	
モリ 森 稚葉	女	1972年	専任講師	人間文化学部人間文化学科 大学院人間文化研究科臨床心理学専攻	
取得学位称号	修士(人文科学)	専門分野	発達臨床心理学		
学 歴	1990年	3月 東京都立西高等学校 卒業			
	1990年	4月 慶應義塾大学 法学部法律学科 入学			
	1994年	3月 慶應義塾大学 法学部法律学科 卒業 学士(法学)			
	1999年	4月 お茶の水女子大学 生活科学部人間生活学科発達臨床学講座 3年次編入学			
	2001年	3月 お茶の水女子大学 生活科学部人間生活学科発達臨床学講座 卒業 学士(生活)			
	2001年	4月 お茶の水女子大学大学院 人間文化研究科発達社会科学専攻 博士前期課程入学			
	2003年	3月 お茶の水女子大学大学院 人間文化研究科発達社会科学専攻 博士前期課程修了 修士(人文科学)			
	2003年	4月 お茶の水女子大学大学院 人間文化研究科人間発達科学専攻 博士後期課程入学			
実 務 経 験	2007年	3月 お茶の水女子大学大学院 人間文化研究科人間発達科学専攻 博士後期課程単位取得退学			
	1994年	4月 キリンビール(株)九州支社 福岡営業部(1997年10月まで)			
	2002年	10月 お茶の水女子大学大学院 ティーチング・アシスタント(心理臨床実習)(2003年2月まで)			
	2003年	4月 社会福祉法人相友会 浅川保育園 相談員 (2010年3月まで)			
	2004年	4月 お茶の水女子大学学生相談室 カウンセラー(2006年3月まで)			
	2004年	4月 和泉短期大学児童福祉学部 非常勤講師 (保育臨床) (2006年3月まで)			
	2004年	4月 お茶の水女子大学大学院 COE研究員(平成16・17年度)(2006年2月まで)			
	2005年	5月 お茶の水女子大学大学院 ティーチング・アシスタント(心理臨床実習)(2006年2月まで)			
	2006年	4月 社会福祉法人相友会 長房西保育園 相談員 (2010年3月まで)			
	2006年	4月 山梨英和大学 人間文化学部 非常勤講師 (発達心理学)(2007年3月まで)			
	2006年	4月 武蔵大学 非常勤講師 (青年心理学Ⅰ・青年心理学Ⅱ)(2007年3月まで)			
	2006年	10月 青山学院短期大学 児童教育学科専攻科 非常勤講師 (児童臨床心理学)(2007年3月まで)			
	2007年	4月 山梨英和大学 人間文化学部 専任講師 (現在に至る)			
			山梨英和大学大学院 臨床心理学専攻 専任講師(兼任) (現在に至る)		
			山梨英和大学 心理臨床センター 相談スタッフ(兼任) (現在に至る)		
	2007年	4月 山梨県適応指導教室(石和こすもす教室)カウンセラー(2010年3月まで)			
	2007年	4月 山梨県特別支援教育体制推進事業 中・西部地域LD等専門家チーム委員 (2010年度より、山梨県特別支援教育専門家チーム委員に改名)(現在に至る)			
	2007年	4月 発達障害早期総合支援モデル事業に関わる発達障害の早期発見に関する健診方法研究委員(平成19/20年度)			
	2008年	4月 発達障害等支援・特別支援教育総合推進事業 LD等巡回相談員(現在に至る)			
	2009年	9月 山梨県適応指導教室(韮崎こすもす教室)カウンセラー(2010年3月まで)			
2010年	4月 私立かほる保育園(山梨県甲府市) カウンセラー(現在に至る)				
受賞歴	特になし				
所 属 学 会	2001年	日本心理臨床学会会員			
	2003年	日本発達心理学会			
	2004年	日本臨床心理士会会員			
	2004年	日本心理学会会員			
	2006年	日本教育心理学会会員			
	2006年	日本コミュニティ心理学会会員 他			
資格・免許・特許等	2004年	4月	臨床心理士(登録番号 12374)		

目 次

○教育業績	
教育理念、方針、方法	290
教育能力	
教育方法実践例	290
作成した教科書、教材等	290
教育方法や実践に関する発表、講演等	290
担当授業科目	290
代表的なシラバス	290
教育改善活動	290
教育能力に対する評価	290
○研究業績	
研究の特徴	291
研究経歴	291
研究実績	
著書	291
学術論文	291
その他の研究活動	291
競争的資金採択課題	291
学会等発表、役員参加	292
共同研究・受託研究の実績	292
大学院生指導	292
研究能力に対する評価	292
○サービス活動業績	
学内委員会・作業部会等活動実績	293
アドバイザー活動実績	293
後進育成活動実績	293
社会貢献活動	293
○専門的活動(教育業績、研究業績、サービス活動業績)の統合による成果と目標	
専門的成果	294
専門的目標	294
○添付資料	
略	
○最新データ入力日	294

教育業績

教育理念、方針、方法	基礎教育においては、「知る」こと「学ぶ」ことの楽しさ(と自らの無知を知ることの痛み)を伝えたいと考えている。自分なりの疑問を持ち、その疑問を解決するために調査を行うワークを課し、そのプロセスを支えるような機会と時間を作っている。専門教育においては、学生が心理学を学ぶことを通して、自己理解を深めるとともに、自らの体験から離れて、より広く人間を理解できるようになることを目指している。講義・演習ともに、学生からのリアクションにできる限り応えて、主体的に考える姿勢を育み、人間の多様なあり方に心が開かれるように心がけている。
教育能力	<p>(1)教育方法実践例</p> <p>①心理臨床実践にかかわる演習科目における工夫 心理臨床実践は、知識を習得するだけでなく、自らの体験を通して習得することが求められる。学部生のうち、大学院進学を目指す学生の基礎力をつけるために、演習では、カウンセリングや心理検査のロールプレイ、グループワーク、心理検査実習を通して、個々人がカウンセリングや心理検査法について、体験的に理解できるよう、工夫をした。また、大学院への進学を目指さない学生に対しては、自己理解・他者理解を深めることをねらいとして提示し、社会人生活とのつながりを意識させることを通して、演習への動機づけを高めるように工夫した。なお、2009年度からは、教員間の授業内容の検討を経て、大学院進学クラスを新設し、学生の目的意識にあわせた演習科目の達成目標を設定している。具体的には、各学生が共通した観点から体験を振り返ることができるようにワークシートの構成を工夫している。また、その体験をグループワークのなかで互いに語り合うという、自らの体験を他者に開く機会を通して、人間の多様性を実感できるように授業を組み立てている。</p> <p>②講義科目における教育方法の工夫 講義科目においては、目標への到達度を確認するために、毎回、リアクションペーパーの回収、途中2回程度の小テストを行っている。履修人数が100名を超える場合にも、双方向的な講義が展開するようにリアクションペーパーを用いて、質疑に答えるなどの工夫を行っている。</p> <p>(2)作成した教科書、教材等 特になし</p> <p>(3)教育方法や実践に関する発表、講演等 森稚葉・黒田浩司・小野綾子・田中健夫・馬場禮子(2010) 効果的な心理臨床教育・訓練システムに関する研究(2)いわゆる「中断・早期終了」ケースの要因に関する分析研究 第27回心理臨床学会大会(東北大学)</p>
担当授業科目	<p>2011年度 <学部>発達臨床心理学、家族心理学、心理検査演習、臨床心理フィールド演習、基礎ゼミナール、専門ゼミナール、卒業研究 <大学院>臨床心理査定演習、臨床心理基礎実習、臨床心理事例研究</p>
シラバスの代表的	心理学(あるいは臨床心理学)における、当該科目が扱う領域の位置づけ、周辺専門領域との関係を理解するためのオリエンテーションを行い、他の講義科目・演習科目とのつながりを意識させる。講義科目では、基礎的な概念に一通り触れ、それらの考え方が実際の支援にどのように活用されているかを考えることができるよう、講義を計画している。演習科目では、学生が主体的に取り組み、課題意識を持てるよう、演習や課題に取り組むプロセスに関与している。取り組みやすい課題からはじめ、徐々に手続きの困難な課題へと進むよう、計画している。
教育改善活動	<p>FD研修への参加:2008年8月、平成20年度FD推進会議(新任専任教員向け)に参加。模擬授業ワークショップを通して、講義の構成、到達目標の提示と達成度の確認、資料作成の工夫について学び、授業改善に活かした。</p> <p>教員間での情報共有による授業改善:学部授業のうち、複数の教員で、同一演習のクラスを担当した授業(心理臨床演習、心理検査演習)について、教員間で演習のねらいと教授方法について検討を行い、授業改善を行った。2009年度からは、学生の目的意識にあわせた達成目標を設定できるよう、大学院進学希望者クラスを新設し、心理検査演習を担当している。また、大学院におけるオムニバス授業(臨床心理基礎実習)では、他教員の担当時間に同席し、他教員の演習の運営方法を学び、自らの演習の改善に活用している。</p> <p>研究結果を活用した教育改善活動:大学院における研修・教育システムに関する研究結果から、授業改善の課題を見出し、臨床心理基礎実習の見直しを進めている。</p>
教育能力に対する評価	<p>(1)学生による授業評価 授業評価アンケートの結果:演習科目においては、4点代後半の高い評価が得られた。特に、心理検査演習、フィールド演習、基礎ゼミナール、卒業研究での評価は高い。自由記述には、実体験を通じた学び、小レポートを通じた理解の深まりに対する評価が書かれている。また、個別指導に対する評価も得られている。講義科目においては平均4点以上の評価が得られた。自由記述には、質問・コメントに対して授業中に応答すること、具体的な事例を含めて説明を行うことが評価される一方、シラバス通りの進行とならず全体的に進度が遅いことに対する批判・要望も出されている。 今後の課題:150人程度の講義において全体の到達度を確認しながらも、一定の進行が保たれるよう(しかし、講義の速度を速めることなく)調整することを今後の課題と考えている。そのための具体的な方策として、授業途中で行った小テストの返却をタイムリーに行い、学生自身の復習を促すこと、質問に対する一部の回答をプリントとして配布することにより、時間の短縮を図ることを検討している。また、視聴覚教材を利用することに対する要望もでており、講義内容を補完するにふさわしい教材の検討を行いたい。</p> <p>(2)同僚教員等による授業評価 同僚教員による授業評価は実施しておらず、今後の課題である。</p>

研究業績

<p>研究の特徴</p>	<p>保育園、幼稚園、学校といった子どもが生活するフィールドにおいて、様々な心理的・行動的困難を抱える子どもの発達を促進する心理臨床的支援の方法について、他専門家との協働をとした実践研究を続けている。発達臨床心理学の観点から、フィールドにおいて子どもの主観的な体験を理解するための枠組みや方法(行動観察・心理検査等)について検討するとともに、その子どもを養育・教育する保護者や関係者(例:保育者、教師)と子どもとの相互交流の理解を基盤とした心理的介入・支援の方法、その後の変化のプロセスについて、検討を進めていきたいと考えている。発達に困難を抱える(いわゆる発達障害)の子どもとその保護者への心理療法、地域における予防的支援(地域における子育て支援、心理教育の実践)にも関心があり、心理臨床センターならびに地域の支援機関との協力のもと、実践活動を行っている。 また、臨床心理士養成大学院の心理臨床センターにおける研修、教育のシステムについて、本学教員・センタースタッフとの共同研究を行っている。</p>
<p>研究経歴</p>	<p>2003年 社会福祉法人相友会浅川保育園相談員として、私立保育園障害児等研修会の運営スタッフの一員として、実践研究に参加(2010年3月まで)。 2004年 お茶の水女子大学大学院 COE 研究員(2004・2005年度)として、附属園・学校における幼児・児童・生徒のメンタルヘルスと園・学校における心理的支援に関する養護教諭との実践協働研究に従事。並行して、地域子育て支援に関するアクションリサーチに従事(2007年3月まで) 2007年 山梨英和大学人間文化学部専任講師として、①保育・学校場面における「気になる」子どもとその保護者への支援に関する保育士・教師との協働実践研究、②臨床心理士養成大学院における効果的な心理臨床教育研修システムに関する研究に従事(現在に至る) 2007年 発達障害早期総合支援モデル事業に関わる発達障害の早期発見に関する健診方法研究委員(2007・2008年度)として、保育園・幼稚園における発達障害児(または発達障害が疑われる幼児)に対する個別支援シートの開発研究に参加(2008年3月まで)</p>
<p>研究実績</p>	<p>(1)著書 a. 森稚葉 (2011) 児童期の子どものメンタルヘルス 伊藤亜矢子編著 『エピソードでつかむ児童心理学』 ミネルヴァ書房 第10章第1節 pp188-191 b. 森稚葉 (2011) 児童期に多い問題 伊藤亜矢子編著 『エピソードでつかむ児童心理学』 ミネルヴァ書房 第10章第2節 pp192-195 c. 分担執筆 (2008) 青木紀久代・神宮英夫編著 『心理学:生活と社会に役立つ心理学の知識』 新星出版社 pp114-117, pp198-199, pp210-211 (発達障害、心理教育プログラム、メンタルヘルスのセルフマネジメント、被害者支援に関する、初学者向けの概説と図説) (2)学術論文 [論文] a.小野綾子・森稚葉(2011) 心理臨床センターにおけるいわゆる「中断・早期終了」事例の検討 山梨英和大学心理臨床センター紀要 第6巻(印刷中) b.森稚葉(2008) 保育場でのコンサルテーションにおける行動観察に関する検討 山梨英和大学心理臨床センター紀要 第3巻, 22-31 c.森稚葉(2007) 学級観察ビデオを用いたカンファレンスの有用性に関する探索的検討 平成16・17・18年度公募研究成果論文集 お茶の水女子大学21世紀COEプログラム誕生から死までの人間発達科学, 51-60 [研究報告書] d.森稚葉(2007) 地域の親ピアサポートリーダー養成プログラム 財団法人子ども未来財団 平成18年度児童関連サービス調査研究等事業報告書(研究課題:子育て支援におけるコミュニティディベロップメントを目指したアクションリサーチ),62-79. e.森稚葉(2007) 学校メンタルヘルス尺度 幼稚園・小学校低学年用の検討 21世紀COEプログラムプロジェクトⅡ「幼児期から青年期までのメンタルヘルス縦断研究～心理的援助のためのアウトリーチプログラムの構築～」最終報告書(お茶の水女子大学),129-134. f.森稚葉(2006) 子育て広場担当者からの評価 財団法人子ども未来財団 平成17年度児童関連サービス調査研究等事業報告書(研究課題:インターネットによる子育てサークルのネットワーク化に (3)その他の研究活動(国際会議発表、学術誌編集、学術論文査読等) a. <u>Chiyo Mori</u>, Kikuyo Aoki, Kazuo Shimamoto, Kiyoko Tomita & Masako Yatsuda. (2008) "Collaboration with nursery specialists and psychologists on child-care support service in Japan - Effect of training of nursery specialists with psychologists on 'noticeable children'" The 11th World Congress of the world association of Infant Mental Health (Yokohama), Poster Session, <i>Infant Mental Health Journal</i>, 29(3A)Supplement b. <u>Chiyo Mori</u>, Kikuyo Aoki, Hiromi wafuji, Sumiko Yamawaki, & Yumiko Iume (2004) "The assessment of child mental health at transition to elementary school." The 28th International Congress of Psychology (China) ,Poster Session, Abstract Book. p961</p>
<p>競争的資金採択課題</p>	<p>2004年4月-2005年3月 平成16年度お茶の水女子大学21世紀COEプログラム「誕生から死までの人間発達科学」公募研究 研究課題「学級場面におけるビデオ観察を用いたフィードバックの有用性に関する検討」(金額42万円)</p>

<p>学会等発表・役員参加</p>	<p>2010年 9月 森稚葉・黒田浩司・小野綾子・田中健夫・馬場禮子 効果的な心理臨床教育・訓練システムに関する研究(2)いわゆる「中断・早期終了」ケースの要因に関する分析研究 第27回心理臨床学会大会(東北大学)</p> <p>2007年 9月 朝日香栄・青木紀久代・高木悦子・森稚葉 保健分野「心の発達と健康」における、仲間関係の変化に重点をおいた回想型授業の実践 第54回日本学校保健学会講演論文集(和洋女子大学)</p> <p>2007年 7月 森稚葉 保育園子育てひろばにおけるコミュニティワークの展開(事例発表) 日本コミュニティ心理学会研修委員会主催平成19年度7月研修「教育組織へのコミュニティ心理学的介入を考える」(九州大学)</p> <p>2006年 11月 森稚葉・青木紀久代・富田貴代子・矢野由佳子 保育における心理臨床研修の実践(6)ー研修参加歴・保育歴から見た研修効果の検討 日本心理学会第70回大会(九州大学)</p> <p>2006年 7月 森稚葉・青木紀久代・富田貴代子・村木紘子・平山敦子・谷田征子 インターネットによる親ネットワーク形成の試みー保育園との協働を軸としてー(2)ひろば担当者から見た実践評価 日本コミュニティ心理学会第9回大会発表論文集(お茶の水女子大学)</p> <p>2005年 9月 森稚葉・青木紀久代・武田(六角)洋子・山脇澄子・井梅由美子 学校コミュニティにおける発達臨床心理学的支援(8)ービデオを用いたフィードバックカンファレンスの意義について 日本臨床心理学会第24回大会発表</p> <p>2005年 9月 森稚葉・青木紀久代・矢野由佳子 保育における心理臨床研修の実践(4)ー3年間における「気になる子ども」の様子と対処の変化 日本心理学会第69回大会(慶應義塾大学)</p>
<p>共同研究・受託研究の実績</p>	<p>2009年 12月 山梨英和大学大学院・心理臨床センター協同研究 研究課題「臨床心理士養成大学院における効果的な心理臨床教育研修システムに関する研究」(研究代表者:馬場禮子)における共同研究者</p> <p>2007年 4月 山梨県教育委員会 発達障害早期総合支援モデル事業に関わる発達障害の早期発見に関する健診方法研究委員(2007・2008年度)として、保育園・幼稚園における発達障害児(または発達障害が疑われる幼児)に対する個別支援シートの開発研究に参加(2008年3月まで)</p> <p>2006年 4月 財団法人子ども未来財団 平成18年度児童関連サービス調査研究等事業(研究課題:子育て支援におけるコミュニティディベロップメントを目指したアクションリサーチ 研究代表者:青木紀久代)における研究協力者(2007年3月まで)</p> <p>2005年 4月 財団法人子ども未来財団 平成17年度児童関連サービス調査研究等事業(研究課題:研究課題:インターネットによる子育てサークルのネットワーク化に関する調査研究 研究代表者:青木紀久代)における研究協力者(2006年3月まで)</p>
<p>大学院生指導</p>	<p>[臨床指導] ① 定期的(面接初期は毎週、面接中期以降は隔週、または毎月)に、1回1時間の個人スーパービジョンを行う(2007年から計11名へ実施) ② ウェクスラー式知能検査、発達検査の所見作成に関する個別指導を行う。 ③ インテーク面接担当者として、受理面接への研修生の陪席、発表用資料作成の個別指導を行う。 ④ 親子並行面接共同治療者として、コミュニティにおける環境調整支援のあり方を伝達し、大学院生が子ども治療者として自立した姿勢で事例に関与する姿勢を学びとれるよう、個別に情報共有の時間を設ける。 [研究指導] 山梨英和大学大学院にて、副査をつとめる。 2010年度 「日本版IFEEL-Picturesを通して見た母親の関係性評価の研究」「児童養護施設における心理的援助と他職種との連携ー施設心理士の発展を目指してー」 2007年度 「虐待児の身体的・心理的発達の特徴ー虐待が発達におよぼす影響について」 「障害児の親の障害否認・受容に関するー研究」</p>
<p>研究能力に対する評価</p>	<p>① 保育・学校場面における「気になる」子どもとその保護者への支援に関する保育士・教師との協働実践研究:主に保育園・学校をフィールドとして、他専門家との協働実践を継続して行い、山梨県内での研修会において、その実践成果をもとに専門家への研修活動を行っている。研修後のアンケートによると、保育や教育実践における研修効果が認められ、現場の専門家との間で継続してきた協働実践の一定の成果があると考えている。しかし、2008年以降、当該テーマに関する学会発表、研究報告論文を発表・好評していない。これらの実践の成果をまとめ、対外的に発信することが課題である。 ② 臨床心理士養成大学院における効果的な心理臨床教育研修システムに関する研究では、心理面接に関する教育の課題が見出されている。その結果は、教育改善活動にも活かすことができている。対外的にその成果を発信しており、今後も研究を推進していくことが求められる。</p>

サービス活動業績

学内委員会・作業部会等 活動実績	2007年	4月	教務委員会、入試委員会、入試実務委員会 委員(2008年3月まで)
	2007年	10月	新教育課程カリキュラム検討委員会 委員(2009年3月まで)
	2008年	4月	入試委員会、入試実務委員会 委員(2009年3月まで)
	2009年	4月	心理社会コースコーディネーター、教務委員会、ハラスメント相談員(2011年3月まで)、ハラスメント防止委員会 委員(2010年3月まで)
	2009年	12月	留学生教育体制等点検委員会 委員(2010年4月まで)
	2010年	4月	広報委員会 委員(2011年3月まで)、図書館運営委員会、紀要委員会 委員(現在)
	2010年	9月	スポーツ・学芸特待生制度検討会 委員(2010年12月まで)
	2011年	4月	国際交流委員会 委員(現在に至る)
アドバイザー活動実績		2011年度は、2年生22名、3年生10名、4年生9名のアドバイザーを担当(例年、同数程度を担当)。週1回1コマのオフィスアワーの他、個別面接の時間を設け、履修、学業、生活、進学、就職に関する相談に応じ、適切な相談窓口(学生相談室、保健室、学生部)への紹介を行う。 各ゼミナールでは、懇親を広げる(または深める)ための時間を複数回とり、対人関係形成の機会を設けている。また、3年次以降は、専門教育の理解を深めるために、教員が実践で関わっているフィールド(保育園)への参加体験、ボランティアの紹介を行っている。	
後進育成活動実績		2009年度は、大学院修了生(希望者)に、保育士との自主研究会への参加を通して、保育園でのコンサルテーションに関する卒業指導を行った。	
社 会 会	(1)講演会		
	2011年	2月	山梨こたばを育む親の会主催 教育講演会 講師:言語障害を持つ子どもの保護者、こたばの教室担当教員、保育士を対象に、「子どもと言葉と発達 ~臨床心理士の立場からみえてくるもの~」という題で、言語発達と情動発達との関連について、講演を行った。
	2011年	1月	地域療育等支援事業保育所等職員研修会 講師:親子の関係性の問題を抱え、発達面での偏りがみられる子どもの理解と対応について、『『気になる』子どもの理解と対応』という演題で2回、講演を行った(2011年1月:大月、2010年11月:甲府)
	2010年	10月	甲斐市愛育会主催 子育て講演会 講師:未就園児を子育て中の親を対象として、「子育てに正しい“答え”はあるの?」という演題で、講演を行った。
	2010年	6月	山梨県義務教育課主催 山梨県園長等運営管理協議会 講師:特別支援教育における保護者支援の考え方と留意点について、「特別支援教育における保護者支援」という題で講演を行った。
	2010年	3月	山梨県言語聴覚士会主催 学術講演会 講師:障害を持つ人の心理的体験と支援者との関係について「患者-支援者間のコミュニケーションを考える ~心理臨床の実践から~」という題で講演を行った
	2009年	10月	山梨県情緒障害教育研究会 講師:不登校の心理面での理解と、保護者へのカウンセリングの基本方針について「不登校の子どもと親へのカウンセリング」の題で講義を行った。
その他、保育実践・母子保健・発達障害に関する研修会、子育て講演会、事例検討会を複数担当			
貢	(2)出前講座		
	2010年	3月	南アルプス市子育て支援課主催 ファミリーサポート講習会:ファミリーサポーター候補者に対し、子育てをめぐる社会的変化と保護者の心理的特性、関与の仕方について、「いまどきの子育て事情とコミュニケーション」という題で、講習会を行った。(2008年~計4回)
献	2008年	12月	山梨県発達障害者支援センター主催 発達障害児(者)サポーター養成講座:発達障害を持つ生徒への家庭訪問を行う大学生ボランティアを養成するための基礎講座を行った。
	(3)公開講座		
	2008年	5-7月	山梨英和大学メイプルカレッジ:「子どもの育ちと親子の関わり」という講座を開催した。
活	2007年	9月	山梨英和大学主催 公開講演会(長野) 講師:「子どもの心を理解する:心の発達とメンタルヘルス」という題で、中学生・高校生のメンタルヘルスとその支援に関する講演を行った。
	(4)学外審議会・委員会等		
2007年	4月	山梨県特別支援教育体制推進事業 中・西部地域LD等専門家チーム委員(2010年度より、山梨県特別支援教育専門家チーム委員に名称変更)として、依頼事例に対する判断と支援プランの策定に関わる(現在に至る)	

動	(5)その他	
	2010年	8月 山梨日日新聞「虐待-子育て一人で背負わずに」（2010年8月14日13面）、虐待が疑われる親に対する予防的支援の必要性に関する意見が掲載された。
	2008年	10月 山梨県中北保健所長期療養児療育事業におけるピアサロン(母親同士のピアサポート的集まり)におけるカウンセラーおよび事業評価を担当(年2回出席)(現在に至る)
	2008年	4月 山梨県発達障害等支援・特別支援教育総合推進事業 LD等巡回相談員 (2010年度より、山梨県特別支援教育巡回相談員に名称変更)として、複数の小中学校への巡回相談を行う。(現在に至る)
	2007年	7月 山梨市公立保育所保育士研修担当として、定期的に園訪問とコンサルテーション、研究会を開催し、毎年2回程度の研修会を実施する。(現在に至る)
2007年	4月 山梨県適応指導教室(石和こすもす教室)カウンセラーとして、教室内での事例検討会、学習講演会講師、「訪問指導の手引」作成時の助言を行う。(2010年3月まで。ただし、事例検討会担当は現在に至る)	

成果と目標

専門的成果	<p>① 山梨県内において複数の保育園での心理的支援実践を継続することを通して、支援の方略に関する実践的な理解を深めてきた。支援実践の過程に学生や修了生を参与させる機会を作り、教育上の効果も得られたと考えている。自船から得られた理解を活かし、保育・教育の場における支援に関する研修会を複数を行い、参加者・運営者より一定の評価と成果が得ることができた。</p> <p>② 臨床心理士養成大学院の心理臨床センターにおける研修、教育のシステムについての研究において、調査分析の役割を担った。その成果として、心理面接の研修過程で、面接中断に至りやすい条件が一部明らかとなった。さらにその結果を活かし、心理臨床基礎実習のシラバスの見直しを進めている。</p> <p>③ 心理臨床センターにおいて、発達に困難を抱える子どもの保護者に対する心理面接を複数担当し、園・学校との連携を通じた支援を行うとともに、共同治療者として研修生と関わった。このことを通し、研修生にコミュニティ支援の実際を伝えることが可能になったと考えている。</p>
専門的目標	<p>① 保育園における心理的支援に関する実践事例を集約し、保育コンサルテーション、保育カウンセリングに関する実践的に役立つ支援の枠組みに関する知見を発信する。</p> <p>② 臨床心理士養成大学院の心理臨床センターにおける研修、教育のシステムについての研究を進める。その知見を活かして、大学院カリキュラム、および個別指導のあり方を改善する。</p> <p>③ 発達に困難を抱える子どもとその保護者に対する心理療法技術を向上させる。自らが心理療法を担当するとともに、より適切な臨床指導を研修生に提供することを可能とし、心理臨床センターの臨床活動の充実と地域社会への貢献に寄与したい。</p>

最新データ入力日	2011年 4月 1日
----------	-------------

専任教員職務業績集

山梨英和大学

フリガナ 氏名	性別	生年(西暦)	職名	所属
タカハシ ヒロユキ 高橋 弘毅	男	1976年	講師	人間文化学部人間文化学科
取得学位称号	博士(理学)	専門分野	数物系科学・物理学・素粒子・原子核・宇宙線・宇宙物理	
学 歴	1995年	3月 東京都 私立 日本大学第三高等学校 卒業		
	1995年	4月 青山学院大学 理工学部 物理学科 入学		
	1999年	3月 青山学院大学 理工学部 物理学科 卒業 学士(理学)		
	1999年	4月 新潟大学大学院 自然科学研究科 物質基礎科学専攻 博士前期課程 入学		
	2002年	3月 新潟大学大学院 自然科学研究科 物質基礎科学専攻 博士前期課程 修了 修士(理学)		
	2002年	4月 新潟大学大学院 自然科学研究科 エネルギー基礎科学専攻 博士後期課程 入学		
	2002年	10月 大阪大学大学院 理学研究科 宇宙地球科学専攻 特別(派遣)研究学生(2004年9月まで)		
	2005年	3月 新潟大学大学院 自然科学研究科 エネルギー基礎科学専攻 博士後期課程 修了 博士(理学)		
実 務 経 験	2003年	4月 京都大学 基礎物理学研究所 教務補佐員(2004年3月まで)		
	2004年	4月 大阪大学大学院 理学研究科 宇宙地球科学専攻 特任研究員(2004年9月まで)		
	2005年	4月 大阪市立大学大学院 理学研究科 数物系専攻 博士研究員(2005年8月まで)		
	2005年	9月 ドイツ・マックスプランク重力物理学研究所(アルバート・アインシュタイン研究所) ポストドクター研究員(2007年8月まで)		
	2007年	9月 長岡技術科学大学 工学部 経営情報系 助教 長岡技術科学大学 eラーニング研究実践センター 助教(兼任)(2010年3月まで)		
	2010年	4月 山梨英和大学 人間文化学部 人間文化学科 助教(2011年3月まで)		
	2010年	10月 東京大学 地震研究所 外来研究員(現在まで)		
	2011年	4月 山梨英和大学 人間文化学部 人間文化学科 専任講師 現在に至る		
受 賞 歴	2004年	5月 学術論文“Toward the search for the gravitational waves from inspiralling compact binaries in TAMA300 data : the data quality and stability”, Classical Quantum Gravity, Vol. 21, S697. (H.Takahashi et. al.)がイギリスIOP (Institute Of Physics) 出版発行 Classical and Quantum Gravity 誌の2003-2004 年のリサーチハイライトに選出される		
所 属 学 会	2001年	6月 日本物理学会会員(現在に至る)		
	2009年	3月 日本オペレーションズ・リサーチ学会会員(現在に至る)		
	2008年	9月 日本物理学会 新潟支部委員会 委員(庶務担当)(2010年8月まで(任期2年))		
特 免 資 格 等 ・ ・	1999年	3月 高等学校教諭 理科 第一種免許状 取得		
	1999年	3月 中学校教諭 理科 第一種免許状 取得		
	2002年	3月 高等学校教諭 理科 専修免許状 取得		
	2002年	3月 中学校教諭 理科 専修免許状 取得		
	2010年	9月 五島洋行、高橋弘毅、笠原統徳、“スケジュール作成方法、スケジュール作成装置及びコンピュータプログラム”、特開2010-198339 その他、出願中1件		

目 次

○教育業績	
教育理念、方針、方法	297
教育能力	
教育方法実践例	297
作成した教科書、教材等	297
教育方法や実践に関する発表、講演等	297
担当授業科目	297
代表的なシラバス	298
教育改善活動	298
教育能力に対する評価	298
○研究業績	
研究の特徴	299
研究経歴	299
研究実績	
著書	299
学術論文	299
その他の研究活動	300
競争的資金採択課題	301
学会等発表、役員参加	301
共同研究・受託研究の実績	301
大学院生指導	302
研究能力に対する評価	302
○サービス活動業績	
学内委員会・作業部会等活動実績	303
アドバイザー活動実績	303
後進育成活動実績	303
社会貢献活動	303
○専門的活動(教育業績、研究業績、サービス活動業績)の統合による成果と目標	
専門的成果	304
専門的目標	304
○添付資料	
略	
○最新データ入力日	304

教育業績

<p>教育理念、方針、方法</p>	<p>大学教育の新しい流れとして、「文理融合」という言葉を最近よく耳にする。社会を見回しても、ほとんどの仕事は文系・理系両方の知識を備えて初めてきちんとこなせると考える。情報化・グローバル化が進んだ今、ますます両者のバランスが要求されている。</p> <p>理系の枠を超えて文系がわかる理系人間、そして文系の枠を超えて理系がわかる文系人間の育成、すなわち、幅広い視点をもって物事を見る事が出来る人間の育成が、教育理念である。特に、<u>1. 数理的な素養、2. コミュニケーション能力、3. 論理的思考、4. 情報の高度な応用</u></p> <p>という4つの力をバランス良く身につける事に重点を置いている。将来、研究やビジネス社会で国際的な活躍をするために必要な物理・数学や情報数理の知識、技術が身につくよう数理系教育を設計して行かなくてはならない。現代では、統計学、定量分析、社会調査、マーケティングなど、多くの分野で数理的素養が求められてる。現在の学生は、数理的素養が「自分に必要だ」という事を理解すれば、一生懸命勉強、理解し、その力を伸ばす能力は十分に持っている。今後学生自身が飛び込んでゆく、研究やビジネス社会のどんな場面で、どのような数理的素養が必要なのかに焦点を当て講義を展開して行くことが重要なのではないかと考えている。</p> <p>以上の点を学生に少しでも感じ取ってもらえるようなセミナー・講義を展開したい。もちろん、考えることのおもしろさ、現象を色々な方面から分析することの楽しさも伝えていきたい。</p>
<p>教育能力</p>	<p>(1)教育方法実践例</p> <p>a. 経営システム基礎実験の立ち上げ： 長岡技術科学大学 経営システム工学課程のカリキュラムにおいて、特にハードに関する実践的な知識を吸収できる実習、実験が不足していた。そこで、特に、ハード面に特化した実習、実験を立ち上げた。</p> <p>b. 組込みシステムのプロジェクト指向学習に向けたeラーニングの手法およびシステムの研究開発： 組込みシステム開発のプロジェクト型実習(Project-Based Learning、PBL)において、受講者が時間的・空間的に頻繁に集合することが困難な場合、また、受講者が持っている事前知識にバラツキがある場合でも、効果的な学習を実現する、eラーニングを用いた教育手法、および、それに必要なシステム技術の確立を目的としている。</p> <p>など。その他、多数。</p> <p>(2)作成した教科書、教材等</p> <p>a. 高橋 弘毅、“なぜ人は宇宙を知りたいのか？ --宇宙を観る新しい目--”、「挑戦こそが成功の鍵」、吉川 敏則、末松 久幸(編)、pp.179-185、近代科学社、ISBN: 978-4-7649-5021-4、2010.</p> <p>b. eラーニングコンテンツを開発： 長岡技術科学大学 学部1年向け物理学講義「物理学I」のeラーニングコンテンツを開発。</p> <p>c. 文部科学省 教育情報通信ネットワーク(エル・ネット)(学習コンテンツ流通促進事業)：『防災と自然 -安全と環境を守るための知恵と技-』共同開発。</p> <p>(3)教育方法や実践に関する発表、講演等</p> <p>a. 中平勝子、高橋弘毅、“情報化がもたらした弊害 -そのグラフ何ですか？ -”、大学の物理教育 Vol. 15, 24. (日本物理学会)</p>
<p>担当授業科目</p>	<p>2011年度： ITリテラシー演習 1 および 2、情報システム実験演習I および II、オペレーションズ・リサーチ、IT English、専門ゼミナール、卒業研究</p>

代表的シラバス	<p>演習・講義の方針としては、特に演習では、学生自身が自主的に課題への取り組みが出来るように最大限配慮をしている。課題に対する説明は、最小限とし、単に「教わる」演習はなく、実際の研究や仕事に近い形で調査からデータ解析、資料作成までを全て自力で行なうことができるように構成している。</p>
教育改善活動	<p>a. 教育改善(FD)部会委員(2008年度、2009年度): 長岡技術科学大学 工学部 経営情報系 教育改善(FD)部会委員として、系内のFD活動やFD講演会などの企画。</p> <p>b. 講義撮影システムの導入(2008年度): 長岡技術科学大学E講義室に電子黒板およびパワーポイントと連動し、講義をリアルタイムに収録可能なシステムの導入。</p>
教育能力に対する評価	<p>(1) 学生による授業評価</p> <p>演習・講義の全体評価(講義アンケートより): 演習・講義の方針としては、学生自身が自主的に課題への取り組みが出来るように最大限配慮をした。課題に対する説明は、最小限とし、学生自身が手を動かし、分からないところを自分自身で発見し、その疑問に対しては常に質問できるように、担当教員、TAの学生2名は、フル回転であった。毎回の演習毎に課題を与えており、一度休むとついてくるのが大変であるという事もあってか、おおむね出席率もよく、また課題に対する理解度も比較的高い傾向にあった。 <u>良い点・改善してほしい点(講義アンケート自由記述欄より)</u>: 自分のペースで、課題に取り組む事ができたという意見がかなりの数あった。演習講義では、特につきまとう悩ましい意見ではあるが、課題が簡単すぎる、難しすぎるなど、学生の理解度のばらつきが意見として上げられている。また、演習講義の方針に対しても、質問がしやすく、また、TAを含め3人誰にでも質問できる環境は非常によいなど、本方針が学生にとっても比較的良好な影響を与えていると考えられる。</p> <p><u>改善に向けた今後の方針</u>: 学生のレベルがバラバラの中で、課題に対する説明は、最小限とし、学生自身が手を動かし、分からないところを自分自身で発見し、解決して行くという事はなかなか難しい事である。進度の早い学生には、追加の課題を与える等工夫をしたつもりではあったが、その一方で、進度の遅い学生に対しては、追加課題がプレッシャーとなっていた感がある。この点に関しては、何らかの対策を、模索して行く必要がある。</p> <p>(2) 同僚教員等による授業評価</p> <p>現在、同僚教員等による講義評価は行なっていない。今後の課題である。</p>

研究業績

研究の特徴	<p>主に重力波物理学、および、物理学の知識を応用した情報数理学分野の2つを研究の主要なテーマとして扱っている。重力波とは、時空の揺らぎが光と同じ速度で波動として伝わる現象で、アインシュタインの一般相対性理論によって予言されている。しかし、重力相互作用は非常に弱いため、この重力波を直接検出することは未だ実現していない。世界に先駆け、重力波の直接検出を実現するため、広範な専門知識や大規模コードのプログラミングを駆使し、国内外の重力波観測プロジェクトのメンバーと共に研究を進めている。</p> <p>その一方で、2007年からは、物理学の知識を応用した、数理学・経営工学および制御工学の分野の研究に興味を持ち研究を進めている。我々の研究グループでは、同一資源を用いて複数プロセスを繰返し実行する離散事象システムのスケジューリング方法について検討を進めている。当該研究は、Dioïd代数に基づくシステムのモデリングとその制御系設計問題として位置づけられ、生産システムの他、交通システムや通信ネットワーク、さらにプロジェクト管理などへ応用可能である。従来は勘と経験に頼らざるを得なかった、繰返し実行型システムのスケジューリング方法に関して、前進することが期待されている。</p>
研究経歴	<p>2003年 京都大学 基礎物理学研究所 教務補佐員 数値計算手法、データマイニング手法に関する研究に従事（2004年3月まで）</p> <p>2004年 大阪大学大学院 理学研究科 宇宙地球科学専攻 特任研究員 数値計算手法、データマイニング手法に関する研究に従事（2004年9月まで）</p> <p>2005年 大阪市立大学大学院 理学研究科 数物専攻 博士研究員 数値計算手法、データマイニング手法に関する研究に従事（2005年8月まで）</p> <p>2005年 ドイツ・マックスプランク重力物理学研究所（アルバート・アインシュタイン研究所）ポストドクター研究員 数値計算手法、データマイニング手法に関する研究に従事（2007年8月まで）</p> <p>2007年 長岡技術科学大学 工学部 経営情報系 助教 スケジューリング手法、eラーニング等の研究に従事（2010年3月まで）</p> <p>2010年 山梨英和大学 人間文化学部 人間文化学科 助教 データマイニング手法、スケジューリング手法に関する研究に従事（現在まで）</p> <p>2010年 東京大学 地震研究所 外来研究員 データマイニング手法に関する研究に従事（現在まで）</p>
研究	<p>(1) 著書</p> <p>a. 高橋 弘毅, “なぜ人は宇宙を知りたいのか? —宇宙を観る新しい目—”, 「挑戦こそが成功の鍵」, 吉川 敏則, 末松 久幸(編), pp.179-185, 近代科学社, ISBN: 978-4-7649-5021-4, 2010.</p> <p>(2) 学術論文（最新のものから記載）</p> <p>a. Munenori Kasahara, Hirotaka Takahashi, Hiroyuki Goto, “Resolution of Resource Conflict Between the Different Two Projects in MPL-CCPM Representation”, WSEAS TRANSACTIONS on INFORMATION SCIENCE and APPLICATIONS, Issue 6, Vol. 7, 774-783 (2010).</p> <p>b. Masaaki Morita, Hirotaka Takahashi, “Secondarily-induced gravitational wave background in modified gravity”, Journal of Physics: Conference Series, Vol. 229, 012054 (2010).</p> <p>c. Hiroyuki Goto, Hirotaka Takahashi, “Transferring Progress Control Policies in Scheduling Problems for a Class of Repetitive Discrete Event Systems”, International Journal of Control, Vol.82, 421-431 (2010).</p> <p>d. Hiroyuki Goto, Hirotaka Takahashi, “Fast Computation Methods for the Kleene Star in Max-Plus Linear Systems with a DAG Structure”, IEICE Transactions on Fundamentals, Vol.E92-A, No.11, 2794-2799 (2009).</p> <p>e. Hirotaka Takahashi, Hiroyuki Goto, Munenori Kasahara, “Toward the Application of a Critical-Chain-Project-Management-based Framework on Max-plus Linear Systems”, Industrial Engineering and Management Systems, Vol.8 No. 3, 155-161 (2009).</p> <p>など。その他、詳しい情報は http://www.yamanashi-eiwa.ac.jp/~hirotaka/research.html を参照</p>

実	(3)その他の研究活動(国際会議発表、学術誌編集、学術論文査読等)(最新のものから記載)
績	<p>a. Shotaro Yoshida, Hirotaka Takahashi, Hiroyuki Goto, “Modified Max-Plus Linear Representation for Inserting Time Buffers”, Proceedings of The IEEE International Conference on Industrial Engineering and Engineering Management (IEEM), in Macao pp. 1631-1635, 2010.</p> <p>b. Masaaki Morita, Hirotaka Takahashi, “Gravitational wave background in modified-gravity dark energy models”, The Spanish Relativity Meeting 2010 (ERE2010), in Granada, Spain, 2010.</p> <p>c. Jordan B. Camp, Yuta Hiranuma, Ken-ichi Oohara, Alexander Stroeer, Makoto Saito, Masatomo Saito, Hirotaka Takahashi, “Effectiveness of Empirical Mode Decomposition in search for Gravitational Wave Signals”, The 20th workshop on General Relativity and Gravitation in Japan (JGRG20) in Kyoto.</p> <p>d. Munenori Kasahara, Hirotaka Takahashi, Hiroyuki Goto, “Toward the Resolution of Resource Conflict in a MPL-CCPM Representation Approach”, The 4th WSEAS International Conference on Management, Marketing and Finances (MMF '10), In Penang, pp.143-148, 2010.</p> <p>e. 学術雑誌 Classical and Quantum Gravity、および、学術雑誌 Physical Review Dのレフェリー(2005年4月から現在)</p> <p>など。その他、詳しい情報は http://www.yamanashi-eiwa.ac.jp/~hirotaka/research.html を参照</p>

競争的資金採択課題	<p>a. 2008年6月～2010年3月 財団法人 内田エネルギー科学振興財団試験研究費助成、『重力波検出器・レーザー伸縮計データ解析方法の研究』、研究代表者 (450 千円)</p> <p>b. 2009年4月～2010年3月 財団法人 日本科学協会 笹川研究助成、『Hilbert-Huang変換を用いた重力波検出器データ解析法の研究』、研究代表者 (470千円)</p> <p>c. 2008年6月～2010年3月 戦略的情報通信研究開発推進精度(総務省)、代表者:長岡技術科学大学 湯川高志、『組み込みシステムのプロジェクト思考学習に向けたeラーニングの手法およびシステムの研究開発』、研究分担者</p> <p>d. 2008年6月～2011年3月 科学研究費補助金基盤研究(C)、代表者:新潟大学 大原謙一、『数値相対論による重力波テンプレートの構築と重力波データ解析法の研究』、研究分担者</p> <p>e. 2009年6月～2011年3月 日本学術振興会・二国間交流事業インド (DST) (IUCAA)との共同研究 代表者:大阪市立大学 神田展行、IUCAA Sanjeev Dhurandhar、『LCGTと先進的検出器の重力波検出の研究』、研究分担者</p> <p>など。その他、詳しい情報は http://www.yamanashi-eiwa.ac.jp/~hirotaka/research.html を参照</p>
学会等発表・役員参加	<p>最新のものから記載</p> <p>2010年 9月 高橋弘毅, 五島洋行, 吉田翔太郎, “クリティカルチェーン法のMax-Plus線形システムへの適用 —二つのプロジェクト間でのリソースの競合発見法—”, 日本オペレーションズリサーチ学会 2010年秋季研究発表会, pp84-85, 2010.</p> <p>2010年 8月 吉田翔太郎, 高橋弘毅, 五島洋行, “クリティカルチェーン法のMax-Plus線形システムへの適用 —新たな時間バッファの挿入法—”, 計測自動制御学会 第47回離散事象システム研究会, pp.7-12, 2010.</p> <p>2010年 5月 石田 佳亮, 湯川 高志, 高橋 弘毅, 福村 好美, “履歴再生機能を備えたオンラインホワイトボード・チャット連携システム”, 情報処理学会第1回CLE研究会, 放送大学 本部図書館.</p> <p>2010年 3月 平沼悠太, 齊藤真, 齋藤真朋, 大原謙一, 高橋弘毅, “Hilbert-Huang変換を用いた重力波探査法の検討”, 日本物理学会(春), 岡山大学.</p> <p>2009年 11月 川南 篤司, 五島 洋行, 高橋 弘毅, “地産地消を目指した第二世代バイオエタノール生産事業に関する研究”, 日本経営工学会 平成21年度秋季研究大会, pp.66-67, 2009.</p> <p>2008年 9月 日本物理学会 新潟支部委員会 委員(庶務担当)(2010年8月まで(任期2年))</p> <p>など。その他、詳しい情報は http://www.yamanashi-eiwa.ac.jp/~hirotaka/research.html を参照</p>
受託共同研究の実績	<p>最新のものから記載</p> <p>2010年 4月 『神岡重力波検出機CLIOデータの解析』、東京大学 宇宙線研究所 共同利用研究(2011年3月まで)、研究代表者</p> <p>2009年 4月 『神岡での重力波観測』、東京大学 宇宙線研究所 特定共同研究 (2011年3月まで)、研究分担者(2010年3月まで)、研究分担者</p> <p>2009年 4月 『大型低温重力波望遠鏡の開発・設計』、東京大学 宇宙線研究所 特定共同研究、研究分担者(2010年3月まで)、研究分担者</p> <p>2009年 4月 『Hilbert-Huang変換を用いた神岡レーザー伸縮計データ解析法の研究』、東京大学 地震研究所 一般共同研究、(2010年3月まで)、研究代表者</p> <p>など。その他、詳しい情報は http://www.yamanashi-eiwa.ac.jp/~hirotaka/research.html を参照</p>

<p>大学院生指導</p>	<p>大学院生(副)指導教員(長岡技術科学大学 工学研究科):</p> <p>2009年度 1. Dioid代数を用いた繰り返し型離散事象システムのスケジューリング方法 2. 地産地消を目指した第2世代バイオエタノール生産事業に関する研究</p> <p>2008年度 1. 都市の道路ネットワーク評価に関する一提案 2. 時間軸を考慮したWebニュースの効率的な検索方法の提案</p> <p>2009年度指導をした大学院生が、大学院修了後、日刊工業新聞社 2010フレッシュヤーズ産業論文コンクールI部 努力賞を受賞</p>
<p>研究能力に対する評価</p>	<p>「重力波の初検出」に向けて、国内外のグループの非常にノイズの多い検出器データから重力波信号を探し出す方法の開発(アルゴリズムの開発)を中心に行なっている。提起されたアルゴリズムが国内外の重力波検出に対して中心的な役割を果たすものと期待されている。なお、イギリスのInstitute of Physics (IOP)が出版している学術雑誌Classical and Quantum Gravity誌 (Impact Factor : 3.029) の2003-2004年のリサーチハイライトに選ばれており、重力波検出のために必要なデータ解析手法を確立一翼を担ったものと高く評価されている。(参考URL http://www.iop.org/EJ/journal/page=extra.High0304/CQG)</p> <p>また、2007年から着手した物理学の知識を応用した数理科学・経営工学および制御工学の分野の研究においては、長岡技術科学大学のグループとともに研究を進め、研究成果の学術雑誌への公表をはじめ、国際会議発表や国内学会発表など着実に成果を出し始めている。本研究をはじめてまだ日が浅いが、将来、生産システムその他、交通システムや通信ネットワークなどの様々な実システムへ応用する研究においても中心的な役割果たすと期待されている。</p>

サービス活動業績

学内委員会・作業部会等活動実績	2011年	4月	情報システム コースコーディネーター
	2011年	4月	教務委員会、IT委員会、広報委員会、図書委員会、紀要委員会 委員
	2010年	4月	IT委員会、広報委員会、入試委員会、入試実務委員会、事務システム検討委員会 委員 (2011年3月まで)
	2007年	9月	長岡技術科学大学 安全・衛生・防火対策委員会、職員レクレーション委員会 委員 (2010年3月まで)
	2007年	9月	長岡技術科学大学 経営情報系 教育手段改善部会 (FD部会) 委員、基礎学力向上部会 委員 (2010年3月まで)
アドバイザー活動実績		特になし	
後進育成活動実績		特になし	
社会貢献活動	(1)講演会		
	2009年	7月	長岡市 青葉台コミュニティ推進協議会 主催 科学講演会 講師：2009年7月22日の皆既日食観測のために、皆既日食の予備知識、観測方法や観測に対する注意事項などを『日食と天体 --7.22.長岡で何が起こる?--』と題して講演を行なった。
	(2)出前講座		
	2008年	6月-7月	長岡市主催 ながおか市民大学『旅行学入門』講師：主にドイツ・アメリカでの研究生生活や旅の経験をふまえ、さまざまな失敗談を交え旅の極意を伝え、実学的な観点から旅の醍醐味を見つけ出す講座を行なった。
	(3)公開講座		
2010年	10月	長岡技術科学大学 主催 長岡技術科学大学 公開講座 に山梨英和大学から派遣講師として、『宇宙物理入門～ブラックホールからダークエネルギーまで～』を行なった。	
(4)学外審議会・委員会等			
2008年	9月	日本物理学会 新潟支部委員会 委員(庶務担当) (2010年8月まで(任期2年))	
(5)その他			
2008年	8月	高校—大学連携科目 高校生講座、および、高校—大学連携科目 高校教員講習：『さざ波を聞こう(潮汐力)』と題して、地球物理学に関連する講座を開設した。講座では、高校1、2年生、高校教員が、研究者疑似体験を行った。	
など。その他、詳しい情報は http://www.yamanashi-eiwa.ac.jp/~hirotaka/research.html を参照			

成果と目標

専門的成果	<p>①重力波天文学分野における研究:一般相対論によりその存在が予言されている重力波が、中性子星やブラックホールなどのコンパクト星の連星系(コンパクト連星)から放射されていることは、連星パルサーPSR1913+16などの電波観測で間接的に明らかになっている。しかし、重力相互作用は非常に弱いので、この重力波を直接検出することは未だ実現していない。近年のレーザーを用いた微小計測技術の発展により、重力波を直接検出することが実現可能となりつつある。重力波の検出は、一般相対論の検証において、動的な重力場の性質に関するものとして非常に重要であると同時に新しい天文学を開く可能性を秘めている。特に、途中の物質との相互作用が小さいという重力波の特質から、電磁波による観測とは質の異なった新しい情報が得られることが期待できる。このような「重力波天文学」の創生に向け、日本の TAMA300、米国の LIGO、欧州の GEO600、Virgo は 2000 年前後に建設され、これらの研究グループに積極的に参加し、重力波検出に対する技術的な有効性を実証した。</p> <p>②情報数理学分野での研究:本分野での研究経験はまだ浅いが、内部モデル制御、モデル予測制御、適応制御などの制御工学の概念をDioid 代数系でのスケジューリング方法に適用した研究などの成果を公表するに至った。さらに、大規模システムにおける効率的な計算方法や、プロジェクト管理分野への適用を試みた研究を行った。これらの研究成果により、特に、管理工学分野が対象とする実システムへの適用範囲が格段に広まった。これらの成果により、Dioid 代数に基づく離散事象システムのスケジューリング方法について、実用化への確かな足がかりとなっている。</p> <p>③研究成果の発信等:研究成果や研究活動の経験を基にしたの公開講座の講師等を行ない幅広く研究成果の発信等の活動をしている。</p>
専門的目標	<p>①重力波天文学分野における研究:米国のLIGO と 欧州のVirgo は感度向上のための改良が行われており2016年の稼働をめざしている。我が国では、大型低温重力波望遠鏡 LCGT 計画の一部が「最先端研究基盤事業」の補助対象として採択され、建設が開始された。しかし、LCGT 等の重力波検出器によって得られたデータから重力波の情報を取り出し、さらに、それを元に重力相互作用や天体現象に関する物理学的な研究を行うためには、大きなノイズが含まれる時系列データから微少な信号を取り出す手法の開発が必要不可欠である。それゆえ、データ解析工程の設計からコード開発、統計処理方法の研究を国内外の研究者と議論を交わし進めて行く。</p> <p>②情報数理学分野の研究:今まで行なって来た基礎的な研究をふまえ実システムに応用していく事を進めて行く。</p> <p>③研究成果の発信等:社会・国民に対して、研究の成果はWeb などを通じて広く発信したい。前任の長岡技術科学大学では、新潟県内やその周辺を中心とした高等学校、高等専などとの連携を強化しており、連携授業などを通じて、中高校生に研究成果を詳しく示し、情報・理科教育にも生かしていた。その経験を生かし、今後も情報・理科教育に貢献して行く。さらに、eラーニング実践センターでのノウハウを生かし、eラーニング配信、コンテンツ作成により、研究成果を生かしていくことも検討したい。また、科研費等競争的資金の獲得に向け積極的に応募し、研究費維持、研究の質の維持に勤めたいと考えている。以上のように、教育活動とともに積極的に研究活動を行い学生の手本となる教員をめざしたい。</p>

最新データ入力日	2011年 4月 1日
----------	-------------

専任教員職務業績集

山梨英和大学

フリガナ 氏名	性別	生年(西暦)	職名	所属
イサンジン 李尚珍	女	非公表	助教	人間文化学部人間文化学科
取得学位称号	博士(人文科学)	専門分野	日韓文化交流史(近代)、近代思想史	
学 歴	1995年	4月	宇都宮大学国際学部国際文化学科入学	
	1999年	3月	宇都宮大学国際学部国際文化学科卒業(国際学学士)	
	1999年	4月	宇都宮大学大学院国際学研究科博士前期課程入学	
	2001年	3月	宇都宮大学大学院国際学研究科博士前期課程修了(国際学修士)	
	2001年	4月	お茶の水女子大学大学院人間文化研究科博士後期課程入学	
	2008年	3月	お茶の水女子大学大学院人間文化研究科博士後期課程修了(人文科学博士)	
実務 経 験	2005年	10月	宇都宮大学国際学部非常勤講師(2011年3月まで)	
	2008年	3月	山梨英和大学人間文化学部人間文化学科助教(現在に至る)	
受 賞 歴	年	月	特になし	
	年	月		
	年	月		
所 属 学 会	2001年	4月	日本朝鮮学会会員(現在に至る)	
	2002年	4月	日本韓国・朝鮮文化研究会会員(現在に至る)	
	2002年	4月	韓国歴史学会会員(現在に至る)	
	2002年	10月	日本朝鮮史研究会会員(現在に至る)	
	2011年	4月	日本比較文化学会会員(現在に至る)	
特 免 資 格 等	年	月	特になし	
	年	月		
	年	月		

目 次

○教育業績	
教育理念、方針、方法	307
教育能力	
教育方法実践例	307
作成した教科書、教材等	307
教育方法や実践に関する発表、講演等	307
担当授業科目	307
代表的なシラバス	308
教育改善活動	308
教育能力に対する評価	308
○研究業績	
研究の特徴	309
研究経歴	309
研究実績	
著書	309
学術論文	309
その他の研究活動	310
競争的資金採択課題	310
学会等発表、役員参加	310
共同研究・受託研究の実績	310
大学院生指導	310
研究能力に対する評価	310
○サービス活動業績	
学内委員会・作業部会等活動実績	311
アドバイザー活動実績	311
後進育成活動実績	311
社会貢献活動	311
○専門的活動(教育業績、研究業績、サービス活動業績)の統合による成果と目標	
専門的成果	313
専門的目標	313
○添付資料	
略	
○最新データ入力日	313

教育業績

<p>教育理念、方針、方法</p>	<p>教育理念は創造力・豊かなコミュニケーション力・グローバルな視野を持つ人間性豊かな人材を育成することである。具体的な方針・方法として2つの分野にわけて考えている。 (1)まず、文化・歴史に関する教育においては、これまでの教育の中で得られた成果をもとに受講生が「文化」と「歴史」の概念を理解したうえで、日本と韓国における思想の特殊性と相関性、過去と現状を正確に認識し、一方的ではなくて複眼的・多角的な見方ができるように指導する。(2)次に、韓国語に関する教育においては、「読む・書く・聞く・話す」の基本学習の他、会話と講読の演習を行い、韓国語文献の講読から作文などの表現力・応用力を身につけるように指導し、さらに韓国語の誕生と使用の背景を含む韓国の歴史や社会、文化などの学習内容を取り入れて、専門分野の研究に取り組めるアカデミックな環境の整備・充実に取り組む。</p>
<p>教 育 能 力</p>	<p>(1)教育方法実践例 a.山梨英和大学の担当科目の授業において、①身近にある映画やドキュメンタリー、新聞記事、書籍などを通して、日韓の文化・歴史・思想がテーマとなる具体的な事案を学生たちと一緒に考えながら、学生自らが自分の興味を持つことを見つけて、積極的に研究できるような環境を提供している。また、②資料収集、文献調査・分析、レジュメ作成、発表、討論、レポート作成などによって、各自の問題意識を明確にし、その疑問を解明していく姿勢を身につけるようにしている。 b.海外短期研修(体験としての異文化理解・韓国)においては、本学の参加学生たちと協定校の忠南大学校在学学生たち(日本語学習者)との積極的な交流(マンツーマンサポート)を行い、勉学意欲を高めている。そして、異文化間のコミュニケーション方法として、語学学習の重要性を認識し、全体的な学習意欲につながっていくように指導している。なお、2010年度の参加学生のうち、1名の1年生が2011年度3月よりプログラム実施校の韓国の国立忠南大学校人文大学日本語学科に1年間の交換留学生として派遣されていて、短期プログラムから両校の学生たちの学術的・国際的交流につながっている。 (2)作成した教科書、教材等 特になし (3)教育方法や実践に関する発表、講演等 a.「国際交流とは何かを考える」栃木県立栃木南高等学校教育講演会(2005年6月) b.「人権教育とは何か」栃木県立高根沢商業高等学校教育講演会(2005年9月) c.「平和をどう考えるか」茨城県立八千代高等学校総合的学習の時間の講演(2005年12月) ⇒これら3つの講演会では、大学進学や就職を希望する高校生が、どのように「国際理解や国際交流を深める」べきか、あるいは「外国人から見た人権教育とは何か」、「平和とは何か」という問題について、私自身の体験をもとに講演した。また、高校生や大学生が、身近にいる留学生との交流を通して「平和」と「共存」について理解し、自らできることは何か、を考え、見つけ、行動することが「国際理解」の出発点であることについて質疑応答などをまじえて議論した。 d.「朝鮮を愛した甲州人・浅川巧—その心の軌跡—」山梨県立農林高等学校PTA・教職員研修会(2010年7月)⇒2009年6月15日に山梨県立農林高校の全校生向けに卒業生浅川巧と韓国について話したが、保護者と教職員が生徒たちと共有できるような話題が提供できるように話した。 e.「朝鮮の土となった日本人・浅川巧が現代の私たちに問いかけるもの」未来をひらく歴史～東アジア3国の近現代史第16回学習会(2010年7月)⇒主に中学校高校の教員たちが参加し、歴史教育に関する話や浅川巧のような明るいテーマが及ぼす教育上の影響について話し合った。</p>
<p>担当授業科目</p>	<p>2011年度:日韓文化交流史、韓国現代事情、体験としての異文化理解(韓国) 生活の中の韓国語、ビジネス韓国語、専門ゼミナール、卒業研究</p>

<p>代表的シラバス</p>	<p>科目: 日韓文化交流史</p> <p>概要: なぜ、日韓両国の間に「歴史認識」や「歴史教科書」等が繰り返し問題とされるのでしょうか。両国の文化交流に長い歴史があるとは言え、過去の一時期における植民地統治の出来事が、それぞれの国民に否定的なイメージや先入観を与えてきたからではないでしょうか。韓国の高校の歴史教科書に「肯定的」に紹介された日本人もいます。韓国が日本の植民地であった時代に韓国の陶磁器や民芸品の美術的価値を見出して世に知らしめた柳宗悦や浅川伯教・巧兄弟(山梨県出身)です。この授業では、現代から近世へと時代を遡りながら、日韓文化交流における「明るいテーマ」を見つけていきます。</p> <p>授業展開方法: ①毎回グループワークを行い、各自の意見や疑問点等をまとめて発表してもらう。②受講生が自主的に興味のあるテーマについて調査・発表する時間を設ける。そして、その内容について意見交換をし、討論する。資料収集・発表方法についてはサポートする。</p> <p>到達目標: ①これまでの日韓関係について理解することができる。②日韓交流における明るいテーマに関心を持ち、今後のあり方について認識することができる。③国際的な視野を広げ、異文化理解とその方法について関心を持つことができる。</p>
<p>教育改善活動</p>	<p>2009年度、2010年度にはFD推進委員会の委員として学内におけるFD活動に携わった。</p> <p>具体的には授業評価アンケートの結果を分析し、全体の問題改善に取り掛かり、評価の高かった授業を公開してもらい、参考とした。そして、アンケート実施方法の改善を図り、客観性の確保と効果的なフィードバック方法を確立した。さらに、外部の専門家を招いてFD講演会・研修会を開き、全教職員が共有できるモデルを作った。その活動は現在も続いている。</p>
<p>教育能力に対する評価</p>	<p>(1) 学生による授業評価</p> <p>a. 授業全体の評価(授業評価アンケートより):</p> <p>①2009年度と2010年度の「日韓文化交流史」・「韓国現代事情」においては、132名から64名ほどの受講生で、全体の項目に5までの評価のうち、4以上の評価を受け、「総合的に満足」された。</p> <p>②2008年度と2009年度の「韓国語1、2」においては、27名から36名ほどの受講生で、全体の項目に5までの評価のうち、4以上の評価を受け、「総合的に満足」された。</p> <p>③2009年度と2010年度の「生活の中の韓国語」・「ビジネス韓国語」においては、5名から7名ほどの受講生で、全体の項目に5までの評価のうち、4以上の評価を受け、「総合的に満足」された。</p> <p>④2005年10月より2011年3月まで非常勤講師として宇都宮大学において「朝鮮語入門基礎Ⅰ、Ⅱ」・「朝鮮語入門Ⅰ、Ⅱ」・「朝鮮語応用A、B」を担当してきたが、平均60名ほどの受講生で、全体の項目に5までの評価のうち、4以上の評価を受け、「総合的に満足」された。</p> <p>①②③④いずれも、受講生自身の評価においても4以上の評価で「集中して積極的に授業に参加」することができたと評価された。</p> <p>b. 良い点・改善してほしい点(授業評価アンケートより):</p> <p>まず、「日韓文化交流史」と「韓国現代事情」においては、各授業にテーマを決め、事前学習として受講生が興味を持っていることを調べ、講義内容と比較したり、日本人と韓国留学生によるグループワークで議論したりしたことによって積極的な授業参加ができたこと、受講生自身の韓国観が確立できたことが良い点として挙げられた。事前学習の大変さを訴える受講生もいたが、それがのちに自分の学習力となっていると評価した。そして、テーマに合わせた視聴覚教材の活用が、授業に集中することに役立ったと評価された。</p> <p>次に、語学授業においては、視聴覚教材の活用によって理解度が増したこと、毎回の日常会話の練習によって使える語学学習ができたこと、言葉に関わる歴史や文化の説明によって興味を深めたことが良い点として挙げられた。</p> <p>(2) 同僚教員等による授業評価</p> <p>現在行われていない。</p>

研究業績

研究の特徴	<p>a. 在朝鮮日本人浅川伯教・巧兄弟に関する研究を続けている。この研究は、浅川兄弟の朝鮮伝統工芸研究の特質を分析し、そこから異文化としての朝鮮理解の方法の今日的意義を検証するものである。その具体的内容は、兄弟の朝鮮移住の動機、在朝鮮日本人としての当時の植民統治期の特殊な時代状況の認識、さらに兄弟の伝統工芸研究を通しての朝鮮理解の方法とその背景を探究するものである。また、明治から昭和の激動する社会的背景の中での兄弟の思想的基盤の歴史的特質についても研究を進めている。本研究の重要な方法論的特徴として、兄弟のフィールドワーク研究の方法(Field-oriented Approach)及びその特質を検証することによって、彼らの朝鮮伝統工芸研究の朝鮮理解における位置づけについての研究成果をあげることにある。</p> <p>b. 植民地期以後の日本と朝鮮半島の諸問題に関心を持ち、帰国問題の始まりについて1955年後の日朝関係を再検討することで、北朝鮮が帰国事業を始めた主な理由が、これまで言われていたような労働力の移入ではなく、対日国交正常化のためのパイプ作りにあったことなどを明らかにし、日朝協会や韓国マスコミなど、これまで正面から取り組まれたことのなかったテーマについて研究している。</p>
研究経歴	<p>1999年 宇都宮大学大学院国際学研究科博士課程前期の在学中より現在まで在朝鮮日本人(浅川伯教巧兄弟)研究に取り組んでいる。</p> <p>2005年 『帰国運動とは何だったのか—封印された日朝関係史—』(共著、平凡社、2005年5月)の執筆より現在まで在日韓国人に関する研究に取り組んでいる。</p>
研究実	<p>(1) 著書(最近のものより掲載)</p> <p>a. 共編『韓国民芸の旅』草風館、2005年12月。</p> <p>b. 共編『回想の浅川兄弟』草風館、高崎宗司編、2005年9月、pp.296-305。</p> <p>c. 共訳『韓洪九の韓国現代史Ⅱ—負の歴史から何を学ぶのか』平凡社、2005年7月、pp.286-318。</p> <p>d. 共著『帰国運動とは何だったのか—封印された日朝関係史—』平凡社、高崎宗司・朴正鎮編著、2005年5月、pp.235-267、pp.325-339。</p> <p>e. 共訳『韓洪九の韓国現代史Ⅰ—韓国とはどういう国か』平凡社、2003年12月pp.252-292。</p> <p>(2) 学術論文(最近のものより掲載)</p> <p>a. 「浅川巧の異文化理解モデルに関する一試論」『山梨英和大学紀要』第9号(山梨英和大学)2011年2月、pp.53-68。</p> <p>b. 「柳宗悦の朝鮮伝統芸術研究—浅川伯教・巧兄弟との繋がりを中心に—」『山梨英和大学紀要』第8号(山梨英和大学)2010年2月、pp.51-64。</p> <p>c. 『浅川伯教・巧兄弟の朝鮮理解に関する研究—植民統治期における兄弟の朝鮮伝統工芸研究を素材として』お茶の水女子大学大学院人間文化研究科人文科学博士学位論文、2008年3月、pp.1-200。</p> <p>d. 「浅川伯教・巧兄弟の朝鮮理解の意義」『人間文化論叢』第10巻(お茶の水女子大学大学院、外部審査有)2008年3月、pp.1-10。</p> <p>e. 「在朝鮮日本人浅川伯教・巧兄弟の朝鮮理解—植民地期における兄弟の朝鮮伝統工芸研究を中心に—」『朝鮮学報』第205輯(朝鮮学会)、2007年10月、pp.137-170。</p> <p>f. 「浅川伯教の朝鮮工芸論」『人間文化論叢』第8巻(お茶の水女子大学大学院、外部審査有)2006年3月、pp.249-258。</p> <p>g. 「浅川伯教と朝鮮—植民地期の朝鮮陶磁研究を中心に—」『人間文化論叢』第7巻(お茶の水女子大学大学院、外部審査有)2005年3月、pp.315-324。</p> <p>h. 「キリスト者浅川巧の苦悩—その宗教観を中心に—」『人間文化論叢』第6巻(お茶の水女子大学大学院、外部審査有)2004年3月、pp.177-186。</p>

績	<p>i.「浅川巧—その異文化理解モデルの今日的意義—」『人間文化論叢』第5巻(お茶の水女子大学大学院、外部審査有)2003年3月、pp.243-252.</p> <p>j.「浅川巧の朝鮮観—植民地時代におけるその業績を中心に—」『人間文化論叢』第4巻(お茶の水女子大学大学院、外部審査有)2002年3月、pp.289-299.</p> <p>(3)その他の研究活動(国際会議発表、学術誌編集、学術論文査読等)(最近のものより掲載)</p> <p>a.宇都宮大学国際学部国際シンポジウム<多文化公共圏を考える—国際学の構築に向けて> パネルディスカッション「多文化公共圏における異文化理解モデルとしての浅川巧」2009年11月</p> <p>b.「植民地朝鮮における浅川伯教・巧兄弟と柳宗悦の民芸運動—その今日的意義を中心に—」お茶の水女子大学大学院「魅力ある大学院教育」イニシアティブ・プログラム調査報告書、2006年9月</p> <p>c.「日韓文化交流のモデルとなる日本人・浅川巧」富士ゼロックス小林節太郎記念基金2004年度研究調査報告書、2006年3月</p>
競争的資金採択課題	<p>a.2004年7月～2005年6月富士ゼロックス小林節太郎記念基金研究題目「日韓文化交流のモデルとなる日本人浅川巧」100万円</p> <p>b.2005年7月～2006年6月富士ゼロックス小林節太郎記念基金研究題目「日韓文化交流のモデルとなる日本人 浅川伯教・巧兄弟」100万円</p> <p>c.2005年12月～2006年3月お茶の水女子大学大学院<魅力ある大学院イニシアティブ : <対話と深化>の次世代女性リーダーの育成プログラム>研究題目「植民地朝鮮における浅川伯教・巧兄弟と柳宗悦の民芸運動—その今日的意義を中心に—」30万円</p>
学会等発表・役員参加	<p>最近のものより掲載</p> <p>2010年 10月「浅川伯教と朝鮮美術展覧会」第61回朝鮮学会全国大会</p> <p>2002年 10月「浅川巧と日韓文化交流」第3回韓国・朝鮮研究会</p> <p>2002年 10月「浅川巧—その異文化理解モデルの今日的意義」第53回朝鮮学会全国大会 第52回朝鮮学会全国大会</p> <p>2002年 2月「浅川巧の朝鮮観」第30回インター・ユニ哲学研究会</p> <p>2001年 10月「浅川巧の民芸観—植民地期の朝鮮におけるその業績を中心に—」 第52回朝鮮学会全国大会</p>
受託共同研究の実績	<p>年 月 特になし</p> <p>年 月</p> <p>年 月</p> <p>年 月</p> <p>年 月</p>
大学院生指導	特になし
研究能力に対する評価	<p>a.日韓近代史研究分野において、私が取り組んでいる「浅川伯教・巧兄弟」研究は今日の交流につながるテーマとして評価されている。それは、大学講義や講演会、公開講座などに取り上げ、浅川兄弟の活動と私の研究の持つ今日的意義を明確に提示し続けているからである。</p> <p>b.文献研究のみならず、今日に残る兄弟関係の工芸資料の追跡調査や関係者へのインタビューなどのフィールド・ワークを実施し、独自の論考を確立・展開していることから、私が取り組んでいる研究方法については高い評価を得ている。</p> <p>c.2011年度より「朝鮮民族美術館」・「朝鮮美術展覧会」と浅川兄弟との関わりについての研究を進めていて、専門の学芸員と研究者の評価を受け、協力体制を作って取り組んでいる。その成果は学会誌などに発表する予定である。</p>

サービス活動業績

<p>学内委員会・作業部会等活動実績</p>	<p>2008年 4月 入試委員会、入試実務委員会、国際交流委員会の委員(2011年3月まで) 入試面接や採点、オープンキャンパスの内容考案、大学案内・ホームページ制作などに務めるとともに、外国人留学生の入試と韓国の協定校の現地入試に関わってきたが、入試に限らず、入学後の両国の学生たちの積極的な国際交流にもつながっていき、交換留学・短期研修などの学術交流にも発展していけるように努めた。</p> <p>2009年 4月 学部FD推進委員会の委員(2011年3月まで) 授業アンケートの有効的な活用とFD研修会の効率化のために努めた。</p> <p>2011年 4月 宗教委員会、図書館運営委員会、紀要委員会の委員(現在に至る)</p>
<p>アドバイザー活動実績</p>	<p>2008年4月より現在まで外国人留学生たちのアドバイザーとして学習や進路に関する指導を行っている。オフィスアワーの設定、メールによる学生の申し入れ(日程や相談内容など)によって、一人一人の時間の都合や面談内容に対応できるように努めている。文化や習慣の異なる外国での生活や大学での学習環境に慣れていけるように生活と学習方法を指導し、卒業後の進路(大学院進学と就職)につなげていけるようにしている。</p>
<p>後進育成活動実績</p>	<p>特になし</p>
<p>社 会</p>	<p>(1)講演会(最近のものより掲載)</p> <p>韓国の日本大衆文化開放や日本の韓流ブームが始まり、各界の活発な交流が行なわれているが、こういう時にこそ両国のしっかりした歴史学習が必要である。両国民の歴史認識には曖昧かつ偏見的なものがいまだ残っていることが否定できないからである。ここで、韓国の文化と人々を愛し、韓国の人々に愛され、さらにいま日韓両国の多くの人々に敬愛されている日本人浅川伯教・巧兄弟の行跡を通して、当時の時代背景を再認識した。なお、当時、兄弟と付き合い合った韓国人の子孫たちがソウル市にある巧の墓を管理していることから、代々に受け継がれている歴史の明るい一面を共有し、歴史の学問領域に対する関心を高めるとともに、私自身の研究成果の公開の場となった。</p> <p>2010年 9月 「柳宗悦と浅川兄弟」我孫子市制40周年記念・雑誌「白樺」創刊百周年記念講演</p> <p>2010年 6月 「浅川兄弟研究の歩み」山梨平和ミュージアム山梨平和を願う戦争展記念講演</p> <p>2010年 2月 「浅川巧の眼と心」山梨県立美術館日韓交流エコアート特別シンポジウム講演</p> <p>2009年 11月 「宇都宮大学ブランドを考える—宇都宮大学のさらなる発展と創造へ向けて—」宇都宮大学創立60周年記念シンポジウム</p> <p>2009年 6月 「日韓文化交流における知られざる若きヒーロー—浅川巧の生涯」浅川巧・山梨県立農林高等学校卒業100周年記念事業講演会</p> <p>2009年 5月 大阪市立東洋陶磁美術館テーマ展「浅川伯教が愛した韓国のやきもの」記念講演会</p> <p>2008年 6月 「浅川兄弟の異文化理解」平成20年度浅川伯教・巧兄弟を偲ぶ会記念談話</p> <p>2006年 6月 「回想の浅川巧」平成18年度浅川伯教・巧兄弟を偲ぶ会記念談話</p> <p>2005年 7月 「浅川巧—韓国教科書に載った日韓相互交流のパイオニア」宇都宮大学教科書問題を考える講演会</p> <p>2004年 2月 「浅川巧—その人と業績—」日本コリア協会・大阪第46回総会記念講演</p> <p>(2)出前講座(最近のものより掲載)</p> <p>人権と日韓交流をテーマとする講座で、外国人としての私の日本生活・体験と研究テーマの浅川兄弟にみる異文化＝韓国理解について話し、「共に生きる」ことについて参加者たちと議論した。</p> <p>2009年 9月 「私の自分史を語る」東大和市職員組合主催「人権&国際交流講座」</p> <p>2008年 10月 「日韓文化交流における知られざる若きヒーロー」蕪崎高等学校「個性を育てる学習サポート」</p> <p>2006年 2月 「開かれた韓国・朝鮮の今」東大和市歴史講座5回</p>

貢 献 活 動	(3)公開講座(最近のものより掲載)	
	この4つの講座では、博士論文『浅川伯教・巧兄弟の朝鮮理解に関する研究—植民統治期における兄弟の朝鮮伝統工芸研究を素材として—』において解明した兄弟の朝鮮伝統工芸研究の特質とその展開過程、そこから異文化としての朝鮮理解の方法論について講じし、高校生から社会人までの講座参加者たちと、今後の日韓相互理解について議論し、歴史認識を高める内容とした。	
	2011年	2月「浅川伯教・巧兄弟にみる異文化理解」NPO法人高麗博物館文化講座
	2009年	1月「浅川兄弟にみる異文化理解」浅川伯教・巧兄弟記念講座(浅川伯教・巧兄弟資料館)
	2006年	10月「浅川巧の朝鮮観」浅川伯教・巧兄弟記念講座(浅川伯教・巧兄弟資料館)
	2005年	2月「朝鮮の風土を愛し、朝鮮の土となった日本人～浅川巧」東京東大和市公民館歴史講座;人物史から見た韓国・朝鮮と日本の友好
	(4)学外審議会・委員会等	
	2006年	4月 宇都宮大学大学院国際学研究科外部評価委員(2007年3月まで)
	(5)その他(最近のものより掲載)	
	2011年	4月 コラム「異文化理解モデル—日韓交流に橋を懸けた浅川兄弟」『聖教新聞』
	2010年	8月 コラム「日韓理解の礎・浅川巧に学ぶ」『山梨日日新聞』
	2006年	12月 書評「朴裕河著・佐藤久訳『和解のために—教科書・慰安婦・靖国・独島』」平凡社、『南日本新聞』『信濃毎日新聞』など数紙(共同通信配信)
	2006年	8月 随筆「松本民藝館—日本の中の朝鮮美術・工芸品(15)」『民藝』第644号 pp.52-53.
	2006年	6月 随筆「浅川伯教・巧兄弟、柳宗悦の足跡を訪ねる韓国の旅を終えて」『民藝』第642号、pp.57-59.
	2005年	10月 書評「李秉鎮—『白樺派』における他者としての<朝鮮>—柳宗悦と浅川巧の場合」『民藝』第634号、pp.61-63.
	2005年	9月 書評「李秉鎮—光化門と柳宗悦」『民藝』第633号、pp.55-56.
	2005年	8月 書評「朴桂利—柳宗悦と朝鮮民族美術館」『民藝』第632号、pp.47-48.
	2005年	7月 書評「加藤利枝—3・1独立運動後の朝鮮芸術観と柳宗悦」『民藝』第631号、pp.64-65.
	2005年	6月 書評「丁貴連—もう一つの旅行記—柳宗悦の朝鮮紀行をめぐる」『民藝』第630号、pp.57-58.
	2005年	5月 書評「金希貞—朝鮮における柳宗悦の受容」『民藝』第629号、pp.56-57. 書評「金容菊—柳宗悦と朝鮮芸術論」『民藝』第629号、pp.57-59.
2005年	3月 書評「安達義弘—民芸運動による日韓共生の実現を求めて」『民藝』第627号 pp.58-59.	

成果と目標

専門的成果	<p>①これまでの異文化理解・グローバル化に関する問題点としては、①「歴史」認識と国民レベルの文化交流の具体的な提案がないことと、②学術的な位置づけが行われていないことが挙げられる。私の研究は、浅川兄弟と柳宗悦が示した異文化理解の方法に含まれている科学・哲学・宗教・芸術的要素について、未発掘の資料を掘り起こして、理論的・学術的な検証を行った。この検証は、これまでの日韓関係のみならず、グローバル化における異文化理解・文化交流論に関する問題点の改善方法と将来への提案を含んでいることにおいても重要な意義がある。</p> <p>②私が実施してきた日韓両国におけるフィールドワークは、これまでの歴史研究の文献研究にみられる限界を克服する有意義かつ効果的な手法である。このような特色を有する私の研究は様々な認識の相違点を内包している日韓近代史研究の中にあって、際立って日韓文化交流の「特殊性」「相互関係性」「積極性と実践性」を明示し、さらに単に日韓関係に限らず、人間と歴史の「連続性」「普遍性」にも視角を拡大させる可能性を持っている。</p> <p>③私の研究成果として提示できた浅川兄弟にみる新時代の「異文化理解モデル」は、日韓歴史教育における新たな視点を提供できるとともに両国の若い世代の交流に具体的なモデルを示すことができる。そして、本学が求めている「国際的な視点でものを考え」、「自らの立脚点をしっかりと見据えて地域社会と密接に連携しつつ」、「世界の平和と安定のために活躍する」人材の育成のための教育指導にも活かしていけることと確信している。</p>
専門的目標	<p>①これまで一貫して研究してきた浅川伯教・巧兄弟と柳宗悦の韓国＝異文化理解の方法は、今後の研究計画においても「多文化共生」「異文化理解」にとって実践的に生成・発展させていく可能性を持っている。また、今後の研究から予想される成果は、「浅川モデル」を東アジアから世界へ提唱できる「グローバルな文化交流モデル」として構築することである。これらは歴史研究及び人物研究、日韓の伝統文化研究分野における新たな視点を提供することができる。さらに、日韓近代史研究分野の活発な議論を促し、学会発表やシンポジウム、講演会、公開講座などにおける研究成果発信を積極的に行う。なお、科学研究費等の競争的資金・外部研究費の獲得のために、研究内容の独自性を図り、質の向上に努めていく。</p> <p>②文化・歴史に関する教育においては、これまでの教育の中で得られた成果をもとに国際的な人材育成・教育指導を目指し、歴史的な背景から現在に至るまでの文化交流の現状を認識し、複眼的・相対的探究ができるように指導していく。各科目に対応できる効率的な教材制作に取り組んでいく。</p> <p>③韓国語に関する教育においては、「読む・書く・聞く・話す」の基本学習のほか、会話と講読の演習を行い、韓国語文献の講読から手紙や作文作成などの表現力・応用力・コミュニケーション力を身につけて、グローバルな人材として育成することを目指す。さらに、協定校への短期研修・交換留学にもつながるようにレベルアップのための教授法を工夫し、教材制作にも力をいれていく。</p>

最新データ入力日	2011年 4月 1日
----------	-------------

専任教員職務業績集

山梨英和大学

フリガナ 氏名	性別	生年(西暦)	職名	所属
オカムラ ヤヨイ 奥村 弥生	女	非公表	助教	人間文化学部人間文化学科
取得学位称号	修士(人間環境学)	専門分野	臨床心理学・精神分析学・感情心理学	
学 歴	1997年	3月	熊本県 私立真和高等学校卒業	
	1997年	4月	九州大学教育学部入学	
	2001年	3月	九州大学教育学部卒業	
	2001年	4月	九州大学大学院人間環境学府人間共生システム専攻心理臨床学コース修士課程入学	
	2003年	3月	九州大学大学院人間環境学府人間共生システム専攻心理臨床学コース修士課程修了	
	2003年	4月	九州大学大学院人間環境学府人間共生システム専攻心理臨床学コース聴講生	
	2004年	3月	九州大学大学院人間環境学府人間共生システム専攻心理臨床学コース博士課程入学	
	2010年	3月	九州大学大学院人間環境学府人間共生システム専攻心理臨床学コース博士課程単位取得退学	
実 務 経 験	2001年	4月	九州大学大学院人間環境学府付属総合臨床心理センター心理相談部門相談員 (2007年3月まで)	
	2005年	4月	九州大学大学院ティーチングアシスタント(2007年3月まで)	
	2007年	4月	大川看護福祉専門学校非常勤講師(「老人・障害者の心理」「人間関係論」担当) (2010年3月まで)	
	2008年	10月	福岡教育大学 非常勤講師(「生徒指導」担当)(2010年3月まで)	
	2009年	4月	中村学園大学短期大学部 非常勤講師(「臨床心理学」担当)(2010年3月まで)	
	2010年	4月	山梨英和大学人間文化学部 助教(現在に至る)	
受 賞 歴	年	月		
	年	月	特になし	
	年	月		
所 属 学 会	2001年	7月	日本心理臨床学会 会員 (現在に至る)	
	2004年	8月	日本心理学会 会員 (現在に至る)	
	2004年	8月	日本教育心理学会 会員 (現在に至る)	
	2004年	8月	日本発達心理学会 会員 (現在に至る)	
	2004年	11月	日本感情心理学会 会員 (現在に至る)	
	2008年	8月	日本精神分析学会 会員 (現在に至る)	
特 免 資 格 等 ・ ・ ・	2004年	4月	臨床心理士(No.12220)	
	年	月		
	年	月		
	年	月		

目 次

○教育業績	
教育理念、方針、方法	316
教育能力	
教育方法実践例	316
作成した教科書、教材等	316
教育方法や実践に関する発表、講演等	316
担当授業科目	316
代表的なシラバス	316
教育改善活動	316
教育能力に対する評価	316
○研究業績	
研究の特徴	317
研究経歴	317
研究実績	
著書	317
学術論文	317
その他の研究活動	317
競争的資金採択課題	317
学会等発表、役員参加	317
共同研究・受託研究の実績	317
大学院生指導	317
研究能力に対する評価	317
○サービス活動業績	
学内委員会・作業部会等活動実績	318
アドバイザー活動実績	318
後進育成活動実績	318
社会貢献活動	318
○専門的活動(教育業績、研究業績、サービス活動業績)の統合による成果と目標	
専門的成果	318
専門的目標	318
○添付資料	
略	
○最新データ入力日	318

教育業績

教育理念、方針、方法	<p>心理学は、「人間の心」という身近であり、かつ奥深い対象について学ぶ学問である。第一に、心について学ぶことは、自らの心を見つめ問い直すことにつながる。そのような作業は、自身についての理解を深め、日々の営みを豊かにする一助となるであろう。第二に、科学としての心理学的方法論—すなわち、先行研究を概観し、問いを立て、データ収集を行い、分析し、結果について考察するというプロセスについて学ぶことは、既知と知っている事象を改めて問い直し、科学的知見や実証的なデータを踏まえて多角的に物事を捉える姿勢につながる。以上のようなことを十分に習得することは、社会の中で自分自身を生かしながら他者のために貢献することにつながるものと考えており、そのような人間の育成が教育理念である。その達成のためには、講義を通して基本的な知識を教授すること、さらに、演習を通して、自ら問いを立てて学習し、議論する場を提供することが重要と考える。</p>
教育能力	<p>(1)教育方法実践例 a.臨床心理学に関連するフィールドを見学するなどの校外学習を取り入れた演習 b.演習におけるブレインストーミングの活用 c.臨床心理学に関する体験学習の積極的導入</p> <p>(2)作成した教科書、教材等 特になし</p> <p>(3)教育方法や実践に関する発表、講演等 特になし</p>
担当授業科目	<p>2011年度： はじめてのカウンセリング, 臨床心理フィールド演習, カウンセリング演習, アドバンスト心理学研究演習, 心理学研究法, 心理学文献講読</p>
代表的シラバス	<p>[はじめてのカウンセリング]カウンセリングとは、適応上の問題をもつ個人が、専門家の援助によって問題解決を図る過程といえる。その過程を支える心理療法の理論と技法には様々なものがある。この授業では、代表的な心理療法を体系的に学び、その理論と技法についての基本的理解を得ることを目的とする。また、心や心の援助について学ぶことを通して、自己理解・他者理解を深めることも目指す。</p> <p>[アドバンスト心理学研究演習]人間の感情や情動、情緒に関する研究は、感情心理学はもとより、臨床心理学、発達心理学、社会心理学など様々な分野にまたがる心理学の重要テーマの一つである。また、感情全般についての研究から、喜びや悲しみ、怒り、恐怖、不安、抑うつなど、様々な種類の感情を個々に検討するものまで幅広く研究されている。感情は人間の適応に深く関わっており、心理療法においても人間の感情の要素に目を向ける重要性が指摘されている。この授業では、感情に関する文献を読み、発表と討論を通して理解を深める。</p>
教育改善活動	<p>a.学内FD研修への参加及び発表 b.体験学習における学生の意見・創意工夫の反映</p>
教育能力に対する評価	<p>(1)学生による授業評価</p> <p>学生による授業評価(総合的な満足度:5段階評価)は、4.18、4.67、3.45、4.90、4.30、4.45であった。適宜課題やワーク、小テスト等を取り入れ、また、演習での議論の活性化を促すコメントに力を入れたことで、学生自身の主体的な学習と満足につながったと考える。満足度が3.45と相対的に低い科目は、100名ほどの大講義の中に心理学研究法の体験学習を取り入れることを試みたものであったが、学生間で生じた理解の差に十分対応できず、理解が追いつかなかった学生もいたことが要因と思われるため、改善を試みる予定である。</p> <p>(2)同僚教員等による授業評価</p> <p>現在、同僚教員等による講義評価は行っていない。今後の課題である。</p>

研究業績

研究の特徴	人間の感情や情動、情緒について研究を行っている。具体的には、「情動への評価」という概念を提起し、その測定方法(尺度)を開発するとともに、それが当人の情動の取り扱いおよび適応状態にどのように関連するかを研究している。また、情動は人間の適応に深く関わっており、心理療法においても人間の情緒的要素に目を向ける重要性が指摘されていることから、研究成果の臨床的活用にも力を入れている。	
研究経歴	年	年 特になし
研究実績	<p>(1)著書</p> <p>a.奥村弥生「嗜み締める」 日常臨床語辞典 北山修監修 妙木浩之編 誠心書房 2006</p> <p>(2)学術論文</p> <p>a.奥村弥生「情動への評価」研究の展望—概念、情動過程での位置づけ、その形成について— 九州大学心理学研究 11, 109-118, 2010.</p> <p>b.奥村弥生「情動への評価と情動認識困難・言語化困難との関連」 教育心理学研究 56, 403-413, 2008</p> <p>c.奥村弥生「母親と子どもの情動特性の関連性」 九州大学心理学研究 6, 159-166, 2005</p> <p>(3)その他の研究活動(国際会議発表、学術誌編集、学術論文査読等)</p> <p>a. Yayoi Okumura "Evaluation of emotion and regulation of emotional expression in sadness and anger: Perspectives of emotional suppression and controllability of emotion" 27th International Congress of Applied Psychology 2010 (Melbourne)</p> <p>b. Yayoi Okumura "Evaluation of Emotion and Attachment" XXIX International Congress of Psychology 2008 (Berlin)</p>	
競争的資金採択課題	特になし	
学会等発表・役員参加	2010年	9月 奥村弥生・三沢良「愛着スタイルによる情動エピソードの開示抑制理由の違い」 日本心理学会第74回大会発表論文集(大阪大学)
	2010年	9月 奥村弥生「情動の両刃の矛先を左右する要素とは」 日本心理学会第74回大会ワークショップ「情動の両刃を研ぎなおす—情動知性への提言—」
	2009年	8月 奥村弥生「情動制御と情動への評価との関連」 日本心理学会第73回大会発表論文集p.1005.(立命館大学)
	2008年	9月 奥村弥生「情動への評価スタイルの分類～情動認識困難・言語化困難および愛着との関連を含めて～」 日本心理学会第72回大会発表論文集 p.930.(北海道大学)
	2007年	9月 奥村弥生「プレイに象徴化される子どもの内的世界の理解～カエルから王様に戻ったAとの面接過程を通して～」 日本臨床心理学会第26回大会発表論文集p.87.(東京国際フォーラム)
		など。
共同研究の実績	年	月
	年	月 特になし
	年	月
	年	月
大学院生指導	大学院生の実習機関である山梨英和大学付属心理臨床センターにおいて大学院生への実習指導を行っている。	
研究能力に対する評価	情動や感情に関する研究は、近年研究が増加し研究内容も多岐に渡る領域であるが、その中でも、「情動への評価」という新しい概念を提起し、個々人が自らの情動をどのように評価するか(怒りを悪いもの／必要なものと評価する等)ということが、当人の感情の取り扱いおよび適応状態にどのように関連するかを明らかにしていくことは、情動が人の適応に参与するメカニズムの一端を明らかにする一助となることが期待される。また、心理療法においても人間の情緒的要素に目を向ける重要性が指摘されていることから、研究成果の臨床的活用についても今後の展開が期待される。	

サービス活動業績

学 内 委 員 会 ・ 作 業 部 会 等 活 動 実 績	2011年 4月 図書館運営委員会、紀要委員会、エクステンション委員会 委員 2011年 4月 心理臨床センター紀要編集委員 2010年 4月 エクステンション委員会 委員（2010年3月まで） 年 月 年 月 年 月 年 月
アドバイザー活動実績	特になし
後進育成活動実績	山梨英和大学附属心理臨床センターにおける大学院生への実習指導
社 会 貢 献 活 動	(1)講演会 特になし (2)出前講座 2010年 11月 山梨県教育委員会 適応指導教室(葦崎こすもす教室) 事例検討会講師 2009年 11月 北九州市立高中生中学校 家庭教育学級(保護者研修)講師 2007年 1月 北九州市立二島中学校 教職員研修講師 (3)公開講座 特になし (4)学外審議会・委員会等 2010年 4月 山梨県臨床心理士会 会計 (5)その他 2010年 4月 山梨英和大学附属心理臨床センター兼任カウンセラー(現在に至る) 2008年 8月 第38回九州地区大学保健管理研究協議会一般演題発表「学生への心理教育グループの実践」

成果と目標

専門的成果	①情動に関する研究：心理学の中でも現在活発に研究が行われている情動に焦点を当て、「情動への評価」という概念を提起し、その測定方法(尺度)を開発するとともに、適応との関連を明らかにした。継続して、情動が人間の適応に寄与するメカニズムの解明を行っている。 ②心理臨床活動：医療領域や教育領域等において心理臨床経験を積み、現在、山梨英和大学心理臨床センターにて心理臨床活動の実践を行っている。 ③研究および心理臨床活動の成果発表：情動研究および心理臨床活動について学会発表及び論文発表を行ってきた。
専門的目標	①情動に関する研究：これまでの情動についての研究を展開させることに加え、心理臨床活動の実践から得られる知見についても統合させて博士論文にまとめることを目標としている。 ②心理臨床活動：山梨英和大学心理臨床センターにおける心理臨床活動等を通して臨床経験を積み、心理臨床技術の向上を目指している。 ③研究および心理臨床活動の統合と成果発表：研究知見の心理臨床活動への反映および、心理臨床実践から得られる知見の研究への反映という相互プロセスを行き来しながら両者を展開・統合していくことと、それらの成果を適宜学会等で発表していくことを目標としている。

最新データ入力日	2011年 4月 1日
----------	-------------

専任教員職務業績集

山梨英和大学

フリガナ 氏名	性別	生年(西暦)	職名	所属
ババ 馬場 禮子	女	非公表	教授	大学院人間文化研究科臨床心理学専攻
取得学位称号	博士(医学)	専門分野	臨床心理学、精神分析学、投映法検査、心理療法	
学 歴	1952年	4月 慶応義塾大学文学部入学		
	1956年	3月 慶応義塾大学文学部卒業(文学士)		
	1956年	4月 慶応義塾大学社会学研究科心理学専攻・修士課程入学		
	1958年	3月 慶応義塾大学社会学研究科心理学専攻・修士課程終了(文学修士)		
実 務 経 験	1958年	4月 慶応義塾大学医学部副手		
	1959年	4月 同助手		
	1965年	4月 三恵病院 臨床心理士(1984年3月迄)		
	1969年	4月 慶応義塾大学医学部兼任講師		
	1981年	11月 中野臨床心理研究室(現在に至る)		
	1984年	4月 常磐大学人間科学部教授(1988年3月迄)		
	1988年	4月 東京都立大学人文学部助教授		
	1991年	4月 同教授(1997年3月迄)		
	1997年	4月 放送大学教養部教授(1999年4月より客員教授)		
	1999年	4月 東亜大学大学院総合学術研究科教授		
2006年	4月 山梨英和大学大学院教授			
受 賞 歴	1998年	9月 日本心理臨床学会・学会賞		
	2002年	10月 日本精神分析学会・学会賞		
所 属 学 会	1982年	月 日本心理臨床学会		
	1958年	月 日本精神分析学会		
	年	月 日本ロールシャッハ学会		
	年	月 包括システムによる日本ロールシャッハ学会		
特 免 資 格 等 ・ ・ 等	1965年	月 医学博士(慶応義塾大学)		
	1988年	月 臨床心理士資格取得(0014号)		
	年	月		
	年	月		

目 次

○教育業績	
教育理念、方針、方法	321
教育能力	
教育方法実践例	321
作成した教科書、教材等	321
教育方法や実践に関する発表、講演等	321
担当授業科目	321
代表的なシラバス	321
教育改善活動	321
教育能力に対する評価	321
○研究業績	
研究の特徴	322
研究経歴	322
研究実績	
著書	322
学術論文	322
その他の研究活動	322
競争的資金採択課題	323
学会等発表、役員参加	323
共同研究・受託研究の実績	323
大学院生指導	323
研究能力に対する評価	323
○サービス活動業績	
学内委員会・作業部会等活動実績	324
アドバイザー活動実績	324
後進育成活動実績	324
社会貢献活動	324
○専門的活動(教育業績、研究業績、サービス活動業績)の統合による成果と目標	
専門的成果	324
専門的目標	324
○添付資料	
略	
○最新データ入力日	324

教育業績

教育理念、方針、方法	臨床心理学は対人的実践の学である故に、その教育では、必要な知識、技法、を学ぶことと同時に、臨床家自身の人間性を鍛え成長させること、対人的関わり方について訓練することが必要である。したがって、知識や技法の教育にも常にそれが学生本人の自己理解、自己研鑽に繋がるように配慮することを基本方針としている。
教育能力	<p>(1)教育方法実践例</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 心理検査演習授業では学生自身が検査資料を分析し、内容を読み取ることを中心に演習する。 2. 精神分析理論の授業では、ラウンドテーブルで発言しやすすることと、授業終了毎にリアクションペーパーを提出して、自分の見解や疑問を明確化することを促している。 <p>(2)作成した教科書、教材等</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 精神力動論 1988年 2. ロールシャッハ法と精神分析 1995年 3. 境界例-ロールシャッハテストと心理療法- 1997年 4. 精神分析的な心理療法の実践 1999年 5. 臨床心理学概説 2003年 6. 精神分析的人格理論の基礎 2008年 <p>これらの著書は多くの大学院でテキストとして用いられている</p> <p>(3)教育方法や実践に関する発表、講演等</p> <p>2009年より山梨英和大学の若手教員と共同で、教育改善を目指す研究を行っている。すでに2009年から日本心理臨床学会の大会で「効果的な心理臨床教育・訓練システムに関する研究」を連続発表している。</p>
担当授業科目	2010年の担当科目:臨床心理学特論、臨床心理査定演習、心理療法特論Ⅰ、投映法特論、事例研究、修士論文。
代表的シラバス	心理療法特論Ⅰでは、精神分析の基礎知識を講義中心に行っている。基礎知識といえるものが大量にあり、そのタームが複雑で難しいのが精神分析学の特徴であることから、その基礎がしっかり身につく、かつ自分を理解するための方法となるように、常に自分に問わせる形で講義を進めている。
教育改善活動	1988年以来、臨床心理士資格認定協会の常任理事を務めている立場から、臨床心理専攻大学院のカリキュラムを検討し改善する仕事には長期にわたって関わっている。特に、教育・研修委員、倫理委員を務めたことから、倫理教育をカリキュラムに盛り込むこと、修士課程ばかりでなく修了後の教育・訓練の組織を作ることに協力してきた。
教育能力に対する評価	<p>(1)学生による授業評価</p> <p>授業評価はアンケート調査で年2回行われている。その結果はつねにより評価(5点満点で4.5以上)を得ている。またどの授業の出席率もほぼ100%である。</p> <p>(2)同僚教員等による授業評価</p> <p>そのような評価は現在行っていない。</p>

研究業績

研究の特徴	<p>1. 研究を始めてから23年間精神科医療の場にいたことから、初期には精神病理に関する研究が多かった。心理検査、特にロールシャッハテストを用いて神経症から精神病まで、さまざまな病理を持つ人々の資料を収集し、それを精神分析の理論と観点に基づいて解釈するという手法で、病的パーソナリティの内的特徴を解明してきた。</p> <p>2. その後は、精神分析的な心理療法の研究、精神分析理論をいかに応用するか、また初心者にいかに伝えるかなど、臨床から健常者の健康な成長までにわたっての実践について研究してきた。</p> <p>3. さらにその後、育児支援への関心が強まり、乳幼児、発達、母子関係、などに関する共同研究を行っている。</p>
研究経歴	<p>1958年 4月 慶応義塾大学医学部助手</p> <p>1965年 4月 三恵病院 臨床心理士(1984年3月迄)</p> <p>1969年 4月 慶応義塾大学医学部兼任講師</p> <p>1981年 11月 中野臨床心理研究室(現在に至る)</p> <p>1984年 4月 常磐大学人間科学部教授(1988年3月迄)</p> <p>1988年 4月 東京都立大学人文学部助教授</p> <p>1991年 4月 同教授(1997年3月迄)</p> <p>1997年 4月 放送大学教養部教授(1999年4月より客員教授)</p> <p>1999年 4月 東亜大学大学院総合学術研究科教授</p> <p>2006年 4月 山梨英和大学大学院教授</p>
研究実績	<p>(1)著書</p> <p>1. 心の断面図 青土社 1976</p> <p>2. 言葉の深層へ 思潮社 1988</p> <p>3. 治療構造論 (分担執筆) 岩崎学術出版 1990</p> <p>4. 人格障害 (分担執筆) 金剛出版 1995</p> <p>5. 心理療法と心理検査 日本評論社 1997</p> <p>6. 境界例-ロールシャッハテストと心理療法- 岩崎学術出版社 1997</p> <p>など。その他、多数。</p> <p>(2)学術論文</p> <p>1. 境界例とその周辺領域-ロールシャッハテストによる精神力動的な研究『精神分析研究』Vol.11, No.6, 1965</p> <p>2. 自我心理学に基づくロールシャッハテストの了解について『ロールシャッハ研究』Vol. IV, 1961</p> <p>3. 治療的対退行と治療者の役割-治療者の退行・その意義と特質について-『精神分析研究』Vol.35, no.1 1991</p> <p>4. 境界性人格障害とロールシャッハ法『精神医学レビュー』No.17, 1995</p> <p>5. A comparative study of the Comprehensive system and a psychoanalytic sequence analysis. Rorschachiana, Vol.20 1995</p> <p>6. 投映法-どう理解しどう使うか『臨床心理学』Vol3, No.4, 2003その他多数。</p> <p>その他、多数。</p> <p>(3)その他の研究活動(国際会議発表、学術誌編集、学術論文査読等)</p> <p>1. 学術誌編集: 日本精神分析学会では長年にわたり、現在も、編集委員を務めている。2000年～2002年には編集委員長を務めた。</p> <p>2. 学術論文査読: 日本心理臨床学会、日本精神分析学会、日本ロールシャッハ学会にて、機関誌投稿論文の査読を多数行っている。</p>

競争的資金採択課題	<p>1. 1994年～1995年 マツダ財団研究助成「乳幼児の人格形成と母子の情緒交流—特に人格形成要因としての情動調律行動の研究」研究代表者(30万円)</p> <p>2. 2006年～2008年 文部科学省科学研究費基盤研究(B)による助成「子育て支援現場に適合する愛着形成不全問題への心理臨床的介入技法の開発」研究代表者(1013万円)</p>
学会等発表・役員参加	<p>1973年 月 日本精神分析学会運営委員</p> <p>1982年 月 日本心理臨床学会常任理事</p> <p>1988年 月 日本臨床心理士資格認定協会常任理事(現在に至)</p> <p>学会発表については全く記録していないので記載は困難だが、個人発表、共同発表、シンポジスト、指定討論者、座長など多数にのぼる。2007年9月には日本心理臨床学会、第26回大会実行委員長を務めている。</p>
受託共同研究の実績	<p>受託研究の実績はない。共同研究は多く、上記の教育方法に関する研究、育児支援に関する助成金による研究などはすべて共同研究である。</p>
大学院生指導	<p>筆者の所属が大学院であり、この10年間の業務はすべて大学院生指導となっている。ここまでに記載した教育、研究、訓練に関する事項はすべて大学院生対象のものである。</p>
研究能力に対する評価	<p>特になし。</p>

サービス活動業績

学内委員会・作業部会等活動実績	2006年 4月 大学院人間文化研究科臨床心理学専攻主任(2011年3月まで) 年 月 年 月 年 月 年 月 年 月 年 月
アドバイザー活動実績	特になし
後進育成活動実績	1. 日本心理臨床学会、日本臨床心理士会等が行う研修会では、企画者、講師、シンポジストなどの役割で関わり、後進の指導に当たっている(年間数回)。 2. 中野臨床心理研究室にて、個人的にいくつかの研修会を主催し、定期的な会合を行っている(現在継続しているのは5グループ)。 3. 中野臨床心理研究室にて、個人スーパービジョンを行っている。 4. 「慶応心理臨床セミナー」の顧問および講師として、年間20回の研修会を行っている。
社会貢献活動	1. 文部科学省の大学設置・学校法人審議会専門委員(大学設置分科会)を1999年7月～2000年3月まで務める。 2. 家庭裁判所調査官研修にて、心理検査の研修を依頼され、長期にわたって講師を務める(期間については問い合わせ中)。 3. 少年鑑別所鑑別技官研修にて、心理検査の研修を依頼され、長期にわたって講師を務める(期間については問い合わせ中)。 その他各地での講演多数。

成果と目標

専門的成果	中心は(1)ロールシャッハテストの分析法を創案し、深めたこと(2)この方法によって、多くの精神病理の表現形態を明らかにしたこと(3)そのような分析法を伝え、多くの人が実施できるようにしたことであろう。現在では、この分析法による検査所見を用いて貢献している臨床心理士が、各地に多数存在している。
専門的目標	さらに多くの臨床心理実践家に役立つ研究を進めたい。具体的には、テストバッテリーによる心理検査の解読法を、より詳細で分かりやすいテキストにすることである。しかし、時代とともに次第に、検査の実例を公開することが難しくなっているので、どのように表現するかが、さらに工夫を要するところである。

最新データ入力日	2011年 4月 1日
----------	-------------